江戸後期の職業詩人研究

——大窪詩仏を中心として——

張　淘

目次

序章……1

Ⅰ 職業詩人の誕生……8

第一章 職業詩人の誕生……9
㈠ はじめに……9
㈡ 中国における民間詩人の興起……10
㈢ 日本漢詩の創作主体の変化……11
―江村北海の『日本詩史』を参考に―
㈣ 江戸時代における儒学興隆と町儒者の増加……15
㈤ 職業詩人の萌芽……18
㈥ 結び―職業詩人の大量出現―……26

第二章 職業文人の生き方―大窪詩仏を例に―……32
㈠ はじめに……32
㈡ 明清時代の職業文人……32
㈢ 江戸後期の職業詩人の生計……36
―大窪詩仏を例に―

第三章 大窪詩仏の出版活動とその特徴……54
㈠ はじめに……54
㈡ 個人の別集の出版……55
㈢ 詞華集の編纂……60
㈣ 宋詩選集の出版……63
㈤ 結び……69

Ⅱ 職業詩人のリーダーと成員構成……72

第四章 市河寛斎詩中の「江湖」と江湖詩社……73
―南宋江湖詩派との繋がりを兼論する―
㈠ はじめに……73
㈡ 天明六年に市河寛斎が詠んだ「江湖」……74
㈢ 江湖詩社と江湖詩派の関係……78
㈣ 江湖詩社の四霊……85
㈤ 結び―江湖詩社の行方―……88

第五章　山本北山及び奚疑塾の人たち……95
—大窪詩仏の交遊ネットワーク—
(一)　はじめに……95
(二)　町儒者としての山本北山……96
(三)　奚疑塾の性質……101
(四)　奚疑塾と秋田藩……103

Ⅲ　職業詩人活躍の場……111

第六章　日中の民間詩社概説……112
—その教育機能をめぐって—
(一)　はじめに……112
(二)　中国における民間の詩社……114
(三)　江戸時代前～中期の民間詩社……117
(四)　江戸後期の民間詩社—詩仏と化政期の詩社—……119

第七章　化政期の詩会と出版……126
(一)　はじめに……126
(二)　五山禅林の詩会との連関……127
(三)　大窪詩仏と化政期の詩会……130
(四)　化政期の詩会と出版（上）……133
—江戸時代の「人名録」—
(五)　化政期の詩会と出版（下）……140
—江戸時代の課題表—
(六)　結び……145

第八章　江戸時代の書画会—職業詩人の俗化—……150
(一)　はじめに……150
(二)　展覧会系統の書画会……151
(三)　席書・席画系統の書画会……153
—儒者と芸者の参加—
(四)　職業詩人と書画会—文人の俗化—……156
(五)　結び—書画会の行方……162

Ⅳ　職業詩人の詩風変革……168

第九章　山本北山・大窪詩仏の反古文辞派……169
(一)　はじめに……169

(二) 荻生徂徠と「格調」説……169
—古文辞派の盛行について—
(三) 山本北山の反古文辞派……175
(四) 大窪詩仏の反古文辞派……179
(五) 結び……183

第十章 大窪詩仏と唐宋詩歌論争……186
—巻大任編『宋百家絶句』序文を中心に—
(一) はじめに……186
(二) 山本北山・大窪詩仏の序文とその観点……188
(三) 亀田鵬斎・葛西因是の序文及び詩論……193
(四) 館柳湾・巻大任の序文及び詩論……196
(五) 結び……200

V 大窪詩仏の詩 —中国詩との比較—……204

第十一章 大窪詩仏の「村居四時雑題十九首」……205
—范成大「四時田園雑興」との関わり—
(一) はじめに……205
(二) 詩仏の青少年期と『卜居集』……205
(三) 『卜居集』と田園詩……207
(四) 「村居四時雑題十九首」と「四時田園雑興」……211
(五) 「村居四時雑題十九首」の春の詩……213
(六) 「村居四時雑題十九首」の夏秋冬の詩……223
(七) 結び……231

第十二章 大窪詩仏の詠物詩……234
—『三家詠物詩』との関わり—
(一) はじめに……234
(二) 詩仏の詠物詩……234
(三) 詩仏と『三家詠物詩』……236
(四) 詩仏が三家から学んだもの……238
(五) 江戸詩壇と詠物詩……242
(六) 中国詠物詩史における『三家詠物詩』……247
(七) 結び……250

結語……254
参考文献……257

序章

日本における漢詩の創作は、江戸時代の後期（十八世紀後半以後）になって、急速かつ広範に普及するようになった。そのもっとも大きな理由の一つとして、創作主体が通俗化したという事実を挙げることができる。つまり、それまでの公家・武家・僧侶・儒者だけでなく、都市に暮らす富裕な庶民たちがその創作に加わるようになったのである。そして、このような新たな階層のなかから、漢詩を作ることを本業とする職業詩人も誕生した。本論は、江戸時代の後期に出現した、江戸市民における漢詩創作熱に着目し、そのなかでもっとも中心的役割を演じた職業詩人について論じる。

職業詩人の大量出現については、江戸後期の一大特徴として、学界ですでに認められているが、この問題を専ら論じた論著はまだ現れていない。ただし、漢詩が専門化する過程については、すでに松下忠氏が『江戸時代の詩風詩論 明・清の詩論とその摂取』（明治書院、一九六九年三月）において論じている。松下氏は漢詩専門化の重要性を指摘し、「日本近世の詩文を論ずるに当っては、経学と詩文に対する作者の主体性の問題は重要な点である」（同書二六頁）と述べ、当該論著の各章において、この問題を中心に議論を進めている。

むろん本論も、このような先行研究を基礎とするが、松下氏が主として詩論の方面から立論したのとは相異なる方法によってこの問題を論じてゆく。すなわち、本論では、職業（専業）詩人が誕生したことの意味を、主として大窪詩仏という一個人に焦点を当てることで、より具体的に論じる方法を採る。そして、詩論にのみ着目するのではなく、詩仏に代表される職業詩人の社会的階層、経歴や著作、彼らを取りまく環境の変化等々の側面から、より具体的かつ包括的に漢詩専門化の道を明らかにしていきたい。

さらに、本論のもう一つの目的は、日本と中国の比較である。中国の伝統文化の担い手は、唐宋に至るまで主に「士」であった。所謂「士」とは厳密には為政者を指すが、宋以後、科挙が拡大化するにつれ、科挙及第を目指す候補者をも含めて、「士」と呼ぶことが一般化する。そして、科挙には落第がつきものであり、それがやがて一つの文人階層を形成してゆき、南宋末期頃から、布衣の身分で活躍する詩人群が一世を風靡するようになっ

た。このような新たな詩人階層のなかから職業詩人と呼びうる詩人も生まれている。その後、元・明・清と時代が下るにつれ、中国の職業詩人は断続的に発展してきたと考えられる。このように、日本と中国では、職業詩人が誕生した時代と環境に差違があるが、両国の職業詩人の生活基盤に、どのような類似点があるのかについても、本論では検討したい。

さて、日中の職業詩人の出現に、なぜ時代のずれが生じたのであろうか。まずは、日中の社会構造の異同を検討しなければいけない。江戸時代より前の日本においては、「士」は一般的に武士を指し、この階層はけっして伝統文化の担い手とはいえず、したがって漢詩創作の主流でもなかった。漢詩は主に貴族および僧侶によって作られ、彼らこそが主流であった。そして、他に本職を持つ彼らは当然、漢詩を生活の糧にする必要がなかった。

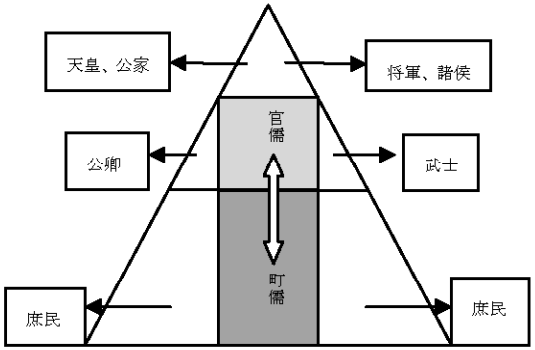
江戸時代になって、儒者の大量出現によって新たな文化の担い手が形成された。そして、元禄年間、林鳳岡（一六四四～一七三二、名又四郎、春常、信篤、字直民）がそれまで僧形で勤めることとされていた儒官制度に反対したことから、それ以後、儒者たちも士として扱われることになった。儒官は世襲される場合も多いが、一般の知識人であっても任命されるケースが増加した。このように、儒者は士と庶をつなぐ存在になっていたといえる。

中国の場合は、宋以降、科挙社会になったことにより、庶民でも士大夫にまで昇ることが可能になり、士大夫も庶民の階層に落ちる可能性が生まれ、そのことによって社会階層の流動性が高まった（図1を参照）。ただし、中国ではそれを可能にしたのが科挙という制度であったのに対し、日本の江戸時代にあっては、寛政の改革の一時期を除き、ほとんどが儒者個人の資質や名声により個別に判断された。

士は四民、すなわち「士民工商」において、主導的地位を占めており、その一角を占める官儒を目指す庶民がますます増加する一方、官儒の定員は有限であるため、新たに生まれた大量の知識人のうちの多くは、まず町儒者として庶民を教育することを生活の手段とした。

官儒は、中国の「士大夫」と同様、つねに社会教化の責任を自らに課していたが、町儒者の特徴は、

図1　江戸時代日本の社会構造図式



政治に無関係であることだった。とりわけ江戸の中後期になると、「道」（道徳）を己の行動の規範としないことさえあった、という。江戸中期の儒者、松村梅岡（一七一〇～八四、名延年、字子長、通称多仲）の『駒谷芻言』（『日本随筆大成第一期』第八巻、吉川弘文館、一九二七年十一月）に、以下のような記述がある。

中夏郡県の制は、諸官人一代きりなれば、後の計を思い、老に及で、逸楽富饒を思ゆへ、人を衝落し、吾厚禄尊官を得んことを欲す。我邦は、諸士世禄あり。吾子孫相続し、衣食の急務は思ひ出しもせぬ也。いかなる小禄ものにても、商賈の豪家よりも穏也。よくよく貪欲深き人、中夏平常の人ぐらひの、宦情をも生ぜんか、此常禄人、故ありて禄に放れば、衣食の急に苦しむ故、少し覚しことあれば、人に売教て口を餬するの業とす。此時に至ては、又悪商に百倍の鄙心を生ず。表向は穏に見ゆれども、内心は世に諂ひ、色々の巧智を尽し、諂はぬ体に見する、術無所不至、見ぐるしき有さま也。因て理を推て考るに、今此方の仕官は、中華の処士や。此邦の浪人は、中夏の宦情に百倍の鄙心あり（三六二頁）。

松村梅岡がまず論じたのは、中国の「官人」、すなわち「士大夫」と日本の「士」の相違である。中国の士大夫は常禄がないため、心理的に不安感があり、つねに官位や金銭を気にしている。日本の「士」は世襲するので、「宦情」（名利心）はない。しかしながら、いったん士の地位から落ちた場合、中国の士大夫のように強欲になってゆく。ここにいう「人に売教て口を餬するの業」とは、町儒者を指す。

要するに、日本の士（官儒を含め）は、中国の隠者のように、名利にとらわれず、心穏やかに学問に精進するが、日本の「浪人」（町儒を含む）は、中国の士大夫のように、名利を追求するところがあり、商人のように学問を商品と見なす傾向がある、というのである。

また、「浪人」と「処士」の区別について、梅岡は次のように述べている。

浪人と云字、柳文に見ゆ。放浪江湖人、と云こと也。浮雲流水の如く、宿も定らず。悪く云はゞ、無宿の事也。中華は、常禄なき国ゆえ、此様の人は無し。里の編民、主戸客戸の別ありて、戸籍厳重なれば、宿の無きものは無也。春台の経済禄に、処士と記せしより世人誤れり。処士とは、いまだ仕宦せぬ人也。吾家に居処するの義也。故に、未だ嫁せざる娘を、処女、処子など云なれば、未だ宦せぬむすこのの事を、本は

云し也。一転して、仕宦の人禄を辞し、我郷里ありて、其地へ帰居るを処士と云。日本の浪人禄を失ひ、店借りにて我宅もたぬを云に非ず。世禄ある士の子、いまだ主君へ仕ざるを処士と云は当れり。無宿素浪人の事にあらず（三六三頁）。

ここでは、「浪人」という言葉の説明として、唐・柳宗元の「李赤、江湖浪人也」（「李赤伝」）という言葉を引用し、これは江湖を放浪する人の意であり、中国には日本のような浪人はいないと言っている。唐代はその通りだったかもしれないが、梅岡が見過ごしたのは、文化教育が普及した宋代においては、官府が必要する知識人よりはるかに大量の「過剰な知識階層」が生まれ、彼らが「江湖藝人」となった事実である。彼らは「農に非ず、工に非ず、商に非ず、士に非」ざる「遊民」と呼ばれ（王学泰『遊民文化與中国社会』、学苑出版社、一九九九年九月）、日本の町儒と同じような身分であった。

その証拠に、江戸の文人は、自らを四民の外に属すると考える傾向があったようである。江戸後期の詩人である篠崎小竹（一七八一～一八五一、名弼、字承弼、通称長左衛門）の「除日」（『小竹斎吟稿』）には、次のようにある。

吾在四民外　吾　四民の外に在り
終年何所爲　終年　何の為す所ぞ
兀兀事文字　兀兀として文字を事とし
何足爲人師　何ぞ人の師と為るに足らん

このように、江戸時代の日本は、宋代以降の中国と比較的類似する社会構造になっていた。このような社会構造が大量の文人を誕生させ、そのなかから、職業文人が誕生したのであろう。

本論は江戸時代に誕生した職業文人の一部――職業詩人――を主な対象として論じる。まず、本論で用いる「職業詩人」という言葉をここで定義しておきたい。

本論にいう「職業詩人」とは、原則として、他に確たる正業をもたず、己の創作した詩によって名声を得た後、自作を売ったり、詩評を書いたり、詩の作法を教えたりすることで、主たる生計を立てた詩人を指す。つまり、自他ともに詩人としての明確な認識をもち、作詩関連の事業を主たる収入源としている人々を、本論では「職業詩人」と称する。

ただし、一時期諸藩に招かれ儒学や詩文を教授した経歴を持つ者でも、右のような条件に合致する生活を一定期間送っていれば、本論では彼らを「職業詩人」と見なす立場をとる。それに対し、儒学の教授を本業とし、詩作を二義的に実践しているような人に対しては、本論では「詩人」と称することはあっても、「職業詩人」とは呼ばない。

ここで注意しておきたいのは、江戸時代からすでに「詩人」と「儒者」が区別されていることである。江戸初期の林鵞峰（一六一八～八〇、名又三郎、春勝、恕、字子和、之道）は「儒家の詩」と「詩家の詩」を明確に区別している。寛文九年（一六六九）に書いた「授仲龍」（『鵞峰先生林学士文集』巻三六）で、鵞峰は以下のように述べている。

儒者の詩を論ずるのは詩家の論ずる所とは、其の取捨、趣が異なり。詩家が取る所の者は、格體、句勢、字法、着眼せざるは無し。儒者は唯だ其の志気の豪大を取るのみ。其の豪なり、其の大なり、皆な性情の正に出づ。所謂「思無邪」なり。詩人は或いは工巧を費し、或いは安排を労し。儒者は唯だ胸中の蘊を写するのみ、而して洒落平淡なり。

儒者論詩與詩家所論、其取捨異趣。詩家所取者、格體句勢字法無不着眼。儒者唯取其志氣之豪大。其豪也、其大也、皆出於性情之正。所謂思無邪也。詩人或費工巧、或勞安排。儒者唯寫胸中之蘊、而洒落平淡也。

鵞峰は「儒者の詩」と「詩人の詩」の相違を、詩人は詩の書き方に専念するが、儒者は詩の気象に注目する、と述べている。鵞峰が言う「詩人」が儒者ではないのは明らかである。そして鵞峰自身は「詩人の詩」よりも「儒家の詩」を支持しているが、これは当時の儒者の一般的な考えと見なされる。

この後、江戸中期になって、詩の専門化に大きな役割を果たした荻生徂徠（一六六六～一七二八、名双松、字茂卿、通称総右衛門）は、詩家の詩は経生（儒者）の作る所ではないとして、「詩家の語は自ら別あり（詩家語自別）」（「訳文筌蹄題言十則」、『荻生徂徠全集』巻五、河出書房新社、一九七七年一月、二二頁）といっている。徂徠の弟子である服部南郭（一六八三～一七五九、名元喬、字子遷、通称幸八）も詩家の詩の独自性を強調し、「詩家の文字は格別の物に候（『灯下書』、『日本詩話叢書』第一巻、六一頁）と述べている。徂徠と南郭のこうした主張は、詩人の詩の純粋性を強調するもので、鵞峰よりも「詩人の詩」を重視している。

さらに後の江村北海（一七一三～八八、名綬、字君錫、通称伝左衛門）は、『日本詩史』巻四

「室鳩巣」条において、「余嘗つて謂く、経儒は文芸を習ず。文士は経業を遺る（余嘗謂、経儒不習文藝。文士遺経業）」といい、「文士」（詩文を作る人）と「経儒」の違いをはっきり述べている。経学を学ばざる者を文士という、と彼はいう。『日本詩史』は「階層」「職種」「地域」という三つの基軸によって書かれており、それは詩人と儒者には区別があるという明確な意識があったからであろう。同時代の龍草廬（一七一四～九二、名元亮、字子明、通称彦次郎）は、漢詩を「儒生之詩」「隠士之詩」「禅者之詩」「詩人之詩」に細分し、詩人の詩を「温厚和平、情景相ひ触れ、逸致余り有り、超然として復た尚ふる可らず」（温厚和平、情景相触、逸致有余、超然不可復尚）と高く評価している（『龍草廬先生文集初編』巻二「鼎石集叙」）。

以上のように、儒者の詩を重視する林鵞峰から、詩人の詩を賛美する龍草廬まで、江戸文人の意識が少しずつ変わっていったことが分かる。そしてこの頃には、詩人が儒者とは違う性質を持つことも認識されていた。つまり、詩人は、儒者と比べると、町人の実用志向や嗜好により近づいているので、その分、商人に近いと考えられていた。

以下、本論と関連する先行研究について簡単に紹介する。まず職業詩人の研究である松下忠氏の前掲論著『江戸時代の詩風詩論 明・清の詩論とその摂取』では、「職業的詩人」「専門詩家」などの称呼を用いている。さらに、「専門詩家の興起」という一節を立て、明和・安永・天明期には、すでに詩文を主とする専門詩家が出現し、寛政時代を経て、文化・文政時代に至ると、その存在は益々顕著になっている、と指摘している。「専門詩家」の先駆としては石川丈山、嚆矢を鳥山芝軒とし、ほかに徂徠門の服部南郭、高野蘭亭、後期に入って龍草廬、安達清河、大窪詩仏、菊池五山、中島棕隠、梁川星巌、広瀬旭荘、草場珮川、河野鉄兜、山田翠雨、菊池海荘等を専門詩家としている。

本論が採り上げる大窪詩仏については、鈴木碧堂氏の『大窪詩仏』（珂北郷土研究会、一九三七年七月）が、詩仏の生涯を論じた最初の著作である。揖斐高氏の「大窪詩仏年譜稿――化政期詩人の交遊考証――文化年間まで」（同氏『江戸詩歌論』所収、汲古書院、一九九八年二月）は詩仏五十一歳までの年譜である。大森林造氏の『大窪詩仏ノート』（梓書房、一九九八年十月）は、揖斐高氏の研究の基礎の上に、詩仏の後半生の経歴を補足している。本論はこれらの先行研究をふまえて考察を行う。

最後に、大窪詩仏の経歴と作品を簡単に紹介する。詩仏が生まれたのは、明和四年（一七六七）、名は行、字は天民。父は医を業として江戸に移住した。詩仏は若くから詩を学び、文学に専念した。今日に伝わる詩集には、以下のものがある。

○『卜居集』二巻、寛政五年（一七九三）刊、一三三首。
○『詩聖堂百絶』、寛政十二年（一八〇〇）刊、一〇〇首。
○『詩聖堂集初編』、文化七年（一八一〇）刊、四九九首。
○『西遊詩草』、文政二年（一八一九）刊、二〇一首。
○『北遊詩草』、文政五年（一八二二）刊、一三六首。
○『再北遊詩草』、文政八年（一八二五）刊、一一四首。
○『詩聖堂詩集二編』、文政十年（一八二七）刊、七一五首。
○『詩聖堂詩集三編』、天保八年（一八三七）刊、四八〇首。

＊ また、『詩聖堂百絶』の跋文に「天民先生卜居集刊行之後、有北征、西遊、龍閑、再遊、池頭之五集、詩凡八百余首、而七言律詩居半焉」とある。しかし、この五集の伝存は未詳である。

詩仏は凡そ十年ごとに詩集を一冊出版しているが、その収録作品はかなり多く、合計二千三百七十八首あり、未収の書簡などを加えると、三千首以上あると思われる。これは柏木如亭、菊池五山に勝る作品数であり、南宋・陸游の「萬首詩」には及ばないとしても、楊萬里の四千二百首余りにほぼ匹敵する。

詩仏は若くして地方を遊歴したが、中年期は江戸で過ごした。晩年はまた地方を遊歴し、秋田藩に仕えたが、高齢のため実務を伴わない形式的な仕官であった。よって、中央と地方の両方で詩文によって生計を立てており、当時の職業詩人の生活を理解するための典型的な例である。さらに、彼は江戸時代の詩風転換にもっとも重要な役割を演じた、山本北山に師事したほか、当時の大文人であり江湖詩社を開いた市河寛斎に師事しており、交遊関係がきわめて広かった。その江湖詩社のなかでも、柏木如亭は主に地方を遊歴して貧窮の生活を過ごし、菊池五山は主に『五山堂詩話』を出版して生活の糧とし、詩集は伝わっていない。この二人の同人と比べると、詩仏は長期にわたって江湖詩社の中心人物として江戸詩壇で重きをなし、かつまた創作の方面でもっとも優れた業績を残した。市河寛斎が「詩聖堂詩集序」に「江湖社中 赤幟を一方に樹つるは、実に天民を以て魁首と為す（江湖社中樹赤幟於一方、實以天民為魁首）」と記したように、詩仏はのちに詩壇の盟主とされ、後世に大きな影響を与えている。

I　職業詩人の誕生

―江戸後期における漢詩創作の環境―

第一章　職業詩人の誕生

一　はじめに

江戸時代の後期、天明七年（一七八七）、市河寛齋（一七四九～一八二〇、上野の人、名世寧、字子静、通称小左衛門）は、江戸の神田に「江湖詩社」を開いた。この詩社から、――本論が考察の主たる対象とする――大窪詩仏（一七六七～一八三七、常陸の人、名行、字天民、通称柳太郎）をはじめ、柏木如亭（一七六三～一八一九、江戸の人、名謙〔のち昶〕、字益夫〔のち永日〕、通称門作）や菊池五山（一七六九～一八四九、讃岐の人、名桐孫（まさひこ）、字無絃、通称左大夫）等、文化文政期（一八〇四～二九）の詩壇を席巻した漢詩人が誕生している。詩仏、如亭、五山に共通するのは、いずれもが専業の布衣詩人であった、という点である。しかも、彼らは日本漢詩史上、おそらく最も早期の職業詩人であった。

本論はなによりもまず、彼らの、この際だった独自性に着目する。そして、如亭や五山と比べると、これまで専論に乏しかった、大窪詩仏を考察の中心にすえて、日本における最初期の職業詩人の諸活動を詳細に洗い出すことを第一の目的とする。また、その過程で、中国における先例や類例にも注意を払い、その影響関係や異同について検討を加える等、日中比較詩学の観点からも光を当て、より総合的に大窪詩仏の詩作活動の意味と特徴を探求してゆきたい。

本論文の第一章では、詩仏をはじめとする江湖詩社の存在意義を改めて検証するために、日本の漢詩がどのような階層の人々によって作られてきたのか、という観点を中心にすえて、日本漢詩の歴史を概観する。それを踏まえ、なぜ江戸の後期に彼らのような「職業詩人」が誕生したのか、という問題を考えてゆきたい。しかし、すべての考察を始める前に、次節において、中国における先例について、ごく簡単に整理しておきたい。

(一)　中国における民間詩人の興起

詩人の社会階層という問題に関して、まず中国における状況を確認しておく。詩の最盛期、唐宋時代において、詩のもっとも中心的な創作主体は「士大夫」であった。周知のとおり、先秦の時代、「士大夫」は、「士」とその上位階級である「大夫」の併称であったが、唐宋にあっては、もはや両者を厳密には区別せず、庶民の上に立つ為政者の総称として用いられている。すなわち、この名称が端的に示すように、「士大夫」詩人にとっては、為政者としての顔の方が本来の面目であり、詩人としてのそれはもともと第二義的なものに過ぎなかった。杜甫が晩年、漂泊の旅の空で「名は豈に文章もて著はさんや（名豈文章著）」（「旅夜書懐」）と慨嘆し、陸游が失意のなか「此の身 合に是れ詩人なるべきや未や（此身合是詩人未）」（「劍門道中遇微雨」）と自問したことに代表されるように、唐宋の士大夫にとって、詩によって名をなすことは、必ずしも最高の栄誉ではなかった。もちろん、詩はすでに不可欠の教養であり重要な自己表現手段となってはいたが、あくまでそれは本務である行政の余技に過ぎず、結局のところ、彼らは自他ともに認める業余の詩人であったのである。

降って十三世紀、宋の滅亡が近づいた頃、士大夫階層の周縁に、士大夫とはいささか異なる詩学認識をもつ一群の詩人たちが現れた。いわゆる江湖派の詩人たちである。彼らの多くは、州県の属官等、下級の官職に甘んじた下層の士大夫か、あるいは科挙に落第し民間に留まった布衣たちであった①。それゆえ経歴の不明な者が多く、彼らと作詩の関係性を具体的に探る糸口も非常に限られている。しかし、そのなかには、わずかながらその生平を窺い知ることのできる詩人もいた。

たとえば、そのような希有な例外のなかで、姜夔、劉過、戴復古等の詩人は、全国各地を遊歴し、現地の高官や名士と積極的に交わり、そのような交遊の場面で、自らの詩藝を武器として己の存在感を高め、金銭を始めとする種々の支援を獲得していたことが知られている。彼らにとっての詩藝は、布衣である彼らが士大夫社会を渡り歩いてゆく際の、唯一無二の社交の手段であった。したがって、彼ら「謁客」詩人にとって、作詩はもはや余技ではない。すでに重要な生活の糧であった、と見なされる。

もちろん今日、江湖派に数え入れられる詩人の過半は経歴未詳であるので、この三名の行動パターンが全体を代表しているとは断言できない。かつまた、彼らの作品は総じてなお明清の職業文人ほど明確には商品化されていない。とはいえ、このグループのなかに含

まれる詩人の数名が、確実に詩を売り物にしていた事実は動かない。

さらに、彼ら江湖の詩人の作品を注意深く分析してゆくと、士大夫の詩とは明らかに異なる傾向を見出すことができる。たとえば、士大夫の詩には、諷諫や社会批判等、経世済民の意識から詠まれた作品が必ずといってよいほど含まれている。これは、むろん、官吏としての彼らの身分に関わっている。他方、布衣詩人の詩は、――そのような社会詩がまったく描かれないわけではないが――ウエイトははるかに軽くなり、身辺の事柄や花鳥風月に向けられた作品の方が圧倒的多数を占めている。また、題材のみならず、江湖派詩人の詩作は、総じて古体詩が少なく、五律や七絶等の短篇の近体詩が多いという、詩型選択上の偏向があり、典故を多用せず白描を主とするという、明確な表現傾向の特徴も有している。このように、江湖派詩人の詩には、士大夫とは一線を画す彼ら独自の特徴がある。

以上のように、南宋も後期になると、民間にも本格的に詩を作る一群が現れたが、この現象は一面から見れば、詩人の身分が士大夫から独立分化し、専業化してゆく傾向が生まれ出たものと、とらえることが可能である。

そして、南宋の滅亡後、五世紀余の時が過ぎた日本に、同じく「江湖」の名を冠する詩社が出現した。この詩社の成員も、そのほとんどが武士や官儒等の為政者階層ではなく、市井に暮らす人々であった。南宋後期と江戸後期、中国と日本というように、無視し難い大きな相違はあるものの、同一の名称を掲げる二つの詩人集団の間に、はたして何らかの繋がりがあるのだろうか。そのことを考察することも、本論の目的の一つである。

㈢　日本漢詩の創作主体の変化

――江村北海の『日本詩史』を参考に――

日本において本格的に漢詩の創作が始まった、奈良・平安時代、漢詩の創作主体はおおむね貴族であった。しかし、鎌倉・室町時代を経て、江戸時代に入ると、それが庶民（布衣）へと変わる。この変化はどのようにして促され発生したのであろうか。

この問題に関しては、江湖詩社の時代よりやや早く、すでに簡にして要を得た回答を出した人がいる。江村北海（一七一三～八八、明石の人、名綬、字君錫、通称伝左衛門）がその人である。その著『日本詩史』五巻は、日本における最初の文学史の著作であり、明和五年（一七六六）に成書、明和八年に出版された②。「詩史」であるから、全体が時系列によって編

纂されているのはむろんのことであるが、本著の最大の特徴は、それ以外に「階層」、「職種」、「地域」という三つの基軸によって「詩史」が細分類され、その結果、人物も前面に出てきている点にある。あたかも、編年体と紀伝体を折衷したかの如き編纂方式といってよい。

まず、江戸時代（慶長末）以前と江戸時代（元和以後）という時系列の大きな区分がなされ、前者は主として階層と職種によって、後者は地域によって再区分されている。具体的に言えば、巻一には、十七世紀前半の慶長末までの貴族（公家）が採り上げられ、巻二には、巻一と同時期の武人、医者、隠者、僧侶、女性が採り上げられている。巻三では、京都の詩人、巻四では江戸の詩人、巻五では諸州の詩人が採り上げられている。

江村北海は「詩史」と銘打つ自著に、身分や職種等、社会階層の視点を加えて編纂したが、それはいうまでもなく、日本において漢詩創作の中心を担った階層が時代とともに推移したことを、彼がすでに明確に意識していたからにほかならない。北海の記した「凡例」に、

> 是の編　初卷に論列する所、並びにこれ朝紳。絶えて韋布の士無し。古選　収むる所然るに由るなり。蓋し、一時の藝文、ただ青雲の上に在りて、草莽の士の指を染むるもの無きか。然らざれば則ち『懷風』『凌雲』『經國』『無題』等の諸選、率ね朝紳の纂輯する所、ここを以て採択民間に及ばざるか。この編　第三卷より以下論載する所、布素にあらざるは靡し、元和以後、朝野文武、靡然として学に嚮ふ……
>
> 是編初卷所論列、并是朝紳。絶無韋布士。由古選所收然也。蓋一時藝文、特在青雲上、而草莽士無染指者歟。不然、則懷風凌雲經國無題等諸選、率朝紳所纂輯、是以採擇不及民間歟。是編第三卷以下所論載、靡匪布素、元和以後、朝野文武、靡然嚮學……

とあるように、そのかみ漢詩の作者がほぼ「朝紳」、すなわち在朝の公家によって独占されていたのが、江戸時代になると、「布素にあらざるはなし」と述べている。この変化について、彼の歴史観がもっとも簡明かつ直截的に現れ出ているのは、次の一節であろう。巻三の冒頭部分に次のようにいう。

> 古へに曰ふ、「文学の盛衰、世道の汚隆に関ること有り」と。信なるかな。これを

我が邦に徴するに、夫れ誰か然らずと曰はん。……中略……これよりその後、列聖相ひ承け、文教 日に闡(ひら)く。餘波 翰墨に及ぶもの、弘仁・天暦の間に汪洋す。謂ひつべし、帝業、文学と偕に盛んなりと。延久より已降、朝綱 紐を解き、文事 日に廢す。保元に一壞し、承久に再壞し、元弘・建武の後に麋爛す。足利氏その鹿を失ふに迄り、邦国 分裂、戦争 已む無し。生民の塗炭ここに到りて極まる。藝苑の事業 復た孑遺(げつゐ)無し。既にして天 喪乱を厭ひ、織田氏豐臣氏 迭(かた)みに興り、中州やや削平す。然れども並びに無学無術、馬上にこれを得、馬上にこれを治めんと欲す。是を以て天人 与せず、或いは業 垂成に壞れ、或いは祚 一世に止まる。これを要するに撥乱反正、天 必ず待つこと有りて、奎壁 彩を久暗の後に発す。固より偶然に非ず。

若し夫れ神祖、聖文神武、上は帝室を翊戴し、下は億兆を煦育(くいく)し、干戈攘擾の中、遄(すみや)かに耆老を訪ひ、以て治道を橐籥(たくやく)し、広く遺書を募りて、以て鴻業を潤色し、又惺窩先生に命じ、経史の義を講析せしむ。ここに於て羅山先生、聘に東都に応ず。夫れ然る後 猛将勇士、やや学に嚮ふを知りて、邦国の泮宮 尋いで興り、士の業、日に広く、今に至りて百六十年。玉燭 光を継ぎ、金甌 虧くる無し。風化の美、彝倫の正、古へに亙りて無き所。近時、文華の鬱たる、漢士に譲ること無し。

古曰、文學盛衰、有關乎世道汚隆。信哉。徴之我邦、夫誰曰不然……中略……自時厥後、列聖相承、文教日闡。餘波及翰墨者、汪洋于弘仁天暦間、可謂帝業與文學偕盛也。延久已降、朝綱解紐、文事日廢、一壞于保元、再壞于承久、麋爛于元弘建武之後。迄乎足利氏失其鹿、邦國分裂、戰爭無已、生民塗炭到此而極。藝苑事業無復孑遺矣。既而天厭喪亂、織田氏豐臣氏迭興、中州稍削平、然竝無學無術、馬上得之欲馬上治之、是以天人不與、或業壞垂成、或祚止一世。要之、撥亂反正、天必有待而奎壁發彩於久暗之後。固非偶然也。

若夫神祖、聖文神武、上翊戴帝室、下煦育億兆、干戈攘擾中、遄訪耆老、以橐籥治道、廣募遺書、以潤色鴻業、又命惺窩先生、講析經史之義、於是羅山先生、應聘東都、夫然後猛將勇士、稍知嚮學、而邦國泮宮尋興、士業日廣、至今百六十年、玉燭繼光、金甌無虧、風化之美、彝倫之正、亙古所無。而所時文華之鬱、無讓漢士。

前半部分は、江戸時代に入る前の変化の跡を叙述している。冒頭の引用句は、出典は定か

ではないが、明の胡応麟に「文章世運に関はる、詎ぞ然らずと謂はんや（文章關世運、詎謂不然）」（『詩藪』内編巻一）という類似の表現がある。このように、決して珍奇な説ではない。むしろもっとも正統的な儒家的詩歌観に基づく、といってもよいであろう。このように、彼は中国の伝統的詩歌観を提示し、漢詩が政治と深く関わりあるものであることを主張している。

「延久より已降」というのは、具体的には、延久四年（一〇七二）の年末に即位した白河天皇の時代を指すであろう。彼は応徳三年（一〇八六）に幼少の堀河天皇に位を譲った後、三代に渉って、上皇として君臨し、院政を敷いて専権的に政を行った。おそらく、この院政体制を批判したものであろう。

「保元」、「承久」、「元弘・建武」は、いずれも戦乱と関わりある元号。「保元」（平治）は、周知の通り、王家から武家まで、朝廷内外の勢力が二分され、覇権を争った大乱の時代。その結果、武家が擡頭した時代でもある。「承久」の乱（一二二一）は、後鳥羽上皇と執権北条氏との覇権闘争で、これに敗れた後鳥羽院は隠岐に流された。「元弘・建武」は、鎌倉幕府の滅亡（一三三三）後の、後醍醐天皇と足利氏の権力闘争を指す。以上、文中で言及された元号は、いずれも天皇ないし朝廷側の失政や権威失墜と関わりあるものである。

後半部分が江戸時代である。「神祖」とは徳川家康を指す。家康は藤原惺窩を京都から江戸に招聘しようとしたが実現せず、門下の林羅山が推されて江戸に来て、儒学（朱子学）を広めた。以来、地方の各藩も藩校を興し、やがて「近時文華の鬱たること漢土に譲るなし」という活況を現出した、という。上に立つ将軍徳川家が儒学（朱子学）を推奨し、各藩がそれに倣ったことにより、漢詩文の学習や創作も武士の間に広まり、かくて漢詩文における空前の活況を呈した、というのが北海の認識であろう。

冒頭の引用に照らせば、平安後期以降の漢詩創作衰退にせよ、元和以降の活況にせよ、それは上に立ち政を掌る者の姿勢如何によって必然的に起きた現象と見なすのが、北海の立場のようである。北海の立場をいささか敷衍し、さらに言語の社会階層という視点と儒学へのスタンスという点を加味して言えば、次のように言い換えることができるであろう。

近代に入る前、日本でも中国でも、階級と使用言語の間には一定の相関関係があり、階級の上下で用いる言語の質や種類が変化した。たとえば、平安時代の、仮名が一定程度普及した時期のことを想定してみると、まず圧倒的多数の文盲層とごく少数の識字層という格差があったと想定される。その上で、識字層の中にも、漢文（文言）を理解し運用でき

る層と、訓読を中心に理解する層と、仮名を主体とする層……というように、幾つかの階層が生じていたはずである。中国でも、まず文盲層と識字層の別があり、さらに識字層の中に、文言を自由に駆使できる層とそれがままならず白話を主体とする層の二層が存在したはずである。

しかし、日本と中国とで明らかに異なる一面もある。それは、中国において、右のような言語的社会階層が、権力構造とほぼパラレルな関係にあったのに対し、日本は必ずしもそうではなかった、ということである。北海が指摘したように、――政治の中心にあった――平安後期以降の公家や鎌倉・室町時代の武家たちは、文言（漢詩漢文）の理解や創作を必須の教養とは見なさなくなった。それに対し、中国では、明清に至るまで、士大夫層は重要な伝統としてそれを保守している。

その要因を突きつめてゆくと、言語や文字の障壁という点を除けば、おそらくは儒学に対するスタンスの相違という一点に帰着するであろう。中国においては、儒学が国教として絶対的地位にありつづけたのに対し、日本において、それは総じて選択可能なオプションの一つに過ぎなかった。仏教の僧侶にとって仏典は絶対的であり、それゆえ文言（禅宗の場合は白話も加わる）の理解が必要不可欠であったのとは異なり、日本の行政を掌った勢力、すなわち公家と武家という二大勢力にとって、儒学は絶対的なものとはならなかった。それゆえ、儒学の文化体系に組み込まれる文言（漢詩漢文）の運用能力も、さほど重要視されなくなったのであろう。

だがしかし、徳川家康の号令一下、状況が一変した、と北海はいう。次の節において、もう少し細やかに江戸前期における変化の様相を考えてみたい。

㈣　江戸時代における儒学興隆と町儒者の増加

江村北海の『日本詩史』五巻には、武川幸順（一七二五～八〇、京都の人、名建德、号南山）の序文が附されており、そこに北海とほぼ同様の見方が提示されている。そのなかで、江戸以後の変化について述べた、次のような一節があり、短いながらも示唆に富む。

近世 廊廟の上、文学 寥々として世に聞ゆるものなし。而して惟だ衡門の寒き、

衲衣の陋しき、獨り美を草萊の下に擅にするもの、それ歎ずるに勝ふべけんや。

近世廊廟之上、文學寥寥、亡聞于世者。而惟衡門之寒、衲衣之陋、獨擅美于草萊之下者、可勝嘆乎。

右文にいう「近世」がいったい何時に始まるのか、定かではないが、常識的にみれば、江戸時代に入って以後のことを指すであろう。もしその解釈に誤りがなければ、公家たち京都の朝廷には見るべきものがなく、「衡門の寒き」や「衲衣の陋しき」が、詩壇を独占している、と武川はいう。前節で引用した北海の文では、「布素にあらざるはなし」と記すのみで、「布素」のいかなる職種が詩壇の中心を担ったのかについて、言及がなかった。武川はここで「衡門の寒き」や「衲衣の陋しき」という具体的な職種（階層）に言及している。後者は僧侶を指す。前者は「寒門の士」の謂であるが、当時の実態に即して具体的にいえば、町儒者を指すであろう。

前引、北海の言のなかにも記されていたように、江戸に幕府を開くに及んで、家康は儒学を大々的に推奨した。武家の本分は武藝であるが、一国を治めるには学問が必要である。それはなにも諸藩を束ねる幕府のみに要求されることではなく、全国許多の諸藩においても同様であった。治国の学問とは、当時にあっては、儒学である。そのため、幕府も諸藩も儒者を招き、顧問として仰ぐとともに、子弟の教育に当たらせた。このように、武家が太平の世を維持し、名実ともに武「士」として庶民に君臨するために、治世の教養たる儒学を彼らに講じられる人材が求められ、ここに儒者に対する空前の社会的需要が生まれたのである。

儒者は、「官儒」と「町儒」とに区分される。「官儒」は世襲によって代々幕府や藩に仕え、武士に準じる扱いを受けた。江戸幕府に代々仕えた林家がその代表である。一方、「町儒」は、家柄とは関係なく実力さえあればなれる職業である。もともと町人に教えるのが彼らの務めであったが、実際に幕府や藩に召し抱えられた人も多くいたため、「官儒」として招聘されることを目指して、学問に精を出す町儒者が多くなってきた、という。そして、彼らは経書を教える傍ら、兼業あるいは傍業として漢詩を作るのが常であった③。ここに、ゆくゆく庶民の漢詩創作へと繋がる重要な起点が生まれた。人口的にも、町儒は官儒の数倍存在し、主として江戸や京都、大坂等の大都会に暮らした。その彼ら一人一人が起点となって、儒学や漢詩を含む中国古典の、民間への普及が始められたと考えられる。

しかし、官儒か町儒であるかを問わず、儒者たちにとって、作詩はあくまでも余技に過

ぎない。この点は、第㈡節で論じた、中国士大夫の事情と同じである。とくに江戸時代、儒学と言えば、朱子学がもっとも広範な影響力を持ったが、朱熹自身が生前、玩物喪志につながると、作詩の戒めを繰り返し主張している。この点は、江戸前期の儒者にとっては、けっして軽々には無視できない重要な問題だったはずである。

ところが、この問題に一石を投じ、漢詩創作推奨へと大きく舵を切り、江戸の漢詩創作熱を創り出した儒者がいた。荻生徂徠（一六六六～一七二八、江戸の人、名双松、字茂卿、通称総右衛門）がその人である。彼は朱子学を批判し、古文辞学を提唱、自覚的に言語学や文献学的アプローチを用いて新たな古典解釈を試みた。そのため、「惣而学問の道は文章の外無之候」（『徂徠先生答問書』中）というように、学問の重要な基礎として詩文の学習を全面的に肯定し積極的に推奨したのである。徂徠は、五代将軍綱吉の側用人、柳沢吉保に仕えたり、八代将軍吉宗に信任され諮問を受けたりする等、まさに時の人となった。このことも手伝い、彼の主張や方法論は全国の儒学者に絶大なる影響を及ぼした。そのおよそ一世紀の後、津阪東陽（一七五七～一八二五、伊勢の人、名孝綽、字君裕）は、『夜航余話』巻下のなかで、徂徠の言も直接引用しつつ、その見識の高さを賛美している。

> 学問の道も他なし。とかく文字と馴親むにあり。書巻に向て気づかひ隔意にては、何でもなき事もむつかしくなやみ、聖人の道を企およびがたく思ひて、しみじみと感徹信受すること能はず、何ほど書を読でも、道と我と合体せずして、躬行の益になる事なし。故に文字に親むより入こと、もつとも学業の第一義にて、その初て入のとりつき立には、詩をまなぶよりよきはなかるべきなり。……中略……「学問之道従詩入」と徂徠翁の發揮せしは、まことに卓識格言なりけり。且士君子にして雅情なければ、固陋にして物の趣をしらず、浅ましく頑愚にして俗に堪ず。しかるに是を軽薄の技として、頭巾俗儒のいましめ禁ずるは、却て「夫人の子を賊」といふべし。
>
> 但し兼好のつれづれ草に、馬のることを習ひし法師の、ついに僧の業をおこたりて、馬のりになりけるいましめ、あながちにふけりすさめば、此弊をまぬかれず、是亦用心すべきなり（もと和文）④。

後段で東陽は、『徒然草』の一節を引用し、度を越した作詩への耽溺を戒めることも忘れてはいない。しかし、前段では、古文辞派が主張した文字（文辞）より学問に入門すること、ならびに詩の学習が初学者にとって学問形成の重要な助けになることをもっぱら述べ、その道筋をつけた徂徠の功績を称えている。しかし、徂徠から約一世紀下った津阪東陽の時代にも、作詩を強く戒める「頭巾俗儒」が存在したことを、この文は伝えている。朱子が提起した問題は、時代を経ても、所を変えても、さらには徂徠の主張によっても、完全には消えてなくなることはなかったのである。したがって、漢詩の創作主体が儒者でありつづける限り、作詩はあくまで附庸の位置づけにしかなり得ない。日本漢詩の全き発展のためには、儒学から自由である詩人が誕生しなければならなかった。

江村北海が『日本詩史』を執筆した、十八世紀の後半、明和年間の前後には、漢詩の創作主体はすでに平民に転じていたが、その多くは町儒者であった、と推測される。ところで、『日本詩史』が完成した明和五年、大窪詩仏はまだ二歳であった。すでに平民の詩人が多く現れていたが、はたして詩を専業とする人が彼よりも前に現れていたのであろうか。この問題について、次節で検討する。

㈤　職業詩人の萌芽

儒者と詩人の分離と詩人誕生の条件について、富士川英郎氏は以下のように述べている。

漢詩文はもと儒者の身につけるべき嗜みとされていたものであった。従って江戸の初期から林羅山をはじめとして漢学者はその大小を問わず、みな詩文に意を用いて、儒者は同時に文雅の士ではあったが、その本道が経義の学にあったことは論のないところである。それが同じ儒者のうちでも経学を事とする者と、詩文に長じた者との別が現れはじめたのはだいたいにおいて蘐園派以後のことと言ってよく、それは早く江村北海もその著『日本詩史』の中で、「蓋し（荻生）徂徠の没後、物門の学、分れて二となる。経義は（大宰）春台を推し、詩文は（服部）南郭を推す」（もと漢文）と指摘している通りである。そしてこの傾向はその後次第に著しくなり、現に江村北海の『日本詩史』のような著書が明和年間に出版されたのもそうした当時の情勢を背景

としてのことだと言ってもいいが、降って菅茶山や市河寛斎のような人にしても、このふたりは立派な儒者であったにも拘らず、その真面目は詩人であり、趣味の人であったことにあると言えよう。しかもこのふたりと前後して世に現われて、同じように詩文を主として嗜んだ儒者の数は甚だ多く、それらの儒者たちが三都をはじめとしてさまざまの土地でひらいた詩社は、当時勃興の機運にあった庶民階級に詩文を学ぶ機会と便宜を与え、農家や町人の子弟でそれらの詩社に入った者の数は少なくなかった。漢詩が経学から独立し、詩人がしばしば儒者と別な者であったという現象は、概して言えば、当時のこのような事態から生じたのであり、また、そのようなもはや儒者ではない詩人たちがよくその生活を保ち得たのも、同じ事態、つまり庶民の間に詩を好み、また、自らも詩を作る者の数が次第にましていたという事情をその支えとしていたのである[5]。

富士川氏は右の文のなかで、儒者のなかに、詩を主とする派があり、そのなかから職業詩人が誕生したこと、そしてその転機が荻生徂徠の蘐園学派隆盛の頃にあること等を指摘している。

しかし、厳密に言えば、元禄・宝永年間から享保年間までの間（一六八八～一七三五）に、関西においては職業詩人がすでに少数ながら存在した。荻生徂徠が古文辞を提唱する前に（あるいはほぼ同時に）、関西でもっぱら詩を教授し、「詩人」と呼ばれた人が二人いる。それは、鳥山芝軒（一六五五～一七一五、名輔寛、字碩夫、通称佐太夫）と笠原雲渓（？～？、山城の人、名龍鱗、字子魯、通称玄蕃）である。

以下、この二人の行跡および詩集の刊行等を簡単に紹介しつつ、職業詩人が如何にして誕生したのを考察する。

(1) 鳥山芝軒

鳥山芝軒は終生、伏見と大坂において、子弟に詩を教授しながら清貧の生活を送った詩人である。遺稿は『芝軒吟稿』といい、六巻すべてが近体詩である。詩題に着目すると、「晩春雑興」、「田家春興」、「田家秋興」／「春日」、「春陰」／「木筆花」、「罌粟花」、「紫燕花」／「荘子」、「伍子胥」、「蘇秦」等々、田園、題詠、詠花、詠史の作が多い。初刊の時期は、末尾に附された三木近有（号省吾）の「以芝軒吟稿呈朝鮮國申學士」の一文から、享保四年（一七一九）の秋、芝軒の子である鳥山輔門が、芝軒門人の戸田方弼（字賚卿、号由夫、一黙軒）等とともに編集刊行したものであることが分かる。同年の秋、朝鮮通信使

の製述官として来日した申維翰（一六八一～一七五二、字周伯、号青泉）に送って批正を求めた。さらに、同年の冬、霊元天皇に謹呈し御覧を忝くしたという。しかし、享保九年（一七二四）春の火災によって、版木を焼失、享保十一年（一七二六）春、輔門等が尽力して再刊した、という（鳥山輔門の跋文による）。

芝軒の場合、詩集の出版は没後のことで、詩名が上がったのも子の輔門や門人の力によるところが大きい。時期的に言って当然ではあるが、その詩に、古文辞派の影は認められない（古文辞派の流行は享保年間以降である）。彼の「詩窮」という詩には、

若將先哲論吾黨　若し先哲を将て吾が党を論ずれば
宋數聖兪唐浩然　宋は聖兪を数へ　唐は浩然なり

とあり、己を唐の孟浩然と宋の梅堯臣に擬えている。この句から判断すると、彼は唐宋を兼修したのであろう。江村北海の『日本詩史』には、巻三に紹介があるが⑥、芝軒の名「輔寛」を「輔賢」と誤記しているところをみると、北海の熟知する人ではなかったようである。しかし、下って明治時代になると、東條琴台（一七九五～一八七八、名信耕、字子臧）は、その著『先哲叢談続編』（『日本偉人言行資料』、友文社、一九一六年五月）巻三において、芝軒こそが日本の専業詩人の濫觴である、と指摘している⑦。以下に関連する部分を引用する。

芝軒、少壮より歌詩を好み、唐人に刻意し、専ら詩を作るを以て、生徒に教授す、常に三体・唐詩・杜律集解・唐詩訓解等を講説し、此を以て門戸を作し、自ら称して詩人と為す。〔按ずるに、是より先き、石川丈山・平巖仙桂・僧元政等、目するに詩人を以てすと雖も、皆経史を講じ、子弟に教授す、未だ曾て唐詩を講説するを以て専業と為す者あらず、元禄・宝永の間、芝軒　始めて之を首唱す。〕

東條琴台によれば、芝軒はもっぱら詩を講説することを業とした初の日本人である。元禄・宝永年間、関西では、すでに詩文だけを愛好する大衆が現れていた。儒学は政治と深く関わる学問であり、関西がすでに政治の中心から遠く離れたため、儒学から離れて詩文を専業とする人たちが現れたのも理の当然である。しかし一方で、芝軒は時代的制限をも受けている。たとえば、出版の費用がまだかなり高く、それを十分に活用できなかったこ

と、学生数がまださほど多くはなかったこと等である。それゆえ、貧窮に甘んじたが、彼の主たる収入源は生徒の納める束修しかなかったようである。

なお、芝軒の門人のなかにも、特筆すべき人物がいる。入江若水（一六七一～一七二九、名兼通、字は子徹）がその人である。彼は、もともと商人でありながら、詩を愛好し、ついに業を棄てて隠棲して詩人となった[8]。日野龍夫氏は、「入江若水伝資料」[9]において、「若水の町家から出て専門詩人への道を歩んだ生涯には、芝軒の影響が大きいと考えられる」と指摘している。若水は業を棄てた後、京都の西山に隠棲して、人と唱和しながら詩を作った（『西山樵唱集』二巻、『東行吟』一巻がある）。そのライフ・スタイルから見ると、詩を生活の糧にしたというよりも、隠居生活を彩るものとして詩があったという方が、実態に即している。よって、彼は専業詩人というよりも、典型的な隠棲詩人というべきであろう。

(2) 笠原雲渓

笠原雲渓は、京都において詩を教授した。生卒年は不明だが、彼の詩集『桐業篇』が現存している[10]。国会図書館所蔵の抄本（乾、坤）と享保二十一年（一七三六）の刊本があり、筆者も調査の機会を得た。両者を比較すると、詩は重なるものもあるが、同一ではない。抄本には、享保十九年の序文があり、それによると、この抄本の抄者は、松岡由章（?～?）であるが、編者は雲渓の門人の一人である（氏名未詳）。師の生前にあまり指導を受けなかった彼は、師の没後、遺稿を求め、ついに『桐葉篇』一冊を得た。のちに、友人の松岡由章がこれを借閲して抄したのが、すなわちこのテキストである。とはいえ、この抄本は誤謬が多く、文字の多出や遺漏が多い。それが由章の誤写によるものだけだとは考えにくい。おそらく、原本にすでに誤まりが多く含まれていた可能性が大きい。いずれにせよ、刊本の出現以前に、雲渓の詩集は抄本の形ですでに一定程度流布したことが知られる。

いま、抄本と刊本を併せて見てみると、創作時期の分かる最も早い作品は、元禄二年（一六八九）の作（「己巳除夜」）で、最も遅いのが享保十五年（一七三〇）の作（「庚戌春盡前三日遊鷲峰亭」）である。よって、その創作時間はおおよそ元禄、宝永、正徳、享保年間であることが知られる。ほとんどすべてが近体詩である（古体詩は附録に数首収められるのみ）が、「阿嬌怨得真韻」、「昭君怨得歌韻」、「婕妤怨得佳韻」、「上陽怨得灰韻」、「春閨怨」、「秋閨怨」、「春宮怨」、「秋宮怨」、「従軍行」等、古文辞派を彷彿とさせる擬古風の詩題も少なくなく、あるいは古文辞派の影響を受けているかもしれない。

雲渓の詩集は生前には刊行されなかったが、詩名はすでにあった。『日本詩史』巻三には、雲渓が如何にして詩を教授する道に進んだのかが簡略に記されている。

笠原雲渓、名は龍麟、玄蕃と称す。京師の人、詩名一時に顯著なり。今に到りて遐陬僻境の士、尚ほ嘖嘖として称す。蓋し惺窩先生京師に講学せしより茲に百有餘年。その間、詩賦文章を以て称せられし者ありと雖も、風俗未だ漓(うす)からず、学は必ず経史に本づき、翰墨を以て緒餘と爲す。雲渓独り詩を以て行ふ。是の時、仁齋の門人中島正佐といふ者、專ら講説を業とす。講ずる所四書を出でず。終始循環、一日数席なり。諸州の生徒、其の門に輻湊す。雲渓の居止、正佐に接近す。乃ち詩を以て人に授く。生徒以て便と爲す、是に於て雲渓の詩名、四方に伝播す。亦た京師の学風一変の機会なり。雲渓没し、門人竹渓といふ者、其の遺稿を鈔し、梓して之を行ふ。『桐業編』と名づく（後略）。

笠原雲渓、名龍麟、稱玄蕃。京師人、詩名顯著一時。到今遐陬僻境之士、尚嘖嘖稱焉。蓋自惺窩先生講學於京師、百有餘年于茲、其間雖有以詩賦文章稱者、風俗未漓、學必本經史、以翰墨為緒餘。而雲渓獨以詩行。是時仁齋門人中島正佐者、專業講説、而所講不出四書、終始循環、一日數席、諸州生徒、輻湊其門。雲渓居止接近正佐、乃以詩授人。生徒以為便。於是雲渓詩名、傳播四方、亦京師學風一變之機會也。雲渓没、門人竹渓者、鈔其遺稿、梓而行之、名桐業篇（後略）。

北海によれば、笠原雲渓は、京都の大儒、伊藤仁斎（一六二七～一七〇五）に師事した。同門の中島浮山（一六五八～一七二七、名は義方、字は正佐）はもっぱら四書を講じ非常に評判よく、諸州から学生が「輻湊」するほどであった。その隣に暮らしていた雲渓はもっぱら詩だけを講じていた。諸州から集った学生たちは、浮山と雲渓の住まいが隣同士で便利なので、四書を習う傍ら、詩も習い始め、それがまた評判を呼んで、彼の詩名も全国に広まった、という。ここに言う「門人竹渓といふ者、其の遺稿を鈔し、梓して之を行ふ」とは、すなわち享保二十一年の刊本（竹渓は刊行前に没し、書肆の梅井秀信が受け継ぎ完成させた）を指す。また、「竹渓」は、野春泰和の号。『桐葉篇』に附録された「竹渓遺稿」はその詩集である。前に記した抄本の序文にいう、氏名未詳の門人が彼であるか否かは分からないが（もし同一人物だったら、抄本未収の作を刊本に補入すべきであるから、その可能性が低い）、この刊本も雲渓の没後にようやく刊行されたものである。

以上のように、芝軒と雲渓が人に詩を教えることを生業としていたことは確かではあるが、彼らは、詩仏たちのように自ら詩集を出版刊行し、同時代的に自作で衆目の関心を惹くような、積極的な文藝活動を展開していたわけではなかった。それは、時代と社会の成熟が未だそこまでは到達していなかったことと、関西という保守穏健な土地柄のなせる業かもしれない[11]。当時の関西は、なおも従来の農耕経済を引きつぎ、漢詩の主たる学習者は儒者や公家、武士、僧侶、医者であった。『日本詩史』巻二では、「今の京城の中、講説を業とする者、無慮数十人、謁を其の門に執るは、醫家の子弟に匪ざるはなし。之を除きて復た生徒なし」と、とりわけ医者の子弟が圧倒的多数であったと伝えている。

とはいえ、詩人の専業化という現象が初めて生まれたのは、実は徂徠学の中心江戸ではなく、京都と大坂であった。その原因は、まず京都がもともと中国を起源とする伝統文化や学問の中心地であり、藤原惺窩や林羅山を生んだことからも分かるとおり、儒学や中国古典学の伝統的盛地でもあったからである。そして第二に、政治の中心が江戸に移ったことにより、関西は自ずと政治から遠ざかり、そこに暮らす儒者たちにとって、政治はもはや絶対的に最優先される要件ではなくなったからであろう[12]。関西の儒者たちは、あるいは公家と付き合い、あるいは町人に教えて束修を得て生活していた。

以上、関西では十七世紀の末から、鳥山芝軒、笠原雲渓のように、作詩を教えることを職業とした人が存在した。しかし、芝軒、雲渓の例はあくまでも孤立的で希有な例外のようである。序章に掲げた、本論における「職業詩人」の諸条件の一部を満たしているとはいえ、化政期の詩仏たちの活動と比べると、はるかに受動的であって、彼らと同日に語ることはできない。彼らの場合は、萌芽的な先例と見なすべきであろう。

それでは、いったい何時頃から名実備わる正真正銘の職業詩人が生まれたのであろうか。この点についても、『先哲叢談続編』巻三「笠原雲渓」の条に以下のような関連の記載がある。

> 建櫜而還、文学寖く闡けて、鴻匠輩出し、其人に乏しからず。然りと雖も、只だ詩藻を以て生徒を教道する者は、是より先き、未だ曾て之あらず、専ら此技を以て一家を作すは、雲渓及び芝軒のみ。
>
> 世に詩人と称する者、輦轂の地、芝軒、雲渓を以て、之が首唱と作す。江村北海・龍草廬の輩に至っては、其拙劣を極むと雖も、声価、経義・文学の士と雁行する者は何ぞや。一首沈吟の詩、労せずして自ら世人の耳に入る、半行間の揮毫、煩はすこと

なくして、能く俗士の眼を娯ましむ、潤筆 収め易く、謝資 速に至る。是を以て詩人と称する者、極めて多し。其徒 博く経史に通ずる能はず。僅に法を李・杜・蘇・陸に誦し、寡陋 自ら甘んじ、傲然として恥じる所を知らず。此弊 近時に至りて、輦轂の地、暨び大坂、江戸を論ぜず、諸方 皆然り。雲渓 才気あれども、惜しいかな、時習の為に錮せられ、遂に詩人を以て世に知らる。

東條琴台は右文の中で「江村北海・龍草廬の輩に至っては、其拙劣を極むと雖も、声価、経義・文学の士と雁行す」と述べている。江村北海（一七一三～八八）や龍草廬（一七一四～九二、姓武田氏、名公美、字君玉、通称彦二郎）を批判した条だが、要は彼らが儒者や漢学者と肩を並べる声価を得ていたという事実である。十八世紀の後半期になると、詩人がすでに職業として成り立つまでになっていたのである。右の文ではまったく触れられてはいないが、笠原雲渓から江村北海に至るまでの間、その変化を促すのにもっとも多大な影響力をもったのは、荻生徂徠および蘐園学派（古文辞派）の諸賢である。

(3) 蘐園の諸賢

江戸前期～中期まで、漢詩文の作者は大半が儒者であったが、後に儒学からだんだんと分離し始める。その変化を加速させたのが、荻生徂徠を始めとする古文辞派の流行であるとされる。

徂徠が柳沢吉保の失脚後、下野して開いた蘐園塾は評判を呼び、多くの弟子（儒者）がここから巣立ち、彼の提唱した詩風や詩説も、彼ら門弟によって各地に拡散した。徂徠は明代中葉の、いわゆる前後七子の唱えた「文は必ず秦漢、詩は必ず盛唐」という主張を受け継ぎ、模範と仰ぐべきテキストを限定し、それを徹底的に模倣学習することを、初学者の第一の務めとした。

絶対的な価値と明確な目標が掲げられたことによって、初学者は迷うことなく模範的作例を学習模倣し、そのなかから詩文の作法と基礎とをいち早く身につけたと思われる。初学者にとって、学習の対象は、多様で無数にあるより、型にはまった少数の方がいい。おそらく、この簡明・明快さゆえに、徂徠の方法論は爆発的に流行したのであろう。その結果、その主張が作詩のハードルを下げ、実作者も倍増して、江戸漢詩の創作レベルを底上げする効果をもたらした、と見なされる。このように、漢詩文の創作熱が一気に高まりつつある風潮の下で、やがて詩文を専業とする人が現れてくる。

徂徠の門人で、詩名のある者は数十人いたが[13]、なかでも、詩文をもって門戸を張った

のは、服部南郭（一六八三～一七五九、名元喬、字子遷、通称幸八）、入江南溟（一六七八～一七六五、名忠囿、字子園、通称幸八）と高野蘭亭（一七〇四～五七、名惟馨、号蘭亭、東里）の三名である⑭。

とはいえ、三人とも最初から詩人として身を立てるつもりではなかった。南郭は最初、和歌と画をもって柳沢吉保に仕えたが、後に徂徠に入門し、詩文に専念した。吉保亡き後、嗣子の吉里が学問好きな人物ではなかったため、やむを得ず柳沢家から致仕した。南溟は、純粋な詩人ではなく、儒学者でもある。蘭亭は、徂徠の門人唯一の庶人の子（肴屋の冨家の子）で、もともと徂徠から疎遠されていたようである⑮。十七歳の時、失明してから、徂徠の意見に従って、専ら詩を作ることになった⑯。その詩集の『蘭亭先生詩集』も宝暦八年（一七五八）、蘭亭の没後に刊行されている。また、蘭亭の門下に横谷藍水（一七二〇～七九、名友信、字文卿）があり、同じ盲人で、医業を棄てて詩人となった。『藍水詩草』があるが、やはり没後の安永九年（一七八〇）に刊行されている。

(4) 龍草廬と江村北海

最後に、東條琴台によって批判された二人、龍草廬と江村北海について附言しておく⑰。龍草廬の「詩人の詩」に対する意識については、すでに序章において論じたので述べない。ここでは詩集の刊行についてのみ記す。

『龍草廬先生集初編』は宝暦三年（一七五三）に出版されているので、龍草廬がまだ中年の頃である。江村北海の『北海先生詩鈔』も、初編が明和四年（一七六七）に刊行されている。すでに晩年ではあるが、初編、二編、三編いずれもがその生前に刊行されている。鳥山芝軒の『芝軒吟稿』、笠原雲渓の『桐葉篇』、高野蘭亭の『蘭亭先生詩集』、本節で採り上げた、十七世紀末から十八世紀半ばまでに活躍した専業詩人の詩集は、すべて没後に刊行された遺稿集であったが、十八世紀の後半、宝暦・明和年間になると、龍・江村両氏の詩集に「初編」の名称が附されたことから明らかなように、作者の生前に詩集が刊行されることが一般化し始めた。彼らは詩を作りながら、自編の詩集を刊行した。この現象の、漢詩の専門化における意義はけっして小さくない。

＊　＊

以上、元禄から宝暦、明和年間に至る専業詩人について考察を加えた。この間のもっとも大きな変化として、まず生活手段の多様化、次いで詩集刊行のスピードを挙げることができよう。この変化は、作詩学習者の増加と出版事業の進歩によって決定されたものである。ただし、彼ら初期の専業詩人の詩は、詩仏等の化政期の詩人のそれとは、やはり質的

に大きな違いがある。江戸前期～中期の専業詩人がおおむね理想として掲げる詩は「君子」の詩であり、窮極のところ儒教的道徳に則る詩であった。古文辞派の詩人はむろんのことだが、龍草廬でさえも、以下のように述べている。

詩とは言なり。君子の言なり。遠きに行ふべく、後世に伝ふるべき者、君子の言に匪ずんば、則ち何を以てか為さん。

詩者言也、君子之言也。可行乎遠、可傳乎後世者、匪君子之言、則何以為。

（『龍草廬先生集初編』巻二「金蘭詩集序」）

これは、中国士大夫の詩論とほぼ変わらない。この問題については、第四編において改めて論じたい。

要するに、大窪詩仏が生まれた時期、職業詩人を可能にする諸条件がすでに具備していた、といってよい。

(六)　結び　――職業詩人の大量出現――

以上述べてきたように、詩は、江戸時代の前期、儒者の余業に過ぎなかったが、中期から、「詩人」という専門職業が、儒者から独立分離し始める。しかし、詩人と儒者の関係は緊密で、多くの詩人は漢学塾から出ている。また、詩歌観も儒家の伝統、風雅を第一とするものであった。ところが、後期になると、詩の専業化がますます進み、庶民のなかに、詩人として身を立てる者が増えてくる。

友野霞舟（一七九一～一八四九、江戸の人、名瑛、字子玉、通称雄助）の『錦天山房詩話』（『日本詩話叢書』第八巻、池田蘆洲編、鳳出版、一九七二年六月）凡例に、以下のような一節がある。

元禄以前、人に因りて詩を伝ふる者、十の七なり。享保以後、詩に因りて人に伝はる者、十の九なり。何となれば則ち、當初の風俗は淳厚たり、士氣は剛勁たり、苟も斯文に志す者は皆な道義を尚ぶ、故に其の嘉言偉行、自ら世に卓卓たり、固より辭章を待たずして伝ふるなり。爾後、累熙重洽、文運　日びに融たり。近世に至りて、閭

里の小民、深閨の弱女、亦た文墨を弄ぶを知る。其の技を挾みて四方に糊口する者有るに至る、此も亦た以て文質の消長、世道の昇降を見るに足る。

元祿以前、因人而傳詩者十之七。享保以後、因詩而傳人者十之九。何則、當初風俗淳厚、士氣剛勁、苟志斯文者皆尚道義、故其嘉言偉行、自卓卓於世、固不待辭章而傳也。爾後累熙重洽、文運日融、至近世、閭里小民、深閨弱女、亦知弄文墨。至有挾其技而糊口於四方者、此亦足以見文質之消長、世道之昇降矣。

友野霞舟は、古賀精里の門人、野村篁園（一七七五～一八四三、名直温、字君玉、通称兵蔵）に師事し、昌平黌教授を経て甲府徽典館の学頭となり、後に昌平黌で教えた。右文の中で重要なのは、「近世」＝江戸後期には、「閭里の小民」、「深閨の弱女」も詩文を作るようになった、と述べている点で、当時の巷間における詩文創作熱を伝えている。なぜ、「小民」が儒学より詩文を愛好するようになったのかといえば、経世治国の学問である儒学に対し、詩文はずっと気軽にアプローチできる技芸であったからであろう。

そして、庶民が作詩を職業として選んだもう一つ理由は、やはりそれがより高尚な職種と見なされたからであろう。文人は、当時の社会階層において上位に位置したのであるから、工、商、農としてその本分に甘んじるよりも、そういう職種を本業とできれば、士の階層に近づくことができる。

たとえば、『五山堂詩話』巻七に、「小田生」という人物のことが記されている。彼は、もともと江戸のとある商人の店に勤めていたが、「既にして自ら謂へらく、吾が先は士たり、我商たるを恥ぢ、幡然として業を改め、文藝を以て自ら奮はんと欲す（既而自謂、吾先為士、我恥為商、幡然改業、欲以文藝自奮）」と言っている。もともと武士の出であった彼は、商家に仕えていたが、それを恥じるようになり、一念発起して文筆で名をなす道を歩み始める、という逸話である。

このように、文化人に憧れる人は少なくなかった。詩仏の父親もそういう一人であったようだ。朝川善庵の撰「宗春大窪先生墓表」には、「子の行、夙に其の志を承け、医を改めて儒と為り、詩学を以て赤幟を一方に立て、名、天下を動かす」と明記されている。すなわち、詩仏が医から儒に転身したのは父親の遺志でもあった。

そのほか、知識人が増加した結果、幕府や藩に取り立ててもらえる定員が飽和状態となり、仕官の可能性が低下したことによって、詩人に転身する人が増えたという現実的理由を想定することもできる。加えて、儒学が治世に用いられなった[18]上に、漢詩漢文を創作

することで生きていける社会構造になったことが、職業詩人が現れたもっとも重要な客観的条件といってよい。つまり、社会における漢詩文需要の高まりが、職業詩人たちの誕生を促したのである。

ところで、江戸後期における詩人の比率はどのくらいであったのだろうか。それは当時、刊行された人名録から推し量ることができる。たとえば、化政版『平安人物志』に、以前の諸版に見られなかった「詩」の部門が出現している。この点については、すでに宗政五十緒氏の「京都の文化社会―『平安人物志』化政版と京儒―」（林屋辰三郎編『化政文化の研究』所収、岩波書店、一九七六年三月）のなかで指摘されている。

そのほか、藤田万樹の『江戸現存名家一覧』（『近世人名録集成』第二巻、勉誠社、一九七六年三月）刊行年は不明だが、江戸後期の作）にも、分様々な江戸の職業が列記されている。一番多いのは儒者（二〇一人）、次に画家（二〇〇人）・書家（九六人）・詩人（六五人）・医者（七六人）と続く。ほかに、博識（九二人）、歌人（五五人）、連歌（一五人）、物産（一一人）、蘭学（一九）、篆刻（二四人）、雑家（五四人）、心学（四人）、兵学（七人）、剣学（一三人）、射術（六人）……筆耕家（一〇人）、書画鑒定（七人）が名を連ねる。これら肩書から推測すると、自らがそれぞれの技芸学問に秀でたのみならず、有志や好事家に伝授・指導した人が多かったようである。このなかでとくに注目すべきは、「詩人」が職業として掲げられているのみならず、人口においても儒者、画家、書家に次ぐ、第四位の多さになっている、という点である。江戸という一都市だけでも、六五名の詩人が存在した点は、時代の大きな変化を証明している。

以上、第一章では、江戸時代に職業詩人が誕生するまでの変化の足跡を整理した。江戸中期から、詩人という職業は、町儒者のなかから分離独立して形成された。政治の中心から遠く離れる関西において、いち早くもっぱら詩文を教授する人が現れ、のちに、荻生徂徠の主張が風靡したことによる詩文重視の風が拡がり、さらには刊刻出版事業の成熟等もあって、少しずつ職業詩人成立の諸条件が整ってきた、ということができよう。次章では、職業詩人がいかに生活していたのかという問題について、論じることとする。

注釈

①「江湖」派の名に違わず、官歴をもつ七二名の中で、中央の顕官に昇った者は殆どいない。このグループの成員は、「江湖」の名の通り、強半が官位の低い役人か在野の民間人である（内山精也氏の『蘇軾詩研究　宋代士大夫詩人の構造』第一章「宋代士大夫の詩歌観」、研文出版、二〇一〇年十月、六〇頁）。

②『日本詩史』（『新日本古典文学大系』65、岩波書店、一九九一年八月）に所収した大谷雅夫の「日本詩史解説」（五九六頁）による。以下の引用は全てこの書による。

③ほかに、漢学の造詣が深い僧侶や医者も余業として詩を作れたが、ここでは暫く討論範囲から除外する。

④『夜航余話』（『新日本古典文学大系』65　一九九一年八月）、三二〇、三二一頁。

⑤富士川英郎『江戸後期の詩人たち』（平凡社、二〇一二年一月）八〇、八一頁。

⑥鳥山碩夫、名輔賢、號芝軒。亦攝人。或云伏見人。余少年時、已聞江若水詩名、以為攝之巨擘、未知有碩夫也。迄為邸職、以吏事數往來浪華、一日訪葛子琴、見架上有芝軒吟稿、廼知碩夫之遺稿（後略）。

⑦松下忠氏の『江戸時代の詩風詩論：明・清の詩論とその摂取』（明治書院、一九六九年三月）も芝軒を「専門詩家の嚆矢」としている（四七四頁）。

⑧入江若水が詩を愛好していたことは荻生徂徠の「叙江若水詩」（『徂徠集』巻八、『詩集日本漢詩』第三巻、汲古書院、一九八六年二月）に記されている。

⑨日野龍夫「入江若水伝資料」（『近世大坂芸文叢談』、大阪芸文会、一九七三年三月）。

⑩『近世漢学者著述目録大成』（『日本人物情報大系』第四八巻、皓星社、二〇〇〇年七月）によると、ほかに『唐詩訓解』や『唐詩法律』の著述がある。

⑪宗政五十緒氏は、「京都の文化社会―『平安人物志』化政版と京儒―」（『化政文化の研究』所収、岩波書店、一九七六年三月）のなかで、「すでに京都においては享保頃、笠原雲渓が出て、詩賦文章を専門として講学した。彼が専門詩家の始まりであることは江村北海の『日本詩史』に述べるところである。しかしながらその後も依然として詩文は儒者の経史講学の緒余であったことが大勢であった」と指摘した（三〇五、三〇六頁）。

⑫「概観的に述べると、日本の儒学は、近世前期においては京都が最も高い水準を保持し

ていたと見てよい。享保期に至って蘐園の学が大いに広まって、江戸中期には京都と江戸と学を二分する様相を呈する。しかしながら、人数の上からいうならば、享保から宝暦にかけても依然として京都が儒学の中心地であったと見てよい。こうした京都の儒学の地位が化政以後衰落の途を辿ることになる」（前掲宗政五十緒「京都の文化社会―『平安人物志』化政版と京儒」、二八八頁）。

⑬日野龍夫氏が「文学史上の徂徠学・反徂徠学」（『徂徠学派』、日本思想大系37、岩波書店、一九七二年四月）にて、「徂徠の門人のうち特に詩文をもって聞こえたのは、服部南郭と高野蘭亭であるが、石川大凡・入江南溟などにも詩文関係の著述が多い。孫弟子では安達清河・鵜殿士寧・横谷藍水などがある。他の人々にしても前代の儒者に較べれば詩文への傾斜は著しく」と指摘している。

⑭日野龍夫『服部南郭伝考』（ぺりかん社、一九九九年一月）、一三七頁。

⑮『蘐園雑話』（著者未詳、『続日本随筆大成』第四巻、吉川弘文館、一九七九年十二月）に「徠翁人に接するに士人に非れば堅く同間に入れざりき。故に蘭亭なぞも屡々出入しかども、御魚屋の子なれば一間づつへだてゝ教授致され、見舞などに来りしときは玄関にて逢てかへされしが、後明を失してよりは士人同様にあしらはれしとなり」（八四頁）。

⑯前掲『蘐園雑話』に「蘭亭失明の後、徂徠に就きて、今はかくなりぬれば如何ともすべからず。針を立習て生産ともすべきやと申せしに、徂徠暫く黙してありしが、いやいや夫は然らず、易を学びて筮者となりなんや。又た詩を作りて詩人となりなんやと云はれしが、又た暫して、必ず詩人となるべし。聖人詩書礼楽の教の其の一つを得べきなれば是に勝ることやあるち決断あるし故、詩を学んで只今は生産も貧しからず。又た後世に名も朽まじきと存ずるなり。皆徠翁の目の明かなるを以て教へられたる故なりと、蘭亭語りき」（七三頁）。

⑰『先哲叢談後編』（『日本偉人言行資料』、一九一六年五月）巻八「龍草廬」条に言う、「草廬、人の需に応じて、文を作り、字を書く毎に、必ず謝儀の多少を定めて、而して後に思を構へ稿を起す。若し其謝儀財幣、速に之を贈らざれば、則ち未だ全く成らずと言ふ。故に墓誌・碑銘・題跋・序記の諸文を請ふ者、其成を速にせんと欲せば、必ず先づ謝儀財幣を以てし、後其事を請ふ、諸儒皆貪得なるを譏る。草廬、自若として曰く、耕耰に代ふるに筆硯を以てす、何ぞ以て累と為すに足らんやと、更に之を校さず。同時に江北海、日本詩選を著す、時人語つて曰く、銭を納れて選に入る江君錫、価を待ち文を作る龍子明と。蓋し当時浮華風を為し、軽薄習を為し、人々虚驕を事とし、好名の徒、詩稿を以

て、採択を請ふ者あれば、北海其請に従ひ、必ず刻費の資と称し、若干銭を取り、而して後、僅に一二首を採つて之を選中に収む、故に此語あり、君錫は北海が字なり」（五七、五八頁）。

⑱皆川淇園「送森生従僕射滕公入東都序」に「それ学んで以って仕うる者は、士の道なり。然れども今の政、儒者に議せずして、その治隆んなり。故に士大夫の道を誦し、学を言う者は、万に僅かに一二を得べし。天下諸侯の国、皆な以て然らざるなし」（『淇園文集』初編巻一、『近世儒家文集集成』第九巻、ぺりかん社、一九八六年四月）とある。

第二章　職業詩人の生き方
―大窪詩仏を例に―

㈠　はじめに

第一章において、江戸時代の職業詩人の誕生および化政期の大量な出現について論じた。しかし、化政期の成熟した職業詩人と萌芽期の詩人とは、生き方において大きな違いが見られる。すなわち、萌芽期の詩人は詩文を教授することを主な生活手段としていたが、成熟期の詩人は多様な手段を使って、裕福な生活を支えていた。本章は、化政期の職業詩人（とくに大窪詩仏を例に）を考察対象として、中国の明清時代の文人と対比しつつ、その生き方および生計の問題を明らかにしようとするものである。

明清時代の文人を対比対象とする理由は以下の通りである。第一章に論じたように、南宋江湖詩派は庶民詩人のさきがけではあるが、厳密的に言えば、職業詩人とは言えない。明清時代になって、江南地域の商業の大発展と共に、大量の文人がそこに集まり、そのなかから、ようやく成熟的な職業詩人という生き方が現れた。明清時代と江戸時代の化政期とは、政治的にも社会的にも大きな差異が存在することは当然であるが、都市環境の具備という点では共通するので、この環境の下で急速に成熟した両国の職業詩人には、生活上どのような共通点があるのかに本章は注目したい。

㈡　明清時代の職業文人

大窪詩仏たちの江湖詩社とほぼ同時代の明清において、もっとも重要な文体は、八股文（時文）であった。そのため、詩は立身出世とは関わりのない文体と化し、士大夫や士大夫を目指す挙子たちが、第一に習得すべき伝統文体ではなくなっていた。とはいえ、もち

ろん明清において詩が作られなくなったわけではない。量的に言えば、詩の全盛期と目される唐宋に数倍する作品が作られ、今日に伝わっている。では、唐宋期においてもっとも主要な創作主体であった士大夫ならびにその予備軍から重視されなくなったこの文体は①、いったい誰によって作られたのであろうか。それは、主として社会の中間層に属する下級知識人たちである。

このような知識人は、だいたい二種類に分けられる。一つは、八股文をうまく書けず、挙子業を順調に歩めなかった知識人で、彼らは主として塾の教師や富裕な家の家庭教師等の教育職に就くか、権貴の機嫌をとる門客になるかして生活した。もう一つは、大都市に暮らす商人や医者等を本業とする愛好家たちで、詩会を開き、時には士大夫を招き入れて活動することもあった。

前者は、地主や他に生業がある人でなければ、生活は困窮していたと考えられる。後者は「儒商」と呼ばれ、生活に余裕があり、都会に暮らす許多の好条件を活用し、文人と交流し、文人にも様々な支援を与えた。両者が互いに影響しあって、職業詩人が現れた。以下は具体的にそれを分析する。

まず前者は、一般的に、「館客」とよばれ（清代になって、「清客」とも呼ばれる）、「塾師」と同様に子弟の教育にも務めるが、その多くは官員や豪商の邸宅へ出入りして生活費を醵出する。その出現は明代の半ばからで、凡そ「山人」の現れに関連があると考える。

明代の沈徳符（一五七八～一六四二、字景倩、又字虎臣）『万暦野獲編』（『元明史料筆記叢刊』、中華書局、一九九七年十一月）巻二三に山人の称呼や出現、及び代表人物などが説明されている②。それによると、明代の山人は嘉靖の初年から始まり、万暦中後期に盛んになった。彼らの主な特徴は「以詩卷遍贄達官」（『万暦野獲編』巻二三「山人名号」条）③、すなわち詩を以て権貴の門客になることであった。例えば、呉拡（?～?、字子充、江蘇昆山人）は厳嵩（一四八〇～一五六七、字惟中、号勉庵）と交遊し、世人から「相府山人」と呼ばれた。沈明臣（一五一八～九六、字嘉則、号句章山人、浙江鄞県人）は徐階（一五〇三～八三、字子昇、号少湖）と交遊しながら、胡宗憲（一五一二～六五、字汝貞、号梅林）の幕僚にもなった。王穉登（一五三五～一六一二、字伯穀、百穀、号半偈長者など、江蘇江陰人）は嘗て袁煒（一五〇七～六五、字懋中、号元峰）の記室であった。陸応陽（約一五四二～約一六二四、字伯生、号古塔居士、片玉山人、上海松江人）はもともと除籍された生員であり、申時行（一五三五～一六一四、字汝默、号瑤泉）に引き立てられて、「藉其勢攫金不少」（『万暦野獲編』巻二三「山人愚妄」条）④といわれた。

山人の多くは権貴に頼って生活したが、詩文を善くする人もいた。例えば、最も有名な山人である陳継儒（一五五八～一六三九、字仲醇、号眉公など）は『明史』隠逸伝に、こういう評がある。

詩に工にして文を善くし、短翰小詞、皆な風致を極め、兼ねて絵事を能くす。又た博聞にして強識、経史諸子、術伎稗官と二氏家言と、較核せざるは靡し。或ひは瑣言僻事を刺取し、詮次して書を成す。遠近 競ひて相ひ購写し、詩文を徴請する者 虚日無し。

工詩善文、短翰小詞、皆極風致、兼能繪事、又博聞強識、經史諸子、術伎稗官與二氏家言、靡不較核。或刺取瑣言僻事、詮次成書、遠近競相購寫、徴請詩文者無虚日。

『明史』に指摘されたように、陳継儒は詩詞文画をよくし、書籍も多く刊行した（たとえば、『妮古錄』、『読書鏡』、『珍珠船』等）。とくに「詩文を徴請する者は虚日無し」に注目したいが、これは、彼自身の詩文が民衆から珍重されていた、と解釈できるだろう。同じように山人として詩名が高い王穉登もそうである。清代の銭謙益（一五八二～一六六四、字受之、号牧斎）の『列朝詩集小伝』（丁集中、上海古籍出版社、一九八三年十月）にいう。

（穉登）書及び篆・隷に妙なり……中略……閩粤の人、呉門を過ぎる者、賈胡窮子と雖も、必ず門に踏まりて一見を求め、其の片縑尺素を乞ひ、然り後に去る。

（穉登）妙於書及篆隷……中略……閩粤之人、過呉門者、雖賈胡窮子、必踏門求一見、乞其片縑尺素、然後去（四八二頁）。

詩文や書画を鬻ぐことも収入源の一つであろう。ところで、その詩文を徴請する者の多くはどのような人たちであろう。もちろん、銭謙益が言ったように、福建省（閩）、広東省（粤）からの人、外国からの商人（賈胡）、貧乏な人（窮子）もいるが、山人を輩出した環境―江蘇、浙江省―所謂「江南」について考えれば、地域の原因もあるだろう。それは明代からそこに集まった徽商である。たとえば、『万暦野獲編』巻二三の「山人愚妄」条に陸応陽の以下の逸事が載る。ある日、彼は自作の詩一巻を作者の沈徳符のところへ送ってきた、曰く、

公 其れ之を珍し、持して門を出づれば、即ち徽人有りて十金を手にして購去せん。
公其珍之、持出門即有徽人手十金購去矣。

「徽人」は徽商、すなわち安徽省からの商人のことを言っているのだろう。明代から江南に集まって、富裕な生活を送っていた。すでに多くの研究があるが、要するに、徽商の中に、風雅を好む商人が多く、今日では彼らは「儒商」と呼ばれる。明代だけでなく、清代になっても、とくに巨大な財富を集めた塩商は文人とは緊密な関係にあった。たとえば、「揚州二馬」と呼ばれる馬曰琯（一六八七～一七五五、字秋玉、号嶰谷）、馬曰璐（一七〇一～六一、字佩兮、号南斎など）兄弟は徽州の商人でありながら、蔵書が甚だ豊富であり、厲鶚（一六九二～一七五二、字太鴻、雄飛、号樊榭など、浙江銭塘人）など文人と親密な交友関係があった。また、詩文書画を売って生計をたてていた「揚州八怪」と塩商の付き合いも周知のことである。

このように、明代の半葉から清代まで、江南地域で「山人」、「清客」などと呼ばれる、詩文書画などの技能を生活手段とする専業文人が現れた。そのなかから、より多くの職業詩人が誕生した。陸応陽のように、富裕になった人もいるが、彼らの多くは貧乏な生活を送った。『万暦野獲編』巻二三の「山人愚妄」条に福建省から来た黄白仲（名之璧）の記事が載る。

又た一閩人の黄白仲、名は之璧、秣陵に遊ぶに慣れ、詩を以て自負す。大第を僦りて以て居し、好衣盛服、華靴を躡み、大轎に乗りて、顕者の門に往来す。一日 客を拜して帰り、橐中 窘しきこと甚し。輿者 僱銭を索め……。
又一閩人黄白仲名之璧、慣遊秣陵、以詩自負。僦大第以居、好衣盛服、躡華靴、乘大轎、往來顯者之門。一日拜客歸、橐中窘甚、輿者索僱錢……。

表は体面を取り繕いながら、実は生活に窮乏している詩人も多数あったことが推測できる。かの有名な清代の呉敬梓（一七〇一～五四、字は敏軒）が著した『儒林外史』は清代の社会の底辺に位置している人を多く描写し、批判した⑤。その中にいわゆる「斗方名士」はすなわち下層詩人である。『儒林外史』の最も早い刊本は嘉慶八年（一八〇三）の臥閑草堂本、毎回末に評が付いている⑥、「斗方名士」について言う

余は人家の少年子弟を見て、略も幾分の聰明有り、隨口として幾句の七言律詩を謟せば、便ち幾個の斗方名士を納交することを要し、以て此れを藉りて声気を通ずる為り、吾れ、其の畢生の断じて成就する時無しを知るなり。何んぞや？斗方名士は、自己が富貴に能わずして人の富貴を慕う、自己が絶して功名無くして人の功名を羨う、大なる則ち雞鳴狗吠の徒と為り、小なる則ち殘盃冷炙の苦を受け、人間は個の活地獄有れば正に此の輩之れを当り、而して尤ほ欣欣然として名士と自命為り、豈に悲しわんや。

余見人家少年子弟、略有幾分聰明、隨口謟幾句七言律詩、便要納交幾個斗方名士、以為藉此通聲氣。吾知其畢生斷無成就時也。何也？斗方名士、自己不能富貴而慕人之富貴、自己絶無功名而羨人之功名、大則為雞鳴狗吠之徒、小則受殘盃冷炙之苦、人間有個活地獄正此輩當之、而尤欣欣然自命為名士、豈不悲哉！⑦

『儒林外史』は小説であり、作者が誇張する可能性が多いため、信憑性は薄いが、この評は当時の実際の状況を語っていたと思われる。その批判は主に「斗方名士」が富貴や功名を追求することに向けられている。かつて詩は、知識人の風雅な心情を表現するための伝統的媒体としてのみ存在し、そこに金銭という大衆の手垢にまみれた俗なるものが入り込む余地はなかった。しかし、職業詩人とは、己の詩藝を元手とし、詩を売ることで生計を立てた者の謂である。当然のことながら、詩と金銭は不即不離の関係にあった。

㈢　江戸後期の職業詩人の生計

—大窪詩仏を例に—

前の一節は中国の明清時代の職業詩人の生活手段および世人から受けた批判を簡単に紹介したが、実はほとんど同じ時期に、日本でも似たような文人が存在した。詩仏やその同人もそのなかに属する。以下は詩仏を具体例として、当時のこういう現象を見てみよう。詩仏の生活がどのような収入源によって支えられていたのか、という点に焦点を当てて、あわせてなるべく具体的に彼の生活環境を探ってみたい。

イ、詩文を教授すること

詩仏の収入源のなかで、もっとも安定的なものは、詩の作り方を教授することで得る束修（受講料）であろう。彼は神田お玉が池の畔に詩聖堂を開き、定期的に詩会を催し、門弟を集めて、詩文の作り方を教授した。詩会については、第七章において詳しく述べる。

詩人として身を立てる者は、儒者とは異なり、塾を開かず、代わりに詩社を結んで、巷間の初学者や愛好家、諸国から修行のため上京してきた者たちに、詩の作法を教えて生活した。儒者たちも、経学を教える傍ら詩文を教えていたが⑧、専業詩人はもっぱら漢詩文だけを教えるから、儒学の習得を目指さない、あるいは必要としない人々は、彼らの許に参集した。そして、大多数の町人にとって、経国のための儒学は、必須なものではなかった。ここに詩社流行の一大要因がある。

詩仏が詩聖堂において詩を教授する様子は、清水礫洲（一七九九～一八五九、名は正巡、字は士遠）の随筆『ありやなしや』にも記されている。

> 於玉が池の裡なれども、詩聖堂と云は二階屋にて、上は塾生下は家内の住居なり。於玉が池三四百坪の池にて、蓮を種、柳を植、池のほとりに翠舎屠蘇といふ一室を作り、はき庭の体にて、飛石伝ひ十五六畳の座敷あり。先生それに住して来客に接し、人のもとめに応じて書画を揮毫す。後に其脇に唐石軒と云葺却の八畳敷程の一室を造る。これは宋唐の碑本をかけ尽るが為めなり。
>
> 食客塾生男女等十余人、料理人一人あり。日々に推鮮割薪、来客絶る事なし。其頃は歳入三四百金なりしと云。歌妓など日として来らざる事なし⑨。

それによって推測できるのは、詩聖堂は、火災に遭って焼失するまで（詩仏、六十三歳の時）、日々、人の行き来の絶えない賑やかな場所であった。対照的に、明清時代の文人は開放的な塾を開く人もいると思うが、多くは貴人の宅で教える館客（塾師）であった。これが原因か、詩仏のように豪邸を建てた山人清客はあまりいなかった。

とはいえ、生徒の中には、富農や富商がおり、彼らはパトロンとして詩仏の豪奢な生活を支えた。この点は山人と清客が官員や富商の子弟を教授する場合と同じである。たとえば、詩仏の弟子の一人である桐生の佐羽淡斎（一七七二～一八二五、名芳、字蘭卿）はすなわち富裕な商人である。淡斎は幼より学を好み、大人になって詩文を善くした。文化七年（一

八一〇）正月、養父吉右衛門の隠居に依って、その家を嗣ぎ、名を吉右衛門（二世）と改め、買次商（問屋）を営んだ。時に年三十九。淡斎は亦貨殖の道に長じ、家業愈々殷盛に赴いて、巨万の富を築き、上毛で一佐羽二加部三鈴木と謳われて、第一の富豪となった⑲。

淡斎が没した後、詩仏や同人はその墓に「詩人」と題し、その並々ならぬ交友関係を語った。朝川鼎の墓記には、

（淡斎）文を嗜み、客を好み、最も能く才を憐れむ。泛く愛し、厚く施し、救乏に急に。魯公の米を乞うを待たず、已に衛尉の許賑を見す。

嗜文好客、最能憐才。泛愛厚施、急於救乏。不待魯公之乞米、已見衛尉之許賑。

と記されており、詩仏たち江戸の文人たちが彼から援助を得ていたことを示唆している。

ロ、権貴の支援

前述したように、詩仏は豪商の佐羽淡斎から支援を得たと思われる。この点は明清の職業詩人と徽商の関係は同じようである。藩主や公卿などとの交遊は江戸前中期の儒者にも同様に見られたが、詩仏たちと権貴との繋がりは、江戸前中期の文人の場合とは、変化が生じていた。すなわち、権貴との関係は薄くなって来て、文人の自主意識が増大してきたのだ。

こういう現象は中国の明清時代にも発生した。権貴と文人は互いに利用する関係であり、名声に関わることが多い。この点は唐代の文人と官員との関係とは大きく違うのである。以下は簡単に唐代の文人と官府の関係を紹介し、その変化はすでに宋代に生じたが、明清時代に文人が積極的にこれを利用していたことを説明する。

中国では、唐の頃に「遊幕」の風があり、多くの詩人が進んで地方の幕府へ赴き、幕僚になろうとした。南宋の洪邁（一一二三～一二〇二、字景盧、号容斎）の『容斎随筆』続筆巻一「唐藩鎮幕府」（『唐宋史料筆記叢刊』、孔凡禮点校、中華書局、二〇〇五年十一月）に、

唐世の士人 初めて科に登り或ひは未だ仕へざる者、多く諸藩府の辟置（へきち）に従ふを

以て重しと為す。

唐世士人初登科或未仕者、多以從諸藩府辟置爲重（二二七頁）。

とある。「辟置」とは、人材を招き幕僚として遇することを言う。ただし、唐代の幕府は節度使を指し、武将が掌握していたため、顧問として彼らを輔佐する文官が求められた。よって、政治と深い関わりがあり、幕府の長も礼を以って彼らを遇していた。そのため、「遊幕」は若手官吏の出世コースと考えられたのである。また、唐代には「行巻」の風があり、高官に自分の文章を投じ、才能が認められれば、科挙に及第したり、官として採用される可能性が増大した。

宋になると、科挙制度が整備され、監督官と受験生の間の情実を未然に防ぐ方式がとられるようになって、行巻の風習は無くなった。しかし、南宋も後期に入ると、詩人が幕府や官府に出入りして長官に拝謁を求めることが、絶えなかった。宋代の拝謁は、唐代とは大きな違いがある。唐代の士人たちは、遊幕という行為を、己の抱負を実現するための手段と見て、心理的になんら恥じることがなかった。一方、宋代の詩人が官府の客となるのは、そもそも科挙と関係がなく、高官への依存ないしは寄生といってよく、腰を低くして向かわねばならない行為であったからである。生活面からみても、唐代の遊幕文人は重視されたため、生活に余裕があった。一方、宋代の遊幕詩人はおおむね軽視されたため、生活の保障はなかった。

江戸前中期の文人（儒者）と大名の関係は、唐代の如く、顧問として権力者より召抱えられるのである。よって、彼らの「士」としての身分は頗る不安定であった。一旦、主君から嫌われ、あるいは主君自身が失脚すれば、文人が士分を失うケースも多かった。たとえば、祇園南海、柳沢淇園、田中桐江、服部南郭たち、彼らと主君の関係は従属的で、緊密である。また、主君に必ずしも士分として取り立てられるとは限らない。中国漢代の東方朔のように、「俳優」または「芸者」として扱われる可能性もある。さらに、文人が幕府や大名の下から退けば、中国の士大夫が政治舞台から退出したように、詩文によって不遇を詩に詠じる人も多い。

江戸後期の職業詩人と権貴の関係は、宋代型に属している。しかし、注意すべきは、彼らには南宋の謁客詩人のように自己を卑下する意識がまったく見られない、という点である。彼らは、むしろ己の名声の大きさを世俗に知らしめ、それをより確かなものとするために、積極的に権貴を利用した、と考えられる。これは、明清時代の文人と権貴との利害

関係と同様である、『万暦野獲編』巻二三の「山人愚妄」条に掲示したように、お互いを利用して、自己の為を図っている。

先達の李本寧・馮開之両先生の如きは、倶に喜んで山人と交はる。其の仕の屡しば躓くは、頗る亦た此れに由る。余 嘗て私かに両公に問ひて曰く、「先生の才 此の曹に高出すること万万倍なり。何ぞ彼に頼りて之を惑暱するや」と。則ち曰く……中略……、余 心に其の誠言に非ざるを知れども、然れども敢えて深く詰らず。近日 馬仲良と交はること最も狎れたり。其の座中 山人 毎に席に盈つ。余 始めて細かく之を叩き、且つ李、馮二公の語 果して確なるや否やを述ぶ。仲良 曰く、「亦た之れ有り、但だ其の愛憐も亦た因有り。此の輩 率ね儇巧 多く、善く意旨を迎ふ。其の体を曲げ承を善くすること、倚門斷袖の逮ばざる所の者有るなり。仕紳の之れに溺れ悔らざるは宜なり。

先達如李本寧、馮開之兩先生、俱喜與山人交。其仕之屢躓、頗亦由此。余嘗私問兩公曰、先生之才高出此曹萬萬倍、何賴於彼而惑暱之。則曰……中略……余心知其非誠言、然不敢深詰。近日與馬仲良交最狎、其座中山人每盈席。余始細叩之、且述李、馮二公語果確否。仲良曰、亦有之、但其愛憐亦有因。此輩率多儇巧、善迎意旨、其曲體善承、有倚門斷袖所不逮者。宜仕紳溺之不悔也。

いささか誇張しているとは思うが、両者の関係をよく指摘している。それに対し、江戸後期の職業文人（詩人も含め）は、明清時代の幕賓に似た身分であり、経済的支援は不安定であり、それゆえ、多方面の支援を求めなければならなかった。かくて、彼らは多くの貴人と交流することとなったが、裏を返せば、不安定な身分保障がかえって彼らにより大きな活動の自由を与えたのだ、とも言うことができる。

たとえば、詩仏の詩集には、藩主や公家たちと唱和した詩が少なからず収められている。後述する番付騒動が発生する一年前の文化十二年（一八一五）、詩仏は増山正賢（長島藩藩主）、小倉豊季（権大内言）、日野資愛（中納言）に招かれて、彼らと詩の唱和をした。このような体験があればこそ、詩仏は番付に己の名を載せる勇気を持ったのであろう。

公家や藩主等の貴人の宴席に連なったり、彼らと唱和することは、様々な副次的効果を生む。詩集に貴人の名が頻出すれば、同時代の読者だけでなく、後世の読者もその詩人に

注意を払うであろう。また、藩主が参勤交代で帰還する際に、送別の詩文を書いて寄贈すれば、その藩にまで、己の詩名が伝わる。そうなれば、当該の藩から江戸にやって来た学生を吸い集める宣伝効果も期待できる。

この点において、彼ら専業文人（詩人）と儒者とは、大きな差異が存在する。藩主といえども、儒者に対しては、礼を以って交わらなければならなかったし、藩主の経国に関わる知識を儒者が教授するので、彼らに顧問のごとき高い身分が与えられた。もちろん、「中国の士大夫と違って、日本では儒者はせいぜい諸侯の学問相手として寓されるばかりで、実際の政治に参画するということは余程の好機に恵まれぬ限りまずはあり得ないことであった」[11]という。しかし、たとえそれが学問相手であったとしても、相応の待遇を与えなければ、儒者もそれを甘受しなかったであろう。そして、儒者は同時に複数の藩主に仕えることはできず、一人の君主に忠誠を誓う必要があった。

ハ、詩文書画を売ること

前に述べたように、明清時代の職業詩人は詩を大衆（とくに徽商たち）に売ることも生活の手段としている。この点は詩仏も同じである。詩仏初期の詩集『卜居集』に、「賣詩者」という詩があり、詩仏自身の日常を投影した作品と見なされる。

禿筆唯因人請揮　　禿筆　唯だ人の請ふに因りて揮ひ
一世休言活計微　　一世　言ふを休めよ　活計　微なりと
幾斷詩腸渾賣盡　　幾ど詩腸を断ちて　渾べて売り尽くし
黄公壚上買鈎歸　　黄公の壚上　鈎を買ひて帰らん

前半はもっぱら他人に乞われて詩を作る、売詩者＝職業詩人の味気ない日常が詠われ、後半は呻吟して作った詩をすべて売って、その金で飲み屋へ行って酒を飲み、釣り針を買って帰る、という内容である。「黄公壚」とは、魏晋の頃、竹林の七賢が集った飲み屋で、『世説新語』の「傷逝篇」に見える。転じて、飲み屋を言う。末尾の「買鈎歸」は、隠居願望を述べたものであろう。

日本随一の大都会、江戸は詩仏に詩の恰好の売り場を提供した。その最たるものが詩会

や書画会である。詩会や書画会については、本論第七、八章において詳論するが、江戸時代の書画会や詩会は、もはや書画等の芸術品を売り出す商業的な場となっていた。すでに名をなした詩人や画家、書家が会に加われば、その会には大勢の好事家が吸い寄せられる。会の主催者はその参加費で潤い、詩人や画家、書家たちは、詩を揮毫したり、他人の作品を品評したりして、会の主催者から応分の謝金を受け取り、持ちつ持たれつの関係にあった。

そして、江戸前期のそれと比べると、後期、とりわけ化政期以降の書画会や詩会には、文人やパトロン等の通人だけではなく、一般市民でも参加することができた。詩仏のように詩壇の盟主の地位を確立していた人だけではなく、若くてまだ無名の青年も、これらの集会に参加することができ、それによって自らの名声を拡げることができたのである。

文化十四年（一八一七）、いわゆる「書画番付」騒動が発生した。この前年の冬、詩仏・菊池五山をはじめとする江湖詩社の同人たちは、江戸の書画家（文人）を相撲の番付に倣って格付けし、それを印刷して巷間に広めた。東の大関に亀田鵬斎、西の大関に谷文晁を列し、東の関脇に詩仏、西の関脇に五山を列したのである。もちろん、番付製作者の氏名は伏せられていたが、これに激怒した儒者の大田錦城は、この裏幕を暴き、詩仏に論争を挑んだ[12]。この番付騒動は、ある意味では、儒者と詩書画篆刻を職業とする専業文人の対立を反映している。しかし、その本質は、文壇および文学市場を席巻する専業文人に掣肘を加えることにあった、と思われる。揖斐高氏の指摘によれば、この番付を批判したのは、大田錦城だけでなく、その他にも葛西因是、亀田鵬斎、鈴木芙蓉、大田南畝、大田晴軒（大田錦城の子）等がいた、という。彼らは詩仏らを揶揄・非難した文や狂歌の類を発表した。これは、儒者ならびに詩仏たちより一つ上の世代の文人たちが、文藝作品の商品化に強硬に反対していたことを示している。

いずれにせよ、職業詩人は、詩文を商品として扱った。彼らは自作の付加価値を高めるため、詩文を創作するほかに、書や画の技藝を備えているのが一般的であった（たとえば、詩仏は草書や墨竹も善くしたが、同じように、王穉登は書道が得意であり、陳継儒は書画が上手であった）。この時期、文人画とよばれる南画が早いスピードで流行していったのもその一因であろう。しかし、文人の「雅」画が普及するためには、もちろん、前提としてそれを求める人、すなわち受容者が多くいることが必要である。一定の経済力を持つようになった一般民衆の家では、掛軸など装飾品を必要とするようになり、時流を受けて、「雅」と評価される南画に関心が集中し始める。かくてここに、大きな需要が発生するこ

とになった。この点は、江戸後期の化政期に、文人趣味がいかに普遍化したかを物語っている。

職業詩人は詩文を商品として扱ったが、この点が従来の文人（詩人）と大きく異なるところである。伝統的な文人（詩人）は幕府や諸藩へ仕えることを目標としていたが、職業文人は、そのような限られたポスト、しかも僅かばかりの固定収入を目指すのではなく、都市や農村の富裕層を相手にして、広く生活費を稼ぐ道を選んだ。もちろん、彼らは庶民の富裕層ばかりを相手にしていたわけでなく、大名や武士、僧侶とも交流した。しかし、この点も保守派の批判対象とされている。町人の分際で、権貴の屋敷に出入りしたからである。彼らの身分を選ばぬ幅広い交遊は、節操なく富貴や功名を貪るものと保守派には見なされた。しかし、実態がどうであれ、彼らの幅広い交友関係やフットワークが、漢詩の普及に大いに寄与したことは論を俟たない。彼らの活動によって、漢詩創作は一層大衆化の道を進み、その結果として、江戸後期の漢詩は質量ともに空前の高みにまで上ったのである。

さらに、江戸の中後期から、種々の書画を貼り混ぜて作った書画冊が流行し始めた。その背景に、詩（書画）の社会的機能における変化があったことを指摘できる。すなわち、詩（書画）はすでに商品化され、実用的な贈答品となっていた。たとえば、誕生日や開業を祝ったり、死者を哀悼したりする際に、名のある文人に詩書画を寄せてもらい、それを書画冊とするのである。その際、祝賀もしくは哀悼される対象が、その文人と面識があるか否かは問題とはならない。著名人に揮毫してもらいそれぞれの行事に箔をつけてもらうことが大切であった。むろん、依頼した著名人には応分の謝礼が渡されるから、これはまぎれもなく詩（書画）の商品化である。この書画冊は、前に言及した書画会において製作される展観目録や書画集（このことは第八章において論じる）の類とは、かなり相違がある。書画会の展観目録や書画集は、企画から製作まで文人が主体的に関わっているが、いわゆる書画冊は、それぞれの行事を執り行う施主が主体となっている。江戸後期の書画鑑定商である安西雲煙（一八〇七～五二、名於菟、字山君、通称虎吉）が天保年間に書いた『近世名家書画談』「書画帖の事」に

書画帖は唐山にては早くあること也、此際にてもこれを古くは手鑑と称し古人の遺墨を集め珍玩せり、近時は此事都鄙に行はれ書画帖と呼び都鄙ともに預め帖子を製し、これを携へて四方に奔走して知ると知らざると書画人の揮毫を乞ひ、工拙をゑらまず

只多く貪り得るをもて上計とす、この故に今の書画人其労にたへずと聞へたり、向に京師の人端隆字は文仲といい又春荘と号し書をもて業とす、詩を能し隠操ある人なりと云、天明年中京師の大火にあひて大に落拓せり、されども春荘帖と名付る書画帖を懐にして、知己の諸名家に乞ひてしるさしめ、此帖はおのが別荘なりとてたのしめりと云、此事畸人傳に見へたり、これらは真に好事なることにて又其風流をも掬すべし⑬。

とある。明清時代における「斗方」（書画に使う一尺ぐらいの冊頁）の流行はこれと類似の現象であるが、当時の職業詩人が「斗方名士」と呼ばれたことは、前述した。

以下、寿詩と弔詩を例として、より具体的に書画を集める理由を見てゆきたい。

生誕の祝賀のために、詩文を集めるのは、中国では、唐代以後のことである。もともと、皇帝聖誕の日に、百官が寿詩を献上することが早くから習わしとなっていたが、宋代以降、士大夫の間でも盛んに行われるようになった。さらに明清時代になると、広く名士の詩詞を募って、一冊の集に編むことが風習となった。清の趙翼（一七二七～一八一四）は、『陔余叢考』巻二四の「寿詩　輓詩　悼亡詩」という条において、その風を批判して以下のようにいっている。

葉水心、蜀僧の北澗集に題して云く、集中に生日に上る詩有り、後に伝ふべからず、と。是れ宋時は猶ほ壽を称ふる詩を以て戒と為すなり。郎仁宝云く、挽詩は唐に盛んなり、交はり無くして涕するに非ざるなり。寿詩は宋に盛んなり、漸く官府に施(し)くも、亦た未だ同(とも)にせずして言う者無きなり、と。亦た『懐麓堂詩話』に見ゆ。近時の二作、識ると識らざるとを論ぜず、転(うた)た相ひ徴求し、動(やや)もすれば卷帙を成すは、恥づべきなり。空同、大復の集中 之れを少(か)く。此れ人に過(まさ)れり。

葉水心題蜀僧北澗集云、集中有上生日詩、不可傳於後。是宋時猶以稱壽詩爲戒。郎仁寶云、挽詩盛於唐、非無交而涕也。壽詩盛於宋、漸施於官府、亦無未同而言者。亦見『懐麓堂詩話』。近時二作、不論識與不識、轉相徵求、動成卷帙、可恥也。空同、大復集中少之、此過人矣⑭。

右文中の「葉水心」は南宋の葉適（一一五〇～一二二三）、「郎仁宝」は明の郎瑛（一四八七～

一五六六）を指し、『懐麓堂詩話』は明の李東陽（一四四七～一五一六）の著。「空同」は明の七子、李夢陽（一四七三～一五二九）の号、「大復」は同じく七子の一、何景明（一四八三～一五二二）の号である。

日本でも江戸中期以後、右と同じ風習が拡がっていた。たとえば、巌垣龍渓（一七三七～一八〇六、名彦明、字亮卿・孟厚、通称長門介）の「刪米壽詩卷序」（『松蘿館文集』不分巻、国会図書館蔵本）という文に、以下のようにある。

近ごろ児童の嬉戯する者すら、猶ほ且つ之（寿詩）を為る。而るに況んや其の饌を山海にし、其の文を錦綉にし、親戚故旧を会し、以て其の父祖を楽しましむるものをや。

近兒童嬉戲者、猶且爲之、而況山海其饌、錦綉其文、會親戚故舊、以樂其父祖乎。

龍渓は江戸中期の儒者で、この序文は「辛丑年春三月」に書かれている。「辛丑年」とは天明元年（一七八一）に当たり、詩仏はまだ十五歳であった。ちなみに、この序文は、紀伊の医官である鎌足生がその祖母の米寿ために宴を設け、親戚や故旧を一堂に会し、諸名家の詩歌および長短雑詞を請い、五百篇余を集め、その選別を求められて記したものである。詩仏も、文化二年（一八〇五）に、川越の中島済美が母の七十歳の寿賀のために、諸名家の作品を求めた際、「題芝仙竹寿図」の七絶を寄せた、という⑮。文化四年に刊行された『五山堂詩話』巻一には壽詩と哭詩を募る人たちを批判して曰く、

博く壽詩を求むる、この弊は今猶ほ已まず。庸人俗子はこれを以て孝と為す。知らず、糞を累ね瓦を堆うすることを。原自り侑爵に堪へず。たとひ佳作有るも、祝嘏の浮辭に過ぎざるのみ。……中略……壽詩は猶ほ恕すべきなり。又た哭詩を募る者有り。それ七情の中、哀は喜より重し。東坡云ふ、「歌へば則ち哭せずと言わず」と。両者の間有ること、以て見るべきのみ。今、その重き者を取りて、これを行路の人に求む。不通の甚しき。豈に人人をして劉豫州たらしめんと欲するか。某の家の少年死す。その友相ひ会して哭詩を作る。その父泣きて曰はく、「賤息短命、料らざりき、今日は諸君の嘲具とならんとは」と、この言沈痛、以て世を醒すべし。

博求壽詩、此弊今猶不已。庸人俗子以是為孝、不知累糞堆瓦、原自不堪侑爵、縱令

有佳作、不過祝嘏浮辭耳。……中略……壽詩猶可恕也。又有募哭詩者。夫七情中、哀重於喜。東坡云、不言歌則不哭。兩者有間可以見已。今取其重者、求之行路人、不通之甚。豈欲使人人為劉豫州乎。某家少年死、其友相會作哭詩、其父泣曰、賤息短命、不料今日為諸君嘲具、此言沈痛、可以醒世。

寿詩は祝い事であるから、それを寿ぐ詩も多ければ多いほどめでたい。それを依頼された側も内容的に比較的気安く製作できたであろうし、事前に製作のための時間を十分に確保することもできた。それに対し弔詩は、依頼された側も軽々に記すことは憚られたであろうし、依頼主も誰彼かまわずに依頼するわけにはいかなかったであろう。そしてなにより、人の死は常に不意に訪れるから、事前の準備は不可能である。弔詩が寿詩に比べて少ないのは、このような事情が作用しての結果と考えられる。同じ現象は中国の明代、広く名人の挽詩や挽詞を求める人が現れた。陸容（一四三六～九四、字文量、号式斎）は、『菽園雑記』（『叢書集成初編』、王雲五主編、商務印書館、一九三六年六月）巻一五において、次のように言っている。

今の仕ふる者 父母の喪有れば、輒ち遍ねく挽詩を求て冊と為す。士大夫も亦た勉強して以て其の意に副ふ。世を挙げて同然たるなり。

今仕者有父母之喪、輒遍求挽詩爲册、士大夫亦勉強以副其意、舉世同然也（一七四頁）。

詩仏の時代も、そうであった。追悼の詩文を広く求め、それを集とした例があった。たとえば、文政年間、若桜藩の大名池田定常（冠山侯、一七六八～一八三三）の第十六女・露姫が五歳にして夭折したが、この娘を哀悼した詩文が『玉露童女追悼集』（一九八八年、金龍山浅草寺覆刻出版）としてまとめられている。集められたのは、漢詩、和歌、俳句から、絵画、オランダ語の追弔詩にまでわたり、その数一五九五点にまで上り、少なくとも一五〇〇余人が作品を寄せている。その中には、詩仏の作品も見える。短期間にこのように厖大な数量を集めることができたのは、当時の文人が書画を寄せることにいかに慣れていたかを証明している、といってよいであろう。

二、職業詩人の旅

江戸時代の後期、庶民の間に旅行ブームが起きていたことは、すでに数多くの論著が取り上げ論じている。寺社巡りが旅のもっとも多い目的であったが、この時期にブームが起きた原因は、何よりもまず庶民の暮らしぶりに余裕ができたことが前提となっている。そのほか、街道や宿場の宿泊施設等、旅のインフラ整備が進んだこと、さらには旅の道具や装備の発達やガイドブックの充実等も、この流行を促す要因となっている⑯。

こういうブームに乗って、三都の専業詩人・文人たちも、地方へ旅に出ることが多かった。そして多くの場合、彼らの旅は往々にして詩嚢を肥やす創作目的の旅というよりは、無心の旅という側面が強かったようである。

詩仏と同時代、彼より先に長期の旅に出た文人には、柏木如亭、菊池五山、亀田鵬斎や市河寛斎等がいる。彼らによって作り上げられた文人ネットワークも、詩仏の旅に多大な便宜を与えたであろう。というのも、旅の途次、詩仏に飲食や宿を提供した人々のなかには、地方の豪農、豪商や名主のほかに、同じ文人交流圏（詩社）に属する弟子や友人が多く含まれていたからである。

たとえば、文化十年（一八一三）、詩仏が桐生へ旅した時に、同じく奚疑塾で学んだ同学の館天籟（一七七八～一八二七、本姓斎藤氏、字豹）と江戸の知人である佐羽淡斎が主催する翠屏吟社の人たちと交流する機会を持っている。また、柏木如亭の晩晴吟社（信州）の同人とも交流があった。すでに指摘があるように、「詩文の自立、あるいは詩人文人の自立を支えたものが、江戸や京坂を中心として地方の農村をもふくむ全国的な儒者交流圏の成立にあった」⑰のである。つまり地方の知識人層が厚くなったことが、職業詩人の旅を強く支援したのである。

文化十四年（一八一七）の番付騒動のあおりで、詩仏の江戸における名声が下落したため、やむなく八月から信越への旅に出た。また、詩聖堂が焼失した後の晩年にも、しばしば地方へと旅に出ている。旅にあって作った詩は、『西遊詩草』、『北遊詩草』、『再北遊詩草』に収録されている。ところが、この三集に収められた作品で、地方の風景を描写するものはむしろ少数に属し、過半の作品は地方の文人と唱和した作品であった。このような作品傾向は、俳諧の旅詩人、松尾芭蕉等とは、まったく違っている。

地方に旅しても、江戸にいる時と同じように詩会を開いて、地元の人々を多く集めて詩画等を揮毫するのは、旅文人の常である。大田錦城の『春草堂集』（『尊経閣叢刊』、育徳財団、

一九三八年）巻十八に、

詩仏先生 北越に遊び、新潟の妓館に於いて再び百花の会を為す。槖中の装ひ、揮ひ散じて殆ど尽く。爾後、得る所の潤筆、門生の百年（人名。木百年）尽く数へ奪ひ去る。夫れ文人の槖装 声伎の為に尽くるは古今の常事にして、異と為すに足らず。門人 金を奪ふこと、劉義の後、又た百年有り、これ千古の僅事なれば、記ざざるべからず。

詩佛先生遊北越、於新潟妓館再為百花會、槖中之装、揮散殆盡。爾後所得潤筆、門生百年盡數奪去。夫文人槖装、爲聲伎盡、是古今常事也、不足爲異。門生奪金、劉義之後、又有百年、是千古僅事也、不可不記。

という詩題がある。この文の中心的話題は門人が師匠の潤筆料を奪うということだが、そのことは別として、ここでは「新潟の妓館でまた百花の会を催し」たことに注目したい。「再び」の語は、江戸でもそのような会を開いていたことを示唆する。すなわち、江戸の最先端の流行を、彼が媒介者となって地方に伝え、それをそのまま実践することで、地方の文人に直に体験する機会を与えたわけである。これも旅文人が果たした重要な役割であろう。

そして、この詩において、大田錦城は詩仏のこういう遊歴を「打秋風」といい、中国明清時代の文人に擬している。『近世名家書画談』「諸名家遊歴の事」にこういう記事が有る、

近世遊歴と呼び都下の書画家文人詞客ややもすれば筆硯を帯び他郷に遊び其技を売るとあり、尤其壮遊なるは当今第一等に坐する老儒先生信越の行より盛なるはなしときく……中略……其北遊の時に当たり其地の諸子弟先生を待こと大旱の雲霓を望が如し、於是先生到る処経を解けば古人未発の妙説あり詩文を作れば皆不朽の文字なり、其余狂草戯墨これを求るもの其一紙半絹も見ること懐素張旭の真筆を得るが如し、因是潤筆積で数百金に及ぶと聞及べり、これより其地の子弟等先生の教化により詩書を事とし居然たる書生と変じ其父兄たるもの愈先生の徳を仰ぐと伝聞く、さて先生得る所の潤筆は手に従て散じ去り家に帰るの日は手に半文銭ものこらずとなん、果して然るやこの説の如くならば先生の壮遊は唐山の人も及べからず、試に挙て或人に問ふ、或人答て云う康熙年間に李笠翁は天下を周流すること数十年、詩を売り文を鬻り其名

当時に高くこれを明の李卓吾陳仲醇の才も不及と云に至る。笠翁嘗て貧なることを友に告しかば其友云、子有筆勝鎡基硯同負郭、売文已足糊口所至輒有逢迎、何貧之有と『一家言』にも見へたり（後略）⑱。

ここに、安西雲煙はこの先生は誰か示唆していないが、上記大田錦城の記事と共通するところがある。そして、ここに指摘されているように、中国清代の李漁（一六一一～八〇、字謫凡、号笠翁、浙江金華人）は地方へ遊歴して潤筆料を貰っていた。ほかに、明代の陳継儒の「紀遊稿序」に、

昔 遊びに二品有り、而るに今 三を加へたり。賈の装遊なり、客の舌遊なり、而して又た其の辺幅の技を操り、左に賈を挈（たずさ）へ右に客を挈へ、陽に其の舌を風騒に吹き、陰に其の装を稠槖に実（み）たす。今に施（およ）びて、遊道 辱めらる。……中略……今の遊士 独り呉に産するのみに非ず、然れども出づるに津梁無く、往往にして子長を藉口にして以て遊祖と為す。馬蹄・車轂、道傍に凌ぎ競ひ、甚しき者、青山白雲 以て税駕せず、而して長安の中に耽ること深帷の臥榻の如し。

昔遊有二品、而今加三焉。賈之装遊也、客之舌遊也、而又操其邊幅之技、左挈賈而右挈客、陽吹其舌於風騒、而陰實其装於稠槖。施於今而遊道辱矣。……中略……今遊士非獨産呉、然出無津梁、往往藉口子長以為遊祖。馬蹄車轂凌競道傍、甚者、青山白雲不以税駕、而耽長安中如深帷臥榻⑲。

とあり、これも同様の例を述べている。中国の明清の頃、「打秋風」が流行した、こういう遊歴に似ている、といえるかもしれない。「打秋風」とは、様々な名目をつけ、金品を無心することをいう。前述のように、詩仏が外遊に出たタイミングは、自己の窮状を回避するものであったから、この形容はあながち大きくは外れていないであろう。

ホ、出版事業及び出仕問題

詩仏は詩学関連の書籍の編纂や出版に積極的に関わり、それを重要な収入源としていた。

この点については、次章で詳しく論じるので、ここではこの指摘に止めておく。

最後に、詩仏晩年の出仕について説明し、この章を終える。

文政八年（一八二五）、五十九歳の時、詩仏は秋田藩[20]の藩校、明徳館の儒官になっている。詩仏はもちろん儒者ではない。にもかかわらず、儒官に選ばれたのは、時流の変化と深い関わりがある。

これより以前、藩校の教授はむろんほぼ儒者によって占められており、一介の詩人が藩士の子弟に教授することは、夢にもありえないことであった。詩仏より半世紀ほど前の詩人、龍草廬（一七一四～九二、名公美、字君玉）を例に挙げれば、彼はかつて儒学の素養が芳しくなかったために、藩儒になれなかった。そのことは小宮山楓軒（一七六四～一八四〇、名昌秀、字子実、通称造酒之介、のちに次郎衛門）の『楓軒紀談』（国会図書館所蔵本）巻四に見える。

> 龍草廬は詩人にして、学問は浅し、故に井伊家に招かれたれども従学するもの少し、故に後京に居る。少年のときは卑賤のものにて童にして書林に仕へたり、書林主人其才あるを惜して学ばしめ、儒と成せり、其出処を掩んとめ草廬集に伝を載せたり草廬の子今儒官となる（原文）。

にもかかわらず、詩人の詩仏が藩に招かれたのは、漢詩や書画等の純粋な芸術が、士の階層においても、儒学と同等に重視され始めたことを端的に示している。詩仏一人ではない。彼の師、市河寛斎の子であり、文人仲間であった、市河米庵（一七七九～一八五八、名三亥、字孔陽、通称小左衛門）も加賀藩に招かれている。菊池五山の『五山堂詩話補遺』巻二にいう。

> 米庵　辛巳の春を以て宗国の辟に応じ、徙（うつ）りて加藩に仕ふ。班秩は等を踰え、一時に榮耀たり。臨池の発跡、近今未だ有らざる所なり。
>
> 米庵以辛巳春應宗国辟、徙仕加藩、班秩踰等、榮耀一時、臨池發跡、近今所未有。

「辛巳」は、文化八年（一八一一）。「臨池」とは書を学ぶこと、あるいは書道のこと。『晋書』衛恒伝を踏まえる。ここでは書家をいう。「發跡」とは、立身出世すること。米庵は

書に長じ、詩仏のように多くの門人が従学した。彼は文化八年に父と縁のある富山藩に仕えたが、やはり書が上手であったため、文政四年（一八二一）に家禄三百を以って加賀藩に召し抱えられた。菊池五山が感嘆したように、書家でありながら藩に仕えたのは前例がなかったことである。安永、天明の頃から、諸藩で藩校の設立が相次ぎ、大量の人材が必要になったことと関係があるが、平民である一介の詩人や書家が藩校に入り、儒官になったという事実は、江戸の後期に社会階層の流動化が一部起きていたことを示している。

もちろん、彼らは藩の政治に関わることはなく、あくまでも藩のお飾り的な身分にすぎなかったが、専業文人の仕官は、この時の時流の変化を象徴している。

以上、本章では職業詩人がなにを収入源としてどのように生活していたかについて、特徴的な数点に焦点を当てて整理してみた。

詩仏は寂しい晩年を過ごしたが、中年のもっとも羽振りがよかった時には、神田お玉ヶ池の畔に居を構えて、そこに二十の小景を造って雅趣を表現してもいる（この二十景については大田錦城が「玉池精舎記」に記している）。この点において、彼は日本のそれまでの儒学や詩文を講じる民間の人士と大きく異なっている。むしろ、明清時代の江南文人に、似ている。番付騒動も詩仏の後半生に小さからぬ打撃を与えたが、これも明清の職業文人たちが被った批判とほぼ同根のものであった、といってよい。風雅なゆかしき伝統を担う詩と商品としての詩という矛盾が顕現した結果、噴出した現象と見なすことができる。職業詩人も彼らなりにこの矛盾を解消しようと試みたであろうが、保守的な知識人や文化人から批判を受けることになったのである。

注釈

① もちろん、士大夫階層に、続けて詩を愛好して創作する文人も少なくない。例えば、茶陵派、七子に属する人たちの大半は士大夫である。

② 『元明史料筆記叢刊』に収録した『万暦野獲編』は「恩詔逐山人」、「別号有所本」、「山人名号」、「山人歌」、「王百穀詩」、「山人対聯」、「山人愚妄」などの項目を設立した。本論はそれに従う。

③ 清・紀昀の『四庫全書総目提要』（河北人民出版社、二〇〇〇年三月）巻一百八十『牒草』（明・趙宧光著）の提要にも、「有明中葉以後、山人墨客、標榜成風。稍能書畫詩文者、下則廁食客之班、上則飾隱君子之號、藉士大夫以為利、士大夫亦藉以為名」（四八七五頁）と、同じことが表明されている。

④ ほかに、『万暦野獲編』に例擧されなかった山人も多数ある。例えば、徐渭（一五二一～九三、字文長、号天池山人、浙江山陰人）、王叔承（一五三七～一六〇一、号昆侖承山人、江蘇吳江人）など。

⑤ 『儒林外史』の作者は明代を時代として提示したが、その実際の創作背景は乾嘉時代である。

⑥ 評の作者は呉敬梓本人や和邦額など諸説ある。

⑦ 李漢秋氏輯校の『儒林外史彙校彙評』、上海古籍出版社、二〇一〇年八月、二二六頁。

⑧ 津阪東陽の『夜航余話』（『新日本古典文学大系』65所収、岩波書店、一九九一年八月）において、詩文を添削することに関して、多くのことを言及した。

⑨ 『続随筆大成』第八巻、吉川弘文館、一九八〇年八月、二九三頁。

⑩ 大森林造氏の「大窪詩仏と桐生の佐羽淡斎」（『郷土ひたち』第四三号、一九九三年、二二～三〇頁）を参照。ほかに、詩仏が文化十年に書いた『淡斎百律』序に「桐生有佐羽淡斎、以鬻段匹為業、余曾遊其家、僮僕數十百人、買賣之忙、牒簿之煩、盡管淡斎一人之身、自他人觀之、幾如不堪、而淡斎處之綽然、少有間則端坐一室、披卷吟詩、未嘗一日改其樂也。曩年刻絶句百首、北山先生序而傳之、今又刻律詩百首、詩皆清新溫雅、字字得其任、句句皆有響、淡斎之詩、出於其緒餘、其工可列作者林、論者所謂非詩能窮人者、於淡斎乎領之、窮者而者、於淡斎乎不然之」とある。

⑪ 小島康敬氏の『徂徠学と反徂徠』、ぺりかん社、一九九四年七月、八〇頁。

⑫ 揖斐高氏の『江戸の詩壇ジャーナリズム：『五山堂詩話』の世界』（角川書店、二〇〇一年十二月）第十一章「大江戸文人茶番劇」を参照。

⑬ 『近世名家書画談』、『日本画談大観』所収、民友社、一九一七年七月、二五七、二五八頁。

⑭ 清・趙翼撰、曹光甫氏校点『陔余叢考』、上海古籍出版社、二〇一一年十二月、四四〇頁。

⑮ 大森林造氏『大窪詩仏ノート』、梓書房、一九九八年十月、五八頁。

⑯ 横山俊夫氏の「「藩」国家への道」の第四節「旅する文化の興隆―その文明史的意味について―」に、「民衆の旅行を促したものに、見聞記風の旅行記の出版ブームということが考えられる。宝暦・明和の頃、すなわち十八世紀半ばすぎからみられるこの風潮を決定的にしたのは、寛政の後半、橘南谿の『東遊記』『西遊記』の刊行であったようだ」と指摘されている（『化政文化の研究』所収、岩波書店、一九七六年三月、一〇三、一〇四頁）。

⑰ 衣笠安喜氏の「儒学における化政―寛政異学の禁との関連」、前掲『化政文化の研究』所収、三九〇頁。

⑱ 『近世名家書画談』、前掲『日本画談大観』所収、二六三、二六四頁。

⑲ 『陳眉公全集』、広益書局、一九三六年五月、七三、七四頁。

⑳ 大森林造氏の「大窪詩仏と秋田藩」（『郷土ひたち』第四六号、一九九六年、二三～二六頁）を参照。

第三章　大窪詩仏の出版活動とその特徴

㈠　はじめに

江戸時代の後期、漢詩文の出版がいよいよ盛んになった。『江戸明治漢詩文書目』（二松学舎大学21世紀COEプログラム、二〇〇六年三月）に毎年の出版数を計算した結果が載る。いまはそれによって、慶長元年から大窪詩仏が生存する天保年間までの出版データを図にすれば、以下のようである。

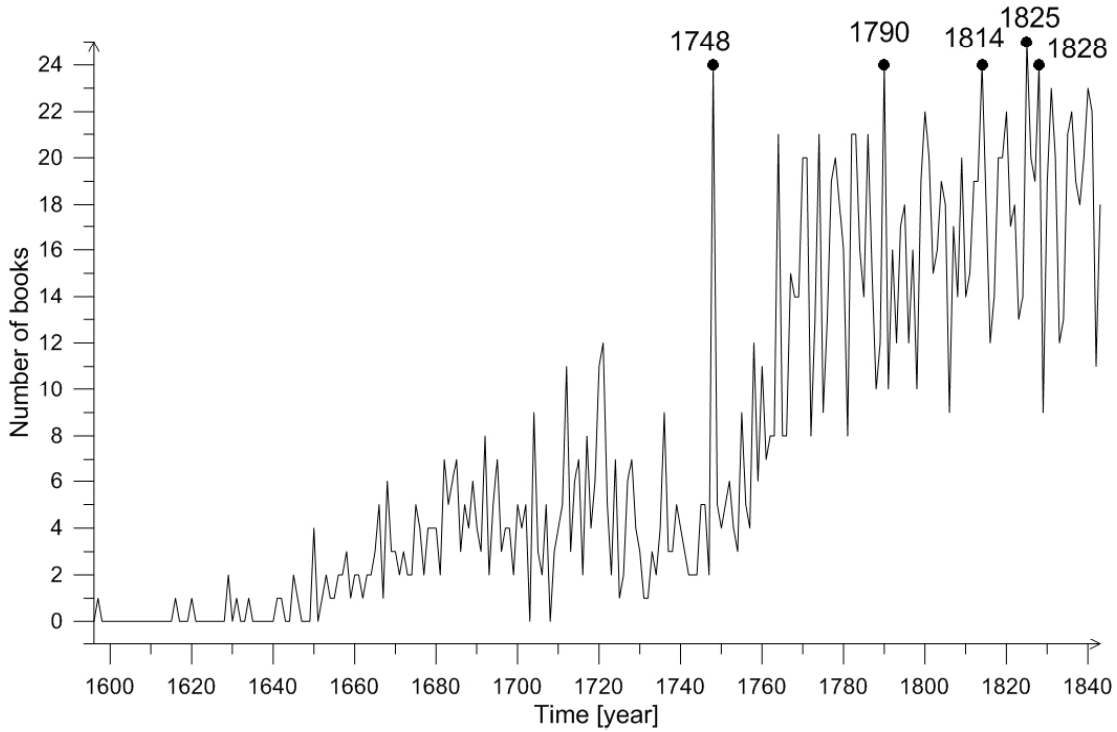


図２　江戸漢詩文（1600～1840）出版趨勢図

この図が示すように、寛延元年（一七四八）の急遽的な伸びは第十回の朝鮮通信使の来訪による文人に対する刺戟の影響であるが（ほかに、天和二年〔一六八二〕の第七回、宝暦十四年〔一七六四〕の第十一回来訪も漢詩文刊行に影響が見られる）、このような外来的な要因を除けば、江戸初期から後期までの漢詩文刊行は総体的に漸次増長していく趨勢であった。とくに明和年間（一七六四～七一、詩仏が生まれる頃）から、著しい増長が見られる。これはこの頃から流行しはじめた狂詩狂文の影響もあるが、個人集が多く刊行されたのも一要因である。例えば、明和年間、細井平洲（一七二八～一八〇一、名徳民、字世馨、通称甚三郎）は『嚶鳴館詩集』（明和元年〔一七六四〕）、宮瀬竜門（一七二〇～七一、名維翰、字文翼、通称三右衛門）は『竜門先生文集』（明和五年〔一七六八〕）、大江玄圃（一七二九～九四、名資衡、字穉圭、通称久川靱負）は『玄圃集』（明和六年〔一七六九〕）を刊行した。いずれも作者の中年頃であった。刊行技術が進歩したことはもちろんであるが、その要因は、まず何よりも漢詩人が増加したことに求めるべきであろう。しかし、そのほかにも、出版に対する詩人の意識変化を指摘できるように思う。すなわち、江戸の後期になると、詩人が進んで自作を整理編纂し、それを生前の折々に上梓する、という出版に対する積極性が顕著に現れ出てくる。むろん、大窪詩仏もそのなかの一人である。

詩仏と同人たちの刊行事業は、内容によって、おおよそ三類に分けられる。第一に日本の漢詩人の詩集である。第二に中国で出版された詩集に訓点や評注を加えて翻刻したもの、第三に日本人によって作品選択のなされた中国詩の選集。本章では、右の三つの分類に従って、詩仏が関わった詩集の出版物について整理分析を加える。第一種については、別集と詞華集（総集）に分け、さらに詩話を加えて論じることとする。第二、第三の二類は、宋詩の選集が大部分である[1]。

(二)　個人の別集の出版

小宮山綏介（やすすけ）（一八三〇～九六、名昌玄、字伯亀）の『南梁劄記』（国会図書館所蔵本）に、以下のようにある。

唐人の詩、百詠と称するものあり。宋阮閱『彬江百詠』、宋曾極『金陵百詠』、明楊循吉『梅花百詠』、清李確『梅花百詠』の如き是なり。万首絶句と称するものあり、宋洪邁『万首唐人絶句』、清王士禎『唐人万首絶句選』の如き是なり。但未だ百絶百律と称するものは是なし、蓋邦人の創造なり、其初は古人の詩を刊行す、今は則己が詩を刊行することなり。

右文に言う「唐人」は中国人の謂である。中国には「百詠」や「万首」と題する詩集が宋代以来存在するが、「百絶」や「百律」と題するものはなく、日本の独創であること、その「百絶」「百律」の編纂方式は当初、古の詩人の集を編む際に用いられたが、やがて詩人自らが自作を編む際に用いられるようになったことが指摘されている。

前者についていえば、後述の『宋三大家絶句』、『三家妙絶』、『宋三大家律詩』、『宋三大家絶句箋解』、『広三家絶句』等はいずれもこの類に属する。封面の標題には「百」の文字がないが、内題には「石湖百絶」、「誠斎百絶」、「放翁百絶」というように、「百」が明記されている。

後者についていうと、具体的には、詩仏たちのことを指して言っていると考えられる。とくに、江湖詩社早期の個人詩集は多く「百絶」、「百律」の題目を冠している。たとえば、次のように。

市河寛斎の『寛斎百絶』、寛政九年（一七九七）刊行。
大窪詩仏の『詩聖堂百絶』、寛政十二年（一八〇〇）刊行。
佐羽淡斎の『淡斎百絶』、文化六年（一八〇九）刊行（詩仏の序あり）。
宮沢雲山の『細庵百絶』、文化七年（一八一〇）刊行。
村田水荘の『杜陸堂百絶』、文化九年（一八一二）刊行。
佐羽淡斎の『淡斎百律』、文化十年（一八一三）刊行（詩仏の序あり）。
栗田逸斎の『逸斎百絶』、文化十一年（一八一四）刊行（詩仏の序あり）。
寛斎、如亭、詩仏、五山の『今四家絶句』、文化十二年（一八一五）刊行。
市河米亥の『米庵先生百絶』、天保二年（一八三一）刊行。

*『寛斎百絶』、『詩聖堂百絶』、『細庵百絶』は、併せて『三大家百絶』という。

*宮沢雲山（一七八〇～一八五二、名雉、字神遊）、江湖詩社の同人。

*村田水荘（?～?、名明、字月渚）、大窪詩仏の門人。
*栗田逸斎（?～?、名朗）、詩仏の同人である館豹海庵が主宰した翠屏吟社の一人。

この理由について、市河寛斎は「細庵百絶序」のなかで次のように述べている。

夫れ百は盈數なり。唐に日に百篇を試するの制有り、当時、王建、花蕊の宮詞に於ける、胡曾の詠史に於けるが如きは、皆な此の数に従へば、則ち豈に唯だに之れを一斑に窺ふと謂ふのみならんや。寛政中、如亭・五山 余が為に百絶を刻す。爾後、天民・淡齋 皆な效ひて之を刻し、乃ち三家絶句、三家妙絶に至るまで、亦た此の数に非ざる者無し。近日、如亭 初稿を刻し、諸体 具はると雖も、其の数 猶ほ此れを出でず。之れを江湖の甲令を謂ふも、亦た奚ぞ不可ならんや。

夫百者盈數也。唐有日試百篇之制、當時如王建花蕊於宮詞、胡曾於詠史、皆從此數、則豈唯謂之窺乎一斑而已哉。寛政中如亭五山爲余刻百絶、爾後天民淡齋皆效而刻之、乃至三家絶句三家妙絶、亦無非此數者。近日如亭刻初稿、諸體雖具、其數猶不出於此、謂之江湖之甲令、亦奚不可②。

寛斎が言及した如亭の初稿とは、文化七年（一八一〇）に出版された『如亭山人稿初集』である。書名に「百」の字はないが、百首だけを収録していた。寛斎は詩集を百首に止めることを「江湖の甲令」、すなわち最も大事な規則だと言っている。その理由は何であろうか。

百首に限定する直接の理由は、出版経費を節約するためであろう。作品数が減れば、版木の数も紙も少なくすみ、売値も安価に抑えられる。読者の側からすれば、さほど懐が傷まず、圧迫感が減り、携帯にも都合良くなる。その結果、これらの詩集は、よく売れて、広範に伝わった。このような出版戦略は、江戸市民における、漢詩の普及を促すとともに、通俗化をもたらしたのである。これは、江戸前～中期の儒者兼詩人のものとは著しい違いがある。津阪東陽の『夜航余話』巻下では、次のように指摘している。

篠崎金吾和学辨に、時風の軽薄をそしりて、先づ死なぬ内に詩文集を板行したがる世の中なればといへるは、蘐園の徒を指たるなり、奥田三角へよせたる書を見けるに、南郭文集上木いたし候、存生の内に家集を公にするは、めづらしき事にて候、

彼社中にてもおかしがり候、然れば生前に集を版にするは、南郭よりぞ始まれる、今は世のならはしとなりて、あやしむ人もあらざるなり、もろこしにては五代の時に始まり、明に至て盛になれり、「古人の書、多く伝ふべき者、未だ嘗て自ら其の伝はるを求めざるなり。之れを蔵する家、或ひは当時、或ひは後世、人 見て之れを愛し、之れが為に鏤刻し衆と同好し、故に伝ふべきなり。五代の和凝、集百余巻有り、自ら版を鏤して世に行ふも、識者之れを非れば、此れより前自ら其の集を刻する者無きを見るべし。今人自ら其の詩文の可否を量らず、概ね鏤版を為して世に行ふ。是を以て伝はる者少なくして、伝はらざる者多し（古人之書、多可傳者、未嘗自求其傳也、藏之家、或當時、或後世、人見而愛之、為之鏤刻與眾同好、故可傳也。五代和凝、有集百餘卷、自鏤版行於世、識者非之、可見前此無自刻其集者、今人不自量其詩文可否、概為鏤版行世、是以傳者少、而不傳者多也）」と、雲谷臥余にいへり、近ごろ又一弊を生じて、集本に人の評を請ておこがましく批評をてらひ、あぶらの滴たるやうなるほめ辞を、靦然として世にひけらかす、まことに軽薄浮華の至り、おとなげなく厚き顔なりけり、篠崎は徂来の門人なりけるが、山田麟嶼にともなひ上京して、東涯にも従遊しければ、三角と親しかりしなり[3]。

篠崎金吾は篠崎東海（一六八七～一七四〇、名維章、字子文、通称金吾）のことで、引用した話は見えないから、東陽の記憶違いであろう。奥田三角（一七〇三～八三、名士亨、字嘉甫）は伊藤東涯の門人で、『先哲叢談』の伝によれば、彼に書簡をよせたのは入江南溟であった[4]。いずれにせよ、生前に己の詩集を刊行するのは、日本では服部南郭（一六八三～一七五九、名元喬、字子遷）から始まったが、南郭はまだそれを恥ずべきことと考えていたようである。それは、当時の詩集の出版時期から証明できる。本論の冒頭に論じたように、明和頃から、個人集の出版が多くなってきた。

しかし、こういう詩集を自ら出版することは、少なくとも江戸の中期には、批判された。松村梅岡（一七一〇～八四、名延年、字子長、通称多仲）の『駒谷芻言』に

近年名利を好む学風行れ、毎人に書を著はし、售出すことになれり。素より非力にて、銭取と名取との為に編出す物なれば、人の為には露ばかりもならず。害になること多し。因て第一義を立て、蒙士に示して云、三十年以来、〔割注〕宝暦。」此方にて編し書、別て注解の書、決して目に触まじき也。さすれば、自ら本道ばかり行て、鬼

窟外道の阿房仲間へ堕ざる也。よくく此事を戒慎すべし⑤。

とあり、宝暦年間（一七五一～六三）、儒者が書を多く出版することを、作者は批判の眼で視ていた。これは詩文集に限らないが、同時代の江村北海（一七一三～八八、明石の人、名綬、字君錫、通称伝左衛門）の『日本詩史』巻四にも、

伯玉（祇園南海）の墓木 已に拱して、遺稿 未だ出でず。余 未だ何の故かを審かにせず。近時学風軽薄、僅かに詩を作ることを学べば、則ち已に梓に災す⑥。

伯玉墓木已拱、遺稿未出、余未審何故。近時學風輕薄、僅學作詩、則已災梓。

とあり、この著が書かれた明和五年（一七六六）の前後、遺稿集が出版されて然るべき祇園南海の詩集がいつまでも出版されず、詩を習いたての者が自作詩集を出版する時世を批判している。これは菱園詩隆盛を受けた時流の変化を背景にしている。また、混沌詩社の鳥山崧岳（?～一七七六）が自作詩集『垂葭詩稿』を出版した際に、その跋文でこう述べている。明和九年（一七七二）のことである。

（垂葭詩稿 刻成し、門人 諸れを海内に公にせんことを請ふ。先生 曰く）否なり、吾が志に非ず。古人は文 成りて諸れを名山に蔵し、其の意 微なり。之を通邑大都に伝ふるは、吾が儕の敢へて当たる所に非ざるなり。方今、世 澆（うす）く人 薄くして、滔滔乎として名利 之れを競ひ、白面の書生、纔か五字七字を綴れば、則ち嘉萬の諸子を剽竊し、嘐嘐（こうこう）然として自ら詫（ほこ）りて曰く、吾れ善く開天の際に泝る、と。其の最も狡黠なる者は、他人の詩を偸み、以て己れの作と為し、之を簡編に著し、或ひは縉紳、釋氏、漢商、韓兒の序を請ひて其の首に冠し、虚名を閭里が兒女の輩に売り、以て衣食の資と為す。宛も賈豎の招牌を掲げて顧主を誘ふが如し」と。

（垂葭詩稿刻成、門人請公諸海内、先生曰）否、非吾之志也。古人文成而藏諸名山、其意微矣。傳之通邑大都、非吾儕之所敢当也。方今世澆人薄、滔滔乎名利之競焉、白面書生、纔綴五字七字、則剽竊嘉萬諸子、嘐嘐然自詫曰、吾善泝開天之際。其最狡黠者、偸他人之詩、以爲己作、著之簡編、或請縉紳釋氏漢商韓兒之序、而冠其首、賣虚名於閭里兒女輩、以爲衣食資、宛如賈豎之掲招牌而誘顧主也⑦。

右文で批判されたのも、江湖詩社よりも前の護園学派に連なる人々である。第一章で論じたように、護園学派は漢詩文を儒学から切り離すのに大きな影響を与えた。「虚名を閭里が兒女の輩に売り、以て衣食の資と為す」という部分には、詩集を出版して、詩名を博し、利益を求める人を、強く批判する姿勢が滲み出ている。

『日本詩史』と、鳥山崧岳の跋文は、明和年間からすでにこのような現象が生じていたことを証明している。寛政年間（一七八九～一八〇〇）になると、この現象はさらに普遍化した。畑道雲（はたどううん）（一七六七～一八〇九、名秀龍、字道雲、号金鶏）の『金鶏医談』（寛政十一年〔一七七九〕刊）に、以下のようにある。

近時 世人の癖疾有る者、今 其の一二を挙ぐれば、儒生 初めて門戸を開きて詩文集を刻せざる者 稀なり。

近時有世人之癖疾者、今舉其一二矣、儒生初開門戸而不刻詩文集者稀矣。

儒学では入門したてなのに、自作の詩文集は刊行しているという現象が、当たり前になっていたことを、右文は伝えている。寛斎が門人に「百絶」や「百律」を出すのを奨励したのも、こういう気風の影響を受けたからと考えられる。詩仏は寛政五年（一七九三）、二十六歳の時、すでに第一詩集である『卜居集』を出しているので、右の指摘の典型例といってよい[8]。

㈢　詞華集の編纂

ここで採り上げる詞華集の出版とは、古人の珠玉を選んで名作選として出版する営為ではなく、同時代における同じ詩学的主張を持つ同人の秀作を選んで一集とし出版する営為である。代表的なものを挙げれば、山本北山の奚疑塾社友の詩を収録した『臭蘭稿甲集』がそうである。この集は寛政五年（一七九三）に刊行され、詩仏の詩も収められている。

むろん、このような営為に批判的立場の人もいた。

大田錦城は寛政六年（一七九四）、「臭蘭稿」（『春草堂集』巻八）という一文を書き、そのよ

うな動きを激しく批判している。彼はまず、そういう風潮の遠い魁をなした、江村北海に批判の矛先を向けた。

余 猶ほ之を記す。二十年前、洛儒の江村君錫なる者『日本詩選』を作り、其の徒の詩を刻し、之を天下に行ふ。天下の蒙生、競ひて其の門に集まり、大いに之の利を罔し、以て其の富を致すを。

余猶記之、二十年前、洛儒江村君錫者作『日本詩選』、刻其徒之詩、行之天下、天下蒙生、競集其門、大罔之利、以致其富。

右に批判したのは、安永年間（一七七二～八〇）に刊行された『日本詩選』正編十巻、続篇八巻のことで、そこに北海の門人の作を選録したことを問題視している。しかし、それはあくまで話の枕であって、もっとも主たる攻撃対象は、『臭蘭稿甲集』であった。

喜六（山本北山）の此の集、蓋し其の故智を襲ひ、都下の名を好む愚人を牢籠し、以て門庭を張皇し、囮（おとり）して修脯を致さんと欲するならん。是の故に好名を以て自ら称す、而れども其の実は則ち射利の黠計なるのみ。

喜六此集、蓋襲其故智、欲牢籠都下好名愚人、以張皇門庭、囮致修脯、是故以好名自稱、而其實則射利黠計耳。

「其の故智」とは、江村北海の先例を指す。「牢籠」は、他人を自分の術中に入れて自由に使うこと。「張皇」は、拡げて大きくすること。「修脯」は、束修のこと。「射利黠計」とは、利益をねらったずる賢い術策の意。集名の「臭蘭」は、『周易』「繫辞上伝」の「（君子）二人 心を同じくすれば、其の利（するど）きこと金を断ち、同心の言は、其の臭（かおり）蘭の如し（二人同心、其利斷金、同心之言、其臭如蘭）」という文言より来ている。

大田錦城の批判は実に容赦ない。北山が詩集を刊行したのは、「臭蘭」という格調高き書名によって、江戸の「愚人」を籠絡し、自門の影響力を高めて、束修をたんまり稼ごうという算段だ、と批判した。錦城は儒者の立場から、詩文軽視の観点を展開し、北山の門下が早く詩集を出し、名利を博していることに、大いに不平を鳴らしたのである。

その他の例を挙げれば、かつて詩仏に従って詩を学んだ、佐原鞠塢（きくう）（一七六二～一八三一、

北野姓も名乗る。通称喜久七・平八・梅隠居士・百花園等多数、向島梅屋敷開祖）が文化元年（一八〇四）に出版した『盛音集』（『詞華集日本漢詩』第十巻、富士川英郎等編、汲古書院、一九八四年五月）がある。山本北山は序を寄せ、「集中 皆な江戸の清新の詩を輯」めといい、収められた一〇七家はすべて清新なる詩である、と高らかに謳い、読者にこの流派を強く印象づけている。

この種の詩集を出版する際に、事前に集金する場合もあった。たとえば、文化五年（一八〇八）、稲毛屋山（一七五五～一八二二、名直道、字聖民、号屋山、通称官右衛門。篆刻家）は『采風集』（『詞華集日本漢詩』第七巻、一九八三年八月）を編む際に、「請詩小引」を出している。

> 上梓の費、貧生の微力の及ばぬ所なり、故に已を得ずして預め之を謀り、然し諸名家は固も償を出して以て集に入りのを欲せずは必なり、冀く高意を枉して卑志を助成す⑨。

すなわち、この集に詩を載せる場合、事前に金を出さなければいけない。次のような具体的な金額まで示している。

> 集に録せば、一葉二十行、一行の刻価は、銀六分を以て成し、略ぼ諸體の位置を計りて左に録す。
>
> 集録、一葉二十行、一行之刻價、以銀六分成、略計諸體之位置而録左⑩。

ちなみに、詩話の出版にも、金銭の授受に絡む似たような現象があったようである。菊池五山が『五山堂詩話』を編修した際、詩人や作品を採り上げる見返りに謝礼を得ていたことが、指摘されている。前掲『南梁劄記』では、松本士崇の話として、「五山が五山堂詩話を編むときは載録を請ふものは七絶一首二百銭、七律一首一銖の謝儀を納るることとなりしと云」と伝えている。また、小宮山楓軒（一七六四～一八四〇、名昌秀、字子実、通称造酒之介、のちに次郎衛門）の『楓軒紀談』（国会図書館所蔵本）巻三でも、「五山堂詩話、采風集 皆射利のものなり、人 膝栗毛の草紙に比す。詩話に仙台家老片倉小十郎の詩あるは多金の贈りものありしならん」と記している。

菊池五山以前の詩話、たとえば、六如の『葛原詩話』（『日本詩話叢書』第四巻、鳳出版、一九七二年六月）は考証を重んじ、津阪東陽も「六如葛原詩話は、奇語を博綜発揮して、詩人

の帳秘に備ふ、実は其集の自注なり」（『夜航余話』巻上）と好意的に紹介している。一方、『五山堂詩話』は、己自身や同人の詩に関わるエピソード集であり、大いに性格を異にする。

『五山堂詩話』は、清・袁枚（一七一六～九七）の『随園詩話』を模した詩話であり、ともに同時代の知人の詩を多く収録する。『随園詩話』が江戸後期に流行したことは、『夜航余話』に、「近ごろ随園詩話の話を除て詩はかり抄して世に刊行す、うつけわさのかきりなりけり」とあることによって分かる。もともとが詩話なのに、「話」の部分を削除し、詩ばかりを抜粋して一書としたものまでも刊行されていた、という。

菊池五山も職業文人であるから、文筆が唯一の生活の糧であった。他に本業があって、詩を聖なる余技と見なす者から見れば、彼の詩文は常に金銭が絡み、世俗の垢にまみれた商品に過ぎぬもの、と目に映ったであろう。しかし、一面から見れば、彼らの行為は、漢詩を廟堂の高みから江湖へと引きずり落とし、作詩人口を一気に増大させた。漢詩は、江戸市民にとっても、もはや十分製作可能な抒情の具に変わったのである。この点において、彼らの功績はやはり甚大である。

㈣　宋詩選集の出版

以上は詩仏に関わる個人集の出版を列挙したが、以下に討論した宋詩選集の刊行は彼らの詩学主張と緊密な関係が有り、生活の来源にもなっている。しかしながら、これらの出版はその前の古文辞派の人が唐詩に関する書籍を大量に出版することと類似し、時代の変化があまり見られないが、清代の宋詩選集を底本とする点は特徴である。詩仏は宋詩に関わる詩学書やほかの明清の書籍なども何種を出版したが、紹介する余裕が無いため、附録を参照されたい。

周知のように、江戸の前中期においては、蘐園学派が明の七子の復古・擬古主義的詩論を踏襲し提唱したことによって、唐詩や『唐詩選』に関する出版が、主流を占めた。一方、江戸後期の大窪詩仏等江湖詩社同人たちは、山本北山や市河寛斎の指導の下、宋詩を提唱し、宋詩の選集を数多く出版した。以下、詩仏が編集に参加した宋詩の選集を、時系列に沿って配列して、底本の性格によって分類しつつ、紹介する。

① 清・張景星『宋詩別裁集』（別名『宋詩百一鈔』）

寛政六年（一七九四）、大窪詩仏は山田直大（?～?、字伯方、号西湖）、奥山榕斎（一七八一～一八四一、本姓糸井、名高翼、字君鳳）および山本緑陰（一七七七～一八三七、名信謹、字公行、通称亮助）とともに『宋詩別裁集』を校訂して出版した。ところが、この和刻本の書名は、封面・内題ともに、『宋詩鈔』に作り（『和刻本漢詩集成　総集編』第三輯に収録）、書名と内容の間に齟齬が生じている。一般に『宋詩鈔』と言えば、清・呉之振（一六四〇～一七一七、字孟挙）等が編纂した書を指す。山本北山が序を寄せており、そこには以下のように記されている。

近來、彼の邦　此れが為に宋詩大いに行はる。其の証は『漫堂説詩』に在り。曰く、『『宋詩鈔』　家ごとに其の書有るに幾（ちか）し」と。

近來彼邦爲此宋詩大行、其證在漫堂説詩、曰、宋詩鈔幾於家有其書矣。

「彼の邦」は、清朝のこと。『漫堂説詩』は、清・宋犖（一六三四～一七一三、字牧仲、号漫堂）の著。宋犖は清初宋詩派の重要人物であり、山本北山の宋詩観も清代初期の宋詩流行の影響を受けていた、と考えられる。『漫堂説詩』の原文は「余が友　呉孟挙が宋詩鈔の出づるに至り、家々に其の書有るに幾し（至余友呉孟舉宋詩鈔出、幾於家有其書矣）」[18]である。「呉孟舉」の名が明記されているので、宋犖が言及した宋詩鈔は、明らかに呉之振、呉留良、呉自牧の編になるそれであって、張景星の『宋詩別裁（百一鈔）』ではない。ちなみに、呉之振等の『宋詩鈔』の初集は康熙十年（一六七一）の刊、張景星の『宋詩別裁（百一鈔）』は乾隆二十六年（一七六一）の刊である。あるいは、この書を出版した時点で、山本北山も詩仏たちも『宋詩鈔』の原本を手にしていなかったため、このような誤解が生じたのかもしれない。後述するように、詩仏はこの数年後には確実に『宋詩鈔』の原本を手にしており、それに基づいて和刻本を刊行している。もう一つの可能性としては、『宋詩鈔』初集は百六巻からなる浩瀚な書であり印刷経費も嵩むため、それを厭う書肆の求めによって、『宋詩別裁（百一鈔）』が選ばれたのかもしれない。『宋詩別裁（百一鈔）』は不分巻であるが、收録作品数は七百首に満たず、それこそ『宋詩鈔』の百分の一程度である。しかし、いずれの理由にせよ、羊頭狗肉の譏りは免れえない。

② 清・周之麟、柴升の『宋四名家詩抄』

寛政十二年（一八〇〇）の夏以後、詩仏は中野素堂（一七六五～一八二九、名正興、字子興）、山本謹とともに山本龍所蔵の清・周之麟、柴升の編『宋四名家詩抄』中の『放翁詩鈔』を校訂し、翌年の享和元年二月に出版した（『和刻本漢詩集成　宋詩編』第十六輯に収録）。この和刻本にも、山本北山は序文を寄せている。

本集以下『剣南詩抄』、『放翁詩選前・後集』を将（もつ）て讎校し、旁（あま）ねく『宋詩紀事』、『宋詩抄』、『瀛奎律髓』等の凡そ放翁の詩有る者に及ぶ」

將本集以下剣南詩抄、放翁詩選前後集讎校、旁及宋詩紀事、宋詩抄、瀛奎律髓等凡有放翁詩者焉。

「本集」とは陸游の『剣南詩稿』を指す。また、『剣南詩抄』とは清・楊大鶴（字九皋、号芝田）の『剣南詩鈔』（康熙二十四年〔一六八五〕序刊）を、そして『放翁詩選前・後集』とは、南宋・羅椅と元・劉辰翁の選集をそれぞれ指す（この二集は四部叢刊に明・弘治刊本が收録されている）。ここに列挙された校正資料から判断すると、①の編纂時期とはわずかに六年前後しか隔たっていないが、宋詩関連の資料がこの当時になると確実に増加していたことが知られる。

文化元年（一八〇四）には、山本謹とともに『宋四名家詩抄』中の『石湖先生詩鈔』を刊行している。さらに、文化三年（一八〇六）には、朝川鼎、松井元輔とともに、『東坡先生詩鈔』を校訂して出版した[12]。だが、同年の三月四日、江戸は大火に見舞われたため、詩仏も一時的に今戸の廃宅で仮寓した後、信越へと旅に出ている。したがって校正には参加したが、刊行には関与していなかったかもしれない。

③ 『宋三大家絶句』、『三家妙絶』、『宋三大家律詩』、『宋三大家絶句箋解』、『広三家絶句』

享和三年（一八〇三）、詩仏は山本緑陰とともに『宋三大家絶句』を刊行した。文化四年（一八〇七）には、市河寛斎が『三家妙絶』を出版している。文化八年（一八一一）には、柴山老山（一七八八～一八五二、名琴、字氷清、通称司）と梁川星巌（一七八九～一八五八、名卯、字伯兎、通称新十郎）が『宋三大家律詩』を出版し、詩仏は序を寄せている。翌年、佐羽淡

斎が『宋三大家絶句箋解』を出版したが、これは『宋三大家絶句』に対する注釈本である。文化九年（一八一二）には、詩仏と菊池五山が『広三大家絶句』を出版した。詩仏と五山が連名で署名する序文には、これら一連の南宋三大家（范成大、楊万里、陸游）選集の刊行事情について以下のように語られている。

癸亥の歳（享和三年）、行（詩仏）　緑陰（山本謹）と相ひ謀りて范・楊・陸三家の絶句、毎家百篇、詩　合せて三百を鐫す。北翁（山本北山）之れに序し、遠近　争ひて購ひ、家々に其の書有り。李家の唐詩は殆ど亡ぶに幾し。丁卯の歳（文化四年）、寛翁（市河寛斎）　再び『三家妙絶』を纂し、其の遺を採拾し、行をして之れに序せしめ、桐孫（菊池五山）暨（およ）び如亭（柏木如亭）をして之れに跋せしめ、又た詩三百と為す、篇什　既に富めば、亦た以て止むべきなれども、行、桐孫の両人　猶ほ厭を知らず、共に遺の又た遺る者を搜して、更に詩三百を録し、名づけて『広三家絶句』と曰ふ。但だ益すを請ふ者に応ふるに急にして、富みを継ぐの誚りを顧みるに遑（いとま）あらず。前の二書を通じて、詩は凡そ九百、初学・新進、宜しく辞する毋くして郷党・鄰里と之れを受読すべし。

癸亥歳、行與緑陰相謀、鐫范楊陸三家絶句、毎家百篇、詩合三百。北翁序之、遠近爭購、家有其書。李家唐詩殆幾於亡。丁卯歳、寛翁再纂三家妙絶、採拾其遺、使行序之、桐孫暨如亭跋之、又爲詩三百、篇什既富、亦可以止矣。行、桐孫兩人猶不知厭、共搜遺之又遺者、更録詩三百、名曰廣三家絶句、但急於應請益者、不遑顧繼富之誚也。通前二書、詩凡九百、初學新進、宜毋辭而與鄕黨鄰里受讀之。

この序によって、『宋三大家絶句』が好評を博して広く流布したから、一連の選集が陸続と編まれたことが分かる。「家々に其の書有り」という表現は、前引、宋犖の『漫堂説詩』の言葉をそのまま借用したものであろう。また、『広三大家絶句』を編集したのは、「請益者」の求めに応じたため、と記されている。おそらく書肆が、利益を見込んで詩仏に早急に作るよう要請したのであろう。最後の一文の「初学・新進」ならびに「郷党・鄰里」はこれら選集の主たる読者対象を暗示している。すなわち詩を学び始めた初学者や地方の私塾に通う若者たちである。三百篇前後の絶句や律詩は、分量的に手頃である上、南宋三大家のそれは平易かつ清新な詩風であるので、初心者にとっては絶好の入門書となった。そ

の結果、「李家の唐詩 殆ど亡ぶに幾し」であった。「李家唐詩」とは、明七子の一、李攀龍の『唐詩選』を指す。この一文は、菱園詩風の衰退を示唆している。

柏木如亭は、その「宋詩清絶序」のなかで、次のように言っている。

> 嚮に吾が師寛齋先生 吾が友詩仏の三家絶句の例に依りて、更に三百首を選刻し、名づけて三家妙絶と曰ふ。吾 恆（つね）に此の二選本を以って行笥に載せ、到る處 詩を説き、糊口の助けと為すこと少なからず。
>
> 嚮吾師寛齋先生、依吾友詩佛三家絶句例、更選刻三百首、名曰三家妙絶、吾恆以此二選本載行笥、到處説詩、爲糊口之助不少。

如亭は旅に出る時は、師と友がそれぞれ編集刊行した南宋三大家の絶句選本を必ず携帯し、それをもとに詩の講義をして生活費を稼いだ、という。旅に出ることの多かった如亭からすると、内容もさることながら、嵩張らず手頃な分量であったことも、旅行必携の理由の一つであったに相違にない。ちなみに、清水礫洲（一七九九～一八五九、名正巡、字士遠）『ありやなしや』（『続日本随筆大成』第八巻所収）にも、寛斎が塾生や門人のために『三家妙絶』や『放翁詩抄』の講義をしたことが記されている[13]。

④ 清・呉之振等の『宋詩鈔』

前述のように、清初の詩壇に大きな影響のあった、呉之振等の編『宋詩鈔』は、詩仏もそれを刊行している。

文化二年（一八〇五）、詩仏は佐羽淡斎とともに『方秋崖詩鈔』（『和刻本漢詩集成　宋詩編』第十六輯所収）を出版したが、北山の序文によると、これは呉之振の『宋詩鈔』を原本として、本集を用いて校正したものである。本集とは『秋崖小稿』を指すであろう。呉之振等の『宋詩鈔』には、百家の宋詩人の詩が収録されているが、詩仏たちは方岳の詩を第一の校正対象にしている。その理由は、『宋詩鈔』の小伝に、方岳の詩が「清新を主とす」という評があることによるのではないかと推測される。なぜなら、山本北山をはじめとする江戸後期の宋詩派がもっとも重視した詩境が、ほかならぬ「清新」であったからである。

文化五年（一八〇八）には、山田直大、山本謹、辻元崧庵（一七七七～一八五七、名昌道、号冬嶺）とともに『楊誠斎詩鈔』（『和刻本漢詩集成　宋詩編』第十五輯所収）を校訂出版した。ま

た、文化七年（一八一〇）に、松浦篤所（一七八一～一八一三、名則武、字乃侯）が宋・高翥（一一七〇～一二四一、字九万、号菊磵）の『菊磵遺稿』（『和刻本漢詩集成　宋詩編』第十六輯所収）を刊行している。詩仏はこの刊行に関わってはいないが、松浦篤所は山中天水と市河寛斎に学んだことがあり間接的な繋がりはあるので、ここに附記する。

文化九年（一八一二）には、泉澤牧太（一七七八～一八五五、名充、字始達、号履齋、三年間詩仏の塾に学んだ）が校した『真山民詩集』（『和刻本漢詩集成　宋詩編』第十六輯所収）に、詩仏が序を寄せている。文化十二年（一八一五）に、詩仏は『宋四霊詩鈔』の刊行に関与し（『和刻本漢詩集成　総集編』第四輯所収）、文政元年（一八一八）には、幾阪世達（?～?）の校正による『後村詩鈔』（『和刻本漢詩集成　宋詩編』第十六輯所収）にも、序を寄せている。

⑤ 清・陸式玉『今体宋詩選』

文化三年（一八〇六）、山本謹は、清・陸式玉の『今体宋詩選』を校正出版した（『和刻本漢詩集成　総集編』第四輯所収）。

⑥ 曹庭棟『宋百家詩存』

文化八年（一八一一）、柏木如亭は、清・曹庭棟の『宋百家詩存』より抜粋して、『宋詩清絶』を編集刊行した。そして、天保十二年（一八四一）、菊池五山と辻元崧庵はその続編『続宋詩清絶』を刊行した。また、巻大任は文化十年（一八一三）、『宋百家絶句』を刊行し、詩仏が序を寄せている。

以上、詩仏に関わる宋詩選集の刊行状況を整理した。彼らが用いた底本は、宋人の別集ではなく、ほとんどが清人の編選にかかる選集であり、それを翻刻もしくは抜粋したものである。この理由は幾つか考えられる。まず、清朝詩壇への憧れを想定できる。かつまた、清人の編選にかかる選集には、どれも宋代詩人の小伝が附されており、その小伝には簡潔な詩評が含まれているので、彼らはそこに大きな参照価値を見出した可能性もある。さらに、民間人である彼らにとって、宋人の別集を入手することは、そもそも容易なことではなかったに相違なく、そのことも一因であろう。官校には関連の書籍が一定数所蔵されていたであろうが、彼らにはそれを自由に利用する資格がなかった。その点、彼らが利用した清人の選本は、長崎経由で多数舶来されていたはずなので、彼らにとっても十分入手可能であった。

また、和刻本を出版する場合、当然ながら、中国書の重刊や覆刻とは大いに異なる点があった。すなわち、訓点を施さなければならない。訓点を施すためには、詩の意味をすみずみまで理解しなければならないので、巻帙に富む浩瀚な書ともなれば、相当の時間を要することになる。むろん、出版経費も嵩み、自ずと価格もつり上がる。よって、訓点を加える（校定する）側にとっても、出版・販売する側にとっても、巻帙に富む別集類の出版は採算ならびに事業効率がよくないため、忌避される結果を生んだのであろう。

しかしいずれにせよ、和刻本の刊行者は、校正の過程で当該の詩集をすべて精読する。それゆえ、詩仏が校正に加わった書籍は、とりもなおさず、詩仏の詩学関連の学識（文化資本）を豊かにする役割を果たした。一例を挙げよう。前述のように、文化二年（一八〇五）、詩仏は佐羽淡斎とともに『方秋崖詩鈔』を出版したが、その校閲作業が完成したのは文化元年（一八〇四）の冬であった。詩仏の詩集『詩聖堂詩集（初編）』巻五には、「倣唐伯虎花月吟（唐伯虎の花月吟に倣ふ）十首」という作が収められているが、詩仏はその自注として、方岳の「舟次嚴陵（舟 厳陵に次す）」詩の「江風月事老（江風 月は老に事ふ）」という句を引用している。明・唐寅の詩に倣ったこの詩は、享和二年（一八〇二）頃の作なので、ちょうど方岳の詩鈔を校正していた時期に当たると考えられる。この例などは、一字一句の校正作業が彼に具体的な詩想を与えていた実例と見てよいであろう。

(五)　結び

以上、本章では、詩仏たちの出版事業について、その内容によって分類した上で、逐次その特徴を論じた。

内容の如何を問わず、相共通する特徴を抽出すると、彼らの出版物は彼らの詩学的主張とストレートに直結し、出版の企画面におけるイニシアティブをもっていたこと、と同時に、主として巻数や形態面で、書肆の意向や市場の動向もそこに常に織り込まれていたことである。またとくに、詞華集や詩話において顕著に現れ出ているが、同時代性をより濃く表現している点も彼らの出版物の重要な特徴である。

化政期を中心とする江湖詩社の出版活動は、出版事業のトライアングル、すなわち著者（編者）―書肆―読者（市場）の関係性が、彼ら以前よりもはるかに緊密に結びつき、有

機的な結びつきになっている。巻帙に富む書よりは、巻数の少ない書が出版される代わり、その分、出版件数が増加し、内容や編集形態も多様化した。

書肆としてみると、巻数を抑えられれば、投下する資本が少なくて済み、売価を下げられる。そうすれば、市場に好まれ、販路を拡大できる。著者（編者）も製作の時間が短くて済む上、己の氏名を冠した書籍がより多く市場に流れれば、詩名が上がり、作品の市場価値も高まる。読者にとっても、価格の低下と種類の多様化は、購買意欲を刺激されたであろう。このように、三者の関係性が上手く結合した形を、彼ら出版事業の背後から読み取ることが十分可能である。

むろん、彼らのこうした積極的な出版活動ならびに出版戦略は、保守派の面々からは、唾棄、痛罵の対象となった。その一斑は本章でも紹介した。しかし、彼らの活動によって、詩作という行為がより通俗化し、その結果、量的拡大とそれに随う質の向上をも生んだことは、紛れもない事実である。それゆえ、日本漢詩史上における彼らの功績はけっして小さくはない。

なお、行論の都合上、採り上げなかったが、上記の書籍のほかにも、詩仏が出版に関わった書籍が多数ある。それらを附録として列記する。

〔附録〕

・寛政十三年（一八〇一）、奥山榕斎と共に『宋詩語』を編纂。
・文化元年（一八〇四）、『唐宋箋注聯珠詩格』を出版。
・文化二年（一八〇五）、植村氏の『瀛奎律髄』に跋文を書く。
・文化二年（一八〇五）、『佩文韻府両韻便覧』を出版。
・文化五年（一八〇八）、『中郎流挿花図会』の序文を書く。
・文化七年（一八一〇）、『三家詠物詩』を校正。
・文化十三年（一八一六）、菊池五山とともに『元百家絶句』を校閲。
・文政元年（一八一八）、『枕山楼課児詩話』を校正。
・文政元年（一八一八）、『花暦百詠』に序文を書く。
・文政十年（一八二七）、『袖体三体詩』に序文を書く。
・文政十年（一八二七）、『甌北詩選』を点校。
・文政十二年（一八二九）、『甌北詩話』を校正。
・文政十二年（一八二九）、岡部菊厓とともに『清新詩題』を編集。
・文政十二年（一八二九）、朝川善庵・岡部菊厓とともに『簷曝雑記』を校正。

注釈

①堀川貴司氏の教示をいただき、劉芳亮氏の『日本江戸漢詩対明代詩歌的接受研究』（山東大学出版社、二〇一三年四月）第三章に「江戸後期宋詩和刻本的出版状況」という表があることを知り、それに参照して本論を修正した。

②『寛斎先生余稿』、遊徳園、一九二六年六月、一三二頁。

③『夜航余話』巻下、『新日本古典文学大系』65、岩波書店、一九九一年八月、三六三、三六四頁。

④日野龍夫氏の『服部南郭伝考』（ぺりかん社、一九九九年一月）にすでに指摘されている（二二〇頁）。

⑤『日本随筆大成』第一期第十六巻、吉川弘文館、一九七六年二月、三八二頁。

⑥『日本詩史』、岩波書店、新日本古典文学大系65、一九九一年八月、一一四頁。

⑦「垂葭詩稿跋文」、『浪華混沌詩社集』、般庵野間光辰先生華甲記念会、近世文芸叢刊8、一九六九年十一月、一〇九、一一〇頁。

⑧後に、「人の勧むるに因りて梓に上す、今に至りて臍を噬めども及ばざるなり」（『詩聖堂詩話』）と言ったが、やはり謙遜の言葉と見なくてはならない。

⑨水田紀久氏の「『采風集』刊前刊後」（『近世文芸』(47)、一九八七年十一月、日本近世文学会笠間書院、三八～四六頁）による。

⑩前引資料による。

⑪『清詩話』、丁福保編、上海古籍出版社、一九七八年九月、四一六頁。

⑫朝川鼎の序文に「予は大窪天民、松井長民と與に東坡詩鈔を校刻し以て之を伝う」とあり、詩仏も校正に参与したことは明らかである。ちなみに、この出版について、大森林造氏の『大窪詩仏ノート』（梓書房、一九九八年十月）は言及していない。

⑬「寛斎翁は隠居して二階住居にて、塾生門人等のために三家妙絶、放翁詩抄等の講義あり」（『続日本随筆大成』第八巻、吉川弘文館、一九八〇年八月、二九二頁）。

Ⅱ

職業詩人のリーダーと成員構成

第四章　市河寛斎詩中の「江湖」と江湖詩社

—南宋江湖詩派との繋がりを兼論する—

㈠　はじめに

日本の漢詩史上、「江湖詩社」は非常に重要かつ独特な存在である。江戸漢詩の詩風変化に与えた影響の大きさはもちろんのこと①、社員の柏木如亭、菊池五山、そして大窪詩仏がいずれも専業詩人として、新たな文人のスタイルを築いたことによっても、江戸詩壇に多大なる影響を与えている②。

〔Ⅰ職業詩人の誕生〕においては、マクロの視点から職業詩人を醸成した江戸後期の文化的環境や具体的な生活手段について研究した。〔Ⅱ職業詩人のリーダーと成員構成〕では、同じ名称をもつ中国南宋時代の江湖詩派との繋がりを研究する。そのために、本章で詩社命名の主、市河寛斎についてまず検討を加え、次に第五章において、江湖詩社には加わっていないが、詩仏に大きな影響を与えた山本北山のことも併せて論ずる。彼ら二人は職業詩人とは言えないが、詩仏、菊池五山、柏木如亭などが職業詩人として成長するように導いた。ゆえに、彼らを検討すれば、職業詩人の育成や人間関係の解明にも意義が有る。

まずは詩仏の師であり江湖詩社のリーダーでもある市河寛斎（一七四九～一八二〇、名世寧、字子静、通称小左衛門）について論じる。従来の研究では、主として彼の詩学的主張や『全唐詩逸』等の著作に注目し、江湖詩社のリーダーとしての身分については深く研究されてこなかった。しかし、当然ながら彼は江湖詩社の盟主として、社員の成長に大きな影響を与えている。本章でとくに注目するのは、彼が詩社を設立したとき、なぜ「江湖」という社名を選んだのか、という問題である。中国南宋後期の江湖詩派と果たしてどのような関係があるのであろうか。また、彼にとって、「江湖」がどのような意味をもつ言葉なのかについて、「江湖」の語を含む作例を中心に考えたい。

(二)　天明六年に市河寛斎が詠んだ「江湖」

江湖詩社の成立経緯については、揖斐高氏の「江湖詩社の出発―市民文学としての漢詩へ」③という論文のなかで説明されている。ここで、いまひとつ検討を加えたいのは、市河寛斎の「江湖」意識の形成とその発展についてである。

寛斎が「江湖」を明確に意識するようになったのは、天明七年（一七八七）、江湖詩社設立直前のことのようである。天明六年（一七八六）に、彼の詩のなかに「江湖」の語が出現する。『寛斎摘草』四巻は、寛斎の前半生、天明六年までの作品を詩型別に収めた詩集であるが、一部の作品が、寛斎の子孫、市河三陽によって編年されている④。それによって、天明六年の作品に、「江湖」という語が集中的に現われていることが分かるのである。おそらくこれは、単なる偶然ではなく、深い意味をもつものと考えられる。事実この年は、寛斎の周辺で天災人禍が相次いだ一年であった。

天明六年の①正月二十日に江戸に大火があり、昌平坂文廟ならびに校舎が焼失した。さらに二月下旬まで、江戸ではほぼ日夜火災がつづいた。また、②七月中旬、水災が起こった。③九月には、将軍家治（一七六〇～八六）が没した。その結果、田沼意次が罷免され、③、④の関わりで、寛斎の師である関松窓が勢いを失った。さらに、翌天明七年正月に、昌平黌の祭酒林鳳潭（一七六一～八七、名信徴）が死去、富田能登守の二男を以って嗣としたことも加わって⑤、天明七年十月に、寛斎は聖堂啓事役（塾頭）を辞し、江湖詩社を開くことになるのである。よって、天明六年～七年は、まぎれもなく彼にとって大きな転機となった一年であった。

「江湖」の語を含む天明六年の作品は、以下のa～c三首である。

a．「古城春望」　七言律詩（『寛斎摘草』巻三）

b．「時事二首」其二　五言律詩（『寛斎摘草』巻二）

c．「秋日休文益夫見過」　五言律詩（『寛斎摘草』巻二）

まず、aの詩では、「江湖」の語は冒頭第一句に現れる。

a　欲向江湖寄此身　　江湖へ向ひて此の身を寄せんと欲す

古城風色望青春　古城の風色　青春を望む
荒園雨灑桃花水　荒園の雨は灑ぐ　桃花の水
壊道雲飛車馬塵　壊道の雲は飛ばす　車馬の塵
月滿宮中無倚檻　月は宮中に満ちて　檻に倚る無く
草深溝畔有垂綸　草は溝畔に深くして　綸を垂るる有り
凭高獨起凄涼思　高きに凭りて　独り起こす　凄涼の思ひ
鳥雀相親抱病人　鳥雀　相ひ親しむ　病ひを抱くの人

「古城」がいったいどこの城であるかは不明だが、伝統的な懐古詩の手法で詠じられており、蘆園余風の趣が残る。冒頭一句、これから「江湖」で生活してきたいという願望が吐露される。もともと、「江湖」は、「朝廷」や「廟堂」と対置する場所として、現在の「在野」「民間」とほぼ同じ意味で用いられる。そして、中国の伝統的観念からみると、「江湖」にいる人は自由自在であった。当時、昌平黌に身を置いた寛斎は、純粋な民間人ではなく、武士に学問を教える官儒であった。よって、士の立場に立って度重なる天災や人災に胸を痛め、鬱々たる思いで日々を過ごしていたようである。

おそらく、前述の②洪水の際に詠じたであろう作が、b詩である。

b　溝渠通積水　溝渠　積水に通じ
無路問滄洲　滄洲を問ふに路無し
仰乳空梁燕　乳を仰ぐ　空梁の燕
尋雄失渚鷗　雄を尋ぬ　失渚の鴎
門庭爭利涉　門庭　利涉を爭ひ
聚落入奔流　聚落　奔流に入る
為問江湖客　為に問はん　江湖の客
誰懷杞國憂　誰か杞国の憂ひを懐くと

第一句は、洪水のため、水路の水が溢れて、海と繋がったかのように、街が一面の水に覆われたことをいう。「積水」は、ここでは海のこと。第二句「滄洲」は、水辺をいうが、古来、隠者の居所に喩える。水辺に隠遁しようにも道がなく、どう行っていいのか分からない、の意。頷聯は自然界の対句。家主が避難して留守のため、がらんとした家、その梁

上の巣に親燕の帰りを待つ雛だけが残り、渚が水に没して、所在なくなったメスの鷗が伴侶を捜している。頸聯は人間界の対句。「利渉」、すなわち舟を我先に求めて難を逃れようとする家々、容赦なく集落に注ぎ込む奔流。「門庭」はある程度の富のある家を指そう。だとすると、この「聚落」は庶民の住まいを指し、長屋に容赦なく奔流が押し寄せる様子を描写した句とも解せる。尾聯は、杜甫の「秋日荊南述懐三十韻」の末尾二句「古より江湖の客、冥心　死灰の若し（自古江湖客、冥心若死灰）」（『杜詩詳注』巻二二）を踏まえる。江湖の客たる杜甫は、俗念を捨て去った心はもはや何ものにも動かされない、と詠じたが、この惨状を目にして、天が落ちて来はしないかと憂えた杞国の人と同じ憂いを抱く者がいる、それは誰だと問うている。

この年の秋、寛斎の家に葛西因是（一七六四～一八二三、名質、字休文、通称健蔵、号因是道人）、柏木如亭（一七六三～一八一九、名謙、字益夫、通称門作）が訪ねてきたとき作った詩（c）のなかにも、「江湖」の語が登場する。

c　同人尋我至　同人　我を尋ねて至り
　風葉掃茅茨　風葉　茅茨を掃ふ
　烹茗清為味　茗を烹ては　清きを味ひと為し
　論詩心作師　詩を論じては　心を師と作す
　寒蟬高樹集　寒蟬　高樹に集ひ
　歸鳥晩雲遲　帰鳥　晩雲に遅たり
　相値休爭席　相ひ値ふて　席を争ふを休めよ
　江湖合在茲　江湖　合に茲に在るべし

「同人」の来訪ゆえの、清く虚飾のない心の交流を詠じている。末尾の二句は、おそらく年輩である寛斎を立てて譲らぬ若き客人二名に対して、ここは江湖、廟堂とは違うのだから、堅苦しいことは抜きにして、気楽にくつろごう、という主旨であろう。「争席」は本来、礼にこだわらず、うちとけて隔てのないことをいう言葉（出典は『荘子』雑篇「寓言篇」陽子居の故事）だが、ここでは王維の「積雨輞川荘作」の句「野老　人と席を争ひ罷はれば、海鷗　何事ぞ　更に相ひ疑はんや（野老與人爭席罷、海鷗何事更相疑）」（『王右丞集箋注』巻十）の用例を踏まえ、文字通り、席次を争うの意であろう。全篇に、廟堂に対する「江湖」の意識が貫かれている。彼はなお昌平黌で公務を担っていたが、この年の前後、公と私の

区別が明確になり、後者により多く精神的比重が移っていたことを暗示する。

以上、「江湖」の語を含む三首の作例を検討した。天明六年の一年間に、「江湖」の語が集中して現れるのは、寛斎のなかでそれだけ「江湖」の意味が重くなり、彼が意識的に己の来し方行く末を繰り返し考えていた証左となろう。a詩において、己をなお江湖の外に身を置くものとして詠じた寛斎が、夏を過ぎて秋になると、c詩の末句「江湖合に茲に在るべし」と、自己の居場所として「江湖」を詠じている。この変化が、昌平黌を去る決意が定まりつつあることを暗示するようで興味深い。

実は、ほかの視点から天明六年の頃には、すでに江湖詩社の基礎が造られていたと指摘する先行研究もある。揖斐高氏はc詩を分析して、

> 寛斎が因是・如亭を目して「同人」と呼んでいることに注目したい。この一首の光景には、寛斎を中心にした新詩風に心を寄せる若き詩人たちのサロンの形成が暗示されているのである。そのサロンには、先に掲げた『日本詩紀』各巻の校定者たちや、それ以外の幾人かの若き詩人たちが出入りしていたであろう。すなわち、この小サロンこそ、江戸詩壇革新の前衛となる江湖詩社の前身なのであった⑥。

と述べている。右文にいう『日本詩紀』とは、寛斎が平安末に至るまでの王朝期の漢詩を集めた総集で、五十巻からなり、四二〇名の詩人に三二〇四首の詩を収める。その第一弾十二巻分が天明六年に刊行されているが、その出版経費の寄附を求める募疏の文もこの年に書かれ、そこには、寛斎と連名で後の江湖詩社のほぼすべての氏名が署名されており、むろんそのなかには詩仏の名も見える。揖斐氏の指摘の通り、どうやらこの時すでに詩社の成員が一つの集団を形成していたようである。しかし、三首の詩を読む限り、寛斎の心は「江湖」に限りなく近寄りつつも、なおもためらいのなかにいる。a詩の「欲」、c詩の「合」の字がそのためらいを端的に象徴している。結局のところ、このような詩社に連なる活動の活発化・安定化が、彼をして「江湖」の人となる最後の一線を踏み越える決断をさせた、といってよいだろう。

㈢　江湖詩社と江湖詩派の関係

天明七年（一七八七）、松平定信による寛政の改革が始まった。この改革は、それまでの田沼意次による重商政策を改め、商業を抑制し、文教に対する統制を強化するものである。とくに文化面では、風俗の矯正や異学の禁が行われた。

江湖詩社が設立された時期は、寛政の改革によって、世情が「放」から「収」へと大きく変化した時のことである。この時期の作「矢倉新居作」（『寛斎先生遺稿』巻一）を見てみよう。

拋擲昌平啓事名　拋擲す　昌平啓事の名
煙波近處占幽情　煙波　近き処　幽情を占む
江湖結社詩偏逸　江湖　社を結びて　詩　偏へに逸し
木石成居趣亦清　木石　居と成して　趣　亦た清し
白首人間爭席罷　白首　人間　席を争ひ罷はり
青雲世外振衣行　青雲　世外　衣を振ひて行く
扁舟乘月誰相訪　扁舟　月に乘じて　誰か相ひ訪ねん
門靜寒潮夜夜聲　門　静かにして　寒潮　夜夜の声

詩題の「矢倉（やのくら）」は、日本橋両国の地、今の東日本橋の辺りで、神田川が隅田川に注ぐ附近である。第二句「煙波近處」は、大川に臨む場所柄ゆえの表現である。寛斎はそれまで日本橋桶町に暮らしていた。桶町は今の東京駅に程近い八重洲・京橋の辺りである。転居しても、昌平黌からの歩行距離にさほどの違いはないが、江戸城を中心に考えると、桶町が城の目と鼻の先であるのに対し、矢の倉は倍近く遠ざかる。その分、官の臭いも薄らいだであろう。

冒頭の一句は、文字通り、彼が昌平黌啓事の職を辞したことをいう。天明七年（一七八七）十月のことである。彼はこの後、寛政二年（一七九〇）六月まで昌平黌の教授職に留まるが、天明七年十月の時点で、官儒としての暮らしに一定程度、踏ん切りをつけたのであろう。頸聯の「白首」の句は、前引c詩と同じく、王維の「積雨輞川莊作」を踏まえる。白髪頭になった私は、世俗でこせこせ他人と席次を争うようなことはもうやめた、の意。

世俗の塵埃をきれいに払って、世俗の外へと出かけてゆくのだ、と決意を記す。尾聯は「相訪」の主体を作者とするか他者とするかで解釈に異同が生まれるが、いずれにせよ月明かりに誘われ小舟に乗ってふらりと友を尋ねる、という隠士の自由で気ままな生活ぶりを象徴するモチーフである。

詩社に「江湖」の名を冠した理由について、寛斎は「与源温仲先生」という書簡文において、「社名の江湖は、之れを宋人の流派より取る（社名江湖、取之宋人之流派）」⑦と明記している。すなわち、南宋後期の江湖派から取ったものである。江湖詩社と江湖派は、内実がかなり異なる。たとえば、「江湖派」は他の一般的な詩派と異なり絶対的なリーダーがいない⑧。また、「詩社」は日本でも中国でも空間（場、座）の共有を前提とするが、「江湖派」には、そのような結びつきは薄弱である。それならば、寛斎がこの規格外の流派に共感を抱いた理由は何であろうか。「与源温仲先生」にその理由が書かれている。

曰く、吾輩は朝に坐せず、宴に与へず、幸に大〔「太」の誤りか〕平の世に生れ、含鼓の沢に沐浴し、即ち道を知る庶人に為り得れば、則ち足りる。何んぞ必ず時好を效ふ為に、唐人試帖中の語を截取し、以て沾沾として自ら喜ぶか。是に於ひて元・白・皮・陸、蘇・黄・范・陸、各おの好む所に従ひて、之の涯岸に為さず、只だ興趣を得ることを以て貴と為る。亦た唯だ一二の従遊の士と與に、日び以て娯楽するのみ、何んぞ為さん、己を以て人を律るかな。

曰吾輩不坐朝不與宴、幸生大平之世、沐浴含鼓之澤、即得為知道之庶人則足矣。何必為效時好、截取唐人試帖中語、以沾沾自喜邪。於是元白皮陸、蘇黄范陸從各所好、不為之涯岸、只以得興趣為貴。亦唯與一二從遊之士、日以娯樂而已、何為以己律人哉⑨。

ここに挙げた理由はおよそ二つあり、①身分から言うと、おなじ庶民であること、②詩学の面から言うと、反古文辞派のために、時人が斥けた各時代の詩人を学習対象とする。これは江湖詩派が晩唐体と南宋四大家を学習することに似ていることである。ゆえに、寛斎は「江湖」の語を選び命名した。

さて、第二点については後で述べるが、第一点について、より詳しく述べれば、前述したように、寛斎が人生の転換期に賦した詩における「江湖」という名称そのものへの執着ということを考えると、少なくとももう一点、当時の寛斎をしてこの流派に注意を向ける

要因があった。それは、彼らが筆禍事件に遭遇したことである。

後年のこととなるが、文化七年（一八一〇）に、松浦篤所が校定刊行した―江湖派詩人の一人―高翥（一一七〇～一二四一、字九万、号菊澗）の『菊澗遺稿』に、寛斎は序文を寄せている。

後世 詩を以て罪に抵る者 甚だ多し。何ぞや。貝錦羅織の所として至らざるは無しと雖も、抑(そもそ)も作者も亦た全く罪無しと謂ふべけんや。宋時、坡谷の諸公より以下、此禍に罹る者、皆な是れ薦紳・大夫 国を憂ひ民を恤れみ憤激するの余、覚えず此に陥るのみ。江湖詩人の如きは、朝(ちょう)に坐せず、宴に与せず、而して禍の及ぶ者にして、嘉定中、李知孝（?～?）の事を弾ずるは、最も甚しと為す⑩。其の時 臨安に集ふもの、劉潛夫（劉克荘、一一八七～一二六九）、敖器之（敖陶孫、一一五四～一二二七）、趙紫芝（趙師秀、一一七〇～一二一九）、周筌翁の如きは、皆な免かれず。而して独り菊澗高先生のみ巨擘を以て能く紛議の外に超然たるは、豈に塵世に高踏し、汚泥に染まらず、其の詩も亦た一語の人事に渉ること有ること無きに非ずや。

後世以詩抵罪者甚多、何耶。雖貝錦羅織無所不至、抑作者亦不可謂全無罪也。宋時自坡谷諸公以下罹此禍者、皆是薦紳大夫憂國恤民憤激之餘、不覺陷此耳。如江湖詩人、朝不坐、宴不與、而禍及者、嘉定中李知孝之彈事、為最甚焉。其時集於臨安、如劉潛夫、敖器之、趙紫芝、周筌翁皆不免、而獨菊澗高先生以巨擘能超然紛議之外者、豈非高踏塵世、不染汚泥、其詩亦無有一語干渉人事哉。

「朝に坐せず、宴に与せず」の言葉は前引「与源温仲先生」と一致しているが、続けて江湖詩派の具体的事件に言及している。この文では、「嘉定中」（一二〇八～二四）と記されているが、いわゆる「江湖詩禍」は、正確には宝慶元年（一二二五）に勃発した筆禍事件で、権臣の史彌遠が済王を廃立したことに非難が集中したのを、史彌遠が強権を発動して批判者を弾圧した一連の事件の一齣で、折しも臨安の書肆、陳起が刊行した『江湖集』のなかに、それを批判したと思しき詩が含まれていたため、詩集は発禁処分となり、批判的詩を書いたと見なされた劉克荘、曾極、敖陶孫、趙師秀、周文璞、陳起の計六名が処罰された筆禍事件である。李知孝は、史彌遠の意を迎え監察御史としてこの疑獄を捏造した張本人で、当時「三凶」と呼ばれた。

寛斎は、江湖詩禍が北宋の筆禍事件と比べて法外に悪辣な疑獄であったとの自己の認識を記した後に、高翥に一切累が及ばなかったことに言及して、その人となりと詩風を絶賛している。もちろん、この序文は、詩社設立の二十年余り後の作であるから、詩社命名時点の心情と完全に一致するわけではないであろう。しかし、もしも当時の寛斎にも、高翥礼賛の基盤となる思想信条がすでに備わっていたと仮定すれば、「江湖」という称号に込められた第一の思いは、「政治」とは距離を保ち、政治とは一切関わらない立場を貫くという点にあったと推測できる。寛政の改革によって、強大な権力が社会をものすごい勢いで硬化させてゆくのを目の当たりにし、かつまた己の身辺にも大きな変化が生じたことで、寛斎は昌平黌を離れる決意を固めていった。その一方で、一民間人として己を自由に表現できる場として、江湖詩社を設立することにしたのであろう。その際に、明哲保身という意味も込め、詩歌に政治を持ち込まないと固く己に誓ったのであろう。

次に、「与源温仲先生」で言及した「江湖」の名称を選んだ第二の理由「反古文辞派のため」について論じる。大窪詩仏が、寛斎の詩論を伝えている。『詩聖堂詩話』に以下のようにある。

寛斎先生、嘗て詩を論じて云く、「詩は風情に本づくに、之れを風趣に求めずして、之れを格調に求むれば、抑そも遠きかな。且つ格は猶ほ人品のごとし。品は上下に分かつ。士農工商、各おの身分有り、品格有り。臣にして君を為し、農にして士を為すは、之れを分を知らずと謂ふ。故に応制・試帖は吾 為らざる所なり。何となれば則ち身 江湖に在ればなり。従軍・塞下は吾 作らざる所なり。何となれば則ち時際 昇平なればなり。夫れ教へは修身より始めて之れを天下に充つ。詩を学ぶも亦た爾り。其の身分の中を言ひ、所として能くせざる無くして、然る後 応制・従軍 遇する所に従へば、皆な吾が身分の外に出でず。故に詩を学ぶに、一に之れを目前に求めて、必ずしも之れを遠きに求めず」と。先生の此の言、痛く今人の病ひに中たる。故に此に録す。

寛齋先生嘗論詩云、詩本風情、不求之風趣、而求之格調、抑遠矣哉。且格猶人品、品分上下、士農工商各有身分、有品格。臣而爲君、農而爲士、謂之不知分。故應制・試帖、吾所不為、何則身在江湖也。從軍・塞下吾所不作、何則時際昇平也。夫教自脩身始而充之天下、學詩亦爾。言其身分之中、無所不能、然後應制從軍從所遇、而皆不出於吾身分之外、故學詩、一求之目前、不必求之遠、先生此言、痛中今人之病、故錄

于此。

冒頭の部分は、むろん古文辞に対する批判である。寛斎は、古文辞学派が格調を学び取るために、まずモデルの徹底的模倣を繰り返し、虚を記すことさえ厭わない点を批判する。「応制」は本来、皇帝の命によって詩を詠じる意であるのに、そのような資格もない者がそれを模倣したり、遠征の体験を持たない、あるいはその身分にない者が、従軍の詩を書いたりという虚偽は厳に慎むべきだ、という主張である。それに代わって、まずは己に身近な素材を詠じ、分相応の題材から始めるべきことを説く。

この言説のなかで、寛斎が士農工商の身分に触れ、それぞれの身分相応の詩を書くべきであると説いているところが、時代を表象している。つまり、士以外の各階層も漢詩を書く時代にすでになっていることを表している。そして、寛斎は江湖に身を置く立場で、民間の詩人たちに向かって、背伸びをせず、身近なことがらを詠じなさい、と説いているのである。

中国の伝統的詩論はそもそも士を対象として展開されたものであるから、寛斎の詩論とは同日には語れないが、もちろん両者の間には基本的姿勢において大きな開きがある。すなわち、中国の詩論は、伝統的に詩の教化や諷刺機能を強調し、社会詩の製作を推奨する。それゆえ、士を強く意識する詩人たちは進んで社会・時政批判の詩を詠じた。それに対し、寛斎の詩論は分相応を主張するものであるから、基本的には、中国で積極的に容認された、詩歌の社会性・政治性を排除ないしは否定する傾向を有している。

以上のように、寛斎が詩学の主張として古文辞派に反対するのも庶民と自認する意志から出たものと考える。おそらくその理由は前に分析したように、――寛政の改革の最中、政治権力の恐ろしさを身を以て体験し、そこから距離を保つ道を選んだ――彼の経歴と人となりとに大いに関係があろう。彼が江湖詩社に求めたものは、政治と対極にある世界なのであって、儒家的な指向性とは正反対のものであったと考えられる。それが、右のような詩論となって現れたのであろう。

寛斎が「江湖」と詩社に命名したのは南宋の江湖詩派によることは前に論じた。ところで、寛斎が矢の倉の新居で暮らした時間はわずかに三年と短かった。寛政二年（一七九〇）、寛斎は白銀町へ引っ越した。白銀町は今の日本橋本石町の辺り、日本銀行本店の北隣に位置し、繁華な中心街である。「移居」（『寛斎先生遺稿』巻一）という詩に心境の変化が詠われ

ている。

買得城中屋數椽　買ひ得たり　城中　屋の数椽
移家来住亦因縁　家を移し　来りて住むは　亦た因縁
簷低猶足容妻子　簷　低きも　猶ほ妻子を容るるに足り
堂浄殊宜奉祖先　堂　浄らかにして　殊に祖先を奉ずるに宜し
厨不妨空魚市近　厨　空しきを妨げず　魚市は近し
樽如常滿酒家鄰　樽　常に満つるが如し　酒家は隣る
心閑此際多幽事　心　閑なれば　此の際も　幽事　多し
枉殺江湖過幾年　枉殺せり　江湖　過ぐること幾年ぞ

多くの期待を込めて転居したはずの矢の倉であったが、三年に満たずにまた転居したのは、きっと生活に不便なところがあったのであろう。右の詩の末句「枉殺」は、むだに費やす、期待に背く等の意の語であるから、この詩からも、矢の倉の暮らしが期待はずれであったことが分かる。頸聯の対は、白銀町の新居における生活の便利さを詠っている。町中にあるため、その分喧噪はあったであろうが、陶淵明の「飲酒二十首」其の五よろしく、「心　閑なれば　地　自ら偏」となり、彼にとっては気にならなかった。矢の倉は川端にあり町の外れなので、「寒潮夜夜の声」が響く静寂はあっても、生活の不便が堪えられなかったのかもしれない。ところが、都会の便利さを備えた白銀町の暮らしも長くは続かなかった。翌年の寛政三年（一七九一）、寛斎は富山藩校・広徳館の祭酒となり、富山に赴く。この年、寛斎は富山にあって「拙を養ふ（養拙）」（『寛斎先生遺稿』巻二）という詩を詠んでいる。この詩には「時に余　越中に筮仕す（時余筮仕越中）」という自注がある。

漫道江湖宜養拙　漫りに道ふ　江湖は拙を養ふに宜しと
侯家有地更誰知　侯家に地有るを　更に誰か知らん
青衫著得官猶散　青衫　著得るも　官　猶ほ散なり
素髪侵來身未衰　素髪　侵し来りて　身　未だ衰へず
腰瘦初纏博士印　腰　瘦せて　初めて纏ふ　博士の印
名逃空勒黨人碑　名　逃れて　空しく勒す　党人の碑

投閑笑向妻孥詫　閑に投じて　笑ひて妻孥に向ひて詫(ほこ)る
老手工夫持敗棋　老手の工夫　敗棋を持すと

詩題の「養拙」は、閑居や隠居の代名詞として使われる語で、「拙」は世渡り下手をいう。首聯、閑居には江湖が一番だと勝手に口にしていたが、仕官先にそれに相応しい所があろうとは知らなかったと、詠じる。第三句「青衫」は、官位の低い七・八品の文官が身に纏う上着。ここでは、寛斎が藩校の祭酒になったことをいう。第五句「腰痩」は、江湖における数年の貧乏暮らしで腰回りがやせ細った、ということ。第六句「党人碑」は、北宋徽宗の崇寧年間に各地に立てられた元祐党籍碑を踏まえる。新法を奉じる徽宗が、新法官僚を貶謫した、元祐年間の旧法政権に連なる官僚の氏名を石に刻み、彼らや彼らの子孫が朝官や教職に就くことを禁じたもの。ここでは、寛政異学の禁でかつてブラックリストに載った自分だが、功名を争う世界からすでに身を引いているので、形ばかりでなんの役にも立たない、の意。尾聯は、妻子に向かって、己はわざと負け戦を選んだのだ、と笑って見せる、意であろう。「詫」は、誇る、の意。

また、寛政五年（一七九三）に、門下の柏木如亭（字永日）と菊池五山（字無絃）が訪ねてきた時に作った、「永日・無絃過(よ)ぎられ賦し示す（永日無絃見過賦示）」（『寛斎先生遺稿』巻一）を見てみよう。

無復衣冠似白蘇　復た衣冠の白蘇に似たる無く
只餘風月屬江湖　只だ風月の江湖に属するを余すのみ
老來欣遇清詩友　老来　欣びて遇ふ　清詩友
病後重傾小酒壺　病後　重ねて傾く　小酒壺
樂府人傳孀教子　楽府　人　伝へ　孀　子に教へ
窮居自嘆鬼隨軀　窮居　自ら嘆ず　鬼　躯に随ふを
斬新氣味令予起　斬新の気味　予をして起さしめ
欲及青春染素鬚　青春に及びて　素鬚を染めんと欲す

〔自註〕無絃有新樂府辟繻孀之篇、永日有窮鬼隨身驅不去之句、人盛傳誦、故及。
無絃に新楽府「辟繻孀」の篇有り。永日に「窮鬼身に随ひて駆れども去らず」の句有り。人盛んに伝誦す、故に及ぶ。

首聯は、「白蘇」すなわち、白居易と蘇軾のような高い位には昇れないけれど、「江湖」に属する風月ならば、有り余るほどある、の意。白居易の「醉吟先生墓誌銘」（『白氏長慶集』巻七二）には、「外は儒行を以て其の身を修め、中は釈教を以て其の心を治め、旁ら山水・風月・歌詩・琴酒を以て其の志を楽しましむ（外以儒行修其身、中以釋教治其心、旁以山水風月歌詩琴酒樂其志）」とあり、蘇軾の「前赤壁賦」（『東坡集』巻十九）には、「惟だ江上の清風と、山間の明月とは、耳 之れを得て声と為り、目 之れに遇ひて色と成る。之れを取れども禁ずる無く、之れを用ふれども竭きず。是れ造物者の無尽蔵なるなり（惟江上之清風、與山間之明月、耳得之而爲聲、目遇之而成色、取之無禁、用之不竭、是造物者之無盡藏也）」とある。ここで、寛斎が自分が官儒の身分に戻って、詩学理想として推重する白居易と蘇軾など士大夫の閑適詩を追及しつつも[11]、青年期のような意気揚々とした生活には戻れない。ただ江湖詩社の同人たちがいまも活躍して、詩壇の新風を先導している、と言っているだろう。

㈣　江湖詩社の四霊

さて、寛斎と江湖詩派との関係は論じたが、江湖詩社の成員たちは江湖詩派とどういうつながりがあるのだろう。寛斎の純然たる江湖の生活は大変短かかったが、江湖詩社に入門した詩人の大半は平民の身分のまま一生を過ごした。彼らの「江湖」における生活ぶりは、第二、三章において考察したので、ここでは時人の評価から、南宋江湖派との繋がりについて検討したい。

富山藩広徳館の祭酒は閑職で、寛斎は悠々たる生活を送っていた。しかも、毎年一回、江戸に帰ることが許された。文化八年（一八一一）までの二十一年間、寛斎はその任にありながら、毎年のように江戸と富山の間を往来している。そして、江戸に帰ってくると詩社の門弟たちと会い、詩文を唱和した。

寛政四年（一七九二）秋、寛斎は江戸に帰った際、「越中より帰り偶成し永日、克從、君玉、天民に示す（歸自越中偶成示永日、克從、君玉、天民）」（『寛斎先生遺稿』巻一）という詩を作った。

久客身如度嶺巔　久しく客たりて　身は嶺巔を度るが如し
歸家暫欲息勞肩　家に帰り　暫く労肩を息めんと欲す
閑遊清話須終日　閑遊の清話　終日を須ひ
衰病窮愁莫問天　衰病の窮愁　天に問ふ莫かれ
籬壞纔存霜後菊　籬　壞れて　纔かに存す　霜後の菊
酒低猶費俸餘錢　酒　低きも　猶ほ費やす　俸餘の錢
四靈今在江湖上　四、靈　今、江、湖、の、上、に、在、り
老境方知不寂然　老境　方に寂然ならざるを知る

この「四霊」は、言うまでもなく、詩題にある四人を指す。「永日」は柏木如亭。「克従」は小島梅外（後に俳諧に転じ、『大梅居家集』がある）。「君玉」は海野蠖斎（一七四八～一八三三）、備中（岡山県）庭瀬藩の江戸家老であり、詩社で一番の年長者である。「天民」は大窪詩仏である。

「四霊」は、ここでは中国南宋の「永嘉の四霊」[12]、すなわち徐照（？～一二一一、字道暉、霊暉、号山民）、徐璣（一一六二～一二二四、字致中、文淵、霊淵）、翁卷（一一五三～？、字続古、霊舒）、趙師秀（一一七〇～一二一九、字紫芝、号霊秀）を意識した命名である。『五山堂詩話』巻一（文化四年刊）の、次の一則がそれを証明する。

人生の聚散　亦た復た常なり難し。二十年間の江湖社、一離一合、吟席　殆ど暖まる日無し。乙巳、余　江戸に帰りし時、如亭　贈らるるに云ふ、「葉水心　初めて官遊に出で、四霊　復た聚まる　旧江湖」と。蓋し余を以て水心に当つるなり[13]。

人生聚散亦復難常、二十年間江湖社、一離一合、吟席殆無暖日、乙巳、余歸江戸、如亭見贈云、葉水心初出宦途、四靈復聚舊江湖、蓋以余當水心也。

「乙巳」は天明五年（一七八五）であるが、この年、江湖詩社はまだ結成されなかった。研究者はこれを「乙卯」（寛政七年〔一七九五〕）あるいは「丁巳」（寛政九年〔一七九七〕）の誤まりとするが[14]、それだと「二十年間」と符合しなくなるので、おそらくは「乙丑」（文化二年〔一八〇五〕）の魯魚の誤りであろう。江湖詩社設立の年、天明七年（一七八

七）から二十二年となりほぼ符合する⑮。この時、久しぶりに江湖詩社の社友が江戸に集い、社盟を復したのである。如亭の詩はあきらかに前掲、寛斎の詩を意識している。「葉水心」は、葉適（一一五〇～一二二三、字正則、号水心）のことである。彼は「永嘉四霊」を著名にした仕掛け人であり、嘗て四人の詩の選集を編集し陳起の書肆から出版している。菊池五山も、『五山堂詩話』を刊行して、同人の作を多く称賛し、柏木如亭、小島梅外、海野蠖斎、大窪詩仏の名前も頻出する。この点から、如亭は五山を葉適と見なしたのであろう。いずれにせよ、柏木如亭は葉適と四霊を並べて詠じているので、この四霊が南宋後期の「永嘉四霊」を意識した謂であることは疑いない。

そして、寛斎がこの四人を「四霊」に喩えたのは、彼らを江湖詩社のもっとも秀逸な四人と考えたからであろう。「永嘉四霊」を含む江湖詩人は、南宋四大家（范成大、楊万里、陸游、尤袤）の後を継ぐ者と見なされている。たとえば、『瀛奎律髓』巻二十では、「乾淳（乾道・淳熙）以来、尤・楊・范・陸は四大家と為り、是れより始めて降りて江湖の詩と為る（乾淳以來、尤楊范陸為四大家、自是始降而為江湖之詩）」と述べている。詩仏たちが南宋三大家の詩集を刊行したり（第三章参照）、南宋三家の詩を提唱したりしたのも、その源流を遡ったのだと考えられる。

なお、「四霊」の呼称は、寛斎一人だけではなく、彼の周辺の知友や詩社の同人たちも使っており、少なくとも寛斎の周辺では、公認の呼称であった。たとえば、文化五年（一八〇八）、寛斎還暦の祝いに、前に言及した葛西因是が「河先生の六十を寿し奉るの序（奉壽河先生六十序）」のなかで、「社中の諸人、咸な寿詩を献じ、芝蘭の並秀するが如く、四霊の来会するが如し（社中諸人咸獻壽詩、如芝蘭之并秀、如四靈之來會）」⑯と記し、宮邦達の寿詩にも、「須らく江湖を把りて寿台と作すべし、四霊 相ひ会す 小蓬萊（須把江湖作壽臺、四靈相會小蓬萊）」⑰の句がある。

以上、まず市河寛斎の詩に現われた「江湖」の意味と詩社の名と南宋の江湖派との関係を検討し、次に、詩仏を含む詩社の四傑が江湖派の先駆である「永嘉四霊」に擬えられたことを記した。そして、日中の二つの「江湖」を冠する詩人群の詩風も似通っていた。

文化元年（一八〇四）に出版された『盛音集』は、山本北山の序によれば、みな清新の詩風を提唱する人、すなわち詩仏や江湖詩社の同人たちの詩を収録した選集である（第三章参照）が、大田錦城もこの集に序を寄せ、以下のように述べている。

諸名人の詩、尖巧幽麗にして、酷だ江湖の集、月泉の吟に肖たり。晩宋の体を然りと為し、老圃秋容の淡き、晩節霜中の芳しき、菩薩 自ら以て号と為す。則ち是れ其の気類の相ひ似たる者を取るか。

諸名人詩、尖巧幽麗、酷肖江湖之集、月泉之吟矣、晩宋之体為然、老圃秋容之淡、晩節霜中之芳、菩薩自以爲號、則是取其氣類之相似者乎[18]。

「月泉の吟」とは、元の至元二十三年（一二八六）、浙江浦江の呉渭らが企画した月泉吟社の詩。彼らは懸賞つきで近在の詩社に作品募集をし、それに応じて寄せられた作品の佳作を詩集にしている。ちなみに、募集したのは「春日田園雑興」を題とする律詩であった。『月泉吟社詩集』所収の詩は、晩唐体の詩ばかりではないが、それに近似する詩風である。

㈤　結び―江湖詩社の行方―

前に述べたように、江湖詩社が成立してまもなく、市河寛斎が富山藩校広徳館の祭酒となった（寛政三年）、社主の留守は詩社に大きな影響を与える。例えば、寛政九年（一七九七）、寛斎は富山より江戸に戻って、再び詩社を結成した[19]。「重ねて江湖詩社を結ぶ十二韻（重結江湖詩社十二韻）」（『寛斎先生遺稿』巻二）という詩に当時の様子が詠じられている。

昔我在江湖　昔　我　江湖に在りて
自稱詩社長　自ら称す　詩社の長
詩道明如日　詩道　明らかなること日の如きも
雲霧奈不朗　雲霧　朗らかならざるを奈んせん
同盟富俊彦　同盟　俊彦　富み
歌詠多真賞　歌詠　真賞　多し
一時詩壇上　一時　詩壇の上
吾黨臂可攘　吾が党　臂　攘ふべし
中歳入官途　中歳　官途に入り

誤罹此憲網　誤って此の憲網に罹る
四走信越險　四たび信越の険を走り
萱堂乖侍養　萱堂　侍養に乖く
土木終年役　土木　終年の役
襟懐那得放　襟懐　那ぞ放つを得ん
盟誓従是寒　盟誓　是れより寒く
江湖付夢想　江湖　夢想に付す
豈無天閔予　豈に天の予を閔れむ無からん
日月来復往　日月　来たりて復た往く
君恩賜休暇　君恩　休暇を賜ひ
似歸故山壤　故山の壤に帰るに似たり
市酒雖云薄　市酒　云に薄しと雖も
舊交重見枉　旧交　重ねて枉げらる
唯当歌太平　唯だ当に太平を歌ふべし
詎必論俯仰　詎ぞ必ずしも俯仰を論ぜん

最初の八句は、天明七年の江湖詩社を開いた時分を回顧して詠う。第四句の「雲霧」は、寛政の改革（異学の禁）が始まった当初、江戸の街に垂れ込めた暗雲をいったものであろう。第七・八句は、この当時、気焔を上げていたのは我らが詩社だけだった、の意。「臂（うで）を攘ふ」とは、腕まくりすることで、意気軒昂たるさま。第九～十四句の六句は、越中の仕官による不自由な日々を詠じる。第十二句の「萱堂」は、母堂のこと。越中の勤めのため長らく江戸を留守にしたから、母に孝養を尽くせなかったことを嘆く。第十五～十八句は、詩社のことをいつも気にかけてはいても、遠方にあって思うにまかせなかったことをいう。第十九～末句は、ようやく休暇を得て江戸に帰り、社友と再び詩を細やかに論じることができるようになった喜びを詠う。末尾の「俯仰を論ぜん」というのは、人生の短さをあれこれ論じても始まらない、の意。

その後も、寛斎は江戸に戻れば、同人を集めたが[28]、詩社の成員たちは事情があって地方へ旅を出たり、藩へ出勤したりしており、全員揃って集まるのは難しかった。たとえば、

寛政十二年（一八〇〇）、寛斎は如亭に書簡（「與柏永日」）を送り、次のように記している。

但だ詩社 寥寥として、四方に飄散するを愁ひ、人をして愈いよ益ます足下（柏木如亭）を思はしめて置かず。無絃（菊池五山） 既に自造の罪を以て、京攝の間に流落し。天民（大窪詩仏）も亦た尋いで西遊し、今は何くに在るやを知らず。伯美（菅伯美）旧に依りて野火止（埼玉県新座市の地名）に宰たり。唯だ海大夫（海野蠖斎）及び克従（小島梅外）、時に首を一堂の上に聚め、共に為に一長大息するのみ。

但愁詩社寥寥、飄散四方、使人愈益思足下而不置。無絃既以自造之罪、流落京攝之間。天民亦尋西遊、不知今何在。伯美依舊宰野火止。唯海大夫及克從、時聚首於一堂之上、共爲一長大息而已。

右の書簡では、寛政十二年当時の詩社の零落ぶりを記している。「四霊」の半分が不在で、菊池五山もいなかった。文化二年（一八〇五）の作、「無絃 五瀬より至り詩を談ずること数日慨然として贈る有り（無絃至自五瀬談詩數日慨然有贈）」にも、

寥落江湖舊社盟　寥落たり 江湖 旧社盟
相逢重作不平鳴　相ひ逢ふて 重ねて作す 不平の鳴

の句がある。以上のように、社主がしばしば江戸を不在にしたこと、かつまた社友がそれぞれ成長して独り立ちし、彼ら自身も江戸を留守にすることが増えたこと等が、詩社零落の最大の理由であろう。

とは言っても、新しく江湖詩社に入ってくる成員もいたようだ。前述のように、文化五年（一八〇八）、寛斎が六十歳になった時、久しぶりに詩社の同人が一堂に会した。その時の祝賀の詩が、すべて『江湖盛事』に収められており、詩仏以下十六人が「恭しく寛齋先生が六十の初度を祝ふ（恭祝寛齋先生六十初度）」という同題の詩を作っている。この十六人（詳細は附録参照）こそは、当時集った詩社の同人である。

〔附録〕江湖成員考

江湖詩社は決して固定的な詩社ではないので、その成員の人数を統計するのも難しい。しかし、前に言及した「四霊」と菊池五山以外に、名前が知られる成員は以下の通りである。

○菅谷帰雲（一七五七～一八二三、名清成、字伯美、号五痴）、高崎藩士。寛政二年に藩主の勘気を蒙り、武州野火止（埼玉県新座市）に流された。『松夢軒集』八巻有り。詩は専ら香山を学ぶ。故に其の言ふ所、多く平淡に陟る」（『詩聖堂詩話』）。また、詩仏の『卜居集』に「寄菅伯美」詩があり、その題下注に「伯美、同社友今川剛侯之兄也、予未見其人、因剛侯數見其詩」とある。よって、今川剛侯とは兄弟であることが分かる。剛侯は、名は毅、緑窓と号した。備後福山の人、二人は菅茶山と親しい関係である。また、菅谷帰雲は江湖詩社早期の成員であった。詩仏の『詩聖堂詩話』に、「余 初め詩を作るに、独立して倚ることなし、後、高蒙士に因りて寛斎先生の江湖詩社に入り、舒亭、梅外、蠖斎、娯庵、伯美の諸人と交ることを得たり」とあるので、江湖詩社の草創期にすでに社友であったことが知られる。

○松浦篤所（一七八一～一八一三、名則武、字乃侯、通称斎宮）、上毛（群馬県）の人。江戸神田に私塾学山堂を開いた。葛西因是の「古今體序」に、「上毛の松乃侯 詩を河寛斎に学ぶ。河家の門より出づる者、多く詩を以て名あり。而れども乃侯 徒だ詩を以て名を為すを欲せず。経学文章 只だ其の一を少くを恐るるなり（上毛松乃侯學詩於河寛斎、出自河家門者、多以詩名、而乃侯不欲徒以詩爲名、經學文章只恐少其一）」とある。

○宮沢雲山（一七八一～一八五二、名雉、字神遊）、秩父（埼玉県）の人。『宋三大家絶句箋解』校訂者の一人。松村黙庵（一七九六～一八四九）の「贈雲山」詩に、

江湖社裏小無絃　江湖社裏の小無絃
自負風流五十年　風流を自負して五十年
落魄賣詩清活計　落魄として詩を売り 活計清らかなり
名如畫餅豈其然　名は画餅の如きも 豈に其れ然らんや

とある。菊池五山の後継者として、詩文を売る職業詩人のようだ。『細庵先生百絶』がある（第三章参照）。

○木偵　生卒年、出身地ともに未詳。『詩聖堂詩話』によって、二十二歳で没したことが分かる。

『江湖盛事』によって知られる成員は、以下の通り。

○八木雄飛　○原清　○邨為一　○高克儁　○原修　○井文房　○田宣

○鎌五安　○勝真　○原敬

*『五山堂詩話』には、「寛斎先生、風雅を主持し、才を愛すること命の如し。その門墻に在る者、原長卿・田徳郎・勝善長の如きは皆な少年にして詩を能くす。徳郎は詩情最も佳なり。余も亦た深く後起の人有るを喜ぶ。（後略）」とある。恐らく、原長卿は原修、田徳郎は田宣、勝善長は勝真を指すだろう。

『五山堂詩話』によって知られる成員は、以下の通り。

○国府碧　○宇龐卿（名嘉充）　○南總三幣希亮（字は子采、号は周淮）

注釈

①富士川英郎氏の『江戸後期の詩人たち』（平凡社、二〇一二年一月）に「寛政の初めに市河寛斎が江湖社を興し、その門に卓れた詩人が輩出するに及んで、江戸の詩風が一変し、再変したとはよく言われることである」と指摘されている（七九頁）。

②富士川英郎氏の前掲論著に「江湖社に属した詩人たちのうちで、最も古参の者には柏木如亭、小島梅外、大窪詩仏、菊池五山があり、この四人は江湖社中の四天王の趣きがあったが、彼等はみな詩人ではあってももはや儒者ではなかった。或は江戸に門戸を構え、或は諸国を遊歴しながら、他人の詩を添削したり、書画を売ったりして生計をたて、経学はもちろん、訓詁の学でさえ、もはや彼等には縁の遠いものとなっているのである」とある（八〇頁）。

③『国文学：解釈と鑑賞』73⑽、二〇〇八年十月、九八～一〇六頁。

④『市河寛斎先生』、市河三陽著、あかぎ出版、一九九二年二月。

⑤前掲『市河寛斎先生』第九七頁に引用した『雲室随筆』によると、林鳳潭は天明六年に

亡くなった。しかし、鳳潭は天明七年に亡くなったので、雲室の誤記だろう。

⑥揖斐高氏の「江湖詩社と遊里詞—江戸詩壇の革新をめぐって—」（上）を参照、『国語と国文学』51㈢、一九七四年三月、五三頁。

⑦『寛斎先生余稿』、遊徳園、一九二六年六月、八九頁。

⑧内山精也氏の『蘇軾詩研究　宋代士大夫詩人の構造』（研文出版、二〇一〇年十月）第一章「宋代士大夫の詩歌観」に、「江西派には黄庭堅のごとき同時代の絶対的なリーダーが存在したのに対し、江湖派には存在しなかった」と指摘されている（六二頁）。

⑨前掲『寛斎先生余稿』、八九、九〇頁。

⑩南宋・周密（一二三二～九八、字公謹、号草窓など）の『齊東野語』（上海書店、一九九〇年九月）巻十六「詩道否泰」条に「寶慶間、李知孝為言官、與曾極景建有隙、每欲尋釁以報之。適極有「春」詩云：九十日春晴景少、百千年事亂時多。刊之『江湖集』中。因復改劉子翬「汴京紀事」一聯為極詩云、秋雨梧桐皇子宅、春風楊柳相公橋。初劉子翬詩云、夜月池臺王傅宅、春風楊柳太師橋。今所改句、以為指巴陵及史丞相。及劉潛夫「黄巣戰場」詩云、未必朱三能跋扈、都緣鄭五欠經綸。遂皆指為謗訕、押歸聽讀。同時被累者、如敖陶孫、周文璞、趙師秀及刊詩陳起、皆不得免焉。於是江湖以詩為諱者兩年」とある。

⑪昌平学職をやめたあと、寛斎は白居易を宗とした。また白居易の年譜を作ったようだ。「傲具詩」の自注によると、香山社を設立して、毎年の八月に白居易を祭った（前掲『市河寛斎先生』、二〇〇頁）。蘇軾をとくに推重している様子は見られないが、「与源温仲先生」には「是に於ひて元・白・皮・陸、蘇・黄・范・陸、各おの好む所に従ひて」とある。

⑫「永嘉四霊」は江湖詩派の先駆である。南宋・厳羽の『滄浪詩話・詩辨』に「近世趙紫芝翁靈舒輩、獨喜賈島姚合之詩、稍復就清苦之風、江湖詩人多效其體、一時自謂之唐宗」（『滄浪詩話校釈』、郭紹虞校釈、人民文学出版社、二七頁）とある。

⑬『五山堂詩話』、『新日本古典文学大系』65、岩波書店、一九九一年八月、一七一頁。

⑭『五山堂詩話』注釈、前掲『新日本古典文学大系』65、二二九頁。

⑮『五山堂詩話』巻一に「乙丑、余再歸江戸、河寛斎先生見贈云々」とある（前掲『新日本古典文学大系』65、一六三頁）。

⑯『江湖盛事』、前掲『寛斎先生余稿』に収録、四〇四頁。

⑰『江湖盛事』、前掲『寛斎先生余稿』、四〇七頁。

⑱『盛音集』、『詞華集日本漢詩』第10巻所収、汲古書院、一九八四年五月、三九七頁。

⑲前掲『市河寛斎先生』の編年による、一九九頁。

⑳寛政十年（一七九八）、海野蠖斎は小梅別墅を借り、寛斎父子、小島梅外、菊池五山およびその他数人を招いた（『寛斎先生遺稿』巻二に「君玉邀遊某氏小梅別墅同無絃克從兒亥三首」という詩がある、『詩集日本漢詩』第八巻、富士川英郎等編、汲古書院、一九八五年三月、二八七頁）、前掲『五山堂詩話』巻二にも記載されている。文化七年の秋、寛斎宅で詩会が開かれ、詩仏は大田南畝、五山、谷文晁とともに参加した。『南畝集』巻十七（『大田南畝全集』第五巻、濱田義一郎編、岩波書店、一九八七年八月、一七三頁）に「河市寧寛斎集同天民五山谷文晁賦」とある。ほかに、文化八年（一八一一）、信濃飯田藩の堀親憲（ほりちかしげ）（一七八六～一八四八）に招かれて、頼杏坪（一七五六～一八三四、名惟柔、字千祺、通称万四郎）、寛斎、五山が共に陪席した（頼杏坪「飯田侯邸招飲同西野詩佛五山」、『春草堂詩鈔』巻二、『詩集日本漢詩』第一〇巻、一九八六年一〇月、二二五頁）、文化九年（一八一二）、寛斎、詩仏と共に酒を飲んだ（寛斎「風雨赴詩佛飲」、『寛斎先生遺稿』巻五、『詩集日本漢詩』第八巻、三一八頁）など。

第五章　山本北山および奚疑塾の人たち

―大窪詩仏の交遊ネットワーク―

㈠　はじめに

詩仏が何時ごろ奚疑塾に入ったのかについて、『詩聖堂詩話』の次の記事から、寛政二年（一七九〇）から寛政四年（一七九二）までの間のことと推測できる①。

中野素堂の将に晴霞亭遺稿を刻せんとするに及んで、余を引きて北山先生に謁せしむ。余の知を先生に受くるは、詩を職とするの由にして、今より距ること十余年なり。

及中野素堂之將刻晴霞亭遺稿也、引余謁北山先生、余之受知於先生、職詩之由、距今十餘年②。

『詩聖堂詩話』の刊行は寛政十一年（一七九九）であり、この条はこの年に書いたとして、十年を遡れば、寛政元年（一七八九）になるが、山中天水（一七五八～九〇、名久宣、恕之、字宣卿。通称猶平）は寛政二年（一七九〇）に亡くなったので、生前にて遺稿を刻するのはおかしい③。しかし、この条の前に「高蒙士に因りて寛斎先生の江湖詩社に入り」（第四章を参照）との記載があり、「十余年」は天明七年（一七八七）頃から計算するのだろう。いずれにせよ、『晴霞亭遺稿』二巻が中野素堂の編によって刊行されたのは寛政四年（一七九二）であるから、「将に」という言葉によって、詩仏が北山の奚疑塾に入ったのはこの間ということになる。よって、寛斎の門弟となった約三年後のことである④。

大窪詩仏は幼くして母と離れ離れになり、父の故郷、常陸太田で成長した。父は詩仏の幼少期に詩仏を故郷に残して江戸に出て小児科医を開業したため、詩仏は祖父と伯父に養育されたが、祖父の光倫は天明三年、詩仏十六歳の時に、伯父の光明は天明五年、詩仏十八歳の時に没したため、彼も故郷を離れ江戸にいる父の許へと赴いた。しかし、その父も寛政二年、詩仏二十四歳の時に亡くなっている。父が存命であった頃、詩仏は家業を継ぐ

つもりで、医学を修めたが、その基礎となる漢文の素養を身につけるため、前述の、山中天水の塾に通い儒学を学んでいた。父他界の後は、父の後を継がず詩で生業を立てる道を詩仏は選択した。それゆえ、寛斎と北山は、父亡き後、我が道の目標となるとともに、父親がわりの人生の師となったのである。

だが、この二人の師は性格がまったく異なっていた。寛斎がどちらかといえば隠逸志向をもち、人となりも穏やかであったのに対し、北山は他者への激しい攻撃もいとわず、論客として世に鳴らした、外向的な人であった。また、寛斎は江湖詩社の盟主として、詩人としての詩仏を導いたが、第四章で記した通り、詩社設立後ほどなく彼は富山藩に仕官し江戸を留守にすることが多かった。それに対し、北山は江戸を離れることが稀であったので、二十代後半の詩仏がより多く面会の機会を与えられ、より頻繁に交流したのは、北山の方であった。

北山は江湖詩社の社友ではないが、彼やその主宰する奚疑塾は、詩仏にとって、非常に大きな意味を持っている。北山も寛斎と同じように寛政の改革に大きな衝撃を受けた一人であるが[5]、寛斎が昌平黌に勤めた官儒であったのに対し、北山はほぼ町儒者として生きたため[6]、より自由に発言できる立場にあった。また、寛斎の自由放任型の温柔敦厚な教育手法とは異なり、北山には自ら弟子をぐいぐい引っ張ってゆくリーダーシップと感化力が備わっていたようである。かくて、北山は奚疑塾の塾生をリードして、蘐園学派に攻撃を加え、彼らの詩風を「偽詩」と斥けて猛烈に反対した。詩仏にとって、寛斎が実作の方面において彼に刺激的な創作の場を与え、具体的な指針を与えた師であるとするならば、北山は主として理論の方面において、彼の進むべき道を指し示した師であったと言えるであろう。両者には静と動の対比がある。

そして、奚疑塾と江湖詩社の人的交流は大変緊密であった。たとえば、詩仏以外にも、柏木如亭と菊池五山は、奚疑塾の山本謹と親しく交流し、互いに協力して宋詩選集等の出版活動に勤しんでいる。この二つのグループが同一の主張を共有したことによって、当時の江戸詩壇に強力な新風が巻き起こることとなったのである。

㈡　町儒者としての山本北山

北山は時人から大きな批判を受けたようだ。彼が猛烈に古文辞に反対して、古文辞派の批判を招いたのがその主な理由である。また、儒者として批判された時もある。この節ではこの方面から受けた批判を検討し、北山の性格および町儒者としての活躍を分析する。北山の成長環境が重要だと考えるので、最初にその点に触れる。北山は自らこう述べている。

吾れ曾て白山に住居す、白山は駒込と隣れり、駒込は儒生の叢り居て舌耕する所なり、因て吾が十四五歳ばかりの頃、駒込の書肆などへ過りしとき、事に触て相見せし儒生もあり、又図らず一面識になりしも有て、翘に三四人のみならず（原文）⑦。

右文によると、北山は青少年期、江戸の白山で育ち、その隣町の駒込には儒生が多く暮らしていた、という。松村梅岡（一七一〇～八四、名延年・太仲、字子長）の言が、この懐旧談を裏づけている。梅岡は宝暦年間から天明年間まで駒込に住み儒学を教授した人物で、その著『駒谷芻言』は天明二年（一七八二）に完成している。その序文に「余駒篭に居て、教授二十年に及べり。其間代り〳〵同業の人も多し」⑧といい、駒込に儒者が多く居住していたことを記している。ちなみに、梅岡は該書のなかで駒込の儒者が学問の造詣に浅いことを批判し⑨、北山の著『孝経集覧』（安永四年〔一七七五〕刊）も批判の俎上に上せている⑩。

よって、北山は、駒込という町儒が集まる地域の気風に影響を受け、自身も町人の気質を存分に発揮して、財を蓄えた。その著『作詩志彀』には、

吾が家もと貧困、故を以て、志を奢逸に奪はれず。幼くして父を喪ふと雖も、母氏の訓戒も亦た至れり。初め桃渓先生に句読を受くも、十余歳にして先生に訣る。後名師を索めて従はんと欲すれども、其の人を得ず（原文）⑪。

とあり、貧困から出て、両親の教えにより倹約に努めた、と北山自身は回想しているが、その実、晩年になって、随分と羽振りのよい生活を過ごしていたようである。小宮山楓軒（一七六四～一八四〇、名昌秀、字子実、通称次郎衛門・酒造之介、常陸水戸藩士）の『楓軒紀談』（国会図書館蔵写本）巻三に、

北山は富家にて、行なきものなり。堺町（今の東京中央区、日本橋人形町三丁目あたり）芝居の金主などせんものなり。是故に幕府にて用ひたまはず。其門人を待つも財あるものと貧生とて大に異なり。其為人いやしむべし（原文）。

とあり、彼は北山が芝居小屋のパトロンとなったことや門人を貧富によって差別したことを非難している。嘗て北山の門人で、後に反目した大田錦城の三男である大田晴軒（一七九五～一八七三、名敦、字叔復、通称魯三郎、魯佐）は『訓蒙浅語』に[12]、

北山先生の晩年に、内々にて勾欄〔割注〕芝居のこと。」の金主をせし事を、意地悪く天下へ流布せん[13]。

と記した。これにより、晩年のことではあるが、衆人に彼の行為が知られて、儒者にあるまじき行いとして、悪影響が出た。さらに小宮山楓軒は『楓軒紀談』に、亀田鵬斎（一七五二～一八二六、名翼・長興、字国南・公龍等、通称文左衛門）と比較して、

鵬斎北山は共に老儒なり。鵬斎知らずことあれば、打明め北山に問ふ、北山は知らぬことあれど、明らさまには問はず、持まはして其事を語す、人これを以て二人を優劣す。北山常に云へるは人名を売らざれは高名ならず、予は早く名を売りしものなり。

というように、儒者らしい謙虚な亀田鵬斎に対し、虚栄心に満ち意識的に名を売ることに腐心する北山を対比的に描き出し、北山の姿勢を揶揄している。

北山の人品に対する芳しくない評価は、右の例ばかりではない。北山より三十歳年少の広瀬淡窓（一七八二～一八五六、名建、字廉卿）も、『儒林評』（天保七年刊）のなかで、北山を以下のように批判している。

皆川（淇園）は行状放蕩なる人なり。東都の山本北山も亦然り。予が友原士萠、人の説をあげて曰く、皆川の放達は、世を弄ぶより出てたり。謝安が東山に妓を携へし類なり。北山にいたりては、其中に於て利を射るの謀をなす。同日にして語る可からず（原文）[14]。

淡斎も、小宮山楓軒と同様、金銭に貪欲な北山の姿勢を批判している。しかしこの両者の批判も、大田錦城（一七六五～一八二五、名元貞、字公幹、通称才佐）の批判を前にしては、遥かに穏健に映るほどである。そのくらい錦城の北山批判は執拗かつ容赦ない[15]。錦城は、奚疑塾に入塾し一時期、北山の門弟であったが、絶交して北山の許を去った。「記悔」（『春草堂集』巻三）という一文のなかで、彼はその経緯を明らかにしている。要約すると、錦城が初めて江戸に来て、諸儒を拝謁し、経学や文芸を学ぼうとしていた時、北山の名声が大きいことを聞いて、その門に入った。最初はその説の新奇さを喜んでいたが、まもなく北山の「狂誕自信」の性格が分かり、離れようとしたが、兄の伯恆が北山を推崇するため、一年あまり塾に留まった。だが、北山の「驕慢傲放」な行跡に堪えられなくなり、かつて袁中郎の『瓶花集』を北山とともに刊行したことも後悔し、結局は交友も断絶した、という。

以下に錦城が北山の人品について批判した箇所を掲げる。

① 議論往來し、稍や其の説の新奇なるを喜び、卒に委質して焉れに従事せり。此の時に当たりて、喜六（山本北山）中郎（袁宏道）を首唱し、于麟（李攀龍）を譏駁して、牛門（荻生徂徠）・赤羽（服部南郭）の諸老先を掊擊（ほうげき）し、乱を撥（おさ）めて治に反（かえ）すを以て自ら任じ、海内を鼓舞して、以て己が門徒と為さんと欲す。俊秀を招集し、驚傑を誘掖して、羽翼を長くするを以て、第一義と為す。余を得るに及びては、大いに喜び以謂へらく一敵国も啻だならざるなりと。口を極めて推奨すれば、余居ること数日にして竊かに疑ふらく其の人 狂誕自信にして、決して君子の人に非ざるかと。

議論往來、稍喜其説新奇、卒委質從事焉。當此時、喜六首唱中郎、譏駁于麟、掊擊牛門赤羽諸老先、以撥亂反治自任、欲鼓舞海内、以為己門徒、招集俊秀、誘掖驚傑、以長羽翼、為第一義。及得余、大喜以謂一敵國不啻也、極口推奬、余居數日竊疑其人狂誕自信、決非君子之人也。

② 居ること一年、大いに彼の為に誑惑せらるるも、少年の客気、誤って自ら料らず、其の材 薄劣にして、狂疎繆戾（びゅうれい）、驕慢傲放、世儒を蔑視し、豪英 自ら命ず。又た誤って彼の才能を奇とし、以謂へらく天下の雄にして、之れが羽翼と為れば、則ち共に功業を立て、声誉を馳せ、一時に震揚するに足らんと。此れよりの後、平居 著はす

所、書記論説、互ひに相ひ表榜し、以て激しく名声を致さんと欲す。

居一年、大為彼誑惑、少年客氣、誤不自料、其材薄劣、狂疎繆戾、驕慢傲放、蔑視世儒、豪英自命、又誤奇彼才能、以謂天下之雄、為之羽翼、則足共立功業、馳聲譽、震揚一時矣。自此之後、平居所著、書記論説、互相表榜、欲以激致名聲。

③　夫れ喜六の公安竟陵を唱ふるは、豈に真に表鐘を知る者ならんや。唯だ一部の中郎集を抱き、以て名を売り利を射んと欲するに過ぎざるのみ。故に其の詩たるや、俚語押韻、倹僻苦渋、自ら謂ふ詩 此くの如くして、以て精神を為すべしと。夫れ中郎の所謂性霊とは、沖淡にして古朴、清奇にして瀟洒なり。伯敬（鍾惺）の所謂精神とは、孤峭にして幽森、縝密にして沈著なり。豈に喜六の謂ふ所の者ならんや。

夫喜六之唱公安竟陵、豈真知表鐘者哉。唯抱一部中郎集、不過欲以賣名射利耳。故其為詩、俚語押韻、倹僻苦澀、自謂詩如此、可以為精神矣。夫中郎所謂性霊者、沖淡而古朴也、清奇而瀟洒也。伯敬所謂精神者、孤峭而幽森也、縝密而沈著也。豈喜六之所謂者哉。

④　若し或ひは彼の詩文に就きて、其の誤まりを指摘すれば、彼の徠翁諸居（蘐園学派）の文に於けるが如くして、更に僕 曷ぞ盡くさん。経義の義に至っては、強辨妄解、邪正を明らかにせず、義理を晢（あきら）かにせず、古賢を齮齕（ぎこつ）し、前修を誣謗し、猶ほ市井の小人の、利を争ひ財を貪り、闘鬧搏撃し、口を放（ほしいまま）にして怒罵し、喧囂紛雑し、自ら恥を知らざる者のごとし。古の聖人の温厚の旨、一掃して尽く。儒者ありてより以来、未だ喜六の若き驚黠なるもの有らざるなり。

若或就彼詩文、指摘其誤、如彼之於徠翁諸居之文、更僕曷盡。至經義之義、強辨妄解、不明邪正、不晢義理、齮齕古賢、誣謗前修、猶市井小人、爭利貪財、闘鬧搏撃、放口怒罵、喧囂紛雑、不自知恥者矣、古聖人之温厚之旨、一掃而盡、自儒者以來、未有若喜六驚黠也。

右の数段において、錦城が批判しているのは、①性格が狂妄であること、②門弟を集めて党派を結成したこと、③世儒を軽視すること、④袁中郎の説を借りて名利を得ようとすること、⑤先儒をとことん攻撃すること等である。要するに、大田錦城は伝統的な儒者の立場に立って、「温柔敦厚」の旨を失した、北山の激烈な他者批判が、「市井の小人」に似て下品極まりなく、背後につねに金儲けの企みが潜んでいると批判したのである。

ここに引用した三者の批判に共通しているのは、北山の名利に対する姿勢である。それは、裏を返せば批判者がいずれも伝統的な儒者の立場に立って論断していることを意味する。名分を重んじ功利を軽んじるのは儒学の伝統にほかならず、朱子学によって一層強調された。また、「修己治人」「修身」等の内省的禁欲的な姿勢も朱子学の基本であるから、北山の矯激な他者批判の姿勢と抵触する。したがって、彼らが激しく批判するのも無理からぬところがある。

そして、北山に向けられたのと同質の批判が、当時、江湖詩社の同人にも向けられていたことを想起してもらいたい。本論の第三章において採り上げたように、大田錦城は言を極めて菊池五山や大窪詩仏を攻撃していた。詩文や儒学を商品化することに頑なに反対する保守的論陣である。しかしながら、名利を追求するのは商品経済の下で職業文人が担わされた運命だといっても過言ではない。町儒であれ、職業文人であれ、彼らは自身の学識や技藝を売って金銭に換えない限り、生活はおぼつかない。そのため、ややもすると自己宣伝に汲々となり、それが伝統的な儒者や文人にとってはなはだ下品に映ったとしたも致し方ないことであっただろう。つまり、両者の立場がまったく異なるがゆえである。

そして、はからずも、江戸後期の寛政から化政期に至る約四十年前後に集中して、このような批判が噴出していることも示唆的である。やはり、この時期に伝統的学問や文藝の通俗化が急速に進展したことを表している。そして、その大きな渦の中心に山本北山や江湖詩社の同人がいたのである。

㈢　奚疑塾の性質

前節では北山が受けた批判を紹介した。そして、この節では大田錦城が批判した第②点、「門弟を集めて党派を結成すること」について検討する。奚疑塾の成員の身分から、この塾の性質を明らかにする。

奚疑塾の成立時間については、北山の『孝経集覧』に、「奚疑塾蔵」という文字があることから、遅くともこの書が刊行された、安永四年（一七七五）には、すでに成立していたことが分かる。この年、彼はまだ二十三歳であった。二十代の前半には、塾が成立していたのである。そして、最盛期に塾生は数百人にまで至った、といわれる。奚疑塾の出身

者には、儒者や詩人だけでなく、女子（文姫）、輿論に批判された人（山中天水）、劇作者（中井董堂）、歌舞伎作者（長島寿阿弥）等もいた。前掲『楓軒紀談』巻三に、

北山の奚疑塾に寄宿の門人[16]十七人あり、其内に婦人二人あり。一は文姫と云ふ、年三十歳許、書を善くし、詩を善くす。嘗て伊能勘ケ由の妾たりしものなり[17]。

と、奚疑塾に入塾した婦女の名が具体的に記されている。女子が漢学塾に入るのはこの時期からであろう。この点は、中国清代の袁枚（一七一六～九七、字子才、号簡斎・随園老人）によく似ている。中国でも清代になって、女性詩人の数が急激に増えた。そのなかでも、袁枚の「女弟子」は、もっともよく知られている。中国で新たに発生したこのような文化現象が日本に伝わり流行するまでには、通常、二百年前後の時間を要した。ところが、奚疑塾に女弟子が入門したのは、安永・天明年間（一七七二～八八）のことなので、日中の間でほとんどタイム・ラグがない。当時、北山が袁枚の女弟子の存在を知っていたか否かは定かではないが、化政期になると、その存在も知られるようになる。ほかならぬ、詩仏が『随園女弟子詩選選』を出版している（文政十三年〔一八三〇〕）。安永・天明年間の段階では、あるいは偶然の一致であったかもしれないが、結果的にこれを伝統文藝の近世化（通俗化）現象として解釈することが可能である。江戸も後期になると、市民の文化生活という点から見れば、日中の差がかなり接近していた例と見なすこともできる。少なくとも、詩仏たちの時代になると、女性詩人に対して男性詩人の心理的抵抗感はかなり希薄になっていたと考えられる。それも、本を正せば、奚疑塾という身近なところに実例が存在したことと、まったく無縁ではなかったであろう。

女弟子のほかに、世間の人々が好色と非難していた問題人物も、北山は入塾を許可した。山中天水（一七五八～九〇、名は恕之、字は宣卿）がその人である。その遺稿『晴霞亭遺稿』に、北山は序を寄せて次のようにいっている。

或もの恕之を悪み正興に謂ひて曰く、夫れ薄行にして交はりを結ぶべからず。之れを譬へば虎豹の如し。飢ゑれば則ち帖耳搖尾して憐れみを乞ひ、小しく飽けば則ち咆哮して人を食はんと欲す、と

或悪恕之於正興曰、夫薄行不可結交、譬之如虎豹、飢則帖耳搖尾乞憐、小飽則咆哮欲食人。

中野子興（一七六五～一八二九、名正興、素堂と号す。伊勢州飯野郡中万里の人）だけでなく、大田錦城も天水と親しく交友しており、奚疑塾の塾生は師さながら因襲に拘泥しない自由さを持ち合わせていたようである。

また、江間徳人（名尚、号彭城、別号璞堂。俗稱は哲介という。東都の人）という人がいた。幼して井上金峨の業を受け、後に北山に従って学んだ。揖斐高氏の推測によると、この人は長島寿阿弥（一七六九～一八四八、本姓は江間。名は秋邦。通称は真志屋五郎作。別号に曇奇、月所、狂寿）である。彼は狂言のほか、長唄、浄瑠璃を作詞。連歌もよくし幕府連歌師の執筆をつとめた。北山自身にも『笑堂福聚』という漢文笑話集があるほか、読み本に序文を書いたりしている[18]。このように、北山は進んで大衆の愛好する通俗文藝を受け入れており、伝統的な雅俗意識に囚われない柔軟な感覚を備えていた。この点は、遠く明末の三袁やその理論的根拠となった李贄（一五二七～一六〇二、原名林載贄、のち改名、字卓吾、泉州晋江の人）に相連なっている。北山の開放的で自由な精神がそのまま奚疑塾の気風となっていたようである。

また、中井董堂（一七五八～一八二一、名敬義）がいる。江戸出身で、狂号は腹唐秋人。戯作名は島田金谷。書家、狂歌師、戯作者。書は明の董其昌に傾倒し、大田南畝門下として狂詩集『本丁文酔』を著す。狂歌は大屋裏住門下で本町連に属した。洒落本『狂訓彙軌本紀』がある。ほかの塾生については附録のリストを参照のこと。

そのほか、富商も入塾している。たとえば、石田醒斎（一七八〇～一八三四、名は篤、字は伯孝）は日本橋本石町で絹商を営み、巨万の財を成した人である。詩仏より二十八歳年少であるが、親しく交友した。後に、詩仏は詩聖堂を営んだが、清水礫洲の『ありやなしや』によると、醒斎はそこの常連であった。

以上述べたように、奚疑塾は開放的な塾であり、多様な業界の人士を集め、とりわけ町人が主たる塾生であった。彼らは師の唱える詩説を支持し、新たな詩風が庶民の間に確立する役割を果した。

(四)　奚疑塾と秋田藩

山本北山は町儒者であったが、一時期、秋田藩や高田藩の顧問のようなこともしている。とりわけ、秋田藩との関わりは深かった。寛政五年（一七九三）六月、北山は秋田藩主佐竹義和に招かれ、藩校「明道館」の整備のために秋田に赴いている。この時、詩仏も旅に随行している。常陸太田の大窪氏はかつて佐竹氏に仕えた家柄であったので、それもあって詩仏を随行させたのかもしれない。詩仏は四十年後にその旅を振り返り、

予　四十年前、北山先生に随ひて秋田に到る。曾て句有り、「毛（下野）を過れば　平野　絶え、奥（陸奥）に入れば　好山　連なる」と。

予四十年前隨北山先生到秋田、曾有句、過毛平野絶、入奥好山連。

と述べている（「奥毛の界を過る、并びに序（過奥毛界并序）」『詩聖堂遺稿』巻四）。北山は秋田藩から厚く禄を賜わった。『楓軒紀談』巻三に、「北山へ佐竹より賜はるは十人扶持、外に贈りものありて、此禄に百石に比すべし」とある。詩仏は晩年になって、秋田藩に招かれ明道館の教授となっているが、それはこの時の因縁であろう。文化十三年（一八一六）、詩仏は秋田藩主佐竹義和のために挽詩（「恭挽天樹公」、『二編』巻四）を作り、「平生　幾度か恩隆を受くるや、猶ほ風流の眼中に在るを覚ゆ（平生幾度受恩隆、猶覺風流在眼中）」と平生の恩を感謝し、温容を思い起こしている。

また、秋田藩家老の疋田元祥（一七五〇～一八〇〇、名定常、九華。字考祥、通称鶴治）や疋田松塘（一七七九～一八三三、名厚綱、字伯紀、通称久馬、のち斎）父子とも交流を持った。柳塘の墓碑は山本北山が書いている。詩仏は、「贈秋田松塘大夫」（『初編』巻九）という詩を書き、「北遊　昔日　秋田に到り、相識　今に于いて二十年（北遊昔日到秋田、相識于今二十年）」という句を詠じ、自ら「予　知を先大夫柳塘君に受く（予受知於先大夫柳塘君）」と注している。松塘は、文化十一年（一八一四）に、『長堤竹枝詞』（『日本竹枝詞集』に収録、伊藤信編、華陽堂書店、一九三九年十一月）を出版している。ここに収められた三十首の詩は、松塘が江戸藩邸にいた時作ったもので、詩仏が評点を加えたほか、詩を寄せている。

このような縁故があるせいであろうか、奚疑塾の塾生には、秋田藩から来た者が多い。たとえば、館天籟（一七七八～一八二七、本姓斎藤、字豹、通称豹蔵。別号海庵・小倉山房等）がそうである。彼は秋田藩士で、江戸に来て山本北山に弟子入りし、大田錦城、朝川善庵とともに「北山の三才」と称された。文政八年に帰郷し藩校明徳館の教授となった。奥山榕斎（一七八一～一八四一、本姓は井、名高翼、通称九平）も秋田藩士で、のちに江戸藩邸日知館

の教授となり、帰藩して明徳館の教授となった。そのほか、『臭蘭稿甲集』に、東海林泰明（名順、俗稱順泰、秋田藩侍醫）、東海林文哉（名鬱、号嬈山）、田一徳（名長民、号月洲）等の作が収められているが、彼らはいずれも秋田藩の人である。

以上に述べたように、北山が率いる奚疑塾は秋田藩と深い関係があった。家老たちと付き合うことによって、その藩から門弟を集められる可能性が有る。これが大田錦城の批判した一方面だろう。

〔附録〕奚疑塾塾生考

○　山本信謹（一七七七～一八三七、字公行、号汎居、緑陰、通称良輔（介））、北山の息子。『楓軒紀談』巻三に「北山の子は富士見御宝蔵番より小普請に入る、禄八百俵五人扶持なり」とがある。

○　小川泰山（一七六九～八五）、町医者の小川笙船（一六七二－一七六〇）の孫。雨森牛南が伝記を作り、『泰山遺説』（再版は『経子考証』という）に収録されている。○柴山老山（一七八八～一八五二、本姓は菅原、名は琴、字は氷清、太古。通称は司）大野郡揖斐の人。山本北山塾の都講なるも、吟哦を事とせず経術を専攻す。後に和歌山藩に招かれて教授となった。また、老山はのちに入塾した梁川星巌（一七八九～一八五八、名は卯、後に孟緯、字は伯兎、後に公図）と共に『宋三大家律詩』、『浩然齋雅談』を刊行した。

○　佐々木聖父（？～一八二一、名万彦、字は聖甫）、「元典多六と称した幕臣で、実は霞関集の編者石野広通の二男である。文政四年十月二十八日歿している。歌は礼泉家門人、漢学は山本北山門下である」（丸山季夫『泊酒舎年譜』、私家版、一九六四年二月）。『江戸諸家人名録』（文政年間刊）に名が載る。初称は三蔵、号は蒿斎、または海棠園、狭々城花禅、江戸の人。また、池田玄斎の『弘采録』巻九十九に、「但し歌の古風はとらせ給はぬことにや。今も列侯の御歌は大抵佐佐木花禅を師とたのみ給ふときけり。これも時勢といふものなるべし。詩よりは歌の劣れると見ゆるぞあかぬわざなり」とある。

『詩聖堂詩話』による、

○　辻元崧庵（一七七七～一八五七、名昌道、号冬嶺）、幼少より奚疑塾に遊ぶ、詩は詩仏

に従い学ぶ、のちに幕府の医官となり、為春院の号を賜る。

○　小川藤吉、早く夭折した。

○　今川剛侯（?～一八一三、名毅、号緑窗）、備後福山の人。

○　東方祖山（一七四八～一八一三、名望・由賢・屯、字満卿、通称は宇左衛門）。加賀（石川県）大聖寺藩士。前田利道以後、五代の藩主に儒官としてつかえた。著作に「易説弁蒙」「祖山筆記」など。その子蒙齊亦北山に學び、書法を市河米庵に問ひ。

『文藻行潦』による、

○　三浦義見

○　山本明卿（名時亮、号北皋）、東都の人。ほかに、『袁中郎先生尺牘』の校訂者。

『作詩志彀』による

○　山田図南（一七四九～八七、名正珍、字宗俊）、医者。『作詩志彀』の序を書いた。

○　雨森牛南（一七五六～一八一六、名宗真、字牙卿、別号松蔭）。　のちに大野藩医となった。

○　釈性山

○　小野田克

○　柴田子介

○　宮川徳、ほかに『袁中郎先生尺牘』の校訂者。

○　鳥居吉人

○　高井邦淑、陸奥の人。『作詩志彀』の跋文を書いた。

『孝経楼詩話』による、

○　湯上恭、加賀の人。

○　橘景秀、江戸の人。

○　伊藤孝誼、江戸の人。

『古文尚書勤王師』による、

○　中島嘉春

○　中村清成、ほかに、奥山榕斎の『辨藝園鉏莠』の校正者でもある。

『日本外史』による、

○　三島舜臣

『作文率』による、

○　石井忠厚、秋田の人。

○　野上陳令、同上。
○　藤原豹、同上。
『臭蘭稿甲集』による、
○　佐佐木仲佑（名一徳、号藝齋）、東都の人。
○　松井延年（名壽、号碧海）、東都の人。
○　鷹野忠人（名貫、号魯屋）、東都白山鶏声窪の人。儒を以て業と為す。
○　稲垣一徳（号遊山居士）。
○　稲垣君義（名正方、号旭山）、信濃の人。
○　葉潛夫（名虬）、東都仕隠。
○　井上冨蔵、井上金峨（一七三二～八四）の孫、南臺の子。
○　山田子言（名致昌、号未兆、俗稱源二、本姓星、名高、号雄飛）。陸奥二本松の人、東都に移住。
○　山田直大（字伯方、号西湖）、東都の人
○　田中貞卿（名篤忠、号白下園・得得、俗稱定二郎）、東都の人。
○　田中子建（名見年、号夢蝶、俗稱喜六）、東都の人。
○　星野文鳳（名陽、号景山、館号は緑桐）。
○　原子振（名元麟、号江關、館号は昭昭）、東都の人、累世醫を以て業と為す。
○　原直夫（名剛）、東都の人。
○　源仲鼎（名貞鉉、号首山）、八王子郷の人。
○　源伯固（名貞幹、号鳳山）、館称来儀館、武藏八王子郷の人。
○　所君還（名維惠、号柳灣）、奥州の人。
○　加藤陵霄（名泔卿、号北洲）、東都の人。駿州岡部駅に住む。
○　後藤行父（名篤義）、東都の人。
○　釋子德（名真隨）、相州の人。
○　野中新三（名知、号君山）、東都の人。
○　石井子直（名惠、俗稱英吉）、奥州盛岡大槌の人。
○　長谷川光大（名実輝）、東都の人。
○　新家玄常（名景明、一字子亮、号守靜）、遠州の人。東都白銀第三街に寓す。
○　橋本子行（名德、号南華、俗稱藤九郎）、東都吹上の人。
○　岡村士幹（名貞、俗稱祐助）。

○　坂井子衷（名啓節）、東山と号す。越後の人。
○　宮田方大（名直侯）、東都の人。
○　中原伯節（姓中原氏若林、名包貞、字伯節、号鼓山・潛龍館主人）、東都の人。
○　中井子重（名美喬、号霜骨）、東都の人。
○　鈴木廉夫（名恥、号曰櫟屋、俗稱範藏）、武州川越の人。
○　保科碩篤（名宜儔、号八溝、俗稱就助）、東都の處士。
○　三宅所助（名順）、備中の人。
○　浦池鱗長（名潛）、備中の人。
○　久米井子工（名惟亮）、東都の人。
○　喬子元（名黄離、号沖齋）、東都の人。
○　高野伯忠（名恕）、東都の人。
○　高栗子有（名寛喬）、信濃の人。
○　小田切有濟（名熙、俗稱健藏）、東都の人。
○　小松叔韞（名教覓、号尾穀山人）、常陸新治の人。
○　大竹学夫（名近知）、東都の人。
○　大内寛夫（名栗、号桃花齋）、陸奥の人。
○　上田子中（名元吉、号翔谷）、東都の人。
○　菅野広正（名喜、号北林）、下野の人。
○　真里穀真君（名吉利、号玉山）、武州江戸の人。
○　馬島文度（名安節）、相州の人。
○　牛窪雪（字百穀、号棠園）、東都湯島中坂の人。

注釈

① 揖斐高氏の「大窪詩仏年譜稿」（『江戸詩歌論』付篇、汲古書院、一九九八年二月）は寛政三年（一七九一）の項に『詩聖堂詩話』のこの記事を引用して、「この年頃、中野素堂の紹介で山本北山を知る」（六〇九頁）と推定したが、具体的な理由は述べていない。

② 『詩聖堂詩話』、『日本詩話叢書』第三巻、鳳出版、一九七二年六月、四三二頁。

③ 山口旬氏「詩聖堂詩話注釈　上」（『成蹊人文研究』18、成蹊大学、二〇一〇年三月、一～三三頁）にはこういう考証がある。『晴霞亭遺稿』の著者山中天水が没したのも、寛政二年である。その生前から詩集刊行の計画があり、没したことによって『遺稿』となったものか。この段は、「余が知を先生に受くる」を受ける語がない、「職詩之由」の訓読、年数の問題などあり、何らかの本文上の錯乱があるのかもしれない」（一六頁）。「職詩之由」を江湖詩社に入る時より計算すれば、年数は間違いない。

④ 斯文会編の『日本漢学年表』（大修館書店、一九七七年七月、三八五頁）、前掲揖斐高氏の「詩仏年譜稿」（六〇七頁）、大森林造氏の『大窪詩仏ノート』（梓書房、一九九八年十月、九頁）などには、大窪詩仏が江湖詩社に入った時期を寛政二年（一七九〇）頃としている。『日本漢学年表』の根拠は「詩聖堂詩集叙」であるが、該当のところは見えなくて、ただ寛斎の序に「時余方開江湖社、聞風來者甚多、天民亦入社」とあるのみである。「詩仏年譜稿」は「詩仏の江湖詩社への初参加がいつのことかは確定できないが、江湖詩社の四才子として時に併称される柏木如亭・小島梅外・菊池五山に比べて詩社への参加はもっとも遅い」と推測したが、その理由は述べていない。もし、『詩聖堂詩話』の「高蒙士に因りて寛斎先生の江湖詩社に入り、舒亭、梅外、蠖斎、娯庵、伯美の諸人と交ることを得たり」によるなら、第四章にて論じたように、彼が江湖詩社成立前から、すでに寛斎とは親しい関係であったことになる。よって、江湖詩社にはいるのは天明七年頃と推定される。『大窪詩仏ノート』はほぼ揖斐高氏の考証を引用しただけである。

⑤ 山本北山は寛政異学の禁に強く反対し、亀田鵬斎、市川鶴鳴、塚田大峰、豊島豊洲とともに「五鬼」とされた。

⑥ 山本嘉孝氏が「山本北山の技芸論―擬古詩文批判の射程」（未刊稿）にて指摘したように、北山は「寛政二年から文化八年まで第九代秋田藩主佐竹義和の江戸藩邸侍講を務めながら、藩校設立や洪水処理などの藩政に関与した記録が義和の一代記『御亀鑑』江府編に見える」。しかし、これは顧問のような仕事で、藩儒にはなっていなかった。

⑦ 北山の門弟である雨森牛南が『詩訟蒲鞭』（前掲『日本詩話叢書』第八巻に収録）に記録した（三九頁）。

⑧ 『日本随筆大成　第一期』第十六巻、吉川弘文館、一九七六年二月、三五五頁。

⑨ 「明和の初、駒込に、蘭渓と云儒者あり。〔割注〕俗名、本田弁介と云。」あやしき詩文作り、署名に、駒門隠士某と記せり。駒門とは何故ぞと問に、彼人云、徂徠先生牛込のことを、牛門と書たり。故に駒込をも駒門と記せりと云。徂徠の牛門と記せしは、牛

込に城門ある故なり。駒込には城門も無きに、如此記せしは、彼人の意に、門の字を込と訓ずと心得しならん。駒込には、此類の儒者多し（『駒谷芻言』、『日本随筆大成　第一期』第十六巻、三六四頁）。

⑩「近年、孝経集覧と云書を編し人あり。孔安国以下の古注を集たるもの也。其書体を見るに、集注、集解、集伝、合注、など目すべきもの也。一目に双べて、古今註を見わたすに及ばざるなれば、集覧の名不当也」（『駒谷芻言』、『日本随筆大成　第一期』第十六巻、三八〇頁）。

⑪前掲『日本詩話叢書』第八巻、五六頁、五七頁。

⑫ほかに、小山田与清（一七八三～一八四七）の『松屋筆記』（国書刊行会、一九〇八年七月）巻十四にも類似の記録が残っている、「芝居の金主したる文人　今茲文政三年の秋葺屋町玉川座の芝居の金主は岸本由豆流也日々に従僕を率て葺屋町玉川座の帳場に諾居ると也さきに山本信有も芝居の金主せしことあり文人にて芝居の金主せしは此二人而已」（一二〇、一二一頁）。

⑬『日本随筆大成　第三期』第八巻、吉川弘文館、一九七七年三月、二二三頁。

⑭『儒林評』、『日本儒林叢書』第三巻（関儀一郎編、鳳出版、一九七一年十一月）に収録。一〇頁。

⑮例えば、『楓軒紀談』巻三に「鶏俎佛と云うを北山に問ひし人ありんに、如来のことと答へたり、何の書にあると問へば、某の書と答り、後に考うれば、茶の異名にて、佛のことにはあらず。北山の説に如此ものあり、太田才佐云へるとり」。

⑯『楓軒紀談』巻三にはまた「北山へ寄宿するものは毎月白米一斗五升、外に塩菜の料鏹三百文つつなり」がある。

⑰詩仏の詩にも文姫のことを言った「読閨秀文姫詩」（『詩聖堂詩集初編』巻五）がある。

⑱『楓軒紀談』に「草紙の作者馬琴著す燕石雑誌に北山の序あり、人これを薄んず、又太田才佐少年の作に春画の序あり」とある。

Ⅲ　職業詩人活躍の場

―詩社・詩会・書画会について―

第六章　日中の民間詩社概説

—その教育機能をめぐって—

(一)　はじめに

第二編において、詩仏が属した江湖詩社と奚疑塾との主宰者や成員等の問題について論じた。ただし、詩仏はこの二つのグループだけに属していたわけではなく、そのほかにも当時の多くの文人集団に属し、数多くの文人集会に参加しながら活躍していた。ほかならぬ彼自身も詩社を創り青年たちを指導した。よって、本章では、まず江戸時代の詩社の問題を考察して、詩仏と詩社の関係を究明したい。その際、比較対象として、中国における詩社との異同についても論じる。

中国の詩社は、もともと士大夫社会のなかで生まれた。士大夫のそれは、「文人雅集」に由来しており、歴史も長い[1]。士大夫が積極的に詩の創作に取り組み始めた魏晋以来、酒宴を開くかたわら、詩を詠じるのが一つの雅なる伝統となった。もし仮に、半固定的なメンバーで構成され、頻繁に集会し、持続的に詩作する集団を、広義の詩社とするならば、南朝斉梁の貴族的文学サロンもそれに該当する。斉の永明年間（四八三～九三）に、竟陵王蕭子良の許に集まった、蕭衍（梁武帝）、沈約、謝朓、王融、蕭琛、范雲、任昉、陸倕、いわゆる竟陵八友を始めとして、梁の蕭統（昭明太子）、蕭綱（簡文帝）、蕭繹（元帝）等、皇族のサロンでは詩酒の雅会が度々催され、そのような多数俊秀が集う競作の場で、詩の形式や韻律が究められ、また表現技巧も高められた。そして、出来映えの優劣を競うなかで、批評意識も高まり、劉勰『文心雕龍』や鍾嶸『詩品』の如き詩歌評論も生まれている。

他方、現存資料による限り、民間における詩社の成立は、士大夫のそれよりずっと遅れる。その最たる理由は、文言詩の創作が士大夫の教養と位置づけられるようになった結果、その高度に洗練された形式と内容要件が庶民にとって創作をますます困難にしたことと関わりがあろう。つまり、魏晋六朝期に詩作が「士」という上位階層の文化的高さを象徴する教養として強化された結果、「庶」の階層に属する民間人にとって、詩を創作するハ

ードルがいよいよ高くなったのである。

中国詩の最盛期、唐宋時代にあっても、右の状況に著しい変化が生じたわけではないが、ある社会制度と文化事業が、ゆるやかな変化を演出した。それは、科挙制度と印刷出版事業である。前者は隋唐以来、後者は唐五代より始まるが、その規模が拡大され、社会全体に大きな影響を及ぼし始めるのは、北宋以降のことである。よって、民間の詩社出現の条件も、宋代以後にようやく整えられていった。

北宋後期以降、進士及第者は毎回、四、五百名を数える。一方、科挙の第一段階である郷試の受験者は、やはり北宋後期以降、十万人を超えたと想定される。したがって、三年に一回実施される科挙のたびごとに、十万人規模の落第者が大量生産され、彼ら落第者の大半は「士」になれず、民間に沈澱することになった。落第者とはいえ、彼らも長年の受験勉強によって、士の教養としての高度な詩藝を身につけていたと考えられる。おそらく、挙子業においては落伍者である彼らが、あたかも伝道師のごとき役割を果たし、民間における作詩人口を増やしていったのであろう。

また、北宋後期以降、民間の出版業が盛んになり、南宋に入ると福建・江西・浙江を中心にますます隆盛した。民間の書肆は、初め主として科挙の受験生向けの教科書・参考書の類を編纂刊行したが、十三世紀になると、科挙と直接関わりのない書籍も刊行し始める。そのなかには、初学者向けの啓蒙的な選集や用語集等、詩学の入門書も含まれている。これらの書物の存在は、当時、民間にすでに作詩に励む一定数の人口が存在したことを裏づけている。そしてどんなに遅くとも、十三世紀の後半、宋末元初の頃には、士大夫とは異なる、民間の詩人が確実に相当数存在した。このような詩人層の裾野の拡がりが、民間の詩社成立の前提条件となっている。かりに、士大夫文人の集団化成立が斉梁のことだとすると、この間、約八百年のタイム・ラグが存在している。

さて、士大夫と民間の詩社とを比較してみると、やはり両者には無視できない相違点がある。前に広義の詩社のゆるやかな定義を試みたが、ここで改めてそれを再提示すると、半固定的なメンバーによって構成され、頻繁かつ持続的に詩会を開催する詩作集団が（広義の）詩社である。まずこの条件に照らして、両者の相違を考察すると、士大夫の詩社の場合はこの条件を満たしたとしても、活動の持続時間が比較的短期間に偏るという傾向を有している。とりわけ唐宋時代においてはそうである。それは、士大夫が通常三年を満期として部署を転々と変えてゆく生活スタイルをもっていたからである。たとえば、詩名のある士大夫が地方官として地方都市に赴任し、その土地で詩社が結成された場合、当該士

大夫が任期を終え他の都市へと転出すると、その詩社の活動も一気に衰退したり、休止されることが多い。それはその詩社の活動が当該士大夫に大きく依存しているからである。それに対し、民間の詩社は、総じて活動の持続期間が長い。それは、民間人を主体とするがゆえに、主要な成員が一都市に定住しており、移動を常とする士大夫と生活スタイルが大いに異なるがためである。

また、質的にも異同がある。士大夫の詩社は、通常、すでに高度な詩藝を有する者同士の、対等な交流ないしは競作の場であって、そこに啓蒙や教育という要素はほとんど含まれない。他方、民間の詩社の場合は、士大夫のそれとさほど違わないものもあれば、初学者向けの啓蒙的なものに至るまで、目的もレベルも多種多様であった。しかし、初学者向けの啓蒙的な錬磨の場としての機能が、士大夫の詩社には乏しい分、これこそが民間の詩社の一大特徴といってよいであろう。

もちろん、民間の詩社は、もともと士大夫の詩社から発展してきたものなので、両者を厳密に区分できない場合もある。士大夫が民間の詩社に参加し、民間詩人が士大夫の酒宴に参加することもある。本論では、詩社の成員（士大夫か民間人か）と機能（競作か教育か）という視点に着目し、大きく二分して考察する。まずは、中国における民間の詩社の出現状況から検討を始めることとする。

㈡　中国における民間の詩社

(1) 宋元における民間の詩社

中国の「社」は、東晋の慧遠が主宰した「蓮社」が最も早いといわれる。しかし、伝存の詩もあるにはあるが、「蓮社」はやはり宗教的結社であって、純粋な詩社ではない。下って唐代、中唐期の詩のなかに、「社」や「吟社」等の語が出てくるが、それらは僧侶や貴族のそれであり、明らかに民間の詩社ではない②。

詩社についての先駆的研究、欧陽光氏の『宋元詩社研究叢稿』（広東高等教育出版社、一九九六年九月）では、詩社が宋元時代において盛行したことを論じている。しかし、欧陽光氏は北宋と南宋を明確に区別しないままに論じており、叙述にやや正確性を欠くところがある③。両宋三百年の間では、詩社の活動は北宋末に近づけば近づくほど活発になる④。その理由はたぶん文字獄が盛行する時期に、士大夫は詩社など集団活動を回避していたの

だろう。そして、北宋の段階では、士大夫を中心とする集団活動が圧倒的に主流であり、民間のそれはほとんど目立たない[5]。

南宋に入り民間の詩社が増加するが、それも後期以降に顕著になる。たとえば、第四章でも言及した、南宋後期の江湖詩派についていうと、少なくともこの詩派に数え入れられる138名中、21名の詩人が相異なる詩社の活動に参加していたことを確認できる[6]。ただし、彼らの参加した詩社が、具体的にどの様な性質をもつものなのかは、資料的制約によってまったく分からない。しかしいずれにせよ、江湖派の成員は、大半が下層の士大夫か布衣であるので、北宋の頃の大官を中心とする詩社とは、すでに様相を異にしていた、と見なされる。

元代に入ると、民間の詩社の活動がより一層活発化する。とりわけ、江浙においてそれが盛んである。しかも、民間主体であることが、当時の政治状況によって極めて容易に確定できる。すなわち、南宋の故地の中心地であった江浙一帯は、被征服地域であったために、その出身者は中央政治の場で活躍する機会を長らく奪われていた。また、科挙も四十年間実施されなかったため、江浙の知識人の多くは完全に行き場を失ない、民間人として生きるほかなかった。よって、この時期この地に設立された詩社も、自ずと民間の色彩が濃くなるわけである。

欧陽光氏の前掲書によれば、元代の詩社活動は、一般的にまず詩題を定めて作品を募集し、名士や大儒に依頼して、彼らに品評してもらうという形式を採る場合が多い[7]。元の至元二十三年（一二八六）、月泉吟社が「春日田園雑興」を題に詩を募集したのは、その典型例である。実は、宋元の頃から元末まで、同じような形式で執り行っていた集会がたくさんあった。例えば、至順年間（一三三〇～三）、濮彦仁（？～？）などが行なった「聚桂文会」は楊維楨を閲巻官とし、東南地域の名士500人まで集めて文章を作った（朱彝尊『曝書亭集・徐一夔伝』）。これは詩社の集会ではないが、当時のこのような集会形式の流行を反映している。明代の李東陽（一四四七～一五一六）もその『麓堂詩話』（『叢書集成初編』本）に、「元季国初、東南の人士は詩社を重じ、毎に一有力の者を主と為り、詩人を聘して考官と為り、歳を隔てて題を諸郡の詩を能くする者に封じ、期して明春を以て卷を集め、私試して榜を開き、名を次ず，仍ち其の優る者を刻み、略や科舉の法の如し」（元季國初、東南人士重詩社、毎一有力者為主、聘詩人為考官、隔歳封題於諸郡之能詩者、期以明春集卷、私試開榜次名，仍刻其優者、略如科舉之法）と記している。このような詩の公募形式は、考官を置いて公正に優劣を定めるという点から、科挙制度を摸倣したものと従来指摘されている[8]。

では、詩社が科挙制度を摸倣したのはなぜであろうか。実はこれは元代に始まったことではなく、北宋にまで遡る。もともと、北宋の頃に、二種類の詩社がすでに存在していた。熊海英氏『北宋文人集会与詩歌』（中華書局、二〇〇八年五月）によれば、一つは文雅の士が勤務の余暇に師友と集い詩を詠じて品評し合う非功利目的の詩社で、他の一つは科挙の準備のために厳格な形式や規則を設ける功利目的の詩社である（上篇第二章第五節）。南宋中期頃から、後者が増加し始め、元以降、こういう詩社がますます増えた。この種の詩会の主宰者は「会課」と「課社」の制度⑨を模擬して、参加者に競作させたと考えられる。つまり、宋代において、すでに詩社の一類型となっていたわけである。

元の初め、科挙は長期にわたって実施されなかったが、州県学以下、書院・私塾等の各種教育機関はなお存続しており、そのような教育単位が詩社の基盤となったようである。たとえば、前述の月泉吟社は、浙江浦江の月泉書院を基礎としていた。かつまた、月泉吟社の公募で上位入選した者の多くが教授職にある者であった（宋代の詩社に教授を社主とする場合もある。註⑤に言及した⑵⑶はすなわちそうである）。この事実が、当時の詩社と書院の深い関係性を物語るとともに、詩会の活動形式がなにゆえ科挙を模倣するのかという疑問にも答えている。入選した彼らは、自ら創作するとともに、自身の学生たちを指導して、このような詩歌コンテストに応募させ、作詩学習の動機を高めたに違いない。

熊海英氏が前掲書のなかですでに指摘している通り、北宋の後期に詩社が出現したことは、文人集会の成員が下層の士大夫階級へと移行したこと、ならびに文学生成の場が中央から地方へ拡散したことを端的に示している。このような成員の身分ならびに地域の拡大は、当然のことながら、結社の通俗化を促すことになる。なぜならば、士大夫の数はいつの時代も一定数しかいないから、詩社の絶対数が増加すれば、参加者全体に占める士大夫の割合がますます軽くなり、それに反して民間人の比率は自ずと高まるからである。

南宋から元にかけて、民間で詩社が多く作られたことは、非士大夫階級の知識人が増加したことと関わりがある。このような知識人が量産されてゆくメカニズムについては、科挙制度と印刷文化の発展にからめて、すでに前述した。とくに、元代の江浙を中心とする南方の知識人は、北方異民族政権の成立によって、士大夫となる方途を失ったので、詩社を作り、己の詩藝を元手として、後進の指導に当たることを、自らの社会的責務と考えたのであろう。

⑵　民間詩社の発展

明代になっても、民間の詩社は発展し、ますます多様化している⑩。明清の交代期、政治的結社の色彩をもつ社が多く現われた。民族間の緊張が緩み、

泰平の世が再び訪れると、詩社の活動も活発になる。清の乾隆年間になると、文化は最盛期を迎え、職業文人も増加したが、詩社は経済的に豊かな江南の諸都市を中心として、地方においてより多く出現している。民間の詩社では、富商（おもに塩商）が主催になるときが多くなってきった[10]。清末民国に至るまで、詩社の数量、規模はさらに発展した。最近出版された『清末民国旧体詩詞結社文献匯編』（南江濤等編、国家図書館、二〇一二年十二月）二六冊はその証明である。その「出版説明」によると、清末民国の詩社は合計すると1000社に達した。その類型も多様化して、「娯楽型」、「徴友型」、「宗風型」、「学術型」、「教学型」があり、なかに「教学型」はすなわち前述した科挙制度を模倣する詩社に似ている類型であった。ようするに、教育と人材育成を目的とする詩社である。この種の詩社は民間詩社の特徴を最も反映したとも言えるだろう。その理由は前に述べたように、士大夫はすでに高度な詩芸を有する者同士であるが、民間に成立した詩社は、詩の品評や詩芸の伝授を、成員を多く集めるための手段として使ったのであろう。この現象は日本でも同じであろうか。以下は江戸時代の詩社をめぐって、比較を行なう。

㈢　江戸時代前～中期の民間詩社

(1) 官儒の詩社

日本では、平安時代や室町時代にも、貴族や禅僧の間で詩社や詩会があったが、江戸時代になると、とりわけ活発になる。江戸の前期においては、とくに儒者の詩社が多い。日本の漢詩文創作史にあって、江戸時代に儒者という職業が成立したことの意義がとりわけ大きいことを、第一章第四節においてすでに論じた。もとより彼らの本務は儒学の考究にあるが、彼らにとっても漢詩文の学習や創作はすべての基礎となるものであった。したがって、儒者のなかには詩社を結び、積極的に詩作に勤しんだ者もいた。

たとえば、伊藤東涯（一六七〇～一七三六、名長胤、字原蔵・源蔵・元蔵）の門弟である北村篤所（一六四七～一七一八、名可昌、字伴平、通称伊兵衛）は、村上冬嶺（一六二四～一七〇五、名友佺、字漫甫）、堀蘭皐（?～?）等と二十一史を毎月六度の会読をするかたわら、しばしば詩会を開いた。会主は順番に担当するが、とくに冬嶺の肝煎りで、詩社の活動は「綿綿たること二十余年」も続いたという[12]。詩会に飲食が必ず有ったことは後世の詩会と同じである。また、東涯の詩集にも、「中春偶書　二月十六日日野公詩社」（『紹述先生文集』巻二二）、「春湖泛舟　十八日詩社」（同上）、「春夜雨　二月十六日日野公詩社」（巻二七）、「追和杜審言

早春遊望韻　戊寅正月六日長尾順哲詩社題」（巻二二）、「秋夕閑望得残字　七月廿四日岡東庵詩社」（巻二四）、「対酌　六日寅所宅詩社題」（巻二七）、「雪晴　臘月六日小倉恭詩社題」（同上）等の作があり、それを裏づけている。元禄年間の前後から、詩社（詩会）が儒者や公家の間で多く開かれていたことが分かる。

(2) 町儒者の詩社　民間における詩社の活動は、町儒者より展開したとも言える。田中桐江（一六六八～一七四二、名は省、字は省吾）の「呉江社」が最も早いといわれる。桐江は、柳沢吉保に仕えたが、荻生徂徠も同時期に吉保の下にあり、深交を結んだ。ところが、桐江は、吉保の姦臣に対して殺傷沙汰におよび、奥州へと逃亡、やがて知人の勧めにより、大坂の池田に隠居した。隠居の地で享保九年（一七二四）に開いたのが「呉江社」である。この詩社の成員は武士や僧侶が多かったという[13]。享保年間は、蘐園学派盛行の時期で、桐江は徂徠門人との密なる関係によって、詩名を大きくした。

この時期の有名な詩社は多く徂徠門下の出身者が設立したのである。服部南郭の門人である安達清河（一七二六～一七九二、名修、字文仲）は「市隠草堂」という詩社を開き、一般の武士や町人を対象に漢詩を教授したことで知られる。宝暦四年（一七五四）頃、龍草廬（一七一四～九三）は、京都において、芥川丹邱（一七一〇～八五、名煥、字彦章）、清田儋叟（一七一九～八五、名絢、字君錦）等と「幽蘭社」を結成した。この社は儒学を軽んじ詩文を重視したため、世人から「遊乱社」と呼ばれた（『先哲叢談後編』巻八「龍草廬」条）。これは社主の龍草廬の性格に由るのである。清田儋叟の次兄である江村北海も、五十代で致仕した後、毎月の十三日に門弟や名士を賜杖堂に集めて詩を作った。参加者は幽蘭社の成員が多い。芥川丹邱、武田梅龍（一七一六～六六、名維岳、字聖謨・士明）、林東溟、村瀬栲亭（一七四四～一八一九、姓は源氏、名之熙、字君績）[14]など。

そのなかで、異質な詩社は混沌社であり、その前身は木村蒹葭堂（一七三六～一八〇二、名孔恭、字世粛、通称坪井屋吉右衛門）が宝暦八年（一七五八）に開いた蒹葭堂会である。。会は一年に小会六回、大会二回を開き、厳格な規則が設けられた[15]。その七年後の明和二年（一七六五）、佐々木魯庵（一七三三～八二、名鳳、字子岳）は、諸友と大坂で「混沌社」を結び、盟主に片山北海（一七二三～九〇、名猷、字孝秩）を推した。北海は農民の出身で、京に出て塾を開いた。尾藤二洲（一七四七～一八一三、名孝肇、字志尹）、頼春水（一七四六～一八一六、名惟寛、字千秋）もその門下である。「混沌社」の同人は三千人を超えたというが、成員は二十代、三十代の青年が多く、商人や医者等の町人が中心であった。詩会の状況については、頼春水の『在津紀事』に詳しい。それを一部紹介すれば、会は毎月の十六日に開

かれ、即席で詩題を分かち韻を探る。机には一枚の紙だけが用意され、草稿を禁じ、腹案をよく練った後、その紙に清書する、という手順を踏む。これは、社主の片山北海の発案になる。また、詩を賦す間に、飲食も豊かに提供された。詩題は、時序晴雨を始め、詠史までを創作したなど[16]、当時の詩社の状況を如実に反映していると言えよう。

以上、概観したように、享保年間から、すでに民間に結社の風が生まれている。そして、中国の詩社が多様性を呈したのに比べ、江戸の民間詩社は主に若手詩人を教育する機能に特化したのである。ここに、伝統的な文人雅集とも大きな違いが生まれている。この現象は日本の儒者（とくに町儒者）の性質によって決定されたのである。つまり、日本の儒者はおもに教授を本職とし、それ以外の、例えば、詩説提唱、政治参与類型の詩社はあまりなかった。とは言え、この時期の詩社成員自体は詩人になる意識が薄く、知識人を大量に育成したが、詩人の道を歩んだ人は少ないと思われる。例えば、混沌社の成員は一般庶民が大きな比重を占めたものの、彼らには詩を以って身を立てる意識が希薄であった。若手の参加者（たとえば、頼春水）も、詩歌創作を儒学の附庸と見なすものが、なお多かった。しかしながら、このように民間の詩社が隆盛したことは、むろん江湖詩社の誕生に多大な影響を及ぼしたものと考えられる。

㈣　江戸後期の民間詩社

—詩仏と化政期の詩社—

この節では、詩仏の時代の詩社を考察する。詩仏の時代にも、詩社は従来以上に多くかつ大規模に開設され、活発な活動を展開していた。詩仏が所属した「江湖詩社」のほかにも、山本北山が「竹堤社」を結成している。また、江湖詩社の社友、柏木如亭が雲室（一七五三～一八二七、名鴻漸、字元儀等）と「小不朽吟社」を結成し[17]、同じく社友である宮沢雲山は下総銚子で「煙波吟社」を設立しており、詩仏と深い関わりのあるものに限ってみても、直ちに四つの事例が挙がる。

江戸後期の詩社は、前・中期のそれと比較すると、活動の持続性、継続性は前より劣らないほか、詩社の詩人育成機能をさらに働かせて、儒者の詩社が門派に制限があるのとは

違って、各詩社の交流を通して、詩人を集団化させた。そして、詩説を提唱する意識が増大し、詩壇に影響を与えた。たとえば、菊池五山の「氷雲社」は、如亭の「小不朽社」を継承し、盟主五山の没後も続いている。『五山堂詩話』巻七に以下のようにいう。

余 近ごろ麻阜に詩社を結び、名づけて氷雲社と曰ふ。①西湖、②琢斎、③桂叢、④春岸、⑤靜菴、⑥三溪等の諸人 並びに其の選を為す。会ごとに一題を詠じ、余をして甲乙を品せしめ、近業を抄して以て清響を伝へんと為す。

余近結詩社於麻阜、名曰氷雲社。西湖、琢斎、桂叢、春岸、靜菴、三溪等諸人、并為其選。毎會詠一題、使余品甲乙、為抄近業以伝清響[18]。

「麻阜」は、おそらく今の港区麻布であろう。「為其選」というのは、参加者の作った詩に優劣をつけ、佳作を選び出す責を負った詩社のリーダーを指すか。各リーダーが推薦する佳作に最終的な序列をつけるのが、社主である菊池五山の役目なのであろう。その選者となったのは、①西湖＝浅野西湖（?～?、名晁敬、字苟）、②琢斎＝藤文卿、③桂叢＝江連堯（字君致）、④春岸＝木聖揆（字若節）、⑤靜菴＝木漢徵（木聖揆の子、字有道）。⑥三溪＝浅野元謙（浅野西湖の子、字公受）。このうち、①②の両氏はかつて「小不朽社」の成員であった。この詩社には、大沼枕山（一八一八～九一、名厚、字子寿）も参加したようである。枕山に「六月廿八日、中五山翁十七周忌辰、雪江会諸友于淺草水寺、次其絶筆韻」（『枕山詩鈔三編』巻下、『詩集日本漢詩』第十七巻）という詩があり、次のようにある。

五門諸彦散　五門の諸彦 散ずるも
賴有我徒同　賴（さいはひ）に我が徒の同にする有り
蓮寺以詩会　蓮寺 詩を以て会し
如參氷社中　氷社の中に参ずるが如し

菊池五山の十七回忌に当たる日に、浅草の寺で五山を偲びつつ、詩会を催している。首句に「五門諸彦」があり、これが五山の門弟の意味であることから考えて、「氷社」は氷雲社を指す可能性が大きい。

江湖詩社の場合もそうである。盟主の市河寛斎が冨山藩の儒官になって、江戸を長期に

留守をするようになってから、社友はそれぞれ独自の詩社を結び詩会を開催した。たとえば、詩仏は柏木如亭とともに「二瘦詩社」を結成した。会費を取らなかったため、参加者は百名に至ったという。詩仏や如亭は参集した大勢の人の力を借りて、清新詩説を喧伝し、格調派に反対した[19]。このように継承関係や人的繋がりの密な詩社が次々作られたことは、文人間のネットワークを緊密にするとともに大いに拡張させた。相異なる詩社の間で人的交流が頻繁に行われ、とくに著名な詩人はあちこちに招かれて出席をした。ある詩社が詩会を開く場合、他社から参加してきた人もいる。そして、詩社の活発化は、若者たちが漢詩を学ぶ機会を提供し、それによって詩人群がますます増大した。

江戸後期の詩社は、機能面において、前・中期の詩社より多様化している。さらに、文人集会という側面ばかりではなく、——本章(二)の(2)および註⑩で分類した明代詩社のように——功利性を強めている。より具体的にいえば、江戸後期の詩社には、以下の四つの特徴が備わっている。

①漢学や漢詩の塾もしくは道場に相当する役割を果たしている。つまり、詩社のリーダーが後進に詩文の作法を指導する任を負っている。

②詩社単独の活動のみならず、複数の詩社間の交流が盛んに行われた結果、文人の交流もより盛んに行われるようになった。

③文人間のネットワークが形成されたことによって、文学市場の情報を交換できるようになり、その結果、文人の作品を速やかに市場で流通させることが可能になった。

④交流が開放的になり、もともと文人圏外にいた商人や農民等に対しても門戸を開放し、時には緊密に連携し合うこともあった。

多くの「名士」が集う文人ネットワーク（複数の詩社の連合）は、もちろん詩壇ないしは社会に多大な影響を与えた。まず、①詩社が後進の育成という教育機能をその中心にすえたことによって、ますます多くの漢詩人が輩出された。そして、②の盛んな相互交流によって、強大な文人ネットワークが形成され、そのネットワークが文人を固定的な支援から脱却させ、自立性を高める結果をもたらした。③の機能によって、詩人はこのネットワークのなかにいれば、十分生活できるようにもなったのである。

要するに、江戸後期の詩社の発展は、従来固まっていた儒者の世界を打破し、詩酒唱和だけではなく、より功利性（詩説提唱、成員交流、名声獲得）を強めたのである。この点から言えば、宋元以来の中国詩社の発展と内容的に一致している。

注釈

①詩社が出現する背景には文人集会が発達したことがある。熊海英氏の『北宋文人集会と詩歌』（中華書局、二〇〇八年五月）には、北宋の文人集会のことが詳しく論じられている。それによると、北宋の文人集会は極めて繁栄していたという、詩社はすなわちその一種であった。

②欧陽光氏の『宋元詩社研究叢稿』（広東高等教育出版社、一九九六年九月）下編「宋元詩社叢考・弁言」には、①中唐・司空曙「題凌雲寺」詩の「不與方袍同結社、下歸塵世竟何如」句、②同上「歳暮懐崔峒耿湋」詩の「洛陽舊社各東西、楚國遊人不相識」句、③晩唐・高駢「途次内黄馬病寄僧舍呈諸友人」詩の「好與高陽結吟社、況無名跡達珠旒」、④同上「寄鄠杜李遂良処士詩」詩の「吟社客歸秦渡晩、醉郷漁去渓陂晴」句、⑤晩唐・温庭筠「重遊東峰密宗禅師精舎」詩の「暫對山松如結社、偶因麋鹿自成群」句を引用して詩社の出現が宋代からではないことを証明した（一五五、一五六頁）が、その中、詩社と確認できるのは③④である。高駢（八二一～八八七、字千里）は南平郡王である高崇文の孫、晩唐の名将でもある。①⑤はともに僧侶と関係がある。

③欧陽光氏の前掲論著は耆英会、尚歯会、真率会を詩社と認めているが、ここではそれらを文人集会と看做し、除外した。

④もちろん、宋初にはすでに詩社がある。例えば、欧陽光氏の前掲論著が挙げた景徳三年（一〇〇六）、丁謂（九六六～一〇三七、字謂之、公言）が作った「西湖結社詩序」（一六二頁）。ほかに、北宋の詩社は、ただ(1)賀鑄（一〇五二～一一二五、字方回）が元豊年間に設立した彭城詩社、(2)鄒浩（一〇六〇～一一一一、字志完）が元祐年間に設立した潁川詩社、(3)徐俯（一〇七五～一一四一、字師川）の豫章詩社、(4)葉夢得（一〇七七～一一四八、字少蘊）が重和、宣和年間に設立した許昌詩社、(5)李若水（一〇九三～一一二七、字清卿）が宣和末年に設立した詩社、(6)欧陽徹（一〇九一～一一二七、字徳明）の詩社、(7)許景衡（一〇七一～一一二七、字少伊）の横塘詩社、(8)僧雲逸が宣和年間に設立した吟梅社だけが挙げられる。(4)以降はすべて北宋末期に設立したので、詩社が大量に現われたは北宋末期からだと考える。

⑤例えば、丁謂の詩社は唐代の詩社と同じ、士大夫と僧侶の結社である。彼自身は官吏であり、その詩社の成員は「貴有位者、聞師之請、愿入者十八九。故三公四輔、宥密禁林、西垣之辭人、東觀之史官、洎臺省素有稱望之士、咸寄詩以為結社之盟文」（前掲『宋元詩社研究叢稿』、一六二頁）。前注に、(1)は賀鑄が徐州に任官するとき、地元の文人と結成した詩社。(2)は鄒浩が潁昌府学教授を任ずるとき成立した詩社。(3)の成立時期ははっき

りわからないが、おそらく徐俯が南昌に教授する時、のちに進士と成った士人との詩社。(4)の成員は多く官員の子弟である。(5)、(7)の詳細はわからないが、李若水が進士に及第する前のことだろう。注意したいのは、(6)の成員の多く青年平民詩人であることである。惜しいのは欧陽徹は国難にあって、政治に参与し、僅か三七歳で殺された。

⑥欧陽光氏前掲論著『宋元詩社研究叢稿』の計算による（三頁）。「與江湖詩派有関的詩社」という節に詳しく列挙した（二五〇頁）。

⑦前掲『宋元詩社研究叢稿』に「關於詩社的活動形式、根據現有的材料、宋代詩社大都離不開分韻賦詩、次韻唱和的路子、具有相當大的隨機性。而在這方面、元初詩社卻要正規得多。首先、元初的詩社活動要定出一個詩題……中略……其次、要聘請名士碩儒充任考官、擔任評裁詩卷的工作。……中略……第三、詩稿完成后、考官將從中選出優胜者、确定名次、并寫出評語。……中略……第四、有些詩社還要根據名次對優秀者給予物質奬賞」（五三頁）とある。

⑧ほかに、清代の銭謙益（一五八二～一六六四、字受之）は「月泉吟社仿鎖院試士之法」（『牧斎初学集』巻八四「記月泉吟社」、銭仲聯標校、上海古籍出版社、一九八五年九月、一七六三頁）と指摘した。

⑨「会課」の形式は北宋末期からすでにあった。例えば、『東莱呂紫微師友雑誌』（『叢書集成初編』本）に「崇寧初、予家宿州、汪信民教授……中略……三人（汪革、黎确、饒節）者、嘗與予及亡弟揆中會課、毎旬作雑文一篇、四六表一篇、古律詩一篇、旬中會課、不如期者罰錢二百」とがある。「課社」は科挙試験の準備のために集められた集団であり、詩だけを作るわけではなく、文も作る。前掲『宋元詩社研究叢稿』に「課会」や「課社」のことについても紹介があった。

⑩郭紹虞氏は、「明代文人集団」（『照隅室古典文学論集』所収、上海古籍出版社、一九八三年一〇月）という論文のなかで、明代の詩社を三つの時期に大別し、その特徴を述べている。かつまた、その三期を詩社の三つの類型として帰納している。すなわち、第一、「詩酒唱和の詩社」（趣味型／洪武から景泰まで）、第二、「詩説提唱の詩社」（主張型／天順から万暦まで）、第三、「政治関連の詩社」（政治型／天啓から崇禎まで）がそれである。

⑪袁枚（一七一六～九七、字子才）の『隨園詩話』巻四に「昇平日久、海内殷富。商人士大夫、慕古人顧阿瑛、徐良夫之風、蓄積書史、廣開壇坫。揚州有馬氏秋玉之玲瓏山館、天津有査氏心穀之水西庄、杭州有趙氏公千之小山堂、呉氏尺鳧之瓶花斎、名流宴詠、殆無

虚日……中略……馬氏玲瓏山館、一時名士、如厲太鴻、陳授衣、汪玉樞、閩蓮峰諸人、爭為詩會、分詠一題、哀然成集」（民国・雷瑨註『箋註隨園詩話』、鼎文書局、一九七四年一〇月、一二八、一二九頁）とある。玲瓏山館はすなわち本論第二章に言及した塩商の馬曰琯、馬曰璐兄弟の蔵書楼である。

⑫『先遊伝』（『日本儒林叢書』第一四巻、鳳出版、一九七一年十一月）「北村可昌」の条に「北村可昌、字伊兵衛。號篤所。江州江部荘之土豪。夙好讀書。遊京周旋於諸儒之間。後師事先子、草定古義、多其筆授、推為高弟、博物洽聞、有記覧之名、人以為書淫。州郡屢有徴聘不偶。在京四十餘年、搢紳之間、多所親遇、近道諸鎮、或被禮待。晩歳與冬嶺・蘭皐等諸人、會集閲史、青衿之士、多所造就、談吐爽快、議論風生、語朝儀知世變、聽者忘倦。社中會集、必虚左迎之、至曰無車公不樂（後略）」（九頁）。「村上友佺」の条に「晩與篤所、蘭皐諸人、會集閲二十一史、逐月六次、不避寒暑伏臈、中歳後識先子、時時折柬相邀（後略）」（四頁）。『日本詩史』（『新日本古典文学大系』65、一九九一年八月）巻三、「当時の諸儒、二十一史を会読す。会月ごとに数次、又詩社を結ぶ。並びに会主を輪す。必ず酒食有り。期に臨みて会主或いは他故有れば、冬嶺必ず代りて主と為る、故を以て社会綿綿たること二十有餘年。後進の作る所、時に佳句有れば、則ち撃節嘆称し、吟誦数回す。一時藝苑これに頼りて気を吐く。その自運も亦た一時に矯矯たり」（九二頁、九三頁）。

⑬吉田鋭雄氏の『田中桐江伝』（池田史談会、一九二三年一月）には「最初は社友二十余名なりしが、後には次第に増して、其の名を列するもの、士人五十名、緇徒五十二名、合せて百二人を算ふるに至れり」とある（三〇頁）。

⑭金竜道人敬雄の「北海詩鈔序」に「及青山侯、移封郡上、君錫亦辭職而去、其後君錫與余相識于城南、與謀倡詩社、則芥元章・武聖謨輩應之、尋復林周父・源之熙、暨一時知名、濟濟乎來盟矣。於是良會無虚月、雅談披幽襟、則洛陽詩社、惟此時為盛矣」（『北海先生詩鈔』、『詩集日本漢詩』第五巻、富士川英郎等編、汲古書院、一九八五年七月、三一五、三一六頁）とある。

⑮野間光辰「蒹葭堂会始末」（『近世大坂芸文叢談』に収録、大坂芸文会、一九七三年三月）を参照。

⑯『在津紀事』（『新日本古典文学大系』97、岩波書店、二〇〇〇年五月）に「混沌詩社は、毎月既望に諸子会集し、題を分かち韻を探り、各賦し、詩成るや、几上の一紙を取りこれを書す。別に稿を立てず。蓋し腹稿すでに熟すればなり。故に書するに臨みて躊躇する

有ること無く、故紙の狼藉する有ること無し」（一九一頁）、「社友相い会するに交際甚だ昵なり。浪華の俗、酒饌極めて豊かにして、韻を拈じ、詩を賦すに杯盤交錯の間においてす」、「（河野）恕斎客を好み、常に留め酌して詩を賦す。一日衆に謂つて曰く、時序晴雨の詞、己に厭ふべきを覚ゆ。請ふ、国史を分詠せば何如と。皆曰く、善しと（中略）爾後社会すれば、輒ちこれを以て課と為し、体は七律に限る。数十首に至り、裒然冊を為す」（一九六頁）。

⑰『五山堂詩話』（『詞華集日本漢詩』第二巻、冨士川英郎等編、一九八三年九月）巻五に「雲室昔日唱小不朽社、當時訂盟者、桐君蘭石、柏如亭、平梅溪、源臺山、邊赤水、高西巷、田好古等八九人、輪流為主、盛作詩畫之會。後如亭去都、梅溪下世、此會中絶、二三年來、雲室繼而新之、新參者、西圭齋、野西湖、藤琢齋、服古顛、藤三林、而臺山、西巷、巋然尚在、數子皆累於畫、吟詩者、惟臺山、西巷、琢齋三人耳」（四一三頁）とある。

⑱前掲『五山堂詩話』、四四〇頁。

⑲『詩聖堂詩話』（『日本詩話叢書』第三巻、鳳出版、一九七二年六月）に「余嘗與舒亭（柏木如亭）開詩社於東江精舍。號曰二瘦詩社。來與盟者百餘人。北山先生作之引。固不受一星之銀、半尺之布。痛斥世之為李王者。於是格調之徒、豬怒虎視。議論訩々不止焉。然由此得人亦不少。世之刺我非我、於吾乎何有」（四五四頁）とある。

第七章　化政期の詩会と出版

㈠　はじめに

前章では江戸時代の民間詩社を概括的に論じた、本章と次章では、江戸時代の具体的な集団活動――詩会や書画会――について論じる。これらは、第二章で論じた、職業詩人の具体的な生活手段でもある。

詩会と書画会はともに文人集会ではあるが、明確な相違がある。前者は主として成員のみによって行われる通常の活動であり、詩を創作、鑑賞、品評することが活動の中心である。後者は対外的な集会であり、臨時のイベント活動である。「展覧会」と「席書」「席画会」とに細分され、書画や詩を中心とするが、和歌や俳諧等、日本の文藝とも連繋していた。各種文藝の魅力を宣伝して愛好者を増やすことが主たる目的であったが、同時に作品の即売も行い、経済的な目的も潜在させていた。詩会の歴史は奈良平安にまで遡るが、書画会は江戸時代になってから出現した。

書画会は衆目の関心を惹くためのイベントであり、多額の金銭が動いたであろうから、職業文人にとってもハレの舞台であった。一方、詩会は長い伝統と歴史をもつが、江戸後期のそれは、従前の詩会と性質がかなり変化し、職業詩人にとっては経常的な収入を得るための手段・方法となっていた。よって、両者はいずれも近世における文芸の商業化・商品化を端的に表現している。

詩会は、詩社のそれと一般のそれに分かれる。前者は定期的、後者は不定期的という差がある。江戸後期の詩会は、後者がますます増加し、ついに定期的になっていったが、前者との区別は、詩社成員に限らず、参加者の拡大を目標としていたことである。それに加えて、出版事業が関わっていることも、江戸後期の詩会の大きな特徴である。この点は中国の詩社や詩会には見られないが、五山時代からすでに体制が形成されたと考える。

(二)　五山禅林の詩会との連関

詩会はそもそも中国の文人唱和より発生した形式である。漢詩とともに日本に伝来し、奈良時代には、早くも「文会」が催された。平安時代には、詩題に「詩宴」、「詩会」等の語が見える[1]が、関連資料が少なくないため、その実態は詳しくは分からない。

しかし、下って室町時代になると、五山禅林において、規約の完備された詩会が頻繁に行われるようになった。朝倉尚氏によれば、「詩会は禅林の中で注目された存在であり、詩会に参加することは衆僧より羨望視されていた」(同氏『禅林の文学　詩会とその周辺』八頁、清文堂出版、二〇〇四年五月)。江戸時代の初期に、徳川家康によって儒学の必要性が提唱され、林羅山が招かれたことによって、儒学や漢詩文の社会的重要性が一気に高まったことを想起すれば、京都の五山文化と江戸初期の漢学の繋がりは緊密である。なぜならば、その象徴的人物、林羅山は幼少期に建仁寺で学び五山文化を体現した人物だからである。実際に、江戸前期の漢詩受容は、五山の価値観をほぼそのまま受け継ぎ、詩人ならば北宋の蘇東坡や黄庭堅、選集(作詩教本)ならば『三体詩』や『唐宋千家聯珠詩格』等の書が流行している。よって、江戸時代の詩会に直接の影響を与えた、室町時代五山の詩会を検討することは不可欠のプロセスとなろう。

その重要な先行研究に、朝倉尚氏の前掲『禅林の文学　詩会とその周辺』がある。この著において、朝倉氏は、五山禅僧の間で行なわれた詩会の実態を一つ一つ詳しく分析し、その基本的な特徴を抽出し、以下の四点に整理している。

❶ 五山において詩会が隆盛した一因は有力保護者の庇護のもとに塔頭・寮舎が発達したからである。

❷ 「内衆の詩会」(塔頭や寮舎の内々の衆により催される会)と「友社の詩会」(他寺、他院の衆中より懇意な文筆僧を招請して催す会)とに分かれる。

❸ 「内衆の詩会」を行なう順序は、①日時・場所等の決定〜②請題(詩題の決定)〜③作詩〜④評詩〜⑤余興である。

❹ 詩会には主催者、世話人が必要である。

この指摘に基づき、江戸時代の詩会を考察すると、江戸時代の詩会では、❶の性質がすで

に失われたが、❷、❸、❹の形跡は、なおも残存している。

江戸時代の詩会は主に詩社の成員により行なわれたが[2]、他社と交流する詩会もあった。これは、❷にいう「内衆の詩会」と「友社の詩会」の関係に似ている。また、詩会の次第もほとんど❸と変わらない。とくに⑤の余興は、江戸の詩会では次第に贅沢化する傾向があり、飲食は不可欠であった。

津坂東陽（一七五八～一八二五、名孝綽、字君裕、通称常之進）の「樂群社會課序」（『東陽先生詩文集』、国会図書館蔵写本）は、江戸後期の詩会の詳細な次第を今日に伝える貴重な資料である。右の五山禅林の詩会とそれを比較してみると、❸の順番とほぼ対応している、といってよい。

① 凡そ会は迭（たが）ひに賓主を為し、月ごとに闕く無かれ。月に直（あ）たりて事有れば、次と互ひに代はる。日を卜するに宜しく上旬に在るべし。或ひは故有りて果たさざるも、延ばして月末に至るべからざるなり。会に赴くに期に後るること勿かれ。自ら疾病するに非ざれば、風雨晦（つごもり）の如しと雖も、未だ嘗て約に負かず。若し事の累する所と為れば、躱避する能はず、専ら宿題の什を賔らしめ、其の已むを得ざるの状を陳謝し、敢へて虚托して嬾惰を偸まず。

凡會迭為賓主、比月無闕、直月有事、與次互代。卜日宜在上旬、或有故不果、不可延至月末也。赴會勿後期、自非疾病、雖風雨如晦、未嘗負約。若為事所累、不能躱避、專使賔宿題之什、陳謝其不得已之狀、不敢虚托偸嬾惰焉。

② 席上題を設け韻を分つに、須らく典雅にして賦し易かるべし。題を奇にして技を角（くら）べ、韻を険しくして才を鬥（たたか）はせば、恐らく人を窘（くる）しめ物に傲（おご）るの弊を長くし、温柔敦厚の教へに負かんなり。

席上設題分韻、須典雅易賦、奇題角技、險韻鬥才、恐長窘人傲物之弊、負溫柔敦厚之教矣。

③ 饌は餚菜の数を具ふるも、謹んで時制の倹を守れ。然るに欵待の厚は、固より宜しく敬を尽くすべし。要は当に大夫の体を失する無かるべきのみにして、寒陋なる書生の態に傚ふべけんや。鄙語に言有りて曰く、親戚は哭に聚まり、他人は食を以て聚まり、と。蓋し人の大欲の存する所、情義の合する所ならん。其の詩を吟ずる

に方りては、浅酌して興を助け、固く閑話を禁じ、互ひに相ひ商議して以て之れを裨佐す。

饌具餚菜之數、謹守時制之儉、然欵待之厚、固宜盡敬、要當無失大夫之體而已、可傚寒陋書生之態乎。鄙語有言曰：親戚聚於哭、他人聚以食、蓋人之大欲所存、情義之所合也。方其吟詩、淺酌助興、固禁閒話、互相商議以裨佐之。

④　闔座の篇 成り、推敲の論 定まれば、各おの謹んで淨書し、諸れを主人に納る。奉ずるに浅底の小方匣を以てす。吟箋の方幅に称ふ者、遞（たが）ひに受けて之れを読む。座頭 另に矮几を置き、宿題を併せて焉に堆放す。

闔座篇成、推敲論定、各謹淨書、納諸主人、奉以淺底小方匣。稱吟箋方幅者、遞受而讀之。座頭另置矮几、併宿題堆放焉。

⑤　是に於いて劇談縱飲し、罄余の歓を以て、或ひは書画を試し、或ひは管籥を弄し、唯だ興の適ふ所なり。但だ話 惡喙に渉り、醉ひて泥の如きに至るは、殊に慎しむべきのみ。若し席上 吟 未だ円かならざれば、日を限って追償し、令に違ひ期を失する者 礼を具へて以て当に罰すべし。朱晦翁の巣居吟社が故事に倣ふと云ふ。

於是劇談縱飲、以罄餘歡、或試書畫、或弄管籥、唯興之所適、但話涉惡喙、醉至如泥、殊可慎耳。若席上吟未圓、限日追償、違令失期者具禮以當罰、倣朱晦翁巣居吟社故事云。

右の文には、詩会の細かな規則が説明されている。①社員が月々に順番で会を主催者し、もしも当番の月に用事があれば、その翌月の当番と交替する。会の開催日は上旬がよく、月末まで延期するのは避けるべき旨も明記されている。また、会に出席できない場合は、宿題として詩を提出する。次に、②詩題や韻の選定について説明している。即席で題を決め、韻を分けることを記し、なるべく典雅で平易なものに決めるべきことを強調している。ただし、詩社のなかには、即席ではなく事前に課題表を出す場合もあった。この点については後述する。つづいて、③詩会に供される飲食について記している。要するに、飲食は欠かせないものであること、また贅沢である必要はないが、貧乏な飲食はいけないと記している。これは、毎月の当番の心得であろう。詩会の具体的な手順と流儀については、④で細かく規定されている。詩が完成したら、それぞれ清書して規定の小箱に入れて社主に提出をする、とある。「稱吟箋方幅者」とは、模範的な作品のことであろうか。⑤は詩会

終了後の懇談をいう。また、詩会で詩を完成できなかった場合の規約も記されている。

津坂東陽の言によると、この楽群社という詩社に参加した人は「巨室子弟」、すなわち豪農や豪商の子弟であったようである。酒や肴の準備は富裕の家にとっては、たいした負担にはならなかったであろうが、普通の家庭にはやはり大きな負担となった。

詩仏に師事した、幕末の菊池海荘（一七九九～一八八一、名保定、字士固、通称孫左衛門・孫輔）が郷里（和歌山県有田郡湯浅）に開いた「古碧吟社」では、そういう窮状にしばしば陥ったようである。

余の同社　凡そ十余人なり。一月の中　会吟すること、大抵三四回なり。次を以て遞ひに其の家に集ふ。而して茶菓酒食の需め　頗る慂ふ。主家の僕婢　尽く顰顙の色有り。社中の幹事者　宮橘、村垣、白沙等　之れを病み、即ち余と謀り、一舎を賃りて以て会吟所と作さんと欲す。適たま浅浦の南　海に濱するの地に酒楼の眺望に宜しき者有り。遂に相ひ與に醵金し、以て其の主翁に与へて焉れを僦ふ。

余同社凡十餘人矣、一月之中會吟者、大抵三四回矣、以次遞集于其家、而茶菓酒食之需頗慂、主家僕婢盡有顰顙之色。社中幹事者宮橘村垣白沙等病之、即與余謀、欲賃一舎以作會吟所。適淺浦之南濱海之地有酒樓宜眺望者、遂相與醵金、以與其主翁而僦焉。（『秀粲樓初集』巻一、国会図書館蔵文政十二年刊本）

五山禅林の詩会における❹世話人が、江戸時代の詩会にも存在したか否かは未だ確証がないが、右の文にいう「幹事者」は、おそらくそれに相当する人であろう。

以上のように、江戸時代の詩会の形態は、五山禅僧が行なった詩会と継承関係にある。もちろん、会の主体や会の参加者の身分等々、五山禅林の詩会とは異同も小さくないが、規約や次第等の点において相共通する部分が多い。従前の研究では、両者の繋がりがあまり言及されていなかったから、この節においてこの点を改めて強調しておく。

㈢　大窪詩仏と化政期の詩会

詩仏は自ら詩社を開く前に、すでに詩会の参加体験を豊富にもっていた。『詩聖堂詩集初編』所収の、詩会において作られた詩を列挙すると、以下のようになる。

○戸川南涯の天池楼……「秋盡以秋字爲韻　天池樓席上作」（巻八）
「天池樓席上送林積小歸房州」（巻八）
「天池樓會散歸途舟中矚目」（巻八）
「木犀天池樓席上作」（巻九）
「江村晩望得東韻天池樓席上作」（巻十）
○菊池五山の五山堂……「山王會日集五山堂」＊（巻八）
○大田南畝の遷喬楼……「雪後鶯谷小集得庚韻」（巻十）
＊詩に「老人不赴山王會、來訂五山詩社期」とある

このほか、詩題等に詩会の作であることを明示していなくても、関連資料から詩会の席上の作であることが分かるものもある。たとえば、文化三年（一八〇八）の春、幕臣牧野竹所が主宰する竹所吟社で、梅花を題として吟会が催された。各々梅花十首の七言絶句を作り、題は「梅蕾」、「未開梅」、「乍開梅」、「半開梅」、「全開梅」、「未謝梅」、「梅實」であった。会の参加者は九名おり[3]、この九十首の詩は『梅花十詠』という一書に収められている。参会者九名の生年と身分を以下に掲げ[4]、詩仏が参加した文化年間詩会の様相の一端を明かにしたい。

主催者の牧野竹所（?～一八三七、幕府の高級官僚で対馬守）は、柏木如亭の門弟でありながら、旗本の身分である。そのせいか、参加者は官吏が多く、一般の詩会よりも格が高い。まずは幕府の役人、中田粲堂（一七七一～一八三二、幕府の与力）と野沢酔石（一七八一～一八四二、幕府昌平坂学問所の勤番）がいる。次に諸藩の重臣、蠣崎波響（一七六四～一八二六、松前藩家老）と海野蠖斎（一七四八～一八三三、備中庭瀬藩江戸家老）と谷麓谷（一七二九～一八〇九、田安家の臣）の三人がいる。有名な詩人に、山地蕉窓（一七七七～一八四七、亀田鵬斎の門人、詩人）、大窪詩仏（一七六七～一八三七、詩人）がいる。残りの一人は、中井董堂（一七五八-一八二二）で、彼は商家の番頭を勤めていたが、第五章で言及したように、有名な戯作者でもあった。

文化三年（一八〇八）の秋、詩仏は神田お玉が池の畔に新居を築き、杜甫の像を祀って詩聖堂を開いた。文化五、六年、梁川星巌もこの詩聖堂にて開かれた詩会に参加している。その『星巌集』巻一「叫天児」の題下に「詩聖堂課題」という自注がある。詩仏の『詩聖堂詩集初編』巻九にも、同じ場で作ったと考えられる詩が二首あるが、詩題は「告天子」に作る。

詩聖堂の文政年間における盛況ぶりは、清水礫洲（一七九九～一八五九、名正巡、字士遠）の『ありやなしや』（『続日本随筆大成』第八巻、吉川弘文館、一九八〇年八月）に詳しく描写されている。礫洲は若い頃に市河米庵について書を学んだ。その父寛斎は隠居後、米庵の塾生や門人に『三家妙絶』、『放翁詩抄』等の講義を行ったが、礫洲はその講筵に連なり作詩を学びたくなったが、あいにく程なく寛斎が亡くなった（文政三年〔一八二〇〕七月十日）。そこで、礫洲は石田醒斎の紹介によって詩仏に師事、かくて詩仏の詩聖堂における生活ならびに詩会をわが目で実見し、それを自著の随筆のなかに記録したのである。次に、『ありやなしや』の原文を交えながら、その盛況を窺いたい。

詩仏の詩会は毎月の七日に行われた。詩会には、岡本花亭（一七六七～一八五〇、名成、字子省、通称忠次郎）、大沼竹渓（?～?、大沼枕山の父、通称次右衛門）、菊池五山、朝川善庵（一七八一～一八四九、名鼎、字五鼎）、宮沢雲山（一七八一～一八五二、名雉、字神遊）、館柳湾（一七六二～一八四四、名機、字枢卿、通称雄次郎）、塩田随斎（一七九八～一八四五、名華、字士蕚、通称又之丞）をはじめとする大御所が来会した。そのほか不破右門（?～?、字は子温、白川の行人）、山地蕉窓（一七七七～一八四七、名寛、正誠、字孟教、通称武一郎）、池守秋水（一七七八～一八四八、名は龍、字は潜夫。亀田鵬斎の門人）、五十嵐竹沙（一七七四～一八四四、名は主膳、字は主宝）等も常連である。

> ゆゑに書畫を乞者、此日を卜して諸先生の揮毫を乞者多し。故に畫人竹谷〔頭註〕依田竹谷。名瑾。字子長。武清〔頭註〕喜多武清。名字子子慎。号可庵。並為文晁弟子。等も出席せしゆゑ、田舎漢等は先生のもとに来り。束脩を行へば諸先生のをも求むるにたよりよければ、加州などよりは裹糧して先生の家に寓宿するものたゆることなし。

書画の名家が詩聖堂の詩会に多く参加したので、彼らの書画を所望する者たちも、詩会開催日に合わせて、多く参集したという。また、詩仏の書画も評判が高かったので、それを目当てに地方から上京し、詩仏に入門する者も後を絶たなかった、という。

また、前節に記したように、詩会の後に供される料理のことも記録されている。浅草山谷堀の料亭八百善の料理が供された、という。

会日の供給などは八百善の料理にて盛大 目を驚かす計(ばかり)なりき。詩仏は諸侯へ席書にも被招(まねかれ)、豪富の商賈などへも請待せられ、家にあれば屏風其外嘱托の書画を揮寫し、夕方よりは客に対して一酌するに、飲倒しに來る俗物も夥敷(おびただし)き事なれ共、先生 露ほども意に挾むことなし。

貴人や富豪から引く手あまたで招かれたほか、家に在るときも依頼された屏風絵や数々の書画の製作に追われ、来客も後を絶たなかった、当時の詩仏の羽振りの良さが活写されている。

ここには、儒者たちの目指す文人の品格はかけらも見られない。芸能や料亭等、庶民の嗜好に寄りそう有様は、まさに職業文人の面目躍如たるところである。

ちなみに、ひとり詩仏のみならず、江戸の文人の多くが独自に詩会を開いている。清水礫洲が弟子入りした市河米庵の会日は、四九の日ときまっており、門人百人が出席した、という。

ここで注意すべきは、書画を乞う人が「日を卜して来」た、という事実である。それは、事前に会日を知っていたことを意味している。では、その情報を彼らはどこから手に入れたのであろうか。もちろん、人づてにその情報を入手していた可能性もあるが、それ以外の可能性を示唆する文献が今日に伝わっている。それは、「人名録」である。次節において、江戸時代の著名人ガイド「人名録」について採り上げる。

㈣　化政期の詩会と出版（上）

―江戸時代の「人名録」―

詩会の情報が広範囲に人に知られ伝播した背景には、当時の印刷の発達が大いに寄与している。すでに江戸で生活して久しい人ならばともかく、地方から詩会を目当てにはるば

る上京してきた者たちにとって、詩会の開催場所、開催期日等の情報を的確に入手することは決して容易いことではない。彼らに絶大なる利便を与えたのが、印刷された「人名録」であった。

(1) 人名録一覧

江戸の中期から、すでに「人名録」に類する書籍が多数出現している。たとえば、『江戸買物独案内』（中川芳山堂編、近世風俗研究会、一九五八年）のように、ガイドブックの類であり、とくに三都へ遊学する人のために編纂された。これら書籍の主な刊本を、森銑三・中島理寿の両氏が『近世人名録集成』五巻（勉誠社、一九七六年二月～一九七八年三月）に収録して出版している。この叢書は地域と分野に区分して六四種の人名録を収録している。いま本論に関係ない、第二巻の『江都諸名家墓所一覧』、『現存雷名江戸文人寿命附初編・二編』と、第三巻の『俳林小伝』、『名家別号箋』、『国学人物志』、『良医名鑑』、『日本詩選作者姓名』、『日本詩選続編作者姓名』、『大東詩集詩人姓名』、『鰒玉集作者姓名録』、『誹家大系図』、『俳林小伝』、『狂歌知足振』、『狂歌道の栞』と第四巻の書画関係の人名録を除いて、それらを時間順に再配列すると、以下のようになる。

書名	刊行年	編者	収録
『平安人物志初版』	明和五年（一七六八）	弄翰子	第一巻
『古今諸家人物志』	明和六年（一七六九）	奥村意語	第三巻
『熙朝儒林姓名録』	明和六年（一七六九）	永田観鶩	第三巻
『平安人物志二版』	安永四年（一七七五）	弄翰子	第一巻
『浪華郷友録初版』	安永四年（一七七五）	曾谷学川	第一巻
『張城人物誌』	安永七年（一七七八）	僧梵韶	第二巻
『平安人物志三版』	天明二年（一七八二）	弄翰子	第一巻
『浪華郷友録二版』	寛政二年（一七九〇）	曾谷学川	第一巻
『諸家人物誌』	寛政四年（一七九二）	池永秦良	第三巻
『東海道人物志』	享和三年（一八〇三）	大須賀陶山	第二巻
『平安人物志四版』	文化十年（一八一三）	弄翰子	第一巻
⊙『江戸当時諸家人名録』	文化十二年（一八一五）	扇面亭	第二巻
『江戸当時諸家人名録二編』	文政元年（一八一八）	扇面亭	第二巻
『平安人物志五版』	文政五年（一八二二）	弄翰子	第一巻

『続浪華郷友録初版』	文政六年（一八二三）	曾谷学川	第一巻
『浪華金襴集』	文政六年（一八二三）	曾谷学川	第一巻
『新刻浪華人物誌』	文政七年（一八二四）	曾谷学川	第一巻
『上野下野武蔵下総当時諸家人名録』	文政八年（一八二五）	隣柳斎山楽	第二巻
『信上諸家人名録』	文政十年（一八二七）	未詳	第二巻
『平安人物志六版』	文政十三年（一八三〇）	弄翰子	第一巻
『江戸現存名家一覧』	天保初年？	藤田万樹	第二巻
『海内人物志』	天保初年？	狂庵主人	第二巻
『続諸家人物誌』	天保三年（一八三二）	青柳文蔵	第三巻
『伊勢人物志』	天保五年（一八三四）	深野公忠	第二巻
『三野人物考』	天保六年（一八三五）	河瀬友山	第二巻
⊙『江戸現在広益諸家人名録初編』天保七年（一八三六）		未詳	第二巻
『続浪華郷友録二版』	天保八年（一八三七）	曾谷学川	第一巻
『平安人物志七版』	天保九年（一八三八）	弄翰子	第一巻
『江戸現在広益諸家人名録二編』天保十三年（一八四二）		未詳	第二巻
『越後人物志』	弘化二年（一八四五）	吉田楳斎	第二巻
『新撰浪華名流記』	弘化二年（一八四五）	三宅子幹	第一巻
『浪花当時人名録』	嘉永元年（一八四八）	拙亭文夫	第一巻
『江戸文人藝園一覧』	嘉永三年（一八五〇）	畑銀鶏	第二巻
『左海人名録』	嘉永四年（一八五一）	九宝閑民	第二巻
『平安人物志八版』	嘉永五年（一八五二）	弄翰子	第一巻
『浪華名流記』	安政三年（一八五六）	三宅子幹	第一巻
『安巳新撰文苑人名録』	安政四年（一八五七）	松靄道人	第三巻
『安政文雅人名録』	安政七年（一八六〇）	細谷義兵衛	第二巻
『江戸現在広益諸家人名録』文久元年（一八六一）		未詳	第二巻
『文久文雅人名録』	文久三年（一八六三）	細谷義兵衛	第二巻
『平安人物志九版』	慶応三年（一八六七）	弄翰子	第一巻

＊『平安人物志』、『浪華郷友録』が重出するが、内容を更新しているので、別本と見なす。

＊⊙号を付したものは、詩仏の名が見える書である。

(2) 江戸以外の人名録

京都は、最も早く人名録を出した地域である。『平安人物志』の分類から見ると、明和五年と安永四年刊行の初版と二版における門類は、「学者」（初版では、この類の注に儒士、医家、商賈、浮屠とある）、「書家」、「画家」、「篆刻者」、「卜筮者」、「相者」である。天明二年の三版では「暦算」と「本草」が新たに加わっている。文化十年の四版では分類に大きな改変があり、凡例で次のように説明している。

旧刻　専ら知ある文雅の士が姓名・字号・居処・俗称等を以て主と為せば、今も亦た之れに従ふ。一二の技藝に旁ねく及ぶと雖も、然れども武技俗藝の類の若きは、則ち之れを載せず。蓋し文を以て主と為すなり。

舊刻専以知文雅之士姓名字號居處俗稱等為主、今亦從之。雖旁及一二技藝、然若武技俗藝之類、則不載之、蓋以文為主也。

このように、新たに一二の技藝を加えたことを明記している。この四版で分類された門類は「儒家」、「詩」、「韻」、「書」、「篆刻」、「画」、「和学」、「衣」（目録による）、「歌」、「連」（目録による）、「書」、「鑑書」（目録による）、「画」、「医家」、「物産」、「数」、「天文暦算」、「易」、「観相」、「好事」、「喝蘭」、「奇工」、「女流」、「緇流」である。新たに加わったのは、「詩」、「韻」、「和学」、「歌」、「物産」、「好事」、「喝蘭」、「奇工」、「女流」の九門である。これは、文化年間に、文藝や技術全般における職業の分類が細分されたことを反映している。

「詩」の門類には、七人（杉岡道啓、梅辻春樵、石川竹厓、武元登登庵、畑橘洲、澤村蘭斎、瀬尾文）しか記されていないが、凡例に、「儒家は率ね皆な詩を善くす、故に詩に於いて再びは出さず（再出焉儒家率皆善詩、故不於詩再出焉）」と明記されており、「儒家」が除かれている。したがって、この七名は専業詩人ということになろう。五版（文政五年）と六版（文政十三年）の分類はさらに細分され、「詩」類にはそれぞれ二十七人が収録されている[5]が、四版とは異なり、詩を善くする儒家が再出と注記されて収められている。再出の儒家を除けば、詩人は十六人である[6]。さらに、僧を除くと、十一人である（六版の「追加」に神田柳渓を増加した）。ちなみに、七版（天保九年）、八版（嘉永五年）、九版（慶応三年）になると、詩人の数が二十人から十八人にまで減少してゆく。

大坂の『浪華郷友録』は、初版が安永四年の刊で、五門に分類されている。「儒家」、「聞人」、「書家」、「画家」、「作印家」である。寛政二年の二版は九門（「儒家」、「医家」、「緇流」、「聞人」、「天学家」、「物産家」、「書家」、「画家」、「印鐫家」）に分けている。文政六年の『続浪華郷友録初版』と『浪華金襴集』は、人名の以呂波順で編集したもの。ただし、詩をよくする人は見えない。

文政七年の『新刻浪華人物誌』の編者は不明であるが、二版の曾谷学川（一七三八～九七、名之唯、字応聖、通称忠助）序文を、その執筆時期を削ってそのまま載せているところを見ると、おそらく書肆の編であろう。この書の凡例では、「儒家」の下に「文士・詩人 此の門に属す（文士詩人屬此門）」と注している。二版にも同様の注があるが、二版では「下帷の授徒、或ひは道学、或ひは文士なる者を論ずる無く、皆な此の部に属す（無論下帷授徒、或道學、或文士者、皆屬此部）」と注し、「詩人」の名が見えない。よって、寛政二年（一七九〇）から文政七年（一八二四）の三十数年の間に、詩人の存在を無視することができなくなったのであろう。天保八年の『続浪華郷友録二版』は分類編集であるが、簡略なものである。儒者も十三人しか記していない。おそらく、書肆の所業であろう。弘化二年の『新撰浪華名流記』では、凡例に「儒家の詩文或は書の能は常に分なれは別に之を不挙なり」とか、「医家に詩文書画を兼成すと雖ども別に之を不載は其術を重すれはなり」と記されている。儒家や医者は詩文、書画等を善くするが、彼らの本分ではないので掲載しないと述べている。弘化二年（一八四五）の時点で、大坂にはまだ専業詩人と呼べる人がほとんどいなかったのかもしれない。嘉永元年（一八四八）の『浪花当時人名録』では、「詩家」の門類を設けているが、二人の儒家（広瀬謙吉、篠崎小竹）を除くと、残るは香川琴橋（一七九四～一八四九）一人だけで、寥寥たる数である。

享和三年（一八〇三）、東海道の各宿場の文人を収録した『東海道人物志』が出版された。そのなかには、菊池五山（四日市駅）の名も見える[7]。肩書は「漢学、詩、書」と記されている。五山の名が記されているところを見ると、一時的な仮寓者も積極的に収録されたことが分かる。ここに収録された大半の人が、三都で技を磨き、諸藩に仕えたのち、三都へは戻らず、東海道沿線の各地に居住した人たちである[8]。よって、彼らは三都が育んだ文人といってもいいだろう。この人名録には、すでに「詩人」の門類が設けられているので、この時期には、すでに専業詩人が増加してきていることを示している[9]。

(3) 江戸の人名録

江戸の人名録の編纂刊行は、京都と大坂より、だいぶ遅れるが、最初から詩文を重視し

ている。

文化十二年（一八一五）の『江戸当時諸家人名録』は、人名の以呂波による順序で配列し、氏名の傍らに職種を明示している。詩に関わる人物を列挙すると、以下のようになる。

市河寛斎（学者詩人）、服部元立（学者詩）、✪服部元雅（詩）、✪服部元夫（詩）、西川国華（業医詩人）、✪藤堂竜山（詩）、仙桃窟（詩文書画）、✪大窪詩仏（詩書画家）、亀田鵬斎（学者詩書画）、川口緑野（国学漢学詩文）、✪柏木如亭（詩書画）、✪谷麓谷（詩人）、✪館柳湾（詩人）、谷斗南（業医詩）、長瀬東山（業医詩書）、✪海野蠖斎（詩書画）、✪海野柯亭（詩書画）、山本緑陰（学者詩人）、✪梁川星巌（詩家）、✪巻大任（書詩）、藤崎琢斎（業医詩）、藤倉立言（業医詩）、✪小島梅外（詩人）、✪三枝百年（詩人）、✪菊池五山（詩人）、✪宮澤上侯（詩人）

この二十六人から儒者（学者）、医者、僧を除くと、✪印を付した十五人となる。江湖詩社の成員はその大半を占める。よって、文化年間に、江戸の専業詩人の数が、同時期の京都や大坂を超えたことが分かる（京都は十一人、大坂は〇人）。このようなガイドブックに、わざわざ「詩」や「詩人」と明記したのは、地方から江戸に上京する者たちの需要があればこそである。彼らは、これらのガイドブックを頼りに、訪問する詩人の家を捜し、入門したり、書画の依頼をしたりした。

人名録の影響は、当時、多大であった。朝川善庵が『江戸当時諸家人名録二編』の序文で、次のようにいっている。

聞けば前刻の出づるや、寒郷・僻邑の士、贄を投じて執り竭くし、或ひは字を乞ひ画を求むる者、甚だ之れを便利とし、人人争って購ひ以て奇貨と為す。

聞前刻之出、寒郷僻邑之士、投贄執竭、或乞字求畫者、甚便利之。人人爭購以為奇貨。

地方の人々に利便を提供しながら、同時に江戸の文人たちにも大きな利益を与えた。職業詩人（文人）にとっては、江戸のみならず、地方からも作品の依頼が舞い込めば、それだけ収入が増えるからである。ちなみに、二編は初編に漏れた人だけを載せたので、詩人は網川藤谷の一人だけである。

此の二編が刊行された後、約二十年間、流行した。そして天保七年（一八三六）に、『江戸現在広益諸家人名録初編』が刊行された[19]。この書には、詩仏や菊池五山の序文が載せられており、彼らがすでに江戸の名士になっていたことが分かる。また、新しい詩人も加わり、儒者・医者・僧侶を除いても、詩を善くする人は、なお四十一人に上る[20]。

そして、この書の最大の特徴は、詩会の会日を附記した点である。それまでの人名録で、会日を附記したものは他にはない。京都と大坂の人名録は、姓名の下に字号と居処および俗称等を記すのみである。それは、江戸が詩学隆盛の地であるということのほか、文政年間前後から、江戸では詩会を定期的に行う例が一般化したからであろう。会日を記した詩人には著名人が多い。

以下に、氏名と会日を、専門別に列挙する（複数の専門がある時は併記する）。

○儒学……・道学　井田赤城（三八）、大蔵龍河（三八）、大山融斎（ほかに書、五十）、松田迂仙（三八）、松崎慊堂（二七）、赤井東海（四九）、諸葛中如（三八）、安積艮斎（ほかに文章、二八）、佐藤一斎（ほかに文章、一六）、

・折衷学　井部香山（四九）、岡田煌亭（三八）、亀田綾瀬（二七）、遠藤古愚（五十）、朝川善庵（一六）、杉山随斎（一六）

・古学　服部芝山（三八）、萩原緑野（三八）、東條一堂（三八）、岳武陽（四九）、志毛藕塘（五十）

・その他　井伊四娟（儒、書、五十）、佐久間商山（儒、書学、寅日）、日尾荊山（四九）、山地蕉窓（儒、詩、二六）、清水赤城（儒、兵学、一六）、篠田雲鳳（女史、二七）

○画……　五十嵐竹沙（二七）、伊星双岳（一六）、春木南溟（五十）、遠坂文雍（三八）、長谷川雪旦（十三）、濱中琢堂（四九）、大岡雲峰（三）、大西楚南（一六）、岡田閑林（五）、渡辺華山（一六）、鏑木雲潭（二七）、横矢南山（一六）、谷文晁（二七）、村田雲渓（十）、雨花庵参議（一六）、栗本翠庵（二七）、山崎莆田（十）、矢部文斎（三八）、松井月潭（一六）、阿部董琳（二十二）、喜多武清（四九）、目賀田文信（一六）、鈴木噌噌（五十）、杉谷素堂（二）、関翠岳（五十）

○書……　市河米庵（ほかに書学、四九）、石川梧堂（四九）、秦星塢（三八）、畑中西岳（一）、糟谷盤梯（四八）、中西研斎（二七）、中川憲斎（三八）、山内香雪（三八）、八尾克庵（二七）、巻大任（ほかに詩、一六）、松本董斎（三八）、荘門制

衛門（二七）、清水魯庵（三八）、関根趙斎（一六）、関琴山（二七）、市川松斎（一六）、平井連山（女、ほかに画、五十）

○詩……　張龍山（ほかに墨梅、三）、大窪詩仏（ほかに書、十五）、館柳湾（三八）、野沢酔石（一六）、山本緑陰（九）、菊池五山（十六）、宮沢雲山（ほかに小説、三八）

○国学……岡田月楼（三八）、小山田與清（四八）、屋代輪池（ほかに書、三八）、前田夏蔭（五十）、平田篤胤（一六）

○学医……中井乾斎（三八）、安平常行（一六）○本草――　福井春水（一六）、阿部櫟斎（二）

○和歌……井上文雄（十七）、○歌学――　天野葛廬（十六）

○蘭学……高野瑞華（五十）

＊このほか、「在宿」の日を記した例も幾人かある。

この分類から見ると、会を開くのは儒学、画、書、詩、国学、医者等が主な職種である。詩会を開くのは七人いる。会日が明記されたということは、詩会が新参者に対しても常に開放されていることを意味している。この点は文政期の詩会が、従来の詩社主催の一般的な詩会と大きく異なるところであろう。前節で採り上げた清水礫洲の『ありやなしや』の記載と朝川善庵の前掲序文の内容を踏まえて想像すると、詩会の日ともなれば、書画を乞う人々も雲集し、著名詩人の詩会はさぞや賑やかであったに違いない。

その後、天保十三年（一八四二）の二編、文久元年（一八六一）の三編、安政七年（一八六〇）の『安政文雅人名録』にも会日が記されている。ただし、詩仏はすでに没しているので、詳しい紹介は割愛する。要するに、江戸の人名録は、他所の人名録と異なり、詩文書画をより重視し（江戸の価値観がそうであったのであろう）、文政年間から、会日の情報を附加するようになって、地方から上京して会への参加を希望する者、そして職業詩人に対しても、大なる利便を提供したのである。

㈤　化政期の詩会と出版（下）

―江戸時代の課題表―

以上、江戸の人名録が、詩会の盛況にも寄与していたことを考察した。実は、会日が事前に固定され広く知らされていただけでなく、当時は詩の題も参加者に事前に配布されていたようである。それを課題表という。しかも、文政期になると、それが一枚刷りで印刷されている。おそらくは、会の参加者がそれだけ多かったからに相違ない。

「課題」について、小宮山綏介（一八二九～九六）は、その著『南梁劄記』（国会図書館蔵本）のなかで、「課題は門人を課するの詩題、華人の用るを不見。近時詩集に見ゆ、未極捜索、然れども餘義なし」と解説している。「華人の用るを不見」とし「餘義なし」と断じているが、はたしてそうであろうか。結論をいえば、中国にも課題はあった。そればかりか、日本より遥かに早く出現している。ただし、日本の課題表のような資料が残っていないので、課題表のようなものがあったか否かについては明言できない。

中国における「課題」はもともと学校（書会[12]、書院）の宿題であり、「課」は「試」の意である。南宋時代の民間学校――書会――に、すでにその現象が現われている。たとえば、北宋末南宋初の人、李光（一〇七八～一一五九、字泰発、号転物老人、越州上虞の人）が紹興十八年（一一四八）に作った詩の題に、次のようにいう。

戊辰の冬、鄰士と縦歩して呉由道の書会所に至れば、諸生に課して梅花の詩を作らしむ。先の字を以て韻と為し、戯れに一絶句を成す。後三年、由道昌化に来り、前作を索むれば、復た次韻すること三首、前詩と并せて之れに贈る。

戊辰冬、與鄰士縦歩至呉由道書会所、課諸生作梅花詩、以先字為韻、戯成一絶句。後三年由道來昌化、索前作、復次韻三首、并前詩贈之（『莊簡集』巻七）

このように、南宋の初期、私塾で詩題を定めて学生に作詩を課していたことが分かる。元代以降、課題の形式は、詩社の詩会にも取り入れられた[13]。たとえば、黄庚（一二六〇～?、字星甫、号月屋、天台台州の人）は、各地を遊歴し、会稽に客寓した時、越中詩社や山陰詩社に参加し、それぞれ「枕易」と「秋色」という題の詩を書くことを求められた（求めに応じた結果、第一の佳作と絶賛された）。また、明の瞿佑（一三四七～一四三三）の『帰田詩話』にも、「詩社以楊妃襪為題、楊廉夫一聯……」と、楊維楨（一二九六～一三七〇）が詩社から楊貴妃の靴下を題として詩を求められたことが記されている。このように、元になると詩

社の詩会参加者が題をもらって詩を作ったことが分かる。

日本の五山禅林の詩会でも、「兼題（あるいは兼日題）」と「当座題」とがあり、前者は比較的少人数の「内衆の詩会」において出されることが多く、後者は参加人数が多い「友社の詩会」で出されることが多かった、という[14]。江戸時代の課題も同様である。参加人数が少ない同社の詩会の課題は、即席で出されることが多い、たとえば、菊池五山の会日は毎月の十五日であり、文化四年九月の詩会はちょうど月蝕があったので、それを題としている[15]。これは事前に予想できないことであるから、即席に出された課題であることが分かる。一方、大勢の参加者がいる詩会は兼題の方が多い。詩作に不慣れな参加者に時間的余裕を与えるほか、詩会それ自体の時間も短縮できる。のち、「課題表」まで事前に配布されるようになったが、それは詩社に参加する人が、いよいよ通俗化してきたことの現れといってよいであろう。

江戸時代の「課題表」は今日なお数多く残っている。たとえば、かつて菊池五山に師事し、また大沼枕山の詩社にも参加した書家、関雪江[16]（一八二七～七七、名敬・思敬、字鉄卿・弘道、通称忠蔵）の『雪江先生貼雑』という書には、多くの課題表が保存されている。また、早稲田大学図書館所蔵の『五弓雑抄』にも、幕末の課題表が多く収録されている。それらは、五弓雪窓[17]（一八二三～八六、名久文、字士憲、通称豊太郎）が蒐集したものである。

課題表はいったい何時頃、誕生したのであろうか。筆者が探すことのできたもっとも早期のものは文化十年（一八一三）のもので、静岡の江山社が出した課題表である。江戸の詩会の課題表ではないが、実はこの江山社は、詩仏と菊池五山とも深い関わりがあった。江山社の盟主は大塚荷渓（一七七八～一八四四、名正弘、字風暁、通称甚左衛門）、かつて菊池五山に詩を学び[18]、詩仏や梁川星巌とも親交があった。よって、彼が菊池五山や江湖詩社社友の詩会に影響されて、課題表の形式を己が主宰する詩社に採用した可能性が高い。その「江山社通知」を以下に掲げる。

江山吟社の会　月ごとに初七を以て例と為す。乃ち次いで二題を預め附すものより摘す。而して其の詩を輯録せんと欲すれば、請ふ期に負くこと勿かれ。客の生熟を択ばず。更に錦を添へ来るも、亦た一大好快なり。癸酉端月　荷渓冢碧　頓首。

「春雲出谷」「梅樓夜臥」「山中春暁聞鳥聲」「別春爐」「花時苦雨」「田家牡丹」「聽晩鶯」「荷錢」「田家雨中」「移菊苗」「苦熱得雨」「山中觀瀑」「客中七夕」「疎雨滴梧

桐」「湖村月夕」「始聞早砧」「秋柳」「舟中九日」「廢園殘菊」「霜月早行」「霜晴」「寒雨」「食河豚」「風雪歸莊」「歳暮山村」「除夜雪」。

江山吟社會月以初七為例、乃次摘二題預附、而欲輯録其詩、請勿負期、不擇客生熟、更添錦來、亦一大好快也。癸酉端月荷溪冢碧頓首

春雲出谷　梅樓夜臥　山中春曉聞鳥声　別春爐　花時苦雨　田家牡丹　聽晩鶯　荷錢　田家雨中　移菊苗　苦熱得雨　山中觀瀑　客中七夕　踈雨滴梧桐　湖村月夕　始聞早砧　秋柳　舟中九日　廢園殘菊　霜月早行　霜晴　寒雨　食河豚　風雪歸莊　歳暮山村　除夜雪。

「癸酉端月」は、文化十年の正月のことである。「次摘二題預附」とは、後に列挙された詩題のなかから順に二つずつを取り出し、それを月ごとの課題とする、という意味であろう。列挙された詩題は全部で二十六あり二つが余るが、ほぼ季節の推移に沿った詩題が並んでいるので、いずれかの二月だけ、三つの題が課題とされたのであろう。また、「不擇客生熟」という文によって、詩社の社友以外の者も歓迎されていたことが分かる。

すでに述べたように、菊池五山や詩仏がこのような課題表を用いていた可能性は、極めて高い。実は、『雪江先生貼雑』の冒頭に、「五山堂詩会課題」一枚が載せられている。これは、そのタイトルが示すように、菊池五山の詩会で出された課題表である。「己酉」は、嘉永二年（一八四九）であり、菊池五山の没年に当たる。五山は六月二十六日に死去しているので、この課題表は嘉永元年の年末か同二年の年始めに用意され、同人に配布されたものであろう。大塚荷渓の江山社のものと比べると、より整然としている上、詩型も定められている。おそらく、例年、このような課題表が配布され、それをもとに毎月の詩会が催されていたのであろう。現存資料では、大塚荷渓の詩会の課題表が五山のそれより先行するが、両者が師弟関係にあり、江戸が詩会文化の隆盛地であったことを考慮に入れると、もともとの順序はまず五山が先で、その形式を模倣したのが大塚荷渓である、と判断するのがより妥当であろう。さらに、詩仏が五山の同志であることを考慮に入れると、詩仏が文政年間に行っていた詩会も大同小異の状況であったに相違ない。

関雪江『雪江先生貼雑』（内閣文庫影印叢刊　国立公文書館）「五山堂詩会課題（己酉）」

正月	松影	各體
二月	狐王廟	七言律
	木筆始開	七言絶
三月	垂絲海棠	七言律
	青郊歸牧	七言絶
四月	湘簾	七言律
	賣時新	七言絶
閏四月	卯花雪	七言律
	晝永	七言絶
五月	釣絲風	七言律
	竹活	七言絶
六月	觀使鸕鷀	七言律
	過雲雨	七言絶
七月	鴨跖草	七言律
	新涼待月	七言絶
八月	秋蛙	七言律
	江山漁樂	七言絶
九月	花桃	七言律
	獲浚田家	七言絶
十月	菊塔	七言律
	寒林獨步	七言絶
十一月	宿雁	七言律
	雪月夜泊	七言絶
十二月	臘八粥	七言律
	贈乞寒人	七言絶

この表をもとに推測すると、江戸後期の詩会のなかで、初学者にとって、もっとも一般的な形態は、一年分の「兼題」が事前に知らされ、月例の詩会に出かけて行って、その都度、宿題の自作を披露し、社主や同人から称賛もしくは批評されるというもののようである。七絶か七律の形式で予め定められた課題に取り組み、相互批評し合って技量を高めることが、当時の一般向け詩社のもっとも主要な活動内容だったと想像される。

ところで、詩会で出された詩題を見ると、詠物が多い。詩会で詠物を出題する目的について、当の菊池五山自身が次のように述べている。右の課題表の五年前、弘化元年（一八四四）に、門弟の井伊友直が明・朱之蕃の『詠物詩』（『和刻本漢詩集成』第十八輯）を翻刻した際に寄せた序文の一節である。

一旦 著題 手に到れば、其の物性を 審（つまびらか） にして、其の典故を 覈（しら）べ、諸（こ）れを胸中に 蔵（おさ）め、鎔鑄して之れを出せば、造化 手に落ち、楽しみも亦た極まれり。之れを物名を多識するものに較ぶれば、則ち更に進むこと幾層なり。譬へば経を解するに後代に疏家有るが如くして、殆ど廃すべからざるなり。余が家 月ごとに詩題を掲げ、首（はじめ）に詠物を以て、後生に課試するは、此の故の為なるのみ。

一旦著題到手、審其物性、而覈其典故、藏諸胸中、鎔鑄出之、造化落手、樂亦極矣。較之多識物名、則更進幾層矣。譬如解經後代有疏家、殆不可廢也。余家月揭詩題、首以詠物、課試後生、為此之故耳。

詠物が作詩のもっともよい訓練になることを五山は強調し、それゆえに毎月、門生に詠物を課している、と説いている。詠物のほか、題画詩や詠史詩もしばしば出題されている。

大窪詩仏も、文化二年（一八〇五）に、『清新詩題』を出版している。この書は、春・夏・秋・冬（上巻）と雑題、題画（下巻）の六類に分け、それぞれ字数の多寡に従って詩題を

列挙したもので、詩会の題を選ぶ際の参考に供したものである。こういう書が刊行されていることが、すでに当時の詩会の盛況ぶりを示しているが、これらの詩題に占める詠物・詠史・題画の割合もかなり高いことを記しておく。

幕末までを視野に置くと、日本の歴史的事件や典故を課題に採り入れることも増えてくる。たえば、『五弓雑抄』に収める「嘉永己酉（嘉永二年、一八四九）敦好社月課詩文題」がそうである（附表参照）。この課題表には、「王仁頌梅」が含まれるが、『古今和歌集』に収める梅頌歌は王仁の作と伝えられているから、このような詩題が生まれた。「天平宴梅」は、『万葉集』巻五に収める、天平二年正月、大伴旅人の宴において詠じられた「太宰帥大伴の卿の宅に宴してよめる梅の花の歌三十二首」を踏まえる。「筑紫飛梅」は、菅原道真を追って梅が太宰府まで飛び、道真を慰めたという飛梅伝説に由来する詩題である。このように、幕末になると和歌の句題を模倣した形跡の認められる詩題が増加してくることも大きな特徴として指摘できる。

詩会と課題表の組み合わせは、もともと和歌や俳句等和文系の伝統文芸において、早くから試みられてきた方法であるから、それを援用した漢詩の詩会に、日本的な題材が混入してくるのは、ある意味、いたって自然な流れということもできる。しかし、いずれにせよ、漢詩という表現手段が一般化したことに随い、日本人にとってより身近で親近感の持てる題材が希求されたことの反映であったことは、疑いようもない。つまり、日本における漢詩の通俗化が著しく進んだことを示唆している。

㈥　結び

以上、江戸時代の詩会について、その独自性を中心に考察を加えた。とくに、文化文政年間以降、出版という媒体が大いに活用され、それが詩会の規模を拡大したことを指摘できよう。印刷された「人名録」と「課題表」が、江戸後期の漢詩に与えた影響は、まず何よりも広範囲に漢詩を普及させたことであった。

【附】「嘉永己酉敦好社月課詩文題」

正月	十梅園　王仁頌梅　天平宴梅　筑紫飛梅　西行庭梅　紀姫鶯梅　公任折梅　宗任詠梅　源太箙梅　常世盆梅　貞山駄梅　福壽草詩序
二月	含雪窗望嶽圖　小松重盛論
三月	俊成詠櫻圖　兒嶋高德圖贊
四月	誌津嶽七槍圖　捕魚記
閏月	佐野聽平語圖　掃晴娘伝
五月	本間重氏射睢鳩圖　蚊喩
六月	毛利典廏水螢知伏圖　以盗止盗説
七月	藤肥州追朝鮮王子圖　題留侯歸山圖
八月	詠十月　明州望月　在五嘆月　逢阪彈月　足柄吹月　明石殘月　嵯峨鞭月　石橋戰月　大森怪月　機山關月　長嘯泣月　不倒翁贊
九月	僧能因詠秋風圖　興一利不如除一害解
十月	畑時能使犬圖　書善相公意見封事後
十一月	瓜生氏母勸酒圖　幽閑貞靜辨
十二月	寒夜脱御衣圖　讀廉希憲伝

注釈

① 『国史大辞典』（八代国治など編、吉川弘文館、一九〇八年七月）に「詩会」の解釈による、「日本では天智天皇の近江の宮廷、奈良朝の聖武天皇の宮廷、皇族・貴族の邸宅での詩会は盛大であった。平安朝では初期の嵯峨天皇の時代が漢詩文の隆盛期といわれるが、皇室・貴族社会での詩会は鎌倉・室町時代まで行われた」。

②ほかに真率会、尚歯会など名目が付いている詩会があるが、本論文は定期的な詩会を対象とするので、討論範囲には入れない。

③詩仏の連作七首は『詩聖堂詩集初編』（『詩集日本漢詩』第八巻収録、汲古書院、一九八五年三月）巻四に収録されている。『五山堂詩話』（『新日本古典文学大系』65、岩波書店、一九九一年八月）巻二には「竹所牧君、屢詩題を分ち以て同社に課す、一時十梅を詠ず。蠖斎の「未開梅」に云ふ、「香玉枝頭未だ坼かざる時、蓬蒿叢裡自から仙姿。多情の杜牧吾れ相似たり、等候す、湖州十歳の期」。詩仏の「梅實」に云ふ：「葉間的皪として満枝垂る、復た当時冰雪の姿なし。一段の酸心誰か會得せん、多情の小杜重ねて來る時」。同じく一典を用ひて、而して調度各宜しき有り、此れ詩境の妙たる所以なり。」ちなみに、巻四の「梅實」詩は『五山堂詩話』に引用されたものと同じ詩です（一九五頁）。

④高木重俊氏の『蠣崎波響漢詩全釈：梅瘦柳眠村舎遺稿』（幻洋社、二〇〇二年十二月）を参照した。

⑤五版は○松本愚山、○岡崎元軌、○中嶋棕隠、○頼襄、○梅辻春樵、○畑橘洲、○岡田邦彦、堤一雲、源之良、釈知影、釈宗室、○瀬尾文、源維光、○拾大年、丹波恕安、○白井惟徳、○入江有親、○釈徳龍、北尾孟軌、○釈荃庵、中山元吉、○清水雷首、○貫名苞、釈西笑道人、○浦上春琴、○山田敬直、○源亭を収録した。六版は○を付けた一八人以外に、摩嶋長弘、辻章達、野口景張、釈慧海、梁緯、秋吉質、伊黙、向川貞、橘春翠などを収録した。

⑥五版の釈知影、釈宗室、瀬尾文、丹波恕安、入江有親、北尾孟軌、釈荃庵、中山元吉、釈西笑道人、山田敬直、源亭と六版に収録した野口景張、釈慧海、梁緯、伊黙、向川貞である。

⑦菊池五山はこの時、伊勢の四日市に居る。『五山堂詩話』（『新日本古典文学大系』、岩波書店、一九九一年八月）巻二に「余甲子歳（文化元年）、尚寓伊勢」とある（二一五頁）。

⑧海保青陵（一七五五～一八一七、字万和、通称儀平、儀兵衛、または弘助）の序文に「其（東海道）好詩文書畫及國風俳諧琴棋者、半肄業於都、半磨技於府、三十年來、氣韻日高、風俗日華、驛多宿學、邑多老手、乃其肄業磨技者不之都府而足矣」とある。

⑨「詩」、「詩、漢学」などを肩書とした人（儒者、医者、僧などは除外、俳諧、和歌などを付ける人は俳諧師、和歌師などの可能性もあるから、除外した）は、幸田女南枝（保土ヶ谷駅、漢学　詩　書）、鈴木健翁（沼津駅、漢学　詩　文章）、嶋津元敬（沼津駅、漢学　詩　文章）、山梨東平（奥津駅、漢学　詩　文章）、雪松吉右衛門（府中駅、漢学　詩　文章）、横田幸平

（丸子駅、漢学　詩）、大塚荷渓（藤枝駅、漢学　詩　書　画）、桑原正作（嶋田駅、画　詩）、横山市郎次（嶋田駅、漢学　詩　文章）、服部源蔵（金谷駅、漢学　詩　文章）、滝嘉惣次（金谷駅、詩　文章）、中村源治（掛川駅、漢学　詩　算学）、本間中郎（掛川駅、漢学　詩文）、兵藤章吉（掛川駅、詩　文章　書　画）、松村和平次（掛川駅、漢学　詩　書　画）、安間平次彌（見附駅、漢学　詩　文章）、竹尾東六郎（御油駅、詩画）、東桃樹（岡崎駅、漢学　詩）、金沢藤左衛門（岡崎駅、詩　文章）、中野吉郎（桑名駅、書　詩）、菊池五山、松山吟蔵（大津駅、詩　文　書　画）、青木東郭（大津駅、詩）など。

⑩この間に、『江戸現存名家一覧』がある。森銑三氏と中島理寿氏は「解説」に天保初年の刊行と推測したが、その「詩人」の類に詩仏の名が無い。詩仏は天保八年に亡くなったので、その以降の刊行と思われる。

⑪石川艇斎、井伊仁山、原緑雲、富安松翁、張龍山、大窪詩仏、大森快庵、大沼厚、大関忍斎、岡鹿門、岡本花亭、吉田霊鳳、館柳湾、武井雪庵、臼井青堂、宇野蘭泉、野澤酔石、山本緑陰、梁川星巌、巻大任、牧野黙庵、増田双梧、松下紫蟾、青山六雄、菊池五山、木下梅庵、宮澤雲山、宮澤竹堂、嶺田楓江、三上恆、柴野方閑、下村木仙、進梅亭、守村鴎嶼、関湖西、芹田静所、鈴木松嵐、永井三斎、介川緑堂、芥川道斎、内山雨村である。

⑫「書会」はもともと下級民衆にむける学校である。龍建国氏の「宋代書会與詞体的発展」（『文学遺産』、二〇一一年第四期、八二～九一頁）を参照。

⑬欧陽光氏の『宋元詩社研究叢稿』（広東高等教育出版社、一九九六年九月）に、この現象が指摘されている（五三頁）。

⑭朝倉尚氏の『禅林の文学　詩会とその周辺』（清文堂出版、二〇〇四年五月）に「内衆の詩会には兼日題が多いが、友社の詩会には評題による当座題の方が多い」（二九頁）とある。

⑮前掲『五山堂詩話』巻三に「余草堂、例以月望為詩会、今茲九月、当夜月蝕、即以月蝕為題、詩仏詩先成云云」とある。

⑯土浦の人。父は土浦藩儒者関東陽。家世代々書をもって藩に仕えた。祖父・父に家学をうけた後、糟谷磐梯に師事し、私塾「雪香楼」を開いた。慶応三年江戸に出て下谷御徒町に避けて書道塾を設け、その間、大沼枕山・長谷川昆渓らと詩作を楽しみ、『雪香楼詩鈔』を刊行、また「旧雨社」に小野湖山の紹介で同人となる。

⑰備後の人。史学に名があり、一般には『事実文編』の編者として知られている。が、なお『三備史略』『文恭公実録』『白川楽翁公行実』その他多くの著述を残した。文政六年に生れて明治十九年に歿す。享年六四。昭和三年正五位を追贈さる。

⑱文化元年作「和冢荷渓野遊韻却寄」（『寛斎先生遺稿』巻四、『詩集日本漢詩』第八巻に収録）の題下注にて、市河寛斎は「荷渓は詩を五山に学び吾党に帰向する年有り」といい、『五山堂詩話』巻三、巻七、巻八、『補遺』巻二にも彼に言及した。

第八章　江戸時代の書画会

―職業詩人の俗化―

㈠　はじめに

第七章において、江戸の詩会と出版の問題を検討した。詩会は職業詩人が門弟に作詩を教える手段でもあり、地方から上京し書画の依頼を受ける機会ともなっていった。前章でも少しく言及したが、本章では、とくに書画会を採り上げ、関連の問題について考察を加える。前章において、『人名録』を採り上げた際、詩人のみならず、書家や画家等の専業文人も数多く江戸に居住し会を開いていたことを知り得た。また、「課題表」について調査を進めていた時、関連資料のなかに、書画会の開催通知も当時、数多く存在したことを知り得た。そこで、詩社や詩会とも深い関わりのある書画会の実相を探り、その一連の活動に、大窪詩仏を始め江湖詩社の同人や化政期の詩人が具体的にどのように関与していたかについて、本章において整理したい。

書画会は、その名称の示すとおり、書家や画家が中心となって開く会合であるが、そもそも書画と詩文は切っても切れない相互依存の強い文藝であり、分業化が進んだ江戸後期にあっても、彼らと漢詩文とは密接な関わりがあった。よって、そこに詩人が加わるのはごく自然な現象であった。さらには、俳人が参加したり、戯作者が主催したり、文藝関連のさまざまな職種の人々が主催し参加する商業的色彩の濃いイベントであった。

詩会は通常、主催者の家で行われたが、書画会は酒楼や料亭等を使って行われる場合が多く、一定の開放性がある。それゆえ、書画家や詩人ばかりでなく、隣接領域の多くの文藝職業人も関与した。本章では、書画会のこの特質を踏まえ、職業詩人に限らず、広く江戸の職業文人が活躍する場としてそれを位置づけ、検討を加えたい。彼らがいかに商人と連携して、江戸の都市文化を繁栄させたのかについて探ることも本章の目的の一つである。

書画会については、すでに多くの優れた先行研究があり①、本論文もそれら先行研究の

成果に多く依拠している。とりわけ、揖斐高氏が『江戸の文人サロン 知識人と芸術家たち』（吉川弘文館、二〇〇九年九月）において、一章を割いて江戸の書画会を論じており、大いに啓発された。揖斐氏は江戸の書画会を「展覧会系統の書画会」と「席書・席画系統の書画会」の二種に分類されており、本章でもその分類に従う。その上で、書画会の歴史を整理しながら、化政期の特徴を洗い出したいと思う。

(二) 展覧会系統の書画会

中国において、文人が集まり書画を鑑賞するのは、北宋の曝書会からのことであろう[2]。しかし、詩文等の文学作品とは異なり、書画の名品は、宋元前後まで、そのほとんどが宮廷や一部の士大夫たちによって独占されていた、といっても過言ではない。したがって、かりに展覧会に類する催しが開かれたとしても、そこに集う人々は高級官僚等の士大夫ばかりであり、完全に文人の雅事に分類すべきものであった。明代から、江南地域の書画文人が大量に増加し、彼らの間に書画を品題とすることを通して作品の価値を高くすることはあったが[3]、大衆に開放する展観会は管見の範囲には見当たらない。一方、江戸の書画展覧会、とりわけ文化文政以降のそれは、ずっと庶民的で、商業的目的を兼ねた、江戸の富裕層のイベントである。富裕層とはいえ、大半は市民階層、すなわち平民にほかならない。

江戸時代の書画展覧会は、明和七年（一七七〇）に、大坂の商人・木村蒹葭堂（一七三六～一八〇二、名孔恭、字世粛、通称坪井屋吉右衛門）が開催したのが、その濫觴だといわれる[4]。その十年前の宝暦十年（一七六〇）、孔恭は蒹葭堂を開き、以来、書画骨董を精力的に蒐集した。その十年分のコレクションを好事家に展覧したのが、日本の近世における書画会の始まりである。こののち、関西において、書画会が頻繁に開催されるようになる[5]。

江戸においても、安永年間（一七七二～八〇）、書画会が開かれた。たとえば、安永六年（一七七七）正月十五日、八歳の僧・賢雄は、江戸平河町の龍眼寺で書画会を催し、そこで詠じられた作品が『書画展玩席上放歌分題詩冊』（『如禅道人知己詩嚢初編』収録、国会図書館蔵）という集にまとめられてもいる。しかし、厳密に言うと、これは展覧会ではなく、席書・席画系統の書画会である。賢雄が席上で絵を描いたり、参加者がその絵に詩を題す

る形で開催されていた。実は参加者のなかに、山本北山の名もある。北山がこの時、分けられた詩題は「揮筆於墨水酒家」であった。詩仏の師がすでにこのような集会に出席していたことは、やはり弟子たちにも大なり小なりの影響を与えたことであろう。

大坂と江戸以外の地方においても、書画会は開かれている。寛政五年（一七九三）三月三日、讃岐（香川県）の長町竹石（一七五七～一八〇六、名徽、字琴翁、通称徳兵衛、詩仏の知り合い）門下の青山雲隣（一七七〇～一八一九）が、その居、高松の暢春楼にて、古書画の展観会を開いた。この展覧会は近代的意義をもつ展覧会であり、『暢春楼展観』（『日本南画史』附録、山内長三著、瑠璃書房、一九八一年一月）という目録を出版している。その「凡例」によると、

席上 詩を得ること十数篇、余 別に之れを録す。今 但だ玉堂・鹿庭二先生の詩を取り、始末に書し、以て序跋に代ふ。

席上得詩十數篇、余別錄之。今但取玉堂鹿庭二先生之詩、書于始末、以代序跋。

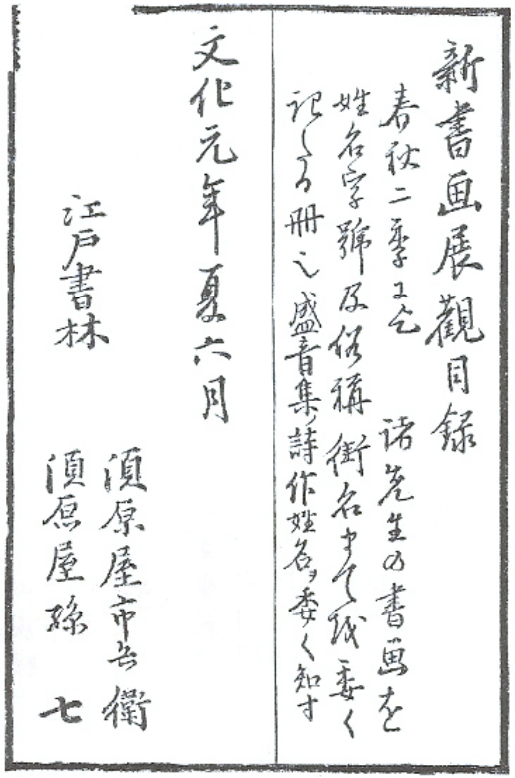
とある。「玉堂」とは、浦上玉堂（一七四五～一八二〇、名孝弼、字君輔、通称兵右衛門）のことで、時折、この地を訪れている。「鹿庭」とは、源汝翼、すなわち山田鹿庭（一七五六～一八三六、名汝翼、字政輔、通称政助、正助）のこと。鹿庭は菊池五山に学び、高松藩の藩校講道館で教えた。すなはち地元の藩儒である。右の凡例にも記されているとおり、この会でも詩は作られたが、あくまで展観が主たる目的であった。出品者はあわせて二十六名いたが、ほとんどが酒楼や書肆の店主であり、名前が知られるのは、梶原藍渠（一七六二～一八三四、名景惇、字復初、通称九郎右衛門、商人）、淵上旭江（一七五三～一八一六、名禎、字白亀、絵師）、後藤漆谷（一七四九～一八三一、名苟簡、字子易。通称勘四郎、詩人）等であった。文人と地元の豪商等の協力によって、地方における文人趣味の昂揚を醸成したのである。

このように、寛政年間には、すでに文人と商人とが連携協力して書画展覧会を開いている。文化年間以降になると、定期的に開かれた書画展覧会も少なくない。展覧内容にも変化が認められる。早期には、主として中国の書画が展覧されていたが、寛政年間以後には、同時代日本人の書画が展覧されるようになってきている。おそらく早期の展覧会は、古刹や貴人が秘蔵していて普段は目にすることのできない貴重な書画を、より多くの人々に鑑賞してもらう目的で行われたので、中国から伝来した名品を主としたのであろう。書画家や好事家の研究心や好奇心、ならびに雅趣を満足させるとともに、教育・啓蒙的な目的も

内包されていたかもしれない。いずれにせよ、それは書画の売買を目的としたものではなかった。一方、寛政以降の展覧会では、同時代の文人が日頃の成果を示し、己の市場価値を高らかに示す場へと変質している。よって、早期よりも商業的意図がはるかに顕在化し、展覧会は即売会の様相を呈していたと推測できる。

文化元年（一八〇四）の前後に、詩仏の弟子・佐原菊塢が書画会を開催した。その展観目録の出版広告が、文化元年刊の『盛音集』（『詞華集日本漢詩』第一〇巻収録）の末尾に附されている。

図3　『新書画展観目録』出版広告


新書画展観目録
春秋二季ニ会　諸先生の書画を
姓名字號及住稱衒名ヲ載ス
記シて冊ニ盛音集詩作姓名委く知す
文化元年夏六月
江戸書林　須原屋市兵衛
須原屋孫七

この広告から推測すると、前節で言及した「人名録」の機能を兼ねた目録のようである。同時代の名人の書画を求める者は、これをカタログ代わりに活用し、書画家の家を訪ね、具体的な依頼をしたのであろう。

以上、展覧会系統の書画会における文人と商人の連携協力を簡単に紹介したが、実は化政期の前後を境として、開催頻度を増やし、定期的に各地で開催されるようになっている[6]。

(三)　席書・席画系統の書画会

—儒者と芸者の参加—

席書・席画系統の書画会は、展覧会系統の書画会より、その出現は遅い。中国にも、そ

のような先例はほとんどない[7]。

安西雲煙（一八〇七～五二、名於菟、字山君）の『近世名家書画談』（『日本画談大観』収録、坂崎坦編、目白書院、一九一七年七月）の「書画会の事」条によると、席書.席画系統の書画会は、寛政年間の曇熙という僧より始まった。その後、書家牛山もこれを学び、ますます盛んに行われた[8]。曇熙と牛山のことは、詳らかにされていないが、要は、僧侶と書画家から発生したという点である[9]。

以上、言及したのは、書画家が開いた書画会であるが、実は早期の書画会は主として俗文学の作者が開催したものが多い。たとえば、戯作者の畑銀鶏（一七九〇～一八七〇、名時倚、字毛義）は、享和年間（一八〇一～〇三）に、荒木素履（一七五四～一八一一、名翹之、字公楚、号青荔・呉橋・適斎等）について書を学んだが、その頃からすでに書画会を開いおり、その様子は畑銀鶏（一七九〇～一八七〇、名時倚、字毛義、通称数馬）の『銀鶏一睡南柯乃夢』に記されている。

既になんじ呉橋が塾にありしころ、毛義と号して、享和二年の春三月二十五日、百川にて書画会を催ほしゝとき、歌川豊国と松露庵雨什として、式亭三馬をたのみて、さる人の世話をしておきし、筆島といふ芸者をつれて来たりしとて、自寛と呉橋がおほきに立腹して、爾が父に小言をいひしを、圭斎と敬義として中へはひり、漸の事にて芸者をば、別席へおひやりし事、爾ももすこしはおぼえ有るべし。又其ときに金杉の親玉と、矢の倉の先生と、根岸の大人と、三人がでられしとて、書家の牛山が、曲河と鶴陵のふたりにいへるには、さてくけふは珍しき事かな。儒者の書画会に出席されしはとて、其時分はめづらしきまゝにはなしゝが、僅の間にふうぞく替りて、近頃の書画会には、一会にても儒者の出ぬといふ事はたえてなし[10]。

「歌川豊国」は、浮世絵師である。「松露庵雨什」は、俳人の生方雨什（?～?）のことであろう。式亭三馬（一七七六～一八二二、菊池泰輔、字久徳）は、地本作家であり、薬屋・浮世絵師でもある。「筆島」は、当時もてはやされた義太夫芸者。「自寛」は、歌人の三島自寛（一七二七～一八一二、名景雄、字子緯）のことである。「圭斎」は、谷文晁（一七六三～一八四一、名正安、通称文五郎、直右衛門）の門人・大西圭斎（一七七三～一八二九、名弘、字毅卿、通称又一）であろう。「敬義」は、中井董堂（第五章に紹介が有る）のこと。「金杉の親玉」は、市川団十郎（五世か）のことだろう。「矢の倉の先生」は、市河寛斎のことか[11]。「根

岸の大人」は、誰かはっきりわからないが、根岸は寛永寺の領地なので、貴族のことだろう。「書家の牛山」は、先に述べた早期書画会の主催者である。「曲河」は、清水曲河（一七四七～一八一九、名冕、字子章、谷文晁に学んだ、画家）であろう、「鶴陵」も、はっきり判らないが、医者の片倉鶴陵（一七五一～一八二二、字深甫、通称元周）のことか。文中に引用された牛山の言葉を踏まえると、出席した「儒者」は、「矢の倉の先生」を指すであろう。

この記事によると、享和以前の書画会は、主に職業文人（俳人や歌人と芸術家の浮世絵師と書家、画家）が主催し参加した。儒者が出席するのは珍しいことで、芸者が出席するのも御法度であったようである。そのことが、右の文によって分かる。

しかし、文化、文政頃になって、書画会の様子は一変した。儒者が主役となり、芸者を招くことが常態となった。しかも、女先生まで現れた。このことについては、三田村鳶魚氏が「文人画は空腹の厭勝（まじない）」のなかで指摘している[12]。

書画会が大きく変化した要因は、まず何よりも儒者や詩人等が出席するようになったためである。『近世名家書画談』では、以下のようにいう。

今は書画家者流この雅会を設るのみならず、ややもすれば、儒流詞客此定式に倣ひて高会を催し、詩賦書画の興たけなはに及べばこれにつぐに絲竹管絃をもてこれを助く、実に昇平の楽事にして山陰蘭亭の会にも勝こと一籌と云べし[13]。

「儒流詞客」、すなわち儒者や詩人が、書画家たちの「定式」を模倣して会を開いたことが明記されている。そして、「詩賦書画の興たけなは」に達すると、「絲竹管絃」を余興として酒宴を盛り上げる。音楽は主に芸妓により演奏されるので、芸者を上げての華やかな宴席である。この点についても、『銀鶏一睡南柯乃夢』に関連の記述がある。

書画会に芸妓のいづるといふ事は近頃の事なり。寛政より享和のころ迄は、此事あまりなかりしが、文化の初めより、そろくと初まり。文政年中にいたりては、甚敷事になり、今にては書画会やら、芸者会やら、かつてわからぬやうになりしゆゑ、此筵につらなるものも、書く事よりは飲むことに心を用ひ、遂に酒雅会となりし事、さてく苦々敷事にあらずや[14]。

のちに、「書画会芸者」と呼ばれる芸者まで現われた、という。三田村鳶魚氏によれば、

普通に盃盤の間を周旋する以外に、墨を磨るのを芸にしたり、印を押すのが上手であったり、何となく諸先生に受けの好いのがあったり、大田南畝が「詩は五山、役者は杜若、狂歌おれ、芸者はお勝、料理八百善」などと御贔屓なのもあった[15]。

儒流詞客ならびに芸者の出席は、結局、書画会の堕落（俗化）を招いた。なぜなら、彼らの参加を契機として、書画を揮毫することよりも、酒を飲み、音楽を聞く等の余興に主体が移っていったからである。

そして、文化文政の書画会は、詩仏や菊池五山等、主として職業詩人によって開催され、詩文を商品と見なす彼らは、書画会をさらに変貌させたのである。

(四)　職業詩人と書画会

―文人の俗化―

文化文政期は、ちょうど詩仏や菊池五山等、職業詩人が活躍し始めた頃であった。書画会も、彼らによって主導されるようになる。それを証明するものに、『江戸名物詩初編』（方外道人著、天保七年刊本）に収録された「扇面亭書畫扇　兩國横山町肴店」という狂詩がある。

文晁武清米庵筆　　文晁　武清　米庵の筆
五山詩佛緑陰詩　　五山　詩仏　緑陰の詩
年年仕込新書畫　　年々　仕込む　新書画
扇面賣初發會時　　扇面　売り初め　発会の時

「武清」とは、喜多武清（一七七六～一八五七、字子慎、通称栄之助）のこと。谷文晁の門人である。「米庵」は、市河米庵（一七七九～一八五八、名三亥、字孔陽、通称小左衛門）のことで、彼らは書画家である。対句は詩人の菊池五山、詩仏と山本謹（第五章に紹介がある）を言っ

ている[16]。

第三、四句目から、毎年、彼らの書画が扇面亭から売り出されたことが分かる。扇面亭は書画会の世話人を勤めた。式亭三馬の日記『式亭雑記』に関連の記述がある。

扇面亭は馬喰町肴店に住す扇屋伝四郎が事也、会席にて、扇子、唐紙、短冊等を商ふ人。（中略）毛氈、硯の類は、扇面亭より損料にて貸す事也、至極便利にてよし、草履番人酒番人とも扇面亭より雇ひ人、甚だ事馴れたる者どもなり[17]。

これによれば、最初は書画会に出入りして扇子や紙、短冊などを売ったり、硯や毛氈を貸し出したりし、やがてさまざまな口利きも始めたらしい。そして、書画会が大流行するようになると、彼らは格式顧問として、さまざまな活動を展開した。寺門静軒（一七九六～一八六八、名良、字子温）は山本謹の門人であり、何回も書画会に出席した人である。彼の『江戸繁昌記初編』（天保年間刊本）は天保二年から書き始めたので、その中に描かれたのはだいたい化政期から天保年間までの様子と考える。同書の「書画会」の条に、

扇面亭の某父子、風流 相ひ承け、並びに会儀に閑ひ、其の格式に達す。故を以て集会を謀る者 皆な先づ就いて質す。蘭亭・西園、毎月集会し、与って力有り。著はす所の江戸諸名家人名録二巻、田舎に行はる。

扇面亭某父子、風流相承、並閑會儀、達其格式。以故謀集會者皆先就質、蘭亭西園、毎月集會、與有力焉。所著江戸諸名家人名録二巻、行于田舎。

とある。彼らは書画会に出入りして会の流儀や次第に通暁していたため、書画会企画者の相談役となっていただけでなく、書画会の情報を地方に広告する役割も果たしていた。すなわち、第七章でも言及した『江戸当時諸家人名録』の出版がそれである。

再び、『江戸名物詩』の狂詩に戻る。第四句の「発会」とは、会を開くこと。職業文人がいろいろな名目で、会を開いて金を稼ぐ。たとえば、書を出版したならば、出版祝賀の会を開き、新刊書を宣伝するとともに、参加者から謝金礼金を受け取る仕組みである。江戸時代の出版記念パーティーといってよい。小宮山昌秀の『楓軒紀談』（国会図書館蔵本）巻三に、「天民〔詩仏の字〕 詩集を刻して、知友に贈り、詩会を催したるに、謝儀金九十

両を得たり」と記している。文化七年に、詩仏が『詩聖堂詩集』初編を刊行した際にも、料亭百川楼で記念書画会を開いている。菊池五山も「五山堂詩話九編」刻成発会を開いている。おそらく、いささか多額の会費を徴収した上で、酒食を用意して振る舞い、詩仏や五山が揮毫し署名した新刊書や、場合によっては彼ら自筆の書画を、参加者に引き出物として配ったのであろう。

さて、右の狂詩や関連資料から、職業詩人が扇面亭と連携して、書画会を頻繁に行ったことが分かった。その盛況ぶりは、大田南畝（一七四九～一八二三、名覃、字子耕、通称直次郎、七左衛門）の「詩仏百川楼集」（「南畝集」巻十七、『大田南畝全集』第五巻、濱田義一郎編、岩波書店、一九八七年八月、三三八、三三九頁）という詩からも分かる。

如是我聞詩佛會　是くの如く我 聞けり　詩仏の会
浮生巷裏幾千人　浮生の巷裏　幾千人
行廚香積沾甘露　行廚 香積　甘露に沾ひ
飛蓋車塵轉法輪　飛蓋 車塵　法輪を転ず
師子一床諸弟座　師子 一床　諸弟の座
天龍八部百川濱　天龍 八部　百川の濱
散花美女來遊戯　散花の美女　来り遊戯し
雪裏金文玉偈新　雪裏の金文　玉偈 新たなり

日本橋の「百川楼」は当時江戸随一の高級料亭で、柳橋の「万八楼」（文化十四年、詩仏は万八楼に於いて書画会を開いた）と並んで書画会がよく開かれた場所である。あまりにも頻繁に開かれるため、百川楼の書画会は、江戸の名物にもなっていた。あまつさえ、地方から上京してきた者がわざわざ足を運ぶ江戸の観光地となっていた、ともいう。『江戸名物詩』所収の「百川楼参會　日本橋浮世小路」という狂詩には、次のように詠じられている。

諸家振舞名弘宴　諸家 振る舞ふ　名弘めの宴
貸切更無一日休　貸し切り 更に一日の休み無し
浮世小路浮世客　浮世小路　浮世の客
百千來會百川樓　百千 来会す　百川楼

「貸切」は全席利用のこと。その状態が一日の休みもなく続くというのだから、その盛況ぶりは相当なものである。書画会の参加人数の多寡によって、その主催者の名声の大小を評価するのは、当時の一般的な風潮であった。むろん、文人の方も、書画会に参加する人数を増やすことによって、己の名声を大きくしたいと願っていた。一例を挙げよう。菊池五山が、小町玉川（一七七五～一八三八、名玉成、字温卿、通称雄八）の『玉川百詩』（文化十年刊、早稲田大学図書館蔵本）に寄せた序文に以下のようにいう。

玉川小町温卿、初め鵬翁〔亀田鵬斎〕の書を介し、酒を載せ以て来りて、曰く、「某某日を以て遍ねく書画の名士を某楼に会せんと欲するに、諸君 莅(のぞ)まるるは、期に及んで往けば、坐間 客を称する者 止だ六七人のみにして、酒 之れが為に酸し」と。居ること一月 又た來りて、曰く、「某 某日を以て再び某楼に会せんと欲するに、前に依りて莅まるるは、期に及んで往けば、来り坐すもの僂指〔指折り数え〕して二十人を出でず、食 之れが為に饐(むせ)ぶ」と。又た半月にして来りて、曰く「某 更に某日を以て大いに某楼に会せんと欲し、敢へて三顧を煩はし、猶ほ期に及んで往けば、巷に到れば則ち輿馬 充ち、門を入れば則ち杖履 溢れ、坐に上れば則ち殆ど立錐の地無し。酒 渓を以て量り、食 山を以て積み、独り平素 書畫を拍浮〔遊泳〕する者の来るのみならず、謹厚にして出でざる者も亦た皆な悉く至れり。一日の内、名は都下を躁す」と。夫れ書画の会 三たび侮りを受くるは、亦た復た少からず。玉川 能く忍びて之れを為す。此れ其の名を顕かにする所以なり。

玉川小町温卿、初介鵬翁書、載酒以來、曰某欲以某日遍會書畫名士於某樓、諸君見莅、及期而往、坐間稱客者止六七人、酒為之酸。居一月又來、曰某欲以某日再會某樓、依前見莅、及期而往、來坐僂指不出二十人、食為之饐、又半月來、曰某更欲以某日大會某樓、敢煩三顧、猶及期往、到巷則輿馬充矣、入門則杖履溢矣、上坐則殆無立錐之地矣。酒以溪量、食以山積、不獨平素拍浮書畫者來、謹厚不出者亦皆悉至。一日之内、名躁都下。夫書畫之會三受侮、亦復不少、玉川能忍而為之、此其所以顯名也。

小町玉川は書画会を開いて多数の名士で満席にしたいと願ったが、初めて開いた会はまったくの閑古鳥で振るわず、三度目の正直でやっと宿願を果たした、という。まだ無名な詩

人にとって、書画会で大勢の人を集めるのは、相当に困難であったと想像される。著名人の来会出席が成否を分けるが、各処ですでに大規模な書画会が催されていた当時、特別な縁故や多額の謝礼でもない限り、足を運んでくれる人は少なかったであろう。寺門静軒の『江戸繁昌記』「書画会」の条にも、その辺の事情が記されている。

主催する「先生」は会を開く前に、会場の料亭に大きな看板を掛け、そこに「晴雨に拘わらず、某月某日を以て会す。請ふ四方君子の顧眙（こち）せんを（不拘晴雨、以某月某日會、請四方君子顧眙）」と大書し「先生」の姓名を書く。そして、著名人を多く集めるために、「先生」は前もって夜明けから富豪や貴人の宅へ赴き会の出席を懇願する。会日になると、「先生」は顔を一変して、厳然として坐って来客と挨拶する……[18]。

このように、化政期の書画会は、すでに文人雅集から大きく離脱し、職業文人のイベントと化して、完全なる俗化の道を辿った。つづく天保年間になると、書画会は最盛期に入ったが、その俗悪さが当時の人からも激しく批判されている。前に引用した畑銀鶏の『銀鶏一睡南柯乃夢』という滑稽本では、天保年間の書画会を「化物道の会所」、「魔王大王の決断所」と罵倒している。彼自身も天保年間に、毎月二十五日に書画会を催していたので、その体験を踏まえての発言である。その批判の対象は主として儒者に向けられている。

近頃の書画会には、一会にても儒者の出ぬといふ事はたえてなし。さればこそ学者の勢ひが強くなりて、書家、画家よりも百倍せり。事にふれ時に臨みては、俗客よりも甚敷大ごゑあげて、人を罵る族も我度々見うけたり[19]。

この条は戯作者として鳴らした畑銀鶏の面目躍如たるところであろう。儒者は政治を語りたがる。しかし、文人は政治の話はしない。書画会に参列する儒者が増えてくると、激昂して時世の批判を始める輩も増えたのであろう。「文人変じて俗人となり」のがこの滑稽本の趣旨である。直接批判されたのは儒者であったが、職業詩人もその中に含められていると思われる。その証明に、周滑平（一七七三～一八三一、名包章、字亀文、夷彦、通称文左衛門）の『妙々奇談』（『日本随筆大成』第三期第一一巻）という評判記では、亀田鵬斎、大窪詩仏、市河三亥、菊池五山、谷文晁等が風刺されている。たとえば、その第四回「栗三圧五三」では、菊池五山を「欲の五山」と喩え、以下のようにいう。

世俗の人評す、欲の五山あり。一曰、詩話の梓行、二曰、師匠の名を売り、三曰、大家の顔色、四曰詩会、五曰書画会。総て五の山なり[29]。

一は、『五山堂詩話』を刊行して、人から謝礼を貰ったこと。二は、亡くなった柴野栗山の詩を詩話に入れたこと。三は、富商や名士の顔色をうかがい媚びへつらうこと、四は、詩会によって儲けること、五は、すなわち書画会で大金を集めること。

『妙々奇談』の創作背景には、番付騒動がある。番付はもともと大相撲における力士の順位表だが、江戸中期から、相撲以外のさまざな業種の番付も出されるようになった。文化十三年、詩仏や五山等がひそかに画策して文人番付を出した。これに儒者の大田錦城が噛みつき、いわゆる「番付騒動」が勃発した。

番付も、評判記も、文人の優劣や順位を定めて、広く市民や地方の好事家に喧伝するものである。前列に位置づけられれば、書画会の集客力が増す。番付騒動の頃、大田錦城は詩仏に宛てた書簡「與大窪天民書」（『日本儒林叢書』第三巻『都下名流品題弁』に収録）のなかで、

近ごろ聞く 都下の書画篆刻の士、其の伎の巧拙を辨ぜず、足下の輩に阿諛す。而して其の党に入る者、乃ち所謂書画会なる者に於いて、首を聚め膝を造べ、親しきこと兄弟の如く、時に其の伎を褒賞して、以て其の名の伝播せんことを欲す。如し其の党に入らずんば、則ち面を背き眼を反し、視ること仇讎の如し。甚しきは則ち緑陰・君鳳の輩、齮齕排擯して、至ざる所無し、其れをして其の坐に在ること能はしめず。其の意 一に書画文墨の士を脅制し、吾が彀中に入れ、其の羽翼を張り、其の門戸を皇いにし、以て名を売り利を射るの媒と為すに在り。

近聞都下書畫篆刻之士、不辨其伎巧拙、阿諛足下輩。而入其黨者、乃於所謂書畫會者、聚首造膝、親如兄弟、時褒賞其伎、以欲其名之傳播矣。如不入其黨、則背面反眼、視如仇讎。甚則緑陰君鳳輩、齮齕排擯、無所不至、使其不能在其坐焉。其意一在脅制書畫文墨之士、入吾彀中、張其羽翼、皇其門戸、以為賣名射利之媒焉（六頁）。

と、この風潮を批判している。大田錦城も書画会のことをよく知った上で、怒りを発したのである。天保九年、天竺浪人が書いた滑稽本『書画会肝煎鍋』（国会図書館蔵本）にも、

書画会の肝煎（世話人）の番付一枚が書扉に貼り付けられている（図3）。職業詩人が俗化してゆくなかで、書画会における利益の独占を図ろうとする動きに対し、それを批判したものである。

図4　書画会肝煎月番付および（筆者の）注釈

書画会肝煎月番付	
三月　文晁　文鳳	四月　南溟　松軒
壬月　雲山　星塢	五月　星巖　文雄
六月　武清　焉馬	七月　北馬　竹谷
八月　五山　遇所	九月　江山　琴台
十月　蕉窓　董斎	十一月　椿年　酔茗
十二月　閑林　雲潭	会酌人おふさ　銭面亭

〔註〕

三月　谷文晁　高島文鳳
四月　春木南溟　未詳
壬月　宮澤雲山　秦星塢
五月　梁川星巖　未詳
六月　喜田武清　烏亭焉馬
七月　未詳　依田竹谷
八月　菊池五山　益田遇所
九月　大窪詩仏　東条琴台
十月　山地蕉窓　未詳
十一月　大西椿年　未詳
十二月　岡田閑林　鏑木雲潭
扇面亭

(五)　結び　—書画会の行方—

以上、本章では江戸時代の書画会について、その発生から隆盛までの状況を概観した。このような隆盛のなかで、前述したように、批判や風刺に晒された文人も少なくないが、現実にお咎めを食らった人士もいた。天保三年（一八三二）、東条琴台は盛大な書画会を開催したが、市中を賑わせた科で、林家から破門された。天保十一年（一八四〇）には、椿椿山（一八〇一～五四、名弼、字篤甫、通称忠太・亮太）が田原（愛知県）に塾居中の師、渡辺崋山（一七九三～一八四一、名定静、通称登）を救援するために、書画会を開いた。ところが、この書画会が華山の死を招くことになった。生活のために絵を売っていたことが幕府で問題視されたという風聞が立ち（一説に藩内の反崋山派による策動とされる）、藩に迷惑が及ぶことを恐れた崋山は、「不忠不孝渡辺登」という絶筆の書を遺して、池ノ原屋敷の納屋にお

いて切腹自害した。

このような騒動を引き起こした書画会であったが、書画会の隆盛は明治まで続いた。三田村鳶魚氏の「おめでたい人の話」（『三田村鳶魚全集』第二巻、中央公論社、一九七五年十月）に、

> 西南戦争の後から、書画会が大の流行であって、文人墨客といわれる稼業人も、お陰を蒙ったものの、実は当代に名高い華族さんと官員さんとの墨跡が玩ばれるので、畢竟は廉価な骨董を要求し、簡単なお慰みに満足する人達が多かった時なのですが、それをかえって華族さんも官員さんも、得意にしたらしく、明治十六年版の『明治文雅姓名録』を見ると、お歴々のお名前がズラリと並ばっております（一九〇頁）。

と記されている。そのほか、秋庭太郎氏の「書画会考」（『三題ばなし考』所収、一九四九年一月）にも関連の記述がある。

本章では、総じて江戸の職業詩人が参加する集会を対象とした。漢詩を世俗化し商品化する上で、書画会が果たした役割は甚大であったといえよう。むろん、職業詩人の生活にも多大な利益をもたらした。江戸の書画会は、職業詩人が名声を拡めるのに大いに寄与し、彼らが富裕な生活を送ることを可能にしたと同時に、それと同じ成功を我がものにしたいと願う多くの人々が、この集団に吸い寄せられていった。

職業詩人が、詩社や詩会、そして書画会において活躍することは、詩風の変化にも大きな影響を及ぼす。とりわけ詩社のもつ緊密なネットワークは、これを容易にする。そしてこの点は、民間の詩人にとって極めて重要である。士大夫詩人が、伝統的な儒者と同じく、政事に対し真っ直ぐな姿勢を示して、崇高な人格を表現するのと異なり、民間の職業詩人は個人の魅力を、もっぱら詩によって表現しなければならない。しかし、個の力は弱く小さい。そこで、集団やネットワークの力を借りて、さらには様々な手段を講じて（たとえば、書画番付）、蔚然たる近世詩壇において旗印を掲げて、それをリーダーしていったのであろう。

注釈

①「科学研究費助成事業」に採択された書画会に関する課題は、(1)ロバート・キャンベル氏の「近世期から明治にいたる書画会の展開と意義」（一九九七年～一九九九年）。その成果は主に、「観照のながれ　書画会四席その一～その四・銀閣寺東山殿三百会忌・江戸感応寺西園雅集・甲府一蓮寺改号書画会・氷川公園内聚楽会」（『文学』八巻二号、一四〇頁～一四一頁・三号、二頁～三頁・四号、二頁～三頁・九巻一号、二頁～三頁、一九九七年）。ロバート・キャンベル氏の研究はほかに『天保期前後の書画会』（『近世文芸』四十七号、一九八七年十一月、四七頁～七二頁）がある。(2)岩佐伸一氏の「京都・大坂における書画会データベースの構築と絵画史的意義の考察」（二〇〇七年～二〇〇九年）。おもな成果は「唐画師・林門苑の作品より」（『美術フォーラム21』第十七巻、二〇〇八年、四頁～九頁）、「十河節堂の『展観録』について」（『大坂歴史博物館研究紀要』第七号、二〇〇九年、九一頁～九六頁）、「美濃飛騨ゆかりの書画会・展観会資料の紹介」（『岐阜県博物館調査研究報告』第三十号、二〇〇九年、一頁～一二頁）、「松本奉時の経歴と画業について（一）」（『大坂歴史博物館研究紀要』、第八号、二〇一〇、五一頁～五九頁）など。(3)川崎智子氏の「近代における書画会の史的考察」（二〇一二年採択課題）などある。ほかにも書画会に関する研究は多い。ただ、大窪詩仏と書画会の関係についての先行研究は少なく、河野桐谷氏の「大窪天民百年祭と化政度の書画会」（『南画鑑賞』一九三八年、四号、二四～二七頁、六号、一四～一七頁）のみが挙げられる。

②北宋の曝書会に関しては、陳元鋒氏の『北宋館閣翰苑與詩壇研究』（復旦大学博士学位論文、二〇〇三年四月、一一三～一一五頁）を参照。

③安西雲煙（一八〇七～五二、名於菟、字山君）の『近世名家書画談』（『日本画談大観』収録、坂崎坦編、目白書院、一九一七年七月）は中国の書画展覧会の有無について言及した。「展観会の事」条に「於菟按に文衡山常に書画を品評することを好む、友人李日華衡山へとふらふごとに其蔵めたる書画を携示しければ、大に悦びてやがて我蓄たる所を見せんと自ら書房に入て四巻を出し、日華に示し終れば又四巻をかへて出し、かくすると幾遍も倦むとなくのこらず見せて楽しみけるとなり。此際にても近世都下の文人詞客書画家者流各古書画を携へ、或は禅院或は閑なる別業に集り、其幅を壁上に掛並て終日賞玩し甲乙を品評して歓を尽すことあり、是を展観会といへり、実に風流韻事といふべし。余このごろ一先生に問ふ、かかる韻事唐山にもありや、先生答て云、往々諸紀載或は法帖の末にも見るへし、前賢の書画を後の名士同観して帖末巻尾等に姓名を記し或は題跋を系

るもあり、これによりて益後世の価も重らん、明張爰平曰、夫賞鑑家得一古絵、必與諸名手遍相伝閲、互出品題、当時皆得指名而物色之云々。唐山名士の鑑定はかくのごとくたしかなる事と見えたり、又これに反せるは随園詩話云、有人画七八瞽者、各執圭璧銅磁書畫等物、作張口争論状、号群盲評古図、其誚世也深矣。これは書画古玩の事ばかりにあるまじ、されど唐山とても自らは鑑定に任じながらかかる人もあるべしとなり（後略）」とある（二五六頁～二五七頁）。文衡山は明代の文壁（一四七〇～一五五九、字徵明）、呉中四才子の一人。「張爰平」は不詳である。

④池大雅（一七二三～七六、名勤、字公敏）筆「竹厳新霽図」の題賛（『国華』795、一九五八年六月）による。

⑤『蒹葭堂日記』（水田紀久等編著、芸華書院、二〇〇九年五月）に次のような記事がある。天明二年（一七八二）四月十二日の条に、双林寺（京都）に於いて書画会が行われ、木村蒹葭堂もそこへ行った（六三頁）。寛政四年より毎年春秋、京都の東山において展覧会が行われ、計十四回開催された。主催者は皆川淇園である。寛政九年（一七九七）三月二十七日に清水寺で行なわれた会については『東山新書画展観』（早稲田大学図書館蔵本）に記載されている。参加者はほぼ関西の名人で占められているが、江村北海が主宰する賜杖堂の成員も参加した。

⑥小栗十洲（?～一八一一、名光胤、字万年）に「紀藩の崖南嶠 名有る書画を求め、春秋ごとに展観す。頃ごろ又た例に依りて書を寄せ、以て余の詩画を請へば、乃ち書して贈る（紀藩崖南嶠求有名書畫、毎春秋展觀、頃又依例寄書、以請余詩畫、乃書而贈）」（『観海楼小稿』、早稲田大学図書館蔵本）という題をもつ詩があり、紀州でも毎年春と秋の二回展覧会が催されていたことが知られる。小栗十洲に書画を求めてきているところから察すると、この展覧会も同時代の名家の作品を展覧するものであった。そのほか、嘉永年間にも、城崎温泉（兵庫県）にて、毎年四月に盛大な展覧会が開かれている。国会図書館に嘉永五年の目録が所蔵されている。その最後に「例年四月於但馬城崎」とある。

⑦前掲『近世名家書画談』の「書画会の事」条に「されば如此雅集後世唐山にもあらんやと一先生に問ふ、先生いふかかる会は未だ書籍にも見あたらねども僅に板橋詞鈔に見及しは、乾隆廿一年二月三日、予作一卓会、八人同席各携百銭以為永日歓、座中三老人五少年、白門程錦荘、七閩黄瓔瓢與燮（板橋鄭氏名燮）、為三老人、丹徒李御蘿村、王文治夢樓、燕京于文濬石卿、全樹金兆燕棕亭、杭州張賓客仲謀為五少年、午後濟南朱文震

青雷又至、遂為九人會、因畫九畹蘭花以紀其盛云々。これらは此方にて今行はるる書画会とはいわゆる似て非なるものにして、至極寒酸なることなり、会主の潤筆は其益あるましと思はる」（二五七頁）とある。『板橋詞鈔』は中国清代の鄭板橋（一六九三～一七六五、名燮、字克柔）の詞集、「乾隆廿一年」は一七五六年、日本の宝暦六年に相当。

⑧『近世名家書画談』に「近世盛に行はるる書画会の式は於菟按に寛政の比鎌倉の曇熙といへる僧より始まれりと聞伝へたり、この僧向に長崎に遊び清商程赤城に書を学びたりとて江戸に来り、自筆の扁聯を製作し又単帖に何月何日某の酒楼におゐて書画の筵を開き諸君子の賁臨を待と記し、これを預じめ四方に贈りさて当日諸客を酒楼に迎へ書を作り画を作り杯を傾け高談互に起り、会主は是日多少の潤筆を得たりと云。この後書家牛山も是れに倣へり、是よりこの挙ますます盛に行はれ（後略）」（二五七頁）とある。

⑨東條琴台（一七九五～一八七八、名信耕、耕、字子臧）の『先哲叢談後編』（『日本偉人言行資料』、一九一六年五月）巻八の「龍草廬」条に「三都の謂ゆる書画会・春初発会・著作会の類、今に至るまで、世の口を文芸に餬する者、用ひざるを得ずして、而して皆之を便とす、其事は草廬より始まる」（五九頁）とある。龍草廬を発端としているが、その根拠は分からない。

⑩『銀鶏一睡南柯乃夢』、『日本随筆大成　第二期』第二〇巻収録、吉川弘文館、一九七四年一〇月、三七四頁。

⑪『市河寛斎先生』（市河三陽著、あかぎ出版、一九九二年二月）によると、享和二年四月から冨山藩へ出発、その前は江戸にいる。

⑫「文人画は空腹の厭勝」（『三田村鳶魚全集』第十五巻、中央公論社、一九七六年十一月）「この時分には女先生が大流行で、特に書画会には、万緑叢中紅幾点かの必要があった。寄席の色取りに、女芸人が是非入用であったのと同じことだ。大名の奥向へ稽古に出入りする女儒者も、御見識は凄じくないでもないが、名高いなりたい念頭から、甘んじて紅幾点と算えられ、全く書画会用の女書家・女画師も現われ、中には白粉臭いオチャッピイも列席し、早速『諸家人名録』に記載されて鼻を高くした」（一七四頁）。

⑬前掲『近世名家書画談』の「書画会の事」条（『日本画談大観』、二五七頁）。

⑭前掲『銀鶏一睡南柯乃夢』、『日本随筆大成　第二期』第二〇巻、三七四頁。

⑮「江戸芸者の研究」、前掲『三田村鳶魚全集』第十巻、一九七五年五月、三二九頁。

⑯ほかに、『南梁剳記』（国会図書館蔵本）に「弘斎書画会に出るに常に米庵と書法の争論あり、詩仏等停調して事止むと云」とあるように、巻大任も書画会に出席したようである。

⑰『式亭雑記』、『続燕石十種』第一巻（広谷国書刊行会、一九二七年一月）、五一頁。

⑱『江戸繁昌記』の「書画会」条に「其地多以柳橋街萬八、河半二樓、先會數月、卜日掛一大牌、書曰、不拘晴雨、以某月某日會請四方君子顧臨、且大書掲先生姓名。……中略……未會之間、先生雞起、孜孜奔走之務、高門縣簿莫不敢往、亦不省内熱之恐、當日先生儀装曲拳、儼然坐上頭（後略）」とある。

⑲『銀鶏一睡南柯乃夢』、前掲『日本随筆大成　第二期』第二〇巻、三七四頁。

⑳『妙々奇談』、『日本随筆大成　第三期』第一一巻収録、吉川弘文館、一九七七年七月、三七一、三七二頁。

Ⅳ　職業詩人の詩風変革

第九章　山本北山・大窪詩仏の反古文辞派

㈠　はじめに

周知のように、山本北山は荻生徂徠の提唱した古文辞派に猛烈に反対し、江戸の詩風を大きく変えた人物である。市河寛斎も、袁枚の『随園詩話』を刊行し、詩風改革の一端を担った。大窪詩仏は、この二人の師のもとで、「性霊清新」なる詩を実作し、反古文辞派の先兵となった。詩仏の詩論は、主として北山より受け継いでいるが、彼が創作において、どのように詩風を変化させたのか、そして、実際の生活のなかで、どのような手段方法を用いて当時の詩風を変えたのか、このような問題について、本章で考察する。

まず、古文辞派の流行、およびその詩論――格調詩説――の成立について述べたのち、詩仏が古文辞派を打破するために用いた方法や理論、およびその手段――北山の理論――について検討を加える。

㈡　荻生徂徠と「格調」説

―古文辞派の盛行について―

荻生徂徠（一六六六～一七二八、名双松、字茂卿、通称総右衛門）は、明の李攀龍（一五一四～七五、字于鱗、号滄溟、歴城〔山東済南〕の人）と王世貞（一五二六～九〇、字元美、号鳳洲・弇州山人、太倉〔江蘇〕の人）を尊崇し、詩は盛唐に擬すべしと説いている。しかし、王李の詩論と大きく異なるところは、徂徠の詩論は学問（儒学）ととりわけ緊密な関係のある点である①。つまり彼は、宋儒（朱子学）の心（徳行）だけを修めることに反対し、上古の経典を究明しなければいけないと考えた。そのための道は、事（礼楽など行事）と辞（修飾）に求めるほかない。詩文についていえば、李攀龍と王世貞の作品を学習し、古代の文辞を大量に使った二人の詩文を読むことを通じて、上古の経学の一斑を窺うことを目的としてい

た。

そして、徂徠は、李攀龍と同じように、詩の風格について、南宋の厳羽（?～?、字丹邱、邵武〔福建〕の人）が『滄浪詩話』において唱えた「格調」を重視し、盛唐詩以下の詩を斥けた。しかし、これはやはり彼の儒者としての立場から出た詩論である。以下、徂徠があくまで官儒の立場に立って、「格調」説を受け入れていたことを明らかにする。

徂徠はかつてまず柳沢吉保（一六五八～一七一四）に仕え、後に徳川吉宗（一六八四～一七五一）の学問顧問として仕えた。おそらく、この経歴とも関わりがあるのだろうが、彼はいつも「君子」の身分を強調し、「聖人」の理想を実現しようとしている。学問や詩文の教育においてもそうである。このことは、彼の「学寮了簡書」に現れ出ている。その中で、徂徠はまず林家の学問が昌平坂学問所に至って衰微したこと、その教育方法が朱子学に偏っていることを批判している。そして、学校の教えは講釈ではなく、経典の奥義を説くべきであることを説いている。

当時昌平坂抔之講釈ハ聴衆兼而極リ無之、参懸リ之人ニ為承候仕形故、ヲノツカラ談義説町講釈之様ニ成行、白人之耳近キ様ニ仕、或ハヲトケ咄ヲマゼ、或ハコウ色ヲツカヒ、或ハ太平記抔之咄ヲ加ヘ、聴衆之多ク御座候様ニ仕候者モ必可有之候。左様無御座候而モ、白人ニ為聞候講釈、オモノ勤之様ニ成行候而者、儒者之学問ハ衰微ニ罷成候。増而右之通ナル鄙劣之振舞モ出来候ハヽ、以之外之義ニ御座候。是等ハ元来不吟味ヨリ事起リ、最早三四十年ニ成候而者、世上之人モ自然ニ御作法之様ニ覚ヘ、誤ト存知候人モ少ク御座候②。

学習者には、玄人と白人（素人）の別があり、儒学は玄人のために講ずべきだが、昌平坂学問所は素人にも分かりやすいようにと、「ヲトケ咄（お伽噺のことか）」や好色物、『太平記』等の俗な話もとり混ぜ講釈し始め、そのため、儒者の学問も衰微した、という。儒学は天下国家に関わる学問であるから、レベルの低い聴き手に媚びるような教授法は相応しくない、ということであろう。徂徠の根底には、雅俗の見があり、雅なる礼の国、中国の儒学を、俗なる日本の物語によって解説しようとする迎合的な姿勢に、強い違和感を覚えたのであろう。また、二行目の「町講釈之様ニ」という条は、官儒と町儒を明確に区別し、官儒は経学を重視し、むやみに町儒者のやり方を真似るべきではない、という保守的

な考え方をもっていたことも分かる。むろん、彼にとって、『太平記』を始めとする日本の俗な読み物と経書とは天壌の違いがあった。彼が漢詩の学習や創作に求めたものが、学問の達成を実現するための手段であった以上、学ぶべき模範も、作るべき詩も、ともに「雅」なる「格調」を具えたものでなければならなかったのである。

徂徠は、儒学を成就させるための手段として、詩文学習の必要性を強調し、詩文を儒学から独立分離させ、門弟たちにまず学習させた。漢詩文を自在に作れるようになれば、より能動的、分析的に経書を理解できるようになる、と考えるのは、理に適っている。明清時代の中国とは異なり、小学から始めて文言を段階的に学ぶ教学システムが、当時の日本では、まだ普遍的ではなく、かつまた文言学習の開始時期も、中国よりもはるかに遅かったと考えられる。このような日本の実情を踏まえ、入門後の門弟にまず詩文を中心に文言を徹底学習させるという方法を、徂徠は選択したのであろう。儒学を修得する第一歩の階梯として詩文の学習を位置づけた。しかし、主体はあくまでも儒学にある。

その彼が、なにゆえ明の七子に惹かれ、古文辞に傾倒するようになったかについては、彼が堀景山（一六八八～一七五七、名正超、字彦昭・君燕）に宛てた長文の書簡「答屈景山書」から、それを読み取ることができる。

明の李王二公、古文辞を倡へ、亦た法を古より取る、其の之れを古文辞と謂ふは、辞を尚べばなり。叙事を主とし、議論を喜まず、亦た宋の弊を矯むるなり。夫れ後世文章の士、能く卓然として古に法る者、唯だ韓柳李王の四公のみ、故に不佞 嘗て四大家雋を作為し、以て門人に誨ふ。而して其の尤も李王を推すは、辞を尚べばなり。然りと雖も、不佞の二公を推す所以は、特だに此れのみならず。夫れ学問の道、古に本づく。六経論語左國史漢は、古書なり。人 孰れか読まざる。然れども人 其の通じ難きに苦しむ。古今 言の殊ればなり。故に必ず伝注を須ひて以て之れを通ぜんとす。猶ほ倭訓を仮りて以て華文を読むがごときか。尚ほ一層を隔てて髣髴たるのみ。且つ伝注の作、後世に出づれば、古今 言の殊ること、彼も亦た我のごとし。彼 且つ理を以て諸れを心に求めて、諸れを事と辞とに求めず。故に其の紕謬 勝げて道ふべからず。且つ徳を異端に明らかにすれば、其の解 豈れ美ならざるか。

明李王二公、倡古文辞、亦取法於古、其謂之古文辞者、尚辞也。主叙事、不喜議論、

亦矯宋弊也。夫後世文章之士、能卓然法古者、唯韓柳李王四公、故不佞嘗作爲四大家雋、以誨門人。而其尤推李王者、尚辭也。雖然、不佞所以推二公者、不特此耳。夫學問之道、本古焉。六經論語左國史漢、古書也。人孰不讀。然人苦其難通。古今言之殊也。故必須傳注以通之、猶之假倭訓以讀華文邪、尚隔一層髣髴已矣。且傳注之作、出於後世、古今言之殊、彼亦猶我也、彼且以理求諸心、而不求諸事與辭、故其紕謬不可勝道、且如明德異端、其解豈不美乎③。

右の引用の直前で、徂徠は韓柳と欧蘇の文に言及し、韓柳は「一へに法を古より取」ったが、六朝の弊を矯めるために「辞を紬け」たと見なし、欧蘇は法を古に求めず、ひたすら韓柳を模倣しただけで直接古を法とせず、理屈ばかりが勝ち、議論を好んで、はては「心の之く所を肆にし、故に法の束ぬるを悪」み、辞も追求せず、叙事ができない、と見なしている。つまり、欧蘇に代表される宋文は、徂徠が重視する古の「法」と「辞」のいずれにも難があり「叙事」もできず、韓柳のそれは「辞」に難がある。しかし、「李王」は「辞」を重視する。この点にこそ、彼らの独自性が含まれており、それゆえ、韓柳の文とも区別して「古文辞」と呼ぶのである。

右の引用部分で、徂徠はさらに、伝注との差違にも言い及んでいる。伝注は古書の難解な箇所を「事」と「辞」に求めず、「理」によって解説するから、誤差や誤謬が生じる、という。この伝注は漢儒以来の注釈類全般を含むであろうが、より直接的には朱子の諸注を念頭に置いた発言であろう。

今日の我々は、明の七子の主張を、あくまで文学の範疇に止まるものとしてとらえる傾向があるが、少なくとも徂徠は儒学ひいては古典学の範疇で彼らの主張を受けとめ、反宋学、すなわち反朱子学の立場を表明したものとも見なしていたようである。中国で考証学が盛んになるのは、乾嘉の間（一七三六～一八二〇）のことであるから、徂徠の没後のことである。樸学と比べると方法論は素朴で未成熟ではあるが、その精神と目的は軌を一にし、かつまた中国に先んじて同類の意見を主張している点が興味深い。

また、別の箇所では、次のように古文辞の目指すところを説いている。

中年に曁びて、二公の業を得て以て之れを読めば、其の初め亦た苦だ入り難し。

蓋し二公の文、諸れを古辞に資(と)れば、故に古書に熟さざる者、以て之れを読む能はず。古書の辞、伝注 解する能はざる者、二公 諸れを行文の際に発して渙如たるなり。復た訓詁を須ひず。蓋し古文辞の学、豈に徒に之れを読むのみならんや。亦た必ず諸れを其の手指より出だすを求む。能く諸れを其の手指より出だせば、而ち古書 猶ほ吾の口 自ら出だすがごとし。夫れ然る後 直ちに古人と一堂の上に相ひ揖し、紹介を用ひず。

暨中年、得二公之業以讀之、其初亦苦難入焉。蓋二公之文、資諸古辭、故不熟古書者、不能以讀之。古書之辭、傳注不能解者、二公發諸行文之際渙如也。不復須訓詁、蓋古文辭之學、豈徒讀之已邪。亦必求出諸其手指焉。能出諸其手指、而古書猶吾之口自出焉。夫然後直與古人相揖於一堂上、不用紹介焉④。

古文辞を身につければ、伝注を介さずに、古書を直接理解できるというだけでなく、自ら古文辞で自己の思いを表現できるようになる。そうなれば、古書が己の口をついて出た言葉と同様になり、古人と同じ土俵で、誰かの媒介を必要とせずに対等に対話できる、と説いている。

徂徠はまた、中国と日本の環境の相違についても言及し、日本においては科挙の束縛がないから、儒学をより自由に学問できると説いている。

明 経義を以て士を策し、必ず朱注を以てす。此れに非ざれば則ち進士に第するを得ず。其の文 必ず八股を以てし、此れに非ざれば則ち亦た進士に第するを得ず。……中略……且つ此の方の儒、國家の政に與らず、身を終ふるまで官を遷らず、贅旒然の如し。豈に功を立て名を策し、其の父母を顕はすの願ひ有らんや。經を治め文を為ること、各おの其の心の為さんと欲する所に從ひ、而して官は之が制を為さず。豈に復た利害の己に切なること、郷者に言ふ所の明人の如きもの有らんや。

明以經義策士、必以朱注、非此則不得第進士、其文必以八股、非此則亦不得第進士。……中略……且此方之儒、不與國家之政、終身不遷官、如贅旒然、豈有立功策名、顯其父母之願哉。治經為文、各從其心所欲為、而官不為之制、豈復有利害之切於己、如鄉者所言明人哉⑤。

明代の科挙は、朱熹の四書注を教科書とし、八股によって経義の答案を書くことが義務づけられているので、各種教育機関で教授されたのも当然のごとく朱子学であり、文も宋文に起源をもつ八股文であった。むろん、それらは個人の好悪によって選択できる種類のものではなかった。一方、日本の儒者は、国政に与る資格がなく、左遷もない代わりに、「贅旒」＝飾り物みたいな存在であるから、かえって思う存分学問ができる、と説いている。そのほか、書簡の送り先である堀景山からおそらく批判されたのであろうが、「模擬剽窃」は良くないという批判に対して、それは明人の口吻をそのまま真似したものに過ぎず、日本の実態から著しく乖離していると説く。たとえ学習の対象が李王でなく、韓欧であったとしても、日本人が漢文を学ぶときには、「模擬」せざるを得ないのであって、さもなければ「国字の文」しか書けなくなる、と説く。

徂徠は世間の「道学先生」を非難し、伝統的儒学の「徳行」の則を破ろうとし[6]、学者たちを、「性理」から脱却して、純粋な文辞を重視する道へと導いた。日野龍夫氏は「文学史上の徂徠学・反徂徠学」という論文で以下のように指摘している。

> 徂徠学でいう君子とは政治支配者のことであって、道学臭とは無縁であるものの、儒学的な概念ではある……中略……徂徠学においてもまだ文学は儒学から完全には独立していなかったということである。徂徠があれほど寛容に人情を認めながら、一方で個性を無視した表現規範を強調した理由はここにあった[7]。

このように、徂徠の「格調」説は、儒学成就のための手段であり、官儒が目指すべき文学であった。

ところで、古文辞派の勢力拡大には、徂徠門人の安藤東野（一六八三～一七一九、名煥図、字東壁、通称仁右衛門）と山県周南（一六八七～一七五二、名孝孺、字次公、少介）の力が大いに与っていたが[8]、徂徠とその門下の多くが柳沢吉保等権力者の庇護を得たことも大きな要因であった。『日本詩史』巻四にいう。

> 徂徠門下、才俊 多しと称さる。其の顕はるる者、春台・南郭の外、猶ほ数十人。盛んなりと謂ふべし。然るに細かに之れを考ふれば、則ちその中、大いに軒輊有り。蓋し大名の下、名を成し易きのみ。況や赫赫たる東都、他邦の比に非ず。或ひは龍に

攀ぢ鳳に附し、欵ち禁臠に託し、或ひは裾を曳き簡を授け、長く侯鯖に沾ほひて、虎の威を仮る者、驥尾に附す者、青雲 致し難きに非ざるなり。之れに加ふるに邦国の士人、各おの其の君に従ひて往来し、結交同盟、諸藩に遍満し、同を褒め異を伐ち、鼓盪扇揚、遐僻として届らざるは靡し、是れ其の一時に顯赫する所以なり……。

徂徠門下、稱多才俊、其顯者、春臺南郭之外、猶數十人、可謂盛也、然細考之、則其中大有軒輊。蓋大名之下易成名耳。況赫赫東都、非他邦比、或攀龍附鳳、欵託禁臠、或曳裾授簡、長沾侯鯖、假虎威者、附驥尾者、青雲非難致也。加之邦國士人、各從其君往來、結交同盟、遍滿諸藩、褒同伐異、鼓盪扇揚、靡遐僻不屆、是其所以顯赫一時也⑨。……

「大名の下」とは、大名の庇護を受けたこと、つまり、官儒になったことを指す。江戸には諸藩から参勤交代でやって来た大名がおり、「文人大名」に気に入られた文人の交際範囲は、京都や大坂の文人よりも広く、名声を挙げるのもより容易かった。

右文には、京都の文人、江村北海の、江戸文人に対する羨望や嫉妬が幾分かは含まれているであろうが、実態もそう大きく乖離していなかったものと推察される。これこそ、彼らが以前の文人よりも大きな勢力を持つことができた理由であり、蘐園詩風が一世に風靡した原因でもある。また、古文辞派の詩は、堂上派の和歌のように、上層の風雅人にも受け入れられた。この点も、流行の一大要因であった。

㈢　山本北山の反古文辞派

荻生徂徠が復古、擬古を提唱した当初から、すでに多くの人が痛烈な批判を展開したが、それはおおむね彼の学問的主張に反対した儒者たちであり、なかでも朱子学者や折衷学等の彼と異なる流派の儒者がほとんどすべてであったので、ここでは一々論じない。前に引用した堀景山に宛てた書簡からも、その一端を窺うことができよう。

ここで注意したいのは、文学的立場からの批判である。実は山本北山以前から、すでに少なくない人々が古文辞派の剽窃模倣を批判していた⑩。しかし、批判者たちは、批判はしたけれども、彼らに独自の詩歌理論があったわけではなかった。徂徠ならびに蘐園学派

に対抗して論陣を張るような詩論家はついぞ現れず、そういう状態が安永・天明（一七七二～一七八八）の頃まで続いたのである[11]。山本北山も、『作詩志彀』において以下のように述べている。

信有 幼より時詩の陋を醜み、口 断て詩を談ぜず。世の之を駁する者起らんことを望めること久し。夫れ時詩の陋を掃はんと欲せば、中郎が為す所をなすべし。今の人僅に、時詩の陋を知るもの或は曰く、于麟をなさず、唐をなすと云ふ、而して之をみれば、やはり于麟風の高華を失ひたる卑弱なるものにて、然も声調穏協、于麟にしかず。故に又これを厭て白楽天をなすと云ものあり、蘇東坡をなすと云ふ者あり、陸放翁をなすと云者あり、程松圓をなすと云ふものあり、之を要するに中郎に由らざる者は、五十歩が百歩を笑ふの類にて……[12]。

要するに、北山以前の反徂徠派の人たちは、祖述の対象を、唐の白居易や宋の蘇軾や陸游、明末の程嘉燧（一五六五～一六四三、字孟陽、号松圓、上海嘉定の人）等に換えることを主張しただけで、古文辞派と大同小異、五十歩百歩であり、擬古の本質的な批判になっておらず、我らの理論こそが初めての本格的批判だということなのであろう。右文にいう「中郎」とは、明の袁宏道（一五六八～一六一〇、字中郎）のこと。彼が主として七子を批判したのと同じように、北山も彼の説を継承して、反徂徠の狼煙を上げたのである。袁宏道は、陽明学左派の李贄（一五二七～一六〇二、字卓吾）の童心説に深く影響され、始めに定型ありきの擬古ではなく、自己の胸臆に潜む性霊をストレートに表現すべきことを唱えた。その「叙小修詩」では、

……故に吾 謂へらく今の詩文 伝はらず。其の万一伝はる者、或ひは今の閭閻の婦人・孺子 唱ふ所の「擘破玉」「打草竿」〔庶民の労働歌〕の類ならん。猶ほ是れ無聞無識の真人の作る所にして、故に真声多し。顰みを漢魏に效はず、歩みを盛唐に学ばず、性に任せて発し展ぶれば、尚ほ能く人の喜怒哀楽・嗜好情欲に通じ、是れ喜ぶべきなり。

故吾謂今之之詩文不傳矣。其萬一傳者、或今閭閻婦人孺子所唱「擘破玉」、「打草竿」之類、猶是無聞無識眞人所作、故多眞聲、不效顰於漢魏、不學步於盛唐、任性發展、尚能通於人之喜怒哀樂嗜好情欲、是可喜也[13]。

といい、今の世の詩で後世にまで伝わるのはほとんどなく、伝わったとしても、それは民間の無学な小僧や婦女たちが歌う作だけであろう。なぜならば、それらの詩だけが「喜怒哀楽嗜好情欲」等人の眞率なる性霊を表現し得ているからだ、という。

つまり、予め想定されている「格調」に無理やり合致させるのではなく、己の心の奥処から発せられた声であれば、たとえ卑俗な表現に満ちあふれていても、それは好い真の詩である、という考え方である。この詩論の根底にあるのは、身の丈に合った身分相応の詩を作るべきだとする発想であり、この姿勢を敷衍してゆくと、政治に関わらない民間詩人の場合、あえて天下国家を詩に詠じる必要はなく、日々の生活をテーマにするだけでよいということに帰着してゆく。これは極論すれば、詩に社会的機能を強く求める儒教的な詩歌観から、「自己」の性霊を吐露することを目的とする個人主義的な詩歌観への転換を意味する。この点は、山本北山も十分に意識していたであろう。

山本北山の反徂徠について、日野龍夫氏は、以下のように指摘している。

> 享保期前後に漢詩壇を壟断していた蘐園派を追放し、漢詩を本来の政教主義の路線の上にひきもどす運動が必ずやある時期に企てられているはずである。漢詩史を見わたせば、運動を企てたものに擬すことができるのは、アンチ蘐園を旗じるしに天明寛政期の登場してきた山本北山、市河寛斎ら清新派以外にはありえない⑭。

しかし、筆者は日野氏の説に、完全には同意できない。なぜならば、北山のアンチ蘐園は、必ずしも政教主義路線への回帰を目指したものではなく⑮、むしろそれとは逆に、詩を民衆へと開放するという方向性を明確にもっていると考えるからである。性霊より発した表現をすべて是とする詩論は、伝統的な文学表現の手段を、庶民をも含め個人の領域へと引き込もうとするものと解するべきではないだろうか。実際に、北山の時代になると、民間における作詩熱はすでにかなり高まってきており、さらに彼の後の時代をも視野に納めると、本論でこれまで論じてきたように、漢詩の大衆化はますます加速している。このような時代状況を踏まえると、北山の詩論は詩作の個人化、すなわち大衆化へと大きく舵を切るためのものだった、と考えることの方がはるかに実態に即している、と筆者は考える。

よって、彼の詩学思想は、むしろ徂徠派への批判を通して、詩を己れの身分に相応しい表現手段に変えることを企図したものと性格づけられよう。北山の改革精神のみならず、

現実主義的な冷静な計算もその背後に潜んでいたのではないだろうか。そして、おそらく、このことと職業詩人の誕生の間には一定の相関関係がある、と考えられる。

ただし、山本北山は、徂徠や南郭の詩文を標的として反対するが、詩であれ、文であれ、古人の熟字錬語を棄て去って、自分の胸臆から全てを出して詩文を作るという主張に賛同しているわけではない。彼も、古典に通暁した上で詩文の創作をすることを主張している。北山の批判を注意深く読むと、彼は古文辞学派の詩文に古語の運用法に誤りがあると批判し、句法の未熟さも批判する（たとえば、二対一意や前後照応しない点）等、彼らの洗練されていない擬古に最大の不満を抱いているが如くである。

李攀龍等の盛唐詩擬古派は、「唐人の使い熟したる字に非ずんば、一字も使わず、唐人の使い慣れたる故事に非ずんば、一事も用いず」（『作詩志彀』、『日本詩話叢書』第八巻、四〇頁）と主張している。それに対して、北山は「経史子集の語すべて詩に入るべからざるなし」（『作詩志彀』、『日本詩話叢書』第八巻、四〇頁）と言っている。『孝経楼詩話』においても、晩唐詩人や宋元明清の詩人たちが用いた詩語を解説し、『唐詩選』等の書籍の誤りを論じている。

古文辞学派が重んじるのは「格調」であり、詩を講じるときに「詩の妙は解ずべく解すべからずの間に在り（詩妙在可解不可解之間）」（明・胡震亨『唐音癸籤』巻三）と説いていたに対して、北山は「凡そ古人の詩未だ一の解すべからざる無し、不可解は己が知識の及ばざる故のみ」と説き、彼らを批判している（『作詩志彀』、『日本詩話叢書』第八巻、三六頁）。また、古文辞派が軽視した『聯珠詩格』を「正書」とし、「此書、詩学に益あるのみに非ず、宋史に漏たる、宋末の義士遺民の姓名字号、この書に因て伝わるもの数十百人、また宋代詩名ある人と雖も、胡元の朝に立、胡元の禄を食もの、一人を入れず」（『孝経楼詩話』、『日本詩話叢書』第二巻、七二頁）と、正反対の高評価を与えている。

そのほか、荻生徂徠は、中国語に通じなければ、詩文は創作できず俗語小説も読めないと主張したが、山本北山は『作文志彀』のなかで、言語の変遷という観点からこの説に反対し、文言と白話の近世における対立を説き、白話が分かっても、詩文には役に立たないと断じ、かつまた、自分の若い頃の体験をもとに、白話が分からなくても俗語小説は読めると証言した。

以上の数点が、詩学的見地から北山が古文辞派に反対したポイントである。徂徠の復古理論は儒学本位であるのに対し、北山の詩学思想は文学本位により近く、より包括的で分かりやすい。また、訓読是認という点から見ても、大衆性をもっている。そのせいか、『作

詩志殼』が出版されると、すぐに世俗の議論の的となった。

(四)　大窪詩仏の反古文辞派

北山はそもそも儒者であり、反古文辞派の活動も、主に論客として理論構築の側面に止まっており、創作実践の方面における功績はさほど大きくなかった。しかし、寛政年間、北山門下に集い、「清新派」と呼ばれた青年たち、とくに大窪詩仏は、もっぱら詩人としての一生を送った人物ゆえに、実践面での功績がより顕著である。彼の詩学観は、基本的に儒教的政教詩観と一切関わりがない。彼は一詩人の立場から古文辞派に反対した。

文化元年（一八〇四）三月、詩仏は神谷東渓（一七四四～一八〇五）が刊行した『隨園詩話』（『和刻本漢籍随筆集』20、汲古書院、一九七八年三月）に序文を寄せている。その中に以下のようにある。

我が邦 元禄・享保の間、蘐園の徒 明季の李王の詩を奉じて、以て長城の守りと為す。後に稍や其の非を覚る者 有りと雖も、時の艱・力の弱もて、臂を攘ひて其の間に起つこと能はず。我が輩 創めて幟を清新性霊の真詩壇に立つるに及んで、偽詩 攻めずして降り、戦はずして破れり。而る後、詩の功業 将に我が輩の手に一統されんとするは、是れ豈に人力の能く為す所ならんや。所謂 清新性霊なる者、自己の胸懐を吐き、古人の糟粕を嘗めざる是れなり。此れを之れ真詩と謂ふ。所謂 専ら活を主とし、死句を参ぜざる是れなり。我が輩 此れを以て世に唱ふること十余、今に于いて猶ほ未だ海内に洽(あま)ねからず。何ぞ隨園先生も亦た彼の邦に在りて之れを唱へしを計らん。隨園詩話の刻は壬子の歳に在れば、則ち今を去ること十三年なり。我が輩の殊地に起こると時を同じうす。

我邦元禄享保之間、蘐園之徒奉明季李王之詩、以為長城守矣。後雖稍有覺其非者、時之艱、力之弱、不能攘臂而起於其間。及我輩創立幟於清新性霊之真詩壇、偽詩不攻而降、不戰而破。而後、詩之功業將一統於我輩之手、是豈人力之所能為乎哉。所謂清新性霊者、吐自己之胸懐、不嘗古人之糟粕是也。此之謂真詩、所謂專主於活、不參死句是也。我輩以此唱世十餘、于今而猶未洽於海内。何計隨園先生亦在彼邦唱之。隨園

詩話之刻在壬子之歳、則去今十三年矣。與我輩之起殊地同時。

袁枚の『随園詩話』は、乾隆五十七年（一七九二、壬子）に刊行された。日本では、寛政四年に当たり、ちょうど詩仏が北山の奚疑塾に入った前後である。よって、右文の「我が輩」とは、奚疑塾の同人を指すであろう。実際に、詩仏は山本謹等とさまざまな宋詩選集を共同で刊行しており、そのことについては、すでに第三章において採り上げた。「詩の功業 将に我が輩の手に一統されんとし」というのは、詩壇において一層名声を挙げ、詩風を古文辞から変えようとする強い決心と自負とが滲み出ている。

寛政十一年（一七九九）、詩仏は『詩聖堂詩話』を刊行した。三十二歳の頃である。山本北山が序文を寄せている。

詩仏の詩話は、業の鏡なり。一たび高く掛くれば、善悪 皆な見はる。遂に人をして人を驚かすの詩の今現在するを知らしめ、而して真詩の心を発す。然れども這裡、三途の業報有るを免れざるは、何ぞや。以て悪詩を降伏し大いに清新を広宣せんと欲す。此れは是れ「貪」なり。俗なる詩家をして殆んど気死せしむ。此れは是れ「瞋」なり。吟を官に易へ、詠を禄に易へ、翰墨を以て財利に易へ、苦心を以て楽意に易ふ。豈に亦た「痴」ならずや。仏にして泥犁に堕つ、大方便、大神通、凡夫 固より知るを得ざるなり。

詩佛之詩話者、業鏡也。一高掛、善惡皆見焉。遂教人知驚人詩今現在、而發眞詩心。然這裡不免有三途業報、何也。欲以降伏惡詩、大廣宣清新、此是貪。使俗詩家殆氣死、此是瞋。吟易官、詠易祿、翰墨以易財利、苦心以易樂意、豈不亦癡乎。佛而墜泥犁、大方便、大神通、凡夫固不得知也。

北山は、仏教の「業報」に照らし、詩仏の詩話を「業の鏡」だと諧謔的に絶賛している。両者のゆかしき師弟関係がこの文からもはっきり読み取ることができよう。「驚人詩」「眞詩」「清新」等、彼らの詩論のキイ・ワードが鏤められている点にも、彼らの自負や変革の手応えが滲み出ている。

詩仏の『詩聖堂詩話』（『日本詩話叢書』本を使用した）は、主として三つの内容に分類できる。第一に詠物詩に関わる内容、第二に師友に関わる内容、第三が己の詩論や活動に関わる内容である。まず、第一類について言えば、第1、第2則は、日本に独特な詠物詩、桜

を詠じた詩を採り上げている。第8則は、三絃琴の江戸における盛行とその詩について採り上げている。第16則は、詠物詩の理論を記している。

第二類は、第3～第7則、第21～第26則、第34～第41則、および第45則の計二十則が、奚疑塾の同人および彼らと関わりのある人物とその詩を採り上げている。第9～第15則、第17～19則、第27～第29則、第32・33・46・48則の計十七則が、市河寛斎および江湖詩社の同人について記している。計四十八則のうち、その八割近くが詩仏の師友、すなわち同志に関わる記述によって占められている（わずかな例外は、第20則の『増註聯珠詩格』について記したものと、第47則の無名氏の詩について記したもの）。

第三類は、第18・30・31の三則が持論を展開したもので、第42・44則は、信濃への旅を記し、第43則は詩仏が民間で反古文辞派の宣伝活動を行ったことを記している。その第43則を以下に引こう。

余 嘗て舒亭と詩社を東江精舎に開く。号して二瘦詩社と曰ふ。来たりて盟に与する者 百余人。北山先生 之が引を作す。固より一星の銀、半尺の布を受けず。痛く世の李王を為す者を斥く。是に於いて、格調の徒、豬のごとく怒り、虎のごとく視る。議論訟々として止まず。然れども此れに由って人を得ることも亦た少なからず。世の我を刺し我を非ること、吾に於いて何をか有らんや。

余嘗與舒亭開詩社於東江精舎。號曰二瘦詩社。來與盟者百餘人。北山先生作之引。固不受一星之銀、半尺之布。痛斥世之爲李王者。於是格調之徒、豬怒虎視。議論訟訟不止焉。然由此得人亦不少。世之刺我非我、於吾乎何有。

「東江精舎」は、現在の東京都墨田区の東江寺にあった。詩仏は一時、「舒亭」＝柏木如亭と詩社を開き、古文辞派に痛烈な批判を加えた。詩社については、すでに第六章において論じたが、彼ら職業詩人にとって重要な収入源であったはずなのに、詩仏がもっとも早く開いたこの詩社では、門弟から学費を取らず、無料で詩文を講じていた。その目的は自説を高らかに唱え、古文辞派を打ち壊すためであっただろう。末尾が暗示するように、この詩社は詩仏の反古文辞活動において重要な意義をもつと思われるが、惜しむらくは関連の資料が殆ど残っておらず、詳細が分からない。しかし、この詩社の評判は遠く地方にまで伝わっていたようである[15]。

最後に、同志柏木如亭の詩歌観も瞥見しておく。高岡秀成（?-?、字実甫、号養拙斎）

は「木工集序」において、柏木如亭の学習の経歴についていささか述べている。ちなみに、『木工集』（『柏木如亭集』収録、太平書屋、一九七九年三月）とは、柏木如亭の集である。

初めて規則を寛齋河先生に受く。河先生なるは、首めて白氏を唱へて世に風し、其の徒 日に衆し。永日 既に其の法を得て、稍や之れを変じ、雑ふるに宋の諸名家を以てし、最も楊誠斎、方秋崖の体を喜む。其の情を述べ景を賦すに、巧なること織密に入りて、其の用心 鉄を鎔して金と成すに在り。凡そ殊俗異風、細言小事、人 以て華語に入るべからずと為す者、悉く收拾し來りて詩料と做す。曲折して態を極め、此れ其の自家の功夫なり、以ての故に其の語は多く奇険にして、常人の喜ぶ所と為らず。而れども常に識者の賞を受く。古色閑澹 猶ほ未だ及ばずと雖も、而れども尖巧細深頗る藍の出だす者有り。

初受規則于寛齋河先生。河先生者、首唱白氏風于世。其徒日衆。永日既得其法而稍變之、雑以宋諸名家、最喜楊誠齋、方秋崖體。其述情賦景、巧入纎密。而其用心在于鎔鐵成金。凡殊俗異風、細言小事、人以爲不可入華語者、悉收拾來做詩料。曲折極態、此其自家功夫、以故其語多奇險、不爲常人所喜、而常受識者賞。雖古色閑澹猶未及、而尖巧細深頗有藍出者。

如亭は初めて詩を市河寛斎に学んだ頃、師の影響を受け、白居易を学んだが、その後、南宋の楊万里（一一二七～一二〇六、字廷秀、号誠斎）と方岳（一一九九～一二六二、字巨山、号秋崖）に傾倒し、そのスタイルを真似た、という。この序文では、古文辞に対する反旗を掲げてはいないが、白居易といい、南宋の楊・方といい、蘐園学派は一顧だにしなかった対象であるから、すでに十分すぎる反古文辞的姿勢である。周知のように、寛斎は白居易の平易な詩風を愛好し提唱した。白居易の詩は、蘐園学派を始めとする儒者たちに、「俗」と評され、学習対象から外されたが、江戸の漢詩初学者にとっては、李王のような詩を作るよりも、ずっと容易かったであろうし、なにより親近感をもてたであろう。寛斎はそのほか、天明六年（一七八六）に、吉原を詠った『北里歌』を刊行している。『詩聖堂詩話』では、それを格調派に反対するためだと記している[17]。

(五)　結び

徂徠学派に属する多くの人々が、幕府や藩校の儒官となっている。このことは、彼らの主張が世に大流行するのに良好な条件を与えたが、北山は主として理論の方面から、詩仏は主に実作や実作指導の側面において、彼らに反旗を翻し、彼らの詩風を追い払うことに成功した。少しく大雑把な括り方をすれば、儒者としてより多く官に寄りそい影響力を強めた護園学派に対し、布衣の儒者として生きた北山と民間の職業詩人として生きた詩仏が、下からの改革を打ち上げ、それによって古文辞の風は一掃されたと言えるかもしれない。むろん、それを可能にさせたものは、十八世紀以後、市民経済が飛躍的に向上し、市民文化が一気に花開き、時代とともにそれが成熟していったことが最大の要因ではあろう。しかし、単一から多様へ、絶対から相対へ、という詩歌観の展開は、いつかは誰かが幟を揚げて主張しなければならない。それが、北山であり、詩仏であったのであろう。彼らより前に反古文辞を唱えた詩人に、六如がいるが、彼は北山や詩仏のように庶民に親しく接し彼らに詩論を説くような身分ではなかった[18]。そのゆえにか、詩風を変えることもできなかった。

北山や詩仏等の反古文辞の動きが寛政年間以降、活発になったのは、なぜであろうか。それはおそらく寛政改革と直接間接に関わりがあろう。山本北山は、安永八年（一七七九）に『作文志彀』、天明三年（一七八三）に『作詩志彀』を刊行しているが、ほぼ同じ時期、詩仏のもう一人の師、市河寛斎は昌平黌の大学頭の地位にあったが、異学の書を挾んだとして昌平黌を追われている（第四章参照）。これを契機に、寛斎も詩文への傾倒を強めている。むろん、この時の思想統制がすべての契機ではないだろうが、そこには無用の軋轢を回避しようという思いが幾許かは存在したであろう。

さらには、護園学派の古文辞学に対する不満も、この頃、高まりつつあった。それは、この頃になると、作り手も読み手も目が肥えてきて、その排他的な古典主義的方法論に飽き足らなくなってきたからであろう。かくて、宋詩に学ぼうとする新たな潮流が生み出されたのである。つまり、お上の朱子学回帰の整風政策によって、折衷学や陽明学などを信奉する町儒者たちは、「遠禍」（第四章を参照）のために、己の塾では儒学より詩文の教授により重きを置く態勢をとるようになり、さらに時代が古文辞学とは異なる詩風を求めるようになった結果、ここに新たな作詩の風が誕生することになったと考えられるのである。

注釈

① 松下忠氏の『江戸時代の詩風詩論：明・清の詩論とその摂取』（明治書院、一九六九年三月）および『明・清の三詩説』（明治書院、一九七八年一二月）にすでに指摘が有る。

② 『荻生徂徠全集』第一巻（みすず書房、一九七三年七月）、五六九、五七〇頁。

③ 前掲『荻生徂徠全集』第一巻、「徂徠先生学則」附録、三三、三四頁。

④ 同上註、三四、三五頁。

⑤ 同上註、三九、四〇頁。

⑥ 「對西肥水秀才問」（前掲『荻生徂徠全集』第一巻）「傳曰、詩書者、義之府也、禮樂者、德之則也。不佞謂、詩書辭也、禮樂事也、義存乎辭、禮在乎事、故學問之要、卑求諸辭與事、而不高求諸性命之微」（五三頁）。

⑦ 『徂徠学派』（『日本思想大系』37、頼惟勤校注、岩波書店、一九七二年四月）収録、五八〇頁。

⑧ 山県泰恒の「先考周南先生行状」（『周南先生文集初編』附録）に「是時（徂徠）先生始倡復古學、疑難蠭起、從信之士尚少。獨先考與滕東壁、一意從事斯道、左提右攜、羽翼大業、名聲籍籍四方」とある。

⑨ 『日本詩史』（『新日本古典文学大系』65、岩波書店、一九九一年八月）、五〇九頁。

⑩ 前掲『日本詩史』巻三に「宇士新、名鼎、京都人……中略……先是物徂徠、唱古文辭於東都、士新説其説、而多病不能東遊、乃遺弟士朗從學焉。京師講徂徠之學自士新始。後來意見漸異、事事反戈徂徠。士新著作頗饒、其文集名明霞遺稿」（五〇〇頁）。

⑪ 葛子琴と六如は宋詩を提唱するが、理論によって徂徠を否定する著作はない。六如の『葛原詩話』（『日本詩話叢書』収録）は、ほとんど詩語の考証で、理論書ではなかった。

⑫ 『作詩志彀』、『日本詩話叢書』（鳳出版、一九七二年六月）第八巻、二〇、二一頁。

⑬ 『袁宏道集箋校』（錢伯城箋校、上海古籍出版社、一九八一年七月）、一八八頁。

⑭ 日野龍夫「近世後期漢詩史と山本北山」、『国語国文』34⑹、一九六五年七月、三頁。

⑮ 山本嘉孝氏が「山本北山の技芸論―擬古詩文批判の射程」（未刊稿）にも日野龍夫氏のこの観点について異見を述べた。しかしながら、山本北山の技芸論から出発して論証したのである。

⑯『詩聖堂詩話』（『日本詩話叢書』第三巻）の四二条に「余、西遊の日、途、信濃に出づ。小諸の稲垣伯弓が家に宿すること三四日、城下の人士、来て詩を求むる者、数十人。僧観禅なる者有り。亦た来て余に見ゆ。余が詩の凡ならざるを称嘆して因て問て曰はく、公、都下に在て痩梅先生を知るやと。余、曰はく、之を知る。和尚、何を以て独り痩梅が名を記すと。僧、曰はく、痩竹先生、曾て此の地に遊ぶ。我、之を見ゆることを得たり。我、聞く、都下に痩竹・痩梅の二先生有て詩を以て一時に鳴ると。余、公の詩を観するに尋常の人に非ず。必ず二先生の徒ならん（後略）」。

⑰『詩聖堂詩話』に「明和の末、蘐園の餘焰、未だ盡きず。詩人、動もすれば率するに格調を以てす。寛齋先生、「北里歌三十首」を作て以て性靈の詩、言ふべからざる者莫きを見す。舒亭は「吉原詞」、娯庵は「深川竹枝」、皆な是れ其の權輿する所なり。而れども先生、其の名を隠して著はさず」とある。

⑱『五山堂詩話』巻一に「六如禪師、詩名籠罩一世、人以鉢盂中陸務觀稱之。余誦其詩、景仰非一日、或傳、師為人矜情作態、見便可憎、余不欲覿面、恐回慕悅之心也。庚申入京、皆川淇園先生勸余往見、時師避疾在一條里宅、因一造之、門下以病見辭、至今以不見為幸矣」とある。

第十章　大窪詩仏と唐宋詩歌論争

――巻大任編『宋百家絶句』序文を中心に――

㈠　はじめに

大窪詩仏およびその同人たちは、徂徠派の擬唐詩に反対し、宋元の詩人、とくに南宋三大家の詩を学習対象とした。それだけではなく、寛政年間から、宋人の詩集や宋詩選集を陸続と刊行し、ついには唐詩に代わって、それらが初学者の入門書となった。

とはいうものの、宋詩が巷間で盛んにもてはやされるようになると、今度は「偽宋詩」という批判の声も出現した。『五山堂詩話』巻一に以下のようにいう。

山本北山先生、昌言して世の偽唐詩を排撃し、雲霧一掃され、蕩滌して殆ど尽く。都鄙の才子、翕然として宋詩に嚮ふを知る。その功偉なり。余　先生に謂ひて曰く、「偽唐詩は已に麋（みなごろし）にするも、更に偽宋詩有り。又た一秦を生ずと謂ふべし。何如」と。先生　莞然たり。「蓋し今日の詩は、虞山の所謂　邪気　結轕し〔鬱然と固まり動かない〕、大いに気を承け之れを下すも、輸写〔胸の内をすっかり吐き出す〕大いに利し、元気　傷を受くれば、則ち別症　生ずるの時なり。誰ぞや之れを瘳（いや）すは、必ず当に任ずるもの有るべし。

山本北山先生、昌言排撃世之偽唐詩、雲霧一掃、蕩滌殆盡、都鄙才子、翕然知嚮宋詩、其功偉矣。余謂先生曰、偽唐詩已麋矣、更有偽宋詩、可謂又生一秦也。何如。先生莞然、蓋今日之詩、虞山所謂邪氣結轕、大承氣下之、輸寫大利、元氣受傷、則別症生之時也。誰居瘳之者、必當有任㈠。

『五山堂詩話』巻一の刊行は、文化四年（一八〇七）である。五山は、北山が「偽唐詩」を排撃して一掃された後、今度は「偽宋詩」が出てきたという。それをどうすればよいかという問いかけに、北山は、「虞山」、すなわち清の医者、銭潢（字天来、虞山〔江蘇省常熟〕

の人）の『傷寒溯源集』②の言葉を引き、こういう現象が現れるのは理の当然なので、この病弊を改める人も、きっと後輩のなかから現れるはずだ、と結んでいる。五山はまた右の条の後にも、「偽宋詩」の問題を採り上げ③、「偽宋詩」の流弊は「偽唐詩」より甚だしい④、と述べている。

もちろん、五山が批判した「偽宋詩」の作者に、江湖詩社の同人が含まれるはずはない。しかし、江湖詩社の詩こそが「偽宋詩」だと考えた人も当時にはいた。武元君立（たけもとくんりつ）（一七七〇～一八二〇、備前岡山藩士）の「讀五山堂詩話」という文では、江湖詩社の詩を「纖巧瑣細」、「輕佻鄙俗」と痛罵している。

> 曩時、徠翁の徒、済南の詩学を唱え、一時を風靡し、黄金白雪、陳腐に勝へず。乃ち一二の鉅匠有りて、宋詩を唱へて務めて以て之に反す。荏土の江湖社 最も甚し。而して予 甚しくは江湖社の詩を喜ばず。其の雕鐫瑣細 或ひは児戯に類するを以てなり。其の軽佻鄙俗 或ひは誹語に陥るを以てなり。今は其の著す所の『五山堂詩話』を読めば、言有りて云く、「偽唐詩は已に鏖にす、更に偽宋詩有り。又た一秦を生ずと謂ふべし」と。是れを以て之を観れば、蓋し自省する所 有らん。
>
> 曩時徠翁之徒、唱濟南詩學、風靡一時、黄金白雪、不勝陳腐。乃有一二鉅匠、唱宋詩務以反之、荏土江湖社最甚矣。而予不甚喜江湖社之詩、以其雕鐫瑣細或類兒戲也、以其輕佻鄙俗或陷誹語也。今讀其所著『五山堂詩話』、有言云、「偽唐詩已鏖矣、更有偽宋詩、可謂又生一秦也」。以是觀之、蓋有所自省也⑤。

末尾の「自省する所有らん」という表現から見ると、武元君立は、五山の「偽宋詩」発言は五山自らが反省した言葉と、皮肉混じりに理解したようだ。

この章では、右のような当時の唐宋詩をめぐる闘争を採り上げ、当時の詩壇における「真詩」「偽詩」の議論を検討してみたい。

検討の対象として、文化八年（一八一一）成書の巻大任編『宋百家絶句』（文化十年の刊、早稲田大学図書館蔵本）を採り上げる。この選本は、王禹偁から花蕊夫人まで、宋代の百家の絶句を二千首収めたもので、序文六篇が附されている。山本北山、葛西因是、大窪詩仏、亀田鵬斎、館柳湾と巻大任の自序がそれである。どの序文も、当時の唐宋詩の争いをめぐ

って持論を展開している。本章では、この六篇の序文を手がかりに、ほかの唐宋詩に関わる言説をも併せ見ながら、唐宋詩の論争の一斑を瞥見する。

『宋百家絶句』が編まれた文化八年の前後は、「真詩」か「偽詩」かの論争が白熱した時期である。同年に刊行された『五山堂詩話』巻五には、以下の記載がある。

今日の詩人は率ね皆な此に類す。一人有り、其詩の真たるを自負し、之れを詆る者有りて曰く、此は豈に真詩ならんやと。又た一人有りて謂ふ、二人の詩皆な真に非ずと。既にして之を察すれば、則ち其の人の作る所も、亦た復た真に非ず。展轉して相ひ攻め、終ひに窮極無し。若し真の道士の一睨に遇はば、則ち其の妖形を逃す所無からん。

今日詩人率皆類此。有一人、自負其詩為真、有詆之者曰、此豈真詩。又有一人、謂二人之詩皆非真、既而察之、則其人所作、亦復非真。展轉相攻、終無窮極。若遇真道士一睨、則無所逃其妖形矣⑥。

こういう論争は、古文辞派と清新詩派というような単純明快な対立図式ではなく、細部を見ると、少しずつ主張に相違が認められる。『宋百家絶句』に序文を寄せた六人の中、北山と詩仏は師弟関係であり、詩論はほぼ一致しているが、小さな相違点は存在する。亀田鵬斎は北山と同じく、井上金峨の門弟で、町儒者である。序文で展開された詩論は折衷的な立場を取り、あくまで己の詩風を肯定する立場から立論している。残りの三人（葛西因是、館柳湾、巻大任）は、詩仏と親しい交友関係にあるものの、いずれも唐詩を提唱した詩人である。よって、このように同じ文人グループであったにもかかわらず、その主張にはおのおの異同が見られ、それが正しく当時の文人間における競合関係をも反映しているかのようである。

㈡　山本北山・大窪詩仏の序文とその観点

まずは詩仏の師、山本北山と詩仏自身の序文を見てみよう。文化八年、北山はすでに六十歳であった。この翌年の文化九年に彼は没している。よって、この序文は、晩年の円熟した境地を反映したものと見なされる。

詩を作りて唐を学ぶ者　真有り偽有り。偽なる者は字々句々唐人を模窃し、其の詩　之れを譬ふれば糟を嚙るが若し。酒臭有りて酒味無し。真なる者　宋人の唐を取る是れなり。凡そ唐詩の宗とすべき者　其の詩　皆な真にして、漢魏を模さず、六朝を襲はず、能く自ら一代の盛音と成るに在るなり。故に宋人　唐を模さず唐を襲はず、皆な別に機軸を出だす。或ひは唐に類する者有りと雖も、之れを要するに其の腐爛の語を棄て、吾が清新の辞を修め、宋詩　唐と抗衡し、雁行に居ら〔遅れてついてゆく〕ざるは、能く真にして偽ならざるに由るなり。譬ふれば一臠の肉、聶せて軒と為し、縷して膾と為し、烹て羹と為し、燎いて炙と為し、宰製・称呼は各おの異なると雖も、其の肉たるの真を失はざるなり。宋を学ぶ者に至りても、亦た宜しく宋人の取る所の唐を取りて、其の詩をして真ならしむべし。然れども既に之れを学び、又た其の用字置句の間、或ひは宋人に類する有るも、其の真を妨ぐること無し。夫の偽唐家の句々腐を模し、字々爛を擬すものと、日を同じくして語るべけんや。是の故に彼の邦の先賢の詩を論ずる者に、偽唐詩の句　有れども、偽宋詩の目　無し。近時の偽風　大いに草なり。真詩　隆行して、人々宋に嚮ふを知る。嫉妬家は偽唐詩の醜名を悪み、偽を宋に分けんと欲し、移して偽宋詩の目を産む。殊に知らず　偽の之れを唐に謂ふべきにして、之れを宋に謂ふべからざるを。余　嘗て宋を学ぶの法を聞くに、多く宋詩を読み、滿腔　是れ宋、目　宋に熟し、口　宋に慣れ、之れを積みて諸れを心に得て手に応ずる有りて、少しも假偽に渉らず、筆を下せば則ち宋詩、斯に成ると云ふ。……

作詩學唐者有眞有偽、偽者字字句句模竊唐人、其詩譬之若嚙糟、有酒臭無酒味。真者宋人取唐是也。凡唐詩可宗者在其詩皆眞、不模漢魏不襲六朝、能自成一代之盛音也。故宋人不模唐不襲唐、皆別出機軸、雖或有類唐者、要之棄其腐爛語、修吾清新辭、宋詩與唐抗衡、不居于雁行者、由能眞而不偽也。譬猶一臠肉聶爲軒、縷爲膾、烹爲羹、燎爲炙、宰製稱呼雖各異、不失其爲肉之眞也。至學宋者、亦宜取宋人所取唐、而使其詩眞。然既学之、又其用字置句之間、或有類宋人、無妨其眞。與夫偽唐家句句模腐、字字擬爛、可同日而語乎。是故彼邦先賢論詩者、有偽唐詩之句、無偽宋詩之目。近時偽風大草、真詩隆行、人人知嚮宋矣。嫉妬家惡偽唐詩醜名、欲分偽於宋、移産偽宋詩之目。殊不知偽可謂之於唐、不可謂之於宋也。余嘗聞學宋法、多讀宋詩、滿腔是宋、

目熟于宋、口慣于宋、積之有得諸心而應乎手、不少渉假偽。下筆則宋詩、成于斯云。

山本北山によれば、唐詩を学んで作られた詩には、「真詩」と「偽詩」の別がある。「偽詩」とは唐詩の一字一句をひたすら模倣しただけの詩であり、「真詩」とはすなわち宋人が選び抜いた唐の詩のことである。それらは、漢魏六朝の詩を模倣したり踏襲したものではなく、独自の表現を確立しているものである。同様に、宋人は唐詩の「腐爛」した文辞を棄てて、自ら「清新」の語を発した。だから、真たりえたのだ、という。

古文辞派の「偽詩」と宋詩を標榜する彼らの「真詩」が「日を同じくして語」れない違いは、この文によると、主に二つある。一つは、古文辞派が学習対象とする唐詩は漢魏六朝の詩を模倣踏襲したものを含み、唐の「真詩」を学んでいないこと、もう一つは、模擬が第一義となっていて、今ここの自己を表現するという、作詩においてもっとも重要なことが目的になっていない、ということである。この観点は、『作詩志彀』においてもすでに示されており、彼の持論といってよい。

この問題は、南朝梁の劉勰（四六七～五二二）が、「復古」と「通変」の問題を論じて以来（『文心雕龍』「通変」篇）、つとに中国伝統詩学の重要論題となっているが、それが規範論争とからめて具体的に論じられ始めるのは、元以降のことである。とりわけ、明の七子を契機として、唐詩か宋詩かという唐宋優劣論が議論の中心になるに及んで、具象性を持ち、具体的な方法論も論じられるようになり、いよいよ熱気を帯びて語られる対象となった。山本北山の主張もその流れに乗っている。

北山の論はそのうち積極的な「通変」肯定の立場に立つものであるが、当時の巷間に所謂「偽宋詩」が、そもそも成り立ちがたいことを強調している点が興味深い。中国にもそのような呼称すら存在しないというのは確かである。北山は、宋詩が「通変」の象徴として、中国詩壇において見なされていた本質を見抜いている。復古派は自ずと唐詩を模擬するのであって、新奇を競う宋詩の精神と相容れないことを理解している。そして、北山は「偽宋詩」という呼称を持ち出すのは、宋詩の隆盛を嫉妬する輩の仕業であると結論している。

この序文を読めば明らかなように、北山は唐詩を全否定しているわけではない。たとえば、『作詩志彀』においても、

中郎が唐に詩無し、詩は宋の諸名家にありと云は、唐の詩を足ずとするには非ず。

宋の東坡・六一が唐を踏襲せざる所が、真の詩なりと云ふ意なり⑦。

「唐を足らずとするに非ず」と述べている。また、別の箇所でも、北山は、「中郎の趣を知らんと欲せば、老杜の詩を熟読せよ（欲知中郎趣、熟讀老杜詩）」と述べ、杜甫の詩のなかに、袁宏道の改革精神に通じるものを見出している。要するに、北山は、宋詩の「通変」、すわち詩風改革精神を何よりも重視していたのである。

次に、詩仏の序文を見てみよう。

世の唐詩を学ぶ者、宋を以て浅劣と為す。宋詩を学ぶ者、唐を以て腐臭と為す。是れ未だ唐宋の真詩なる者を知らざるなり。夫れ唐宋は一なるのみ。譬ふれば猶ほ父 業を創めて子 統を継ぐがごときなり。吾が友弘斎と其の族兄柳湾と唐詩を唱へ、晩唐を為し、中唐を為し、又た忽ち宋百家の絶句を選ぶ。人 或ひは其の乖忤を怪しむも、余 以て然らずと為す。夫れ唐宋は一なるのみ、何んぞ岐（わか）ちて之を二とす。若し其の異を論ずれば、猶ほ寒暑の四時を相ひ為し、之を一歳に非ずと謂ふがごとくにして可ならんや。此れ弘斎の宋詩に兼及せる所以なり。唐 已に四唐の目有れば、宋 豈に一宋ならんや。此れ百家を併取せる所以なり。世の唐宋を論ずるは必ず界限を立つ。世の宋詩を論ずるは、多く両三家を以て一宋を概す。弘斎の此の選 偏見固執の累無し。蓋し胸中 卓然として見（けん）有る者ならん。

世之學唐詩者、以宋爲淺劣。學宋詩者、以唐爲腐臭。是未知唐宋之眞詩者也。夫唐宋一而已矣。譬猶父創業子繼統也。吾友弘齋與其族兄柳灣唱唐詩、爲晩唐、爲中唐、又忽選宋百家絶句、人或怪其乖忤、余以爲不然。夫唐宋一而已矣、何岐而二之。若論其異、猶寒暑之相爲四時、謂之非一歳而可乎。此弘齋之所以兼及宋詩也。唐已有四唐之目、宋豈一宋乎哉。此所以併取百家也。世之論唐宋必立界限。世之論宋詩、多以兩三家概一宋。弘齋此選無偏見固執之纍、蓋胸中卓然有見者也。

周知のように、詩仏は宋詩、なかでも南宋三大家の詩を祖述したが、右の序文では、詩唐宋を分け隔てることなく「真詩」が存すると詩仏は見なしている。また、宋詩にも多様な風格があり、これを同一視するのはおかしいとも言っている。この詩歌観は、これと同年に記された、――門弟の高木龍洲（？-？、名信鞭、字士羊）の詩集『棲鳳楼詩集』のた

めに書かれた――序文にも、はっきり記されている。

予 平常 詩を学ぶの法を挙げて以て子弟に似(じ)して曰く、凡そ詩を学ぶの法、唐 学ぶべし、宋 学ぶべし、元明清も亦た皆な学ぶべし。既に学ぶの後、其の詩 唐なれば、則ち以為へらく吾が詩に非ずと。其の詩 宋なれば、則ち以為へらく吾が詩に非ずと。元明清なれば、則ち以為らく吾が詩に非ずと。夫れ詩 清新を以て務めと為し、性霊を以て主と為せば、自然に一家の言を成し、而る後 之れを後世に伝ふべし。是れを之れ吾の真詩と謂ふ、又た何ぞ唐宋元明清を以て為さんや、と。

予平常擧学詩之法以似子弟曰、凡学詩之法、唐可学焉、宋可学焉、元明清亦皆可学焉。既学之後、其詩唐也、則以為非吾詩矣。其詩宋也、則以為非吾詩矣。元明清也、則以為非吾詩矣。夫詩以清新為務、以性霊為主、自然成一家之言、而後可伝之於後世。是之謂吾之真詩也、又何以唐宋元明清為乎。

右の主張を要約すれば、詩の学習対象は、唐であれ宋であれ、はたまた元明清であれ、どれでも構わないし、いずれも学ぶべきであるが、創作した詩が学習対象と何ら変わらず、引き写しのように似通ってはならない、ということである。つまりは、己の個性を打ち出し、模擬模倣に終わってはならない、ということであろう。基調は、師、北山の詩論と変わらないが、北山の念頭には、やはり唐対宋という対立の図式が濃厚に残っているのに対し、唐か宋かという択一的な拘泥は、詩仏の考えには特段認められない。作り手の「性霊」が「清新」なる言葉できちんと表現されていること、それが彼にとっての「真詩」の条件であった。「通変」重視の詩論であることにおいて、師弟は固く繋がれてはいるが、詩仏の詩論は規範論争を超克し、師匠より一歩先に踏み出した観がある。

詩仏と北山の両者に見られるスタンスの違いの原因として、主に二つのことを想定できる。まずは両者の個性と職業意識の相違である。北山は詩人というより、やはり儒者であり、感情・情緒よりも論理・議論を好む。したがって、他者との論戦も現実との相剋もすべてを進んで受け入れ、それらのさまざまな緊張を背に、己の論理を研ぎ澄まし持説を構成し展開することが得意であり、彼自身もそれを己の真骨頂と考えていたであろう。一方、詩仏は専業文人であり、のびやかな環境のなかに身を置いてこそ本領を発揮するタイプであった。また、理論よりも実作において力を発揮した。総じて詩仏の気質は北山よりもず

っと温厚で、詩論も他者の説により多く耳を傾けた。

第二に、北山と詩仏の間には、十五歳の年齢差があり、彼らが受け入れた中国の「清新性霊」詩論それ自体に、時代的な相違のある可能性が指摘できる。北山の性霊説は、これまで述べてきたように、十六世紀後半、明の袁宏道のそれを踏襲している。一方、詩仏のそれは、十八世後半、清の袁枚からより大きな影響を受けた可能性がある。第九章に記したように、袁枚の『随園詩話』は、日本でも、文化元年に神谷東渓の手によって刊行されている。袁枚も袁宏道と同様「性霊」説を唱えたが、彼は唐詩か宋詩かという二項対立的なとらえ方はしておらず、また袁宏道のように「性霊」にこだわる余り技巧を否定する、というようなところもない。つまり、入口の規範論争にも、途中の技巧云々の風格・方法論にも、きわめて寛大な姿勢を示した。袁枚における「性霊説」は、結果としての実作が全てなのであって、入口やプロセスにはさほど重きを置かない。創作された作品に、作者の個性＝性霊が十分に表現されていれば、それが唐詩的であれ、宋詩的であれ、あるいは白描の詩であれ、典故のある詩であれ、技巧を多用した詩であれ、それは原則、問題にならない。よって、同じく「性霊説」でも、袁宏道と袁枚の間には相当の開きがある。

実際に影響関係があったか否かは、今後、慎重に分析を加えなければならないが、詩仏の認識する「性霊」の内実が、袁宏道よりも袁枚に近かったことは、認めてかまわないであろう。

㈢　亀田鵬斎・葛西因是の序文及び詩論

亀田鵬斎（一七五二～一八二六、名翼・長興、字国南・公龍等、通称文左衛門）は、山本北山と同門であり、親しい交遊があった。町儒者でありながら、詩仏等、当時の江戸の職業文人とも親しく交際した。序文が書かれたのが文化八年ならば、鵬斎は三年にわたる地方の旅を終え、江戸に戻ったばかりの頃であった。鵬斎は書を得意とし、人となりもその字に似て、豪放であった、という[8]。序の全文を以下に引く。

李唐より以後、宋明 各おの詩有り。而して其の一代の調、必ず期する所有り。宋蘇黄を期し、明 李王を期し、今　其の期する所を尊びて、概ね其の一代の諸家の作

を推奉し、其の期する所を鄙みて挙げて其の一代の諸家の作を唾棄す。皆な未だ詩家の金剛一隻眼を具へざる者なり。其の浩瀚雄渾の如きは、則ち期すべきなり。而して或ひは山魈木怪の悪むべき有らんや。其の茅狗飣餖の如きは、則ち期すべからざるなり。而して或ひは沖澹老成の称ふべき有り。然らば則ち詩を選ぶは瞎眼の能く験取すべきに非ざるなり。

李唐以後、宋明各有詩矣。而其一代之調、必有所期焉。宋期蘇黄、明期李王、今尊其所期、而概推奉其一代諸家之作、鄙其所期而擧唾棄其一代諸家之作、皆未具詩家金剛一隻眼者也。如其浩瀚雄渾、則可期也。而或有山魈木怪之可惡矣、如其茅狗飣餖、則不可期也、而或有沖澹老成之可稱矣。然則選詩非瞎眼可能驗取也。

鵬斎が右の文中で展開したのは、唐宋詩優劣論や真詩偽詩論争に直接言及することを回避したかのような論である。鵬斎は、宋と明の二つの時代にあって、理想と仰がれるべきは、それぞれ蘇軾・黄庭堅と李攀龍・王世貞であるが、今日、何れかの時代を推賞する者は、当該の時代の諸家を概ね推賞するが、もう一方の時代を唾棄し歯牙にもかけない……これは「金剛一隻眼」、すなわち真実を見極める目をまだもっていない人の振る舞いである、という。そして、彼自身の価値観、「浩瀚雄渾」、または「沖澹老成」[9]たる詩境こそが理想とすべき詩である、といっている。

明言は避けているが、彼は唐詩により多くシンパシーを覚えているようである。というのも、彼が批判する「飣餖」の傾向は、――「学人の詩」と評され、衒学的な特徴をもつ――宋詩においてより強く、「怪」も新奇な表現を追求する傾向が強い宋詩により多く見られる欠点だからである。鵬斎は北山と違って、こと文藝の方面ではより保守的で受動的な選択をしたのかもしれない。それは、彼が宋の代表として蘇黄を挙げ、明の代表として李王を掲げ、南宋三大家や三袁にまったく言及していないところにも現れ出ている。少なくとも、この序文を見る限り、当時の論争の渦中に巻き込まれたくはないという本音が見え隠れしている。

鵬斎と類似する考えを表明したのは、葛西因是（一七六四～一八二三、名質、字休文、通称健蔵）であった。葛西因是は藩士の出身で、天明年間、市河寛斎や柏木如亭と親しく交遊した（第四章参照）。詩仏ともむろん知り合いである[10]。文化八年の前後は、江戸に居り、林述斎の門人となっていた。彼は詩においては、唐詩を尊崇した[11]。彼の序文は、以下の通りである。

享元の詩人 明詩を喜(この)み、亦た唐詩を貴ぶを知る。今日の詩人 宋詩を喜み、或ひは唐詩を廃するに至る。今 唐詩を主張する者、館枢卿、巻致遠の二人のみ。屢しば唐詩を刻して之れを行ふ。致遠 今 又た宋百家絶句を刻行するは、何ぞや。曰く、詩人唐詩を学ぶこと、何れの代か然らざる。此の集も亦た宋家の唐詩なり、と。其の言 理無しと為さず。両宋三百二十年、雅笨・生熟・精粗・活滞、百家の詩格、遞ひに高偉・雅熟・精活有り、竟ひに骨を露(あらわ)にし肉少きの病を免かれず。笨生粗滞、醜怪鄙俚、之れを総じて旗亭壁上の歪筆に属す。唐の詩人 学問無く、宋の詩人 皆な学問有り。然り而して宋詩 唐詩に及ばざるは、其の学有るに坐すのみ。唐人 学無くして、其の詩 軽松にして自ら佳し。唐人の学有るもの李杜韓柳の如きは、適たま以て其の風騒を助くるに足り、未だ嘗て此れを以て手を棘(さ)し口を戟(さ)さ〔わざわざ晦渋にする〕ざるなり。今日の詩人 宋詩を学ぶは、其の醜怪鄙俚なるを喜むか、抑(そも)そも将(は)た「之乎者也」の、学者の口吻に類(に)るを喜むか、と。致遠 笑ひて答へず、却って余に強いて之れに叙せしめ、遂に讜言(とうげん)して曰く、唐詩を学ぶは上策なり。宋詩の唐調有る者を学ぶは中策なり。宋詩の醜怪鄙俚なる者を学ぶは下策なり、と。致遠が此の刻 中策を遺すを憾みて此に出すや。豈に其れ下策を之れ為さんや。

享元詩人喜明詩、亦知貴唐詩。今日詩人喜宋詩、或至廃唐詩。今主張唐詩者、館樞卿、巻致遠二人而已。屢刻唐詩行之。致遠今又刻行宋百家絶句、何也。曰、詩人学唐詩、何代不然。此集亦宋家之唐詩也。其言不為無理矣。両宋三百二十年、雅笨、生熟、精粗、活滞、百家詩格、遞有高偉、雅熟、精活、竟不免露骨少肉之病。笨生粗滞、醜怪鄙俚、總之屬旗亭壁上之歪筆。唐詩人無学問、宋詩人皆有学問、然而宋詩不及唐詩者、坐其有学耳。唐人無学、其詩軽松自佳。唐人有学如李杜韓柳、適足以助其風騒、未嘗以此棘手戟口也。今日詩人学宋詩、喜其醜怪鄙俚乎、抑將喜之乎者也、類学者口吻乎。致遠笑而不答、卻強余敘之、遂讜言曰、学唐詩上策也。学宋詩有唐調者、中策也。学宋詩之醜怪鄙俚者、下策也。致遠此刻憾遺中策而出於此耶。豈其下策之為哉。

因是の唐詩尊崇の意識は鵬斎よりはるかに強い。文化八年の当時、宋詩が流行し、唐詩を声高に提唱する者が、わずかに館柳湾と巻菱湖の二人くらいしかいなくなったのに、そ

の一人がとうとう宋詩の絶句選本を編集出版することに、半ば慨嘆するところから、この序文は始まる。文は因是と菱湖の対話形式によって記され、その中心に因是の持論が配せられている。因是はまず、宋詩に多様な風格があることを認めた上で、「露骨少肉」「笨生粗滞」「醜怪鄙俚」等の欠点があることを指摘する。そして、その最大の要因が「学問」にある、と説く。唐詩にも学識が盛り込まれることがないわけではないが、それはあくまで抒情の助けとして付随的に用いられているに過ぎないが、宋詩はことさらに詩を難解にしようとするかの如く学問が盛り込まれ、それが欠点に直結している、という。因是における唐と宋の序列ははっきりとしており、その持論をストレートに表現している。あまつさえ、宋詩に転向したかのごとき菱湖の口から、出版の「真の」目的を吐露させ、「宋詩の醜怪鄙俚を学ぶは下策なり」という一言まで引き出している。

鵬斎が直言を避けて、やんわりと唐詩支持を表現したのと異なり、因是は宋詩の欠点をはっきり指摘して、あからさまに唐詩支持を打ち出している。序文という形式を用いて、そのような宋詩の宣伝に力を貸そうとする同志に警鐘を鳴らしているかのようでもある。

以上のように、鵬斎と因是の両者は、宋詩選本に対する序文という条件のなかでも、北山や詩仏とは異なり、唐詩に重きを置く持論を展開している。

㈣　館柳湾・巻大任の序文及び詩論

館柳湾（一七六二～一八四四、名機、字枢卿、通称雄次郎）と巻菱湖（一七七七～一八四三、名大任、字致遠等、通称右内）の二人は従兄弟の関係にあり、ともに亀田鵬斎に学んだことがある[12]。二人の唐詩尊崇は古文辞派の唐詩尊重とは異なり、主に中晩唐の詩を重視する[13]。館柳湾は文化八年、五十歳であり、幕府の役人として穏やかな生活を送っていた。彼は当時、『金詩選』（文化四年）、『晩唐十家絶句』（同上）、『四詠唱和』（文化六年）、『晩唐十二家絶句』（同上）、『晩唐詩選』（同上）、『中唐十家絶句』（文化七年）等の書を陸続と編纂刊行していた。巻菱湖は主として書家として活動していた。この『宋百家絶句』は、書肆の求めに応じたものではあるが、むろん彼自身も普段から宋詩に関心をもっていたに違いない。この二年後、文化十年（一八一三）には、『篋中集』を出版し、十二人の二十四首の詩を選録している。そのなかには、江湖詩社の市河寛斎（一首）、菊池五山（二首）、大窪詩仏（一首）

の詩も収録している。

まずは、館柳湾の序文を以下に掲げる。

夫れ唐詩なる者、稻粱なり、芻豢なり、山餚海錯、嘉羞芳饌、八珍 咸な列し、五味 悉く備ふれば、朝夕に之れを供すとも、其の味 窮すべからず、又た焉くんぞ外慕有らんや。然りと雖も、口の味に於けるや既に膏潤に厭(あ)けば、時に淡泊を思ふこと、人の情なり。情の止む能はざれば、致遠も亦た染指せざるを得ず、則ち宋詩の講せざる能はざる所以なるか。……若し夫れ粟秕 揀(えら)ばず、芒・脱せず、炊洗 粗略にして、器皿 蕪穢なるに、以て性霊の真詩なる者と為せば、則ち野父村老の糞火爐頭に飢ゑを充たすの糲飰なるのみにして、豈に与に味を論ずるに足らんや、豈に与に詩を論ずるに足らんや。……

夫唐詩者、稻粱也、芻豢也、山餚海錯、嘉羞芳饌、八珍咸列、五味悉備、朝夕供之、其味不可窮也、又焉有外慕哉。雖然、口之於味既厭膏潤、時思淡泊者、人之情也。情之不能止、致遠亦不得不染指、則宋詩之所以不能不講歟。……若夫粟秕不揀、芒・不脱、炊洗粗略、器皿蕪穢、以爲性霊眞詩者、則野父村老糞火爐頭充飢之糲飰而已、豈足與論味哉。豈足與論詩哉。……

館柳湾は唐詩を山海の珍味がすべて揃った豪華で贅沢な料理に喩える。それを毎日食していても、けっして飽きることのない豊かな滋味があるが、人は贅沢な料理ばかり口にしていると、時には淡泊な食事も求めるようになる。菱湖が『宋百家絶句』を刊行する所以は、まさにそれである、と説く。次に、菱湖の選が優れていることを賞賛した（中略部分）後に、きちんと食材を選別せず、下ごしらえもせず、きれいな器に盛りつけすることせず、それが性霊を表現した真詩だと言われても、とてもそれを味わう気にはなれないと称している。つまり、味わうためには、まずそれなりの風格や格調・形式を備えていなければならないという考えであろう。したがって、柳湾の詩歌観は、「性霊説」とは相容れない部分を持っており、彼も本音のところでは、時代を席巻していた「清新性霊」の詩論に反発していたのであろう[14]。

最後に、編者である巻菱湖の自序を見てみる。

余は雅(もと)より唐詩を尚ぶ、又た旁ら宋元以下の詩を読み、頗る抄出する所多し。頃(このごろ)書肆の花房姓 宋代の詩を刻せんことを乞ふ。蓋し以て蒙を発くに便ならしめんと欲すればなり。余 乃ち抄出する所に就いて百家絶句四巻、千家絶句四巻を録して、之れに付す。詩 約(およ)そ略(ほ)ぼ千余首。

今 百家絶句の刻 先づ成り、或ひと余に謂ひて曰く、子 唐詩を奉崇し、今 復た宋詩を取れば、将に他人の背議するを如何せん、と。余 之に対へて曰く、ああ、子も亦た此の言を為すか。蘇東坡先生云く、詩を論じて必ず此の詩なれば、定めて詩を知る人に非ず、と。余 嘗て以て知言と為す。且つ近体の詩、孰か唐を学ばざる者ぞ。童蒙の詩を学ぶや、宋人より入手し、取りて以て初機と為す、未だ嘗て方便法門に非ずんばあらず。

吾 観るに 今世の詩を学ぶ者、其の弊 三有り、一は則ち王李の紕繆を画一し、宋を舎て明を取るなり。唐を宗とすと雖も、其の実 専ら七子を蹈襲し、是れ所謂 奴隷輿儓なる者なり。一は則ち唐詩 其の講慣する所に非ず、徒だ宋末の数家の詩を読むのみにして、好んで奇僻猥瑣なるに趨り、風情の託す所の何(いず)くに在りやを知らず。是れ所謂 邪魔外道なる者なり。一は則ち宋元以下を痛斥し、唐詩に偏執し、強弁伝会し、錯隙 太だ過ぎ、竟に作者の本意にして索然として味はひ無からしむ。是れ所謂 郢書燕説なる者なり。三者は各おの己の見る所を是とし、吹毛拉排して、視ること仇讎の如し、之れを均しくせば渠儂の襟韻 高からずして、未だ門戸の陋習を脱し盡くす能はざるに坐すのみ。

余の詩に於けるや、一も依倚する所無し。啻だに宋金元明のみならず、今人の作る所と雖も、其の合する者に逢へば、亦た将に録して之を存せんとす。況んや宋賢の唐を学ぶに於いて、其の得る所最も優れる者をや。子は是れ之れを察せず、却って吾に三者の弊を效ふを願ふや、と。

余雅尚唐詩、又旁讀宋元以下詩、頗多所抄出。頃書肆花房姓乞刻宋代詩、蓋欲以便發蒙也。余乃就所抄出錄百家絶句四卷、千家絶句四卷、付之。詩約略千餘首。今百家絶句刻先成、或謂余曰、子奉崇唐詩、今復取宋詩、將如他人背議何。余對之曰、烏呼、子亦為此言乎。蘇東坡先生云、論詩必此詩、定非知詩人。余嘗以為知言。且近體之詩、孰不学唐者。童蒙之学詩、從宋人入手、取以為初機、未嘗非方便法門也。吾觀今世学詩者、其弊有三、一則畫一王李之紕繆、舍宋取明、雖云宗唐、其實專蹈襲七子、是所

謂奴隷輿儓者也。一則唐詩非其所講慣、徒讀宋末數家詩、好趨奇僻猥瑣、不知風情之所託何在、是所謂邪魔外道者也。一則痛斥宋元以下、偏執唐詩、強辯傅會、錯隙太過、竟使作者本意索然無味、是所謂郢書燕説者也。三者各是己所見、吹毛拉排、視如仇讎、均之坐渠儂襟韻不高、未能脱盡門戸之陋習耳。余之於詩、一無所依倚、不啻宋金元明、雖今人所作、逢其合者、亦將錄而存之、況於宋賢之学唐、其所得最優者乎。子是之不察、卻願吾效三者之弊耶。

巻菱湖はこの選集を出版した経緯と意図を語っている。彼は唐詩尊崇派と見なされていたから、この書によって彼が宋詩推賞に転じたかの印象を抱いた時人はけっして少なくなかったであろう。予想されるそのような疑念や反響に対して、彼はある人の問いに答えるという形を採って、己の本意を説明している。

彼はまず、蘇軾の絵画論として著名な「書鄢陵王主簿所畫折枝二首」其一（『蘇詩合注』巻二十九）の二句を引用し、それを「知言」として引用し掲げる。蘇軾の詩は、もともと絵画の価値が「形似」にではなく「伝神」や「写意」にあることを強調したものであるが、その論の傍証として、詩に絶対的な型が存在しないことをこの二句で詠じている。何かの対象を詩で表現するときに、一つの描き方しかないと絶対視するのは、そもそも詩の本質を知らない者の謬見であると見なす見方である。菱湖はこの理論を援用し、己は唐詩を尊崇するが、それに固執するつもりはなく、自分の趣向に合致しさえすれば、宋金元明の詩、さらには今人の作だって推奨する、と断言している。

こういう彼の詩に対するスタンスを明確にしたうえで、文の半ばと末尾に、この書の編纂目的を潜ませている。末尾に、この書に収めた絶句が唐を学びなおかつその最も優れた作品であることをさらりと明言している。つまり、北山や詩仏の唱えた「清新性霊」とは一線を画するものであることを暗示している。そして、文の半ばでも、近体詩の入門として、宋詩がまことに都合が良いものであることを強調している。すなわち、菱湖の構えとしては、唐詩があくまで主であって、そこへと到る学習の階梯として宋人の絶句を用いる、というものであり、要は宋詩の独自性を明快に打ち出した宋詩鼓吹の選本ではない。

この序文のなかで、もっとも特筆に値するのは、当時の詩壇を三つに帰納し、その病弊を指摘した条であろう。

その三つとは、まず七子の説を金科玉条のように守る唐詩派で、唐詩を標榜しているが、その実、七子を踏襲し、彼らの奴隷のようになっているだけの一派。次に宋末の数名の詩

だけを読み、その「奇僻猥瑣」をもてはやして真似をし、詩の正道を理解しない邪道をゆく一派、第三に宋元以降の詩を排斥し、ひたすら唐詩に固執し、牽強付会の説を繰り返す一派である。第一の流派は、蘐園学派の詩人たちを念頭に置いているであろう。第二の流派は、江湖詩社たちの主張を念頭に置いているであろう。第三は、蘐園学派以外の唐詩尊崇派を指すであろう。

序を記した五名は、序文を依頼したくらいであるから、少なくとも右の三つの分類には該当しないと、菱湖は見なしていたのであろう。しかし、この五名も大枠としてはその何れかのグループに属している。よって、これらの批判は、菱湖自身をも含め、やがては己自身にも返ってくる性格を帯びている。そういう際どい批判を展開しつつ、菱湖は門戸の見に毒され、詩の本質を見失うことの弊害を説いたのであろう。

(五)　結び

巻菱湖の『宋百家絶句』は、もともと唐詩尊崇派の詩人によって編纂されたものだけに、かえって当時の唐宋詩をめぐる認識の多様性をあぶり出す結果をもたらした。序を寄せた五名は、菱湖から序を依頼されたとき、おそらくそれぞれが依頼者の意図を推し量ったに違いない。すでに交遊のある知人からの依頼であることを前提に、彼らはそれぞれの持論と本書の関わりについて、如何に書くべきかを熟考したであろう。

宋詩派の北山や詩仏にしてみても、ある種の意外性を以て本書を迎えたかもしれない。彼らにとっては、歓迎すべき書の出現に違いないが、編者が唐詩派であることを熟知しているがゆえに、彼らも唐詩との絡みの中で、序文を認めている。

唐詩にシンパシーをもつ他の三名は、志を共有する仲間があたかも別の道を歩み始めたかのごとき危惧を抱いたかもしれない。三者三様の書き方で、唐詩の優位性を説いているところに、それが滲み出ている。とりわけ、葛西因是は、その疑問を序文のテーマにしている。

巻菱湖の『宋百家絶句』の序文六篇は、以上のように、文化年間の江戸詩壇を代表する六名の詩人が、唐宋詩の問題をめぐって、節度を保ちながら論戦を展開したものである[15]。そのそれぞれが、論敵を意識しつつも、平生の交友関係を踏まえて、むやみな感情論には

趨らず、自制しつつ論を展開しているようで、まことに興味深い。

実は、文化年間以降、このような唐詩か宋詩かという論争はあまり見られなくなった。そもそも、巻菱湖の『宋百家絶句』の序文に見られる当時の認識は、すでに唐詩か宋詩かというような択一的な規範論争ではなくなっている。どちらにより重きを置くかという相違は認められるものの、双方がすでに一定の歩み寄りを見せている。これはちょうど、明の中頃から始まった唐詩宋詩の規範論争が、清の半ば袁枚の頃になると、落ち着きを見せたのとよく似ている。規範論争の末に、唐詩が全て是というわけでもなく、宋詩が全て非というわけでもないという平衡感覚が自然と生まれるようになってきたのではないだろうか。

詩仏に話を戻せば、詩仏が作詩を習い始めた頃、北山や寛斎に師事し、新しい潮流が生まれゆくのを自ら間近で見聞し、自らも改革の旗手として「清新性霊」の詩を創作して、宋詩流行の流れを作った。彼は我が道の正しさを信じて疑わなかったであろうが、その道のりはそもそも尊崇する二人の師が用意したものであって、彼自らが切り開いた道ではなかった。その彼も、宋詩を学ぶなかで、宋詩が唐詩を基礎とし、あるいは肥やしとして発展したことを学んだであろうし、袁枚の詩論にも接し、性霊詩説の多様性をも学習したであろう。かつまた、己の名声が大きくなるにつれ、交遊半径も拡がり、相異なる詩学認識をもつ者たちとの交遊も増えてきたであろう。そういう日常のなかで現実を学習した結果が、本章で紹介した彼の序文の骨格を成しているように、筆者には感じられる。

また、詩仏たち職業詩人にとっては、巷間の作詩熱がどんどん高まり、作詩人口が増加する現実の方が、理論云々よりもはるかに重要であったに違いない。作り手の絶対数が増加すれば、価値の多様化が起きるのは理の当然である。そして、彼らが生き延びていくためには、時の流れに棹さして、そのような多様な声に耳を傾ける必要もあったであろう。それゆえ、侃々諤々の規範論争が鳴りを潜めたのも、漢詩創作が世俗に根を張ったがゆえの、まことに自然な発展的流れである、と解釈できる。

文化八年の巻菱湖『宋百家絶句』の序文論争は、江戸後期の漢詩壇が体験した幾つかの結節点の、最後の現れだったと言えるかもしれない。

注釈

①『五山堂詩話』巻一、『新日本古典文学大系』65、岩波書店、一九九一年八月、五二五頁。

②　前掲『五山堂詩話』（一六二頁）の注釈を参照。

③『五山堂詩話』巻一に「世之稱唐明者、取材有限、規模已定、譬如棟梁楣楣、畢備、然後營宮室、雖拙工、結構原自不難、至宋元、則不然、譬如造凌雲之臺、架空構虚、出人意表、精巧自非輸般、安能得措手、宜矣偽唐詩之多、而真宋詩之少也」（前掲『五山堂詩話』、五三〇頁）とある。

④『五山堂詩話』巻一に「均之偽也。唯作偽唐詩者、刻鵠類鶩、其言雖笨、猶且不失君子體統。宋詩失真、則畫虎類狗、其言庸俗淺陋、與誹歌諺謡又何擇焉。竟使耳食者謂宋元諸詩率皆如此而併薄之也。乃嘐然自稱宋詩、妄不亦甚乎。其病坐不才無識而已。故學宋詩、必須權衡、唯有才識可以揣度、不然、則鄙俚公行、幾亡大雅、不如作偽唐詩之為猶愈也」（前掲『五山堂詩話』、五三〇、五三一頁）とある。

⑤『北林遺稿』巻五、山陽新報印刷部、一九三六年一月、六〇三、六〇四頁。

⑥『五山堂詩話』巻五、『詞華集日本漢詩』第二巻、富士川英郎編、汲古書院、一九八三年九月、四一五頁。

⑦『作詩志彀』、『日本詩話叢書』第八巻、鳳出版、一九七二年六月、二〇頁。

⑧『五山堂詩話』巻七に「龜田鵬齋先生以宿儒為斯文領袖、豪放不羈、縱酒偃蹇、詩多洸洋自恣語」と言っている（『詞華集日本漢詩』第二巻、四三四頁）。

⑨南宋・厳羽の『滄浪詩話・詩辨』に「詩之品有九、曰高、曰古、曰深、曰遠、曰長、曰雄渾、曰飄逸、曰悲壯、曰淒婉」とある（『滄浪詩話校釈』、郭紹虞校釈、人民文学出版社、一九八三年八月、七頁）。

⑩詩仏の「贈清溪老人」（『詩聖堂詩集初編』巻八所収、文化四年の作）という詩の自注に「第一句因是道人句也」とある（『詩集日本漢詩』第八巻、富士川英郎、汲古書院、一九八五年三月、四一三頁）。

⑪『五山堂詩話』巻二（文化五年〔一八〇八〕刊）に「余論作文、獨心折於因是、至詩則趨向小異。因是專宗唐詩、大要本金聖嘆法、而間有出入者、一日酒間論詩、亹亹生風。余始尚不應、既而相迫曰、果首肯否？余徐答曰、第俟五里霧霽矣。大笑而止」。また、葛

西因是の唐詩推重について、池沢一郎氏の「葛西因是の唐詩推重―「通俗唐詩解序」と「柏山人集序」―」（『早稲田大学大学院文学研究科紀要』第五八輯、二〇一二年、三～一九頁）および「葛西因是の唐詩論―館柳湾編書の序文と「辨唐詩」―」（『江戸風雅』第七号、二〇一三年一月、五九～七八頁）を参照。

⑫亀田鵬斎の「宋百家絶句序」の省略した部分に、「館機巻大任二人、嘗從余而遊、最長于詩學、偕主張唐詩、建赤幟于騒壇而主夏盟」とある。

⑬『五山堂詩話』巻三（文化六年〔一八〇九〕刊）に「越後館機、字樞卿、號柳灣、巻大任、字致遠、號弘齋、一號菱湖。二人同宗中晩、而小異其趣。柳灣仕為小吏、半世為風塵所累、然吟詠不絶、和雅醞藉、詩似其人……中略……弘齋於書、六書八體無所不該、殊為有識所推賞、詩自清雋、優入作者之域」（『詞華集日本漢詩』第二巻、三八三頁）とある。

⑭館柳湾が「篋中集序」（文化十年〔一八一三〕書）に「近世江都一二詩匠厭踏襲摹擬之風、而唱性靈清新之説、以誘後進焉。慕習之徒、一時相和、日趨流易、惟新奇是務、不知其喪於雅正、咄嗟談笑、走筆成章、不論風趣格調、以多為富、鄙俚猥雑、僻劣瑣碎、無所不至、豈足以傳於大方乎。汚惑之聲、幾使聞者掩其耳矣」と言っている。

⑮この年、菊池五山が唐宋詩についても議論を発したことが次の資料から分かる。文化八年に刊行された『五山堂詩話』巻五に、唐宋詩の区別について、以下のように論じた。「唐人詩不勝學、宋人學不勝詩。唐詩溫潤、有春水四澤之象、宋詩磊砢、有冬嶺孤松之象。唐則滿朝詩人、宋則不過數家、只斯數家、優足與全唐詩人抵敵。此宋詩所以稱雄也」、「唐宋之辨、人動問及、余亦難言之。近讀清蔣心餘集、得其辨詩五古、論得痛快、極獲我心。今抄傳以代鼓舌之勞。詩云、唐宋皆偉人、各成一代詩。變出不得已、運會實迫之。格調苟沿襲、焉用雷同詞。宋人生唐後、開闢實難為。一代只數人、餘子故多疵。敦厚旨則同、忠孝無改移。元明不能變、非僅氣力衰。能事有止境、極詣難角奇。奈何愚賤子、唐宋分藩籬。哆口崇唐音、羊質冒虎皮。習為廓落語、死氣蓋伏屍。撐架陳氣象、桎梏立威儀。可憐餒敗物、欲代郊廟犧。使為蘇黄僕、終日當鞭笞。七子推王李、不免貽笑嗤。況設土木形、浪擬神仙姿。李杜若生晩、亦自易矩規。寄言善學者、唐宋皆吾師」（『詞華集日本漢詩』第二巻、、四一〇、四一一頁）。

V　大窪詩仏の詩

―中国詩との比較―

第十一章　大窪詩仏の「村居四時雑題十九首」

—范成大「四時田園雑興」との関わり—

㈠　はじめに

本章では、大窪詩仏の第一詩集『卜居集』に収められた、「村居四時雑題十九首」を採り上げ、詩仏の田園詩の特徴を考察する。後述するように、この組詩は、南宋・范成大の「四時田園雑興六十首」の形式を襲った作例であり、専業詩人として歩み始めて間もない頃の詩仏が、どのように南宋の田園詩を学んだかを今日に伝える好箇の素材である。と同時に、彼一人に止まらず、江戸の清新性霊派詩人が、南宋詩からいったい何を学びとり自家薬籠中のものとしていったのか、という問いかけに、具体的な示唆を与えてくれる作品群である、といってもよい。本章では、この初期の組詩の分析を中心にしながら、併せて後年の田園詩についても言及し、さらに関連の諸問題を考察する。

㈡　詩仏の青少年期と『卜居集』

大森林造氏は、『卜居集』所収の詩に、「山居・村居・山荘・田家などを詠んだものが圧倒的に多い」と指摘し、「この詩集は、自分の生活を詠むというより、幽棲への夢やあこがれを詩に託しているような作品が多すぎる」①と総括している。

第一詩集に田園詩が多い直接の原因はおそらく、後述するように、彼の属した詩人グループの詩歌観と深い関わりがある。しかし、その創作を可能にした遠因は、彼の幼少期の生活環境と体験にあるであろう。詩仏は江戸で生まれ育ったわけではなく、常陸国久慈郡池田村（茨城県）に生まれ、数歳で同郡の大久保村に移住し、幼少期の十数年間を常陸久

慈郡の田園に包まれ育っている。幼少期の詩仏のことを記した文献は極めて少ないが、鈴木碧堂の『大窪詩仏』（鈴木碧堂著、珂北郷土研究会、一九三七年七月）には、現地の伝承が記されている。それによれば、詩仏は「好んで付近の田畑を荒」らす腕白な少年であったようだ。幼少期に駆け回った常陸の田園風景は、きっと詩仏の記憶の奥処に刻み込まれたことであろう。

十代の後半、詩仏は江戸に出て、すでに小児科医として開業していた父の許に身を寄せたが、寛政二年（一七九〇）、二十四歳の時に、早くも父を亡くしている。大田錦城の「玉池精舎の記」（『春草堂集』巻十六）によれば、「天民、少き時に家産を蕩尽し、流離顛沛、東西に奔走す」とあるように、父の亡き後、詩仏青年は江戸の繁華に心を奪われ、一時、放蕩の日々を送ったようである。文化十年（一八一三）に、詩仏が記した「淡斎百律序」（国文学資料館蔵本）には、父が没し、遺産を食い潰した前後の様子が以下のように記されている。

余が家　医を以て業と為す。少き時　父　教ふるに医方を以てすれども、余　医に拙なくして、逃れて詩に帰すも、終歳　局促として、債を索むる者　門に絶えず、詩　能く人を窮せしむるに非ずや。

余家以醫爲業、少時父教以醫方、而余拙於醫、逃而歸於詩、終歲局促、索債者不絶門、非詩能窮人乎。

努力不足か、あるいは適性がなかったのか、彼は家業を継がず、専業詩人の道を歩み始めた。しかし、借金取りが後を絶たず、一年中縮こまって生活していた、という。ただ、右のような困窮生活も幸いに長くは続かず、ほどなく詩名が広がり、詩人として生きていけるようなった。

第一詩集は、寛政五年（一七九三）に刊行され、おおよそ寛政二年から同五年までの作品を収める。第四章でも記したように、詩仏は二十二歳の頃（天明八年〔一七八八〕）、山中天水に入門して儒学を学び始め、翌年、市河寛斎が開いた江湖詩社に加わった。そして、二十四歳の時（寛政二年）、父と天水の没後に、山本北山の奚義塾に入った。

したがって、『卜居集』所収の作品は、父の死後、彼が詩人への転身を決意し、専業詩人として歩み始めたばかりの数年間の作が収められていることになり、すべての詩が、原則、江戸において作られた、と考えてよい。集名は、おそらく巻頭第一篇を飾る七律「卜

居」をそのまま用いたものであろう。

四十歳以前、とりわけ三十歳までの詩仏の足跡は、不明なところが多いが、この「卜居」詩については、先行研究によって、品川の既酔亭に転居した時の作、とされている（揖斐高『市河寛斎　大窪詩仏』一八三頁。岩波書店、江戸詩人選集第五巻、一九九〇年七月）。寛政三年（一七九一）前後、詩仏二十五歳の頃である。

江戸時代の品川は、東海道第一宿場であり、都会の喧噪にすぐ隣接する地域ではあったが、東京湾に臨む風光明媚な土地柄ゆえ、大名の別荘が多い場所であった。とはいえ、むろん田園風景が一面に拡がる場所でもなかった。したがって、もしも初期の田園詩の多くが、品川の既酔亭において創作されたのだとすると、その住環境が直接、その創作を促したわけではないことも容易に想像される。そこは、都会の喧噪こそないにせよ、長閑な田園風景が拡がる場所ではなかったからだ。

よって、当時の彼が田園詩の創作に掻き立てられたのは、直接的には彼が属した詩人グループの詩歌観と密接な関わりがあるであろう。当時の詩仏は、山本北山や市河寛斎に導かれるまま、南宋三大家（范成大、楊万里、陸游）の詩を鋭意学習していた頃であった。そして、南宋三大家は、いずれも田園の日常を細やかに描き出し、三者三様に独自の境地を切り拓いた田園詩人でもあった②。なかでも、范成大の「四時田園雑興」は、晩年、故郷蘇州の郊外にある石湖の畔に別墅を構え、周辺の田園を年間通じて定点観察し、すべて七言絶句による計六十首の組詩の形で世に問うた意欲作であり、後世の田園詩に多大なる影響を与えている。

したがって、第一詩集に田園詩が多い理由は、当時、南宋三大家を学ぶ過程で、詩仏や彼の師友たちが自ずと着目していた題材が田園であった、ということを示唆する。とりわけ、詩仏の「村居四時雑題十九首」は、范成大の「四時田園雑興」の影響下にある作例だけに、その象徴的意味は大きい。詩仏は、おそらく南宋三大家の田園詩における素材や題材の選定や句法に学びつつ、自らの遠い幼少期の原風景を辿って、これら最早期の田園詩を構想していたのではないだろうか。

㈢　『卜居集』と田園詩

中国において田園を描いた詩は、遠く『詩経』にまで遡る。しかし、それがジャンルとして確立するのは、東晋の陶淵明以後のことである。唐に入ると、そこに謝霊運を起源とする山水詩の流れが合流し、山水田園派なる風格も形成された。いわゆる「王（維）孟（浩然）韋（応物）柳（宗元）」の系譜である。なかでも、王維は、他の三者が原則として移動を繰り返し、一所に長期滞在しなかったのとは異なり、都・長安にそう遠くない輞川の地に荘園を購得し、長きにわたってそこを吏隠の拠点とした。彼は荘園の所有主であったせいか、田園に加えて、己の居所である山荘も田園詩のなかに取り入れた③。それゆえ、山水と田園の融合という新たな田園詩のスタイル確立にもっとも寄与した詩人といってよい。この唐代の新たなる展開を踏まえ、後世、田園詩は原則として、詩題に「田」、「園」、「荘」、「村」、「農」、「野」、「田家」、「田舎」等の語が含まれ、農家や漁民の日常生活や田園風景を描写した詩を指すようになった④。

右の原則に照らすと、『卜居集』には下記のような「田園詩」が計六十二首含まれている。

○「山荘十首」（五律）
○「村居」（七律）
○「山居三十首」（七律）
○「田家二首」（七絶）
○「村居四時雑題十九首」（七絶）

すべてが近体詩で、連作が多い。しかも、興味深いのは、詩仏の田園詩は、第一詩集の『卜居集』に集中し、他の詩集では、必ずしも多くないという点である。たとえば、『詩聖堂百絶』には、わずかに「山居」の一首のみしかなく、『詩聖堂初編』⑤には、「村居晩秋」（巻四）、「春日田園」（巻五）、「村中晩歩」（巻六）、「湖村晩興」（巻七）、「山居雪後」（巻八）、「村居書喜」の併せて六首、『二編』には「秋日村居漫興」（巻十）の一首のみ、『遺稿』には「秋夜山居分韻」（巻四）、「春日耕者」（巻六）、「秋日山斎」（巻六）の三首だけであり、すべてを合算しても、十一首にしかならない。よって、『卜居集』の特徴が、田園詩の多さにある、ということもできる。

まず、詩仏自身の言説を検討しよう。彼は『詩聖堂詩話』のなかで、この詩集の刊行に

ついて次のように触れている。

余 初めて詩を作るとき、独立して倚る無し。後、高蒙士に因りて、寛斎先生の江湖社に入り、舒亭・梅外・蠖斎・娯庵・伯美の諸人と交はるを得たり。又た中野素堂の将に『晴霞亭遺稿』を刻せんとするに及んでや、余を引きて北山先生に謁せしむ。余の知を先生に受くるは、詩を職とするの由にして。今を距つること十余年なり。『卜居集』二巻有り。皆な是れより前に作る所なり。癸丑の歳、人の勧めに因りて梓に上す。今に至るまで臍を噬めども及ばざるなり。

余初作詩、獨立無倚、後因高蒙士、得入寛齋先生江湖社、與舒亭・梅外・蠖斎・娯庵・伯美諸人交、又及中野素堂之將刻晴霞遺稿也、引余謁北山先生、余之受知於先生、職詩之由、距今十餘年。有卜居集二卷。皆前是所作。癸丑之歳、因人勸上梓、至今噬臍不及也[6]。

右文の「皆な是れより前に作る所」というのは、事実に合わない。右の文脈だと、あたかも『卜居集』所収の詩が、すべて江湖詩社に入り山本北山の知遇を得る以前の作品であるかのように読みとれるが、実際にはその逆で、江湖詩社に加わり奚疑塾に入った後の作品が集の中心をなしている。

詩仏が奚疑塾に入ったのは、寛政二年（一七九〇）のことであるが、たとえば、巻頭第一篇の「卜居」は、前述の通り、寛政三年前後の作であった。そのほか、所収の「夏夜同北山先生、山本公行、山田伯方、江間徳人同遊」、「北山先生孝經樓」等の詩は、明らかにみな北山に知遇を得た後、すなわち寛政二年以後の作である。ほかに、「送中野子興遊熱海温泉遂歸勢州」という詩も収められているが、この詩の自注に「時臭蘭甲集成、同會奚疑塾評論判議」とある。『臭蘭稿甲集』は寛政五年に刊行されているので、この詩も同年の作と考えられる。ということは、『卜居集』には刊行寸前の寛政五年の作も収録されていることになり、「皆な是れより前に作る所」というのは、明らかに正しい事実を伝えてはいない。おそらく詩仏は、早期の作に未熟さを感じていたがゆえに、これらを半ば強引に作詩に本腰を入れる前の習作という位置づけにしようと考えたのであろう。

本題に戻る。『卜居集』の、田園詩が多いという特徴についてであるが、実は同時期に、詩仏の交遊ネットワークのなかで、この種の題材が盛んに詠われている。たとえば、以下のようである。

▽山中天水『晴霞亭遺稿』（寛政四年刊）
・「秋日田家」
・「卜居二首」
・「次中野子興新秋村家韻」
・「隠居五首」
※・「大窪天民次余隠居韻仍用前韻又賦五首」
・「次中野子興隠居韻七首」
・「幽居春事」

▽『臭蘭稿甲集』（寛政五年刊）
・中野子興「春日田家」
・山田子言「山家閨怨」
※・中井敬義「次韻天水先生隠居之作五首」
・岡村士幹「村家」
・阪井子衷「田家飲」
・真里穀真君「山居」
・大内寛夫「山居春意」
・鷹野忠人「村家飲」、「山家閨怨」
・牛窪雪「山家二首」、「山家閨怨」

▽大田錦城『錦城百律』（享和二年刊）に
・「幽居」
・「山居」
・「隠居」十首
・「山居」六首

▽匹田柳塘『自怡斎吟稿』（写本）
※・「山居三十首大窪天民韻」

これらの作例が示すように、彼らの間では田園詩が好んで詠われている。「※」印を附したものは、詩仏の作が唱和の中心となった作例である。このように、田園詩の多さは、ひとり詩仏にのみ見られる現象なのではない。

㈣「村居四時雑題十九首」と「四時田園雑興」

前節までに、詩仏の第一詩集『卜居集』の特徴が田園詩の多さにある点を指摘した上で、それが必ずしも彼一人の個性によるわけではなく、当時の彼が属した作詩グループに共通する傾向であったことを述べた。つづいて、この時期を代表する田園詩の組作「村居四時雑題十九首」の分析を中心にして、より具体的に詩仏の田園詩を考察してゆきたい。

＊

まず、田園の四季を連作によって詠ずるという形式は、宋代以降普遍化したものである。北宋中期、梅堯臣（一〇〇二～六〇）の「田家」（天聖九年〔一〇三一〕の作。「四時」という自注がある／『梅堯臣集編年校注』巻一、五律、四首）という連作が最早期の作例といってよい。その後、梅堯臣は最晩年（嘉祐五年〔一〇六〇〕）にも、欧陽脩（一〇〇七～七二）との間で、

・欧……「歸田四時樂春夏二首」（『居士集』巻八、七古）

・梅……「續永叔歸田樂秋冬二首」（『梅堯臣集編年校注』巻三十、七古）

というように、二人で「四時」を二季ずつ詠み分け組作を完成させている。そのほか、郭祥正（一〇三五～一一一三）に「田家四時」（五律、四首）、道潛（一〇四三～一一〇六）に「次韻黄子理宣徳田居四時」（五古、四首）と「田居四時」（五律、四首）、賀鑄（一〇五二～一一二五）に「和崔若拙四時田家詞四首」（七絶、四首）、華鎮（？～？）に「田園四時」（七律、春二首、夏缺、秋二首、冬三首の計七首）等の作例がある⑦。

南宋では、「中興四大家」と呼ばれる、范成大、楊万里、陸游、尤袤は、いずれも農村生活を活写し、当時ならびに後世に多大な影響を及ぼした。だが、「四時」の組作ということになると、范成大の右に出る者はいない。范成大は淳熙十三年（一一八六）、六十一歳の時、「四時田園雑興」を完成させた。「春日」、「夏日」、「秋日」、「冬日」各十二首、さら

に「晩春」の十二首を加え、計六十首をすべて七言絶句によって詠じている。

南宋が元に滅ぼされた後、浙江浦江の月泉吟社が懸賞つきで近在の詩社に働きかけ、作詩コンクールを催したが、その時の詩題が「春日田園雑興」であった（詩型は律詩）。この一事によっても、その影響の程が知られる。

＊　＊

日本でも、詩仏以前に、伊藤東涯の「田園四時雑興」四首や、六如の「嵯峨別業四時雑興三十首」があるが、前者はわずか四首に過ぎず、後者はもっぱら別荘や周囲の山水が記されるばかりで田園の風景がほとんど描かれていない。また、春夏秋冬の別によってグループ分けしておらず、詩型も七律である。したがって、厳密にいうと、両者はともに范成大の「四時田園雑興」の形式を踏襲した作例とは見なし難い。

他方、詩仏の「村居四時雑題十九首」は、すべて七絶を用い、「早春」（五首）、「晩春」（六首）、「夏」（三首）、「秋」（三首）、「冬」（二首）から成る組詩となっており、「晩春」の一項を加えたところも、范成大の構成に近い。ただし、詩題に小異が認められるように、両者が全く同じなわけでもない。題材や内容の点でいうと、范成大の詩には、社会風刺や文明批判的な内容が散見されるが、詩仏の詩にはそのような作例は見当たらない。

范成大の「夏日田園雑興」其の十一では、

采菱辛苦廢犂鉏　采菱 辛苦にして 犂鉏を廃し
血指流丹鬼質枯　血指 丹を流して 鬼質 枯れたり
無力買田聊種水　田を買ふに力無くして聊か水に種うるに
近來湖面亦收租　近来 湖面も 亦た租を収む

と詠じ、貧農が田畑を買えず、湖で菱を栽培しなんとか糊口を凌いでいたが、湖面も税の対象になった、と時政への批判を滲ませている。また、「秋日田園雑興」其の二では、

朱門巧夕沸歡聲　朱門 巧夕 歓声沸き
田舍黃昏靜掩扃　田舎 黄昏 静かに扃を掩ふ
男解牽牛女能織　男は解く牛を牽きて女は能く織れば
不須徼福渡河星　須ひず 福を河を渡る星に徼むるを

都市と田園の七夕を対比的に描き、農村の男女は立派に仕事しているから、都会の金持ちの娘のように、七夕の夜、星に「乞巧」する必要などない、と文明批判を展開している。

しかし、詩仏の作にはこのような批判はまったく描かれていない。その原因は、おそらく范成大が士大夫詩人であり、詩仏が布衣であったという、詩人の社会的地位の相違によるものであろう。詩仏が描いたのは、もっぱら季節の移ろいとともに変化してゆく農村の風景や農家の風俗ばかりであり、醇乎たる閑適の世界であった。

㈤　「村居四時雑題十九首」の春の詩

全十九首を解釈して、実際に詩の内容を見てみよう。

【早春】

其一

青松翠竹挾門垂　青松　翠竹　門を挾みて垂れ
聊覺朝暾影更遲　聊か覚ゆ　朝暾　影　更に遅しと
一領綿衣新著了　一領の綿衣　新に著け了はり
閑攜童稚謁叢祠　閑かに童稚を攜へて　叢祠に謁す

この詩は元日の風景を描写したものである。第一句は歳神を迎えるために、松と竹を戸口の両側に飾る「門松」を示している。江戸後期の門松は、竹の先を短く切り揃えずに三メートル近い成木をそのまま戸口の両脇に立てたようである。第二句は、竹が初日を遮るため朝の訪れが遅く感じられることを言うのであろう。後半は初詣を詠じている。中野子興はこの詩に次のようなコメントをつけている。

真率にして喜ぶべし。歳首　門戸に松竹を立つるは邦俗なり。『歳華紀麗』に云ふ、松は高戸を標す、と。『董勛問礼』に云ふ、松枝を戸に繫ぐ、と。彼の方も亦た之れ有るなり。

真率可喜、歳首立松竹於門戸、邦俗也。歳華紀麗云、松標高戸、董勛問禮云。繫松

枝於戸、彼方亦有之。

『歳華紀麗』は、唐・韓鄂の撰とされる歳時記。『董勛問礼』は、魏・董勛の『問礼俗』のこと。同様に歳時記である。

其二

冰雪春消浪漲溪　冰雪　春　消して　浪　渓に漲(みなぎ)り
孤村糞火隔楊隄　孤村の糞火　楊隄を隔つ
農書閲罷還牽杖　農書　閲し罷はりて　還た杖を牽き
試伴丁男蹈麥畦　試みに丁男を伴ひて　麦畦を蹈む

この詩は、二月の「雨水」の頃の情景を描写している。「雨水」は二十四節気の一で、太陽暦の二月十九日頃である。この時期、河川は雪解け水を集めて増水する。第一句はそれを詠じている。第二句は、その川向こうの村の焚き火を遠望したもの。「糞火」とは乾かした牛糞を燃料として起こした火をいうが、これは唐の禅僧、懶瓚の故事を踏まえる。相國鄴公李泌が懶瓚に拝謁したところ、

瓚　正に牛糞の火を発し、芋を出だして之れを啗(くら)ふ。良や久しくして乃ち曰く、「以て地に席すべし」と。啗ふ所の芋の半ばを取りて以て焉れに授く。李　跪捧して尽く食ひて謝す。李公に謂ひて曰く、「慎んで多言する勿かれ、十年の宰相を領取す」と。瓚正發牛糞火、出芋啗之。良久乃曰、可以席地。取所啗芋之半以授焉。李跪捧盡食而謝。謂李公曰、慎勿多言、領取十年宰相（『宋高僧伝』巻十九「唐南嶽山明瓚伝」）。

蘇軾も「除夜訪子野、食燒芋、戲作」という詩（『蘇詩合注』巻五十）のなかで、この故事を用いている。第三、四句は「麦踏み」のことを詠じている。農作業に疎い詩人は、農書をまず読み、知識を得た後に、元気な若者を連れて麦踏みに出かける。「丁男」は成年男子のこと。この詩が作られた頃、詩仏にはまだ成人した男子はいなかったから、老後の己を仮想しての表現かもしれない。

其三

杏花風節雨如絲　杏花 風節 雨 糸の如し
撿曆先知下種時　暦を撿して 先づ知る 種を下すの時
爐火紅殘檐滴細　炉火 紅 残して 檐滴 細たり
暖衾一夜夢春池　暖衾 一夜 春池を夢む

第一句「杏花風」は、二十四番花信風で十一番目の風であり、「雨水」の第二候に当たる。この時期は種蒔きの直前だが、前の詩と同じく、農作業に不慣れな詩人は、暦を調べて種蒔きの時期を知る。

後半の二句は、春まだ浅い頃の寒気と、屋内の温もりを詠じ、細やかな筆致である。第三句の「爐火紅殘」は、夜が更けてきたことをいうのであろうか。おそらく寝入りばな、詩人は布団にくるまりながら、軒端から滴る雨だれの微かな音に耳を傾けている。

第四句「春池」は、鍾嶸『詩品』に引かれた謝霊運の故事を踏まえている。『詩品』では『謝氏家録』を引いて次のようにいう（中品の謝恵連の条）。

（謝）康楽 恵連に対するごとに輒ち佳語を得たり。後 永嘉の西堂に在りて詩を思へども、竟日 就らず、寤寐の間 忽ち恵連に遇ひ、即ち「池塘 春草を生ず」を成す。故に常に云ふ、「此の語 神助有り、我が語に非ざるなり」と。

（謝）康樂毎對惠連輒得佳語。後在永嘉西堂思詩、竟日不就、寤寐間忽遇惠連、即成池塘生春草。故常云、此語有神助、非我語也。

「康楽」＝謝霊運が、族弟の恵連と一緒にいると、不思議と決まって佳句を得た、という故事。詩の文句を一日考えて妙案が浮かばなかったが、まどろみの中、謝恵連の顔が浮かんだとたんに、名句が出来上がった、という話である。「春池を夢む」とは、詩句を構想して警句が浮上してくるのを待つ意であろう。

其四

仲春初午雨新收　仲春 初午 雨 新たに収まり
家醞市餚先禱秋　家醞 餚を市ひて 先づ秋を禱る

社鼓村村響如海　　社鼓　村村　響いて海の如し
翠篁深處掛燈毬　　翠篁　深き処　燈毬を掛く
自注：邦人以仲春初午祭田神。　邦人 仲春の初午を以て田神を祭る。

この詩は、二月最初の「午」の日に、稲荷社を祭る「初午稲荷祭」を詠じている。「初午稲荷祭」の縁起は、京都の伏見稲荷神社の神が降りた日がこの日であったからである。地方には、この日を蚕や牛馬の祭日とする風習もある⑧。

第一句は稲荷祭の時節感を詠じている。ちょうど「雨水」の後で、雨が止んだ時節である。第二句は稲荷祭の供物を言う。「家醞」は、自家製の酒、ここでは神前に捧げる神酒（みき）のこと。「市餚」とは、具体的には「鰦（このしろ）」を指すであろう。渡辺信一郎『江戸の庶民生活・行事事典』（東京堂出版、二〇〇〇年七月）によれば、その縁起は以下の通りである。

江戸の町の稲荷祭には、必ず鰦が供物とされる。この魚はこはだの稚魚で、腹切魚とも言われ、武士の切腹の際に用いられ、しかも炙ると死臭を発するので、特に武家には嫌われたものである。『俚言集覧』に、「このしろは、子の代なりといひつたへたり」という一節があり、庶民たちは子が代々と引き継がれるという縁起から、これを稲荷祭の供物としている⑨。

第三句は村々の稲荷神社で、太鼓が打ち鳴らされながら祭礼が行われたことを詠じる。第四句は挑灯をともし、神前に灯火をささげることを詠じている。

曲亭馬琴編、藍亭青藍補『増補俳諧歳時記栞草』（堀切実校注、岩波書店、二〇〇〇年八月）では、以下のように記している。

武江（えど）にても此日、王子・妻恋・三囲・真崎等の社を始とし、武家、市中とも鎮守の稲荷を祀り、灯燭（みあかし）をかかげ鼓吹して舞ふ。近くては雲間の霹靂の如く、遠くては蒼海の波濤に似たり。江戸の賑ひ耳目を驚かすに堪たり。（「春之部　は」上冊四七頁）

馬琴の原編が刊行されたのが享和三年（一八〇三）のことなので（前掲書、下冊五五二頁、堀

切実解説)、この文が伝える内容も、『卜居集』の十年後の状況とはなるが、右の詩仏の詩の注釈として、まことにぴったりである。詩仏の詩の「響如海」という表現は、日本独特の形容で、表現意図が今ひとつ伝わらないが、『栞草』の説明を読むと、それが海の波濤のような遠来の響きであったことが了解される。

ところで、范成大の「春日田園雑興」⑩にも、土地の神を祭る行事を詠じた作がある。

老盆初熟杜茅柴　老盆　初めて熟す　杜茅柴
携向田頭祭社來　携へて田頭に向ひて社を祭り来たる
巫媼莫嫌滋味薄　巫媼　嫌ふ莫かれ　滋味の薄きを
旗亭官酒更多灰　旗亭の官酒　更に灰多し

「老盆」は、よく使いこんだほとぎ、酒の容器として使う。「杜茅柴」は、粗酒のこと。「巫媼」は、老いた巫女、「旗亭官酒」は、酒楼で販売される政府専売管理の酒。長期保存するため、炒石灰を入れる。詩仏の詩にも、農家が自家製の酒を奉納することが詠じられているが、范成大のように、官酒と優劣の比較をし、官を批判するようなところはまったくない。

其五

兒荷藤籃入一溪　児は藤籃を荷ひて一溪に入り
溪流清處洗荇泥　溪流　清き処　荇泥を洗ふ
無端思得去年事　端無くも思ひ得たり　去年の事
月夜尋梅雪裡迷　月夜　梅を尋ねて　雪裡に迷ひしを

この詩の前半は水中でアサザを摘む子供を描いている。荇は水葵のこと。「本名莕(あさざ)、また鳧葵とも、水鏡とも云」(『蔓纏輪』『近世後期歳時記本文集成並びに総合索引』、尾形仂、小林祥次郎編、勉誠社、一九八四年十二月)。『詩経』国風の冒頭の一篇「関雎」にも見えるので名高い。前半から後半への転換はやや唐突な印象を受けるが、去年の探梅の際は、まだ都市で暮らしていて、今年の梅の時期は村居している、という作者の生活環境における対比と、気候の寒暖の対比をねらった表現であろうか。

范成大の「春日田園雑興」其十二にも、蔬菜を摘み、渓流に洗う場面が描かれている。

桑下春蔬緑満畦　桑下の春蔬　緑　畦に満つ
菘心青嫩芥薹肥　菘心（すうしん）青嫩（せいどん）にして　芥薹（かいたい）肥えたり
渓頭洗擇店頭賣　渓頭に洗い択びて　店頭に売り
日暮裹鹽沽酒歸　日暮　塩を裹（つつ）み　酒を沽（か）ひて帰る

「春蔬」は春の野菜、「菘心」は唐菜の芯、「芥薹」はからし菜の茎、第一、二句は春の野菜が育ってきたことを詠う。第三句は谷川のほとりで野菜を洗って、露店で即売することをいう。第四句で塩を包み、酒を買う、というのは、宋代、塩と酒は専売品なので、農民は野菜を売って得た金で、それらを町で買って帰るのである。范成大の詩は、前半で田園の春、後半で作物を作り売る農民の生活を描き出している。

詩仏の詩は、前半でこそ田園風景が描かれるが、後半は己の回想に転じ、個人的な懐旧で結ばれており、筆致がかなり異なっている。

【晩春】

其六

閒身無事日如年　閒身　事　無くして　日　年の如し
小鼎颼颼茗吐煙　小鼎　颼颼として　茗　煙を吐く
不管人間開落事　管せず　人間　開落の事
滿窗斜日背花眠　満窓の斜日　花を背にして眠る

「村居」の、のんびりとした日常を描く。後半は、前の詩と同様、都会暮らしとの対比である。桜の季節になると、江戸の市民は花が咲いたり散り落ちたりの情報で持ちきりになるが、時が止まったような農村では、花のことなど我関せずに、窓から差し込む春の夕日に温められ、うたた寝をするのである。第二句に茶を煮る情景が描かれるが、もしもそれが新茶ならば、「八十八夜」の前後のことかもしれない。

范成大の「晩春田園雑興」にも、このような長閑な農村生活を描写した作がある、

雨後山家起較遅　雨後の山家　起くること較や遅く
天窓曉色半熹微　天窓の曉色　半ば熹微たり
老翁欹枕聽鶯囀　老翁　枕を欹てて　鶯の囀るを聽き
童子開門放燕飛　童子　門を開きて　燕を放ちて飛ばしむ

この詩は雨天から晴天への変化を的確に捉えている。後半の「老翁」と「童子」の対句は、平和な農村の一齣をスケッチし、作者のほんのりとした思いが伝わってくるようだ。

其七

夜色朦朧多彩曇　夜色　朦朧として　彩曇　多し
柳條籠月翠毿毿　柳条　月を籠めて　翠　毿毿たり
近來倉鼠頻為害　近来　倉鼠　頻りに害を為せば
牢鎖房櫳護穉蠶　牢く房櫳を鎖して　穉蚕を護る

第一句は、俳句にいわゆる「朧月」（あるいは「月朧」、「朧月夜」）という春特有の月を描写している。夜、薄雲の膜を通して月に暈がかかって見える様子をとらえている。第二句は、晩春になって緑濃くなってきた柳の枝を、朧月の光がぼんやり照らしている様子を詠じる。「毿毿」は、柳の枝が垂れる様。

後半の二句は一転して、養蚕に言及する。鼠の害を防ぐため、この時期、農家がとりわけ注意を払うことを記している。前の二首とは逆に、前半が詩人としての詩仏の目を通してみた叙景、後半に田園の農事が描かれている。

范成大の「晩春田園雑興」にも、養蚕を描写した作がある。

三旬蠶忌閉門中　三旬の蚕忌　閉門の中
鄰曲都無歩往蹤　隣曲　都て歩往の蹤無し
猶是曉晴風露下　猶ほ是れ　曉晴　風露の下
采桑時節暫相逢　采桑の時節　暫く相逢わん

「三旬」は三十日の間。「蚕忌」は養蚕の禁忌。この間は、不意の来客や火種を貰いに来られることを忌み、門を固く閉ざして他家との往来を避ける。後半は、そのような禁忌を固く守る中でも、村人は桑の葉を摘む時には、例外的に言葉を交わすことをいう。蘇州＝呉は養蚕の盛地なので、独特の禁忌あるのであろう。范成大の詩が、あたかも「采風」のように、土地の民俗を細やかに記録しようとしているのに対し、詩仏の詩にはそのような要素が乏しい。これも、両者の社会的身分や創作意図の相違から来るものなのであろうか。

其八

行遍江村日已斜　江村を行き遍くして　日　已に斜めなり
亂鶯啼送野棠花　乱鶯　啼きて送る　野棠の花
南坡水暖抽蒲筍　南坡　水　暖かにして　蒲筍を抽き
西塢煙濃舒茗芽　西塢　煙　濃やかにして　茗芽を舒ぶ

この詩は、「清明」の頃を詠じたものであろう。第二句の「野棠花」は、寒食の時に咲いて、清明の頃に散る花である。たとえば、南宋・辛棄疾の「念奴嬌・春恨」詞（宋・黄昇『花庵詞選』続集巻三、四庫全書本）に、

野棠花落　　野棠の花　落つ
又匆匆　　又た匆匆として
過了清明時節　　清明の時節を過ぎたり

とあるほか、元の倪瓚の詩「清明日風雨淒然舟泊東林西滸、步過伯璇徵君高齋、焚香瀹茗、出示燕文貴秋山蕭寺圖、展玩良久因賦一絶」（元・倪瓚『清閟閣集』巻八、四庫全書本）にも、

野棠花落過清明　　野棠の花　落ちて　清明を過ぐ
春事匆匆夢裏驚　　春事　匆匆として　夢裏　驚く

とあり、「野棠」は、中国では、清明の終わりを告げる花という位置づけのようである。

第三句は、晩春になって、水温み、水生の植物が生長し始めることを詠んでいる。「蒲

筍」はガマの新芽を指す。三余斎麁文の『華実年浪草』（天明三年〔一七八三〕刊、早稲田大学図書館蔵本）に、

蘇頌の『図経』に曰く、「香蒲　春　嫩葉を生じ、水を出づる時　紅白色にして、茸茸然なり。其の中心を取りて生に之れを啖へば、甘脆なり。人　醋を以て浸せば筍を食ふが如くして、大いに美なり。『周礼』之れを蒲菹と謂ふ。今人　之れを食ふ者有ること罕なり」と。

蘇頌『圖經』曰、香蒲春生嫩葉、出水時紅白色、茸茸然、取其中心生啖之、甘脆、人以醋浸如食筍、大美。周禮謂之蒲菹、今人罕有食之者。

とあり、野菜として食用に供するようである。第三句は水辺の変化、第四句は茶畑を詠ずる。

范成大の「晩春田園雑興」にも、春の芽吹きを詠じた詩がある。

海雨江風浪作堆　海雨　江風　浪　堆を作し
時新魚菜逐春回　時新の魚菜　春を逐って回る
荻芽抽筍河鮒上　荻芽　筍を抽きて　河鮒　上り
楝子開花石首來　楝子　花　開いて　石首　来たる

「荻芽」はオギの新芽のこと、「楝子花」はオウチの花。清明より後の「穀雨」の時節を詠う詩ではあるが、万物が目覚め、生気を帯びて躍動し始める時節を捉えた点では共通する。

其九

山田泥淺野田深　山田　泥　浅くして　野田　深し
水潦餘痕溪斂音　水潦　痕を餘して　溪　音を斂む
柳絮閒飛半畦雪　柳絮　閒に飛びて　半畦　雪なり
東風吹暖長秧針　東風　暖を吹きて　秧針を長くす

この詩は「穀雨」の頃を描いたものであろう。陽暦の四月二十日前後に当たる。「穀雨」

は、穀物の芽に注ぐ雨が百穀を育むの意だが、この頃とくに雨が多いというわけではない。暖かな雨が地を潤し、穀物を育て始めると見なしていたのである（『日本の歳時記』、宇多喜代子等編著、小学館、二〇一二年一月、三六頁）。

前半の二句は、長雨の止んだ後の田園風景。第一句は高所と低地の田畑の違いを詠ったものであろう。第二句は、増水の痕は残っているが、すでに水嵩も元どおりに戻って、渓流の音も静かになったことをいう。後半は穏やかさを取り戻した田畑の様子。柳絮が雪のように舞い、春風が暖かい空気を運んで、稲の成長を促すのである。

其十

桐花應候酒宜斟　桐花　候に応じて　酒　斟むに宜し
閑臥縄床養懶心　閑かに縄床に臥して　懶心を養ふ
鳥影掠窗知有客　鳥影　窓を掠めて　客　有るを知り
呼兒為掃一張琴　児を呼び　為めに掃はしむ　一張の琴

桐の花は、春と夏の交替期に咲く花である。「縄床」は、長椅子。この詩は隠者風の閑適を描き出している。李白の「山中與幽人對酌」（『李太白集分類補註』巻二三）詩の境地にも似ている。第三句については、中野子興が次のようなコメントを残している。

邦諺に曰く、鳥影　席に落ちれば、乃ち家に客有り、と。転結　新奇なり。
邦諺曰、鳥影落席乃家有客。轉結新奇。

つまり、日本の俗説では、鳥の影が床に映ると、客が到来する兆しとなる。

其十一

紫老紅衰春欲徂　紫　老ひ　紅　衰へて　春　徂かんと欲す
小園漸使月光孤　小園　漸く月光をして孤ならしむ
牡丹非是貧家物　牡丹　是れ貧家の物に非ざるも
為繫年華種數株　年華を繫ぐ為に　数株を種う

この詩は、春の終わりに咲く牡丹を詠じたもの。その花も盛りを過ぎて、いよいよ春も終わりという頃である。第二句は、牡丹を最後に、夜、月の伴をしていた春の花々が終わるので、月光も照らす相手がなくなって孤独になるであろう、ということ。

後半は、貧家に似つかわしくない高貴な花、牡丹を植える理由は、春を繋ぎ止めるためだと詠う。「年華」とは、春の光のことだろう。中唐・元稹の「定僧」（『元氏長慶集』巻十六）という詩に、

落魄閒行不着家　落魄して閒行して　家に着かず
遍尋春寺賞年華　遍ねく春寺を尋ねて　年華を賞づ

とあり、南宋・劉克莊の「寒食清明二首」其一（『後村集』巻九）にも、

寂寂柴門村落裏　寂寂たる柴門　村落の裏
也教挿柳記年華　也た柳を挿して年華を記せしむ

とがある。范成大の「晩春田園雑興」でも、牡丹が登場する詩がある。

穀雨如絲復似塵　穀雨　糸の如くして　復た塵に似たり
煮瓶浮蟻正嘗新　煮瓶　蟻を浮かべて　正に新を嘗む
牡丹破蕚櫻桃熟　牡丹　蕚を破りて　桜桃　熟す
未許飛花減却春　未だ許さず　飛花の春を減却するを

第二句「浮蟻」とは、新茶を煮たときにできる泡のこと。後半二句は、牡丹と桜桃が、春が過ぎゆこうとするのを最後の最後でくい止めている、の意。第四句は、杜甫の「曲江二首」其一の冒頭の一句、「一片の花　飛びて春を減却す（一片花飛減卻春）」（『杜詩詳注』巻六）を踏まえ、それを逆用したもの。

㈥「村居四時雑題十九首」の夏秋冬の詩

つづいて、春以外の三つの季節の詩を順に見てゆきたい。

【夏】

其十二

林外青嵐啼勃鳩　林外の青嵐　勃鳩　啼き
單衣尤好渉田疇　単衣　尤も好し　田疇に渉るに
菜花爲莢筍爲竹　菜花　莢と為り　筍　竹と為る
正是江村熟麥秋　正に是れ　江村　熟麦の秋

「青嵐」は、初夏の青葉を揺すって吹き渡るやや強い風のこと。『華実年浪草』に、以下のようにある。

東坡詩云、翠嵐楼影孤、此句青嵐と云文字には似たれども、唐には山気を以て嵐とすれは本邦に云嵐とは違り。

中国の「嵐」と日本の「あらし」の相違を述べている。「勃鳩」は、『古今事文類聚』では鳩に分類している[11]が、日本ではカッコウを指す。夏の鳥である。「単衣（ひとえ）」とは裏地をつけずに仕立てた一重の夏の着物で、初夏から初秋にかけて着用する。「木綿、麻、絹、羊毛などの薄手の生地で仕立てられ、その軽く涼しい感触を楽しむ。絽や紗のものはまるで風を着ているようで、見た目にも涼しい」（前掲宇多喜代子等編著『日本の歳時記』、二二九頁）。

この詩は初夏の好風景を描写している。菜の花は円筒形のサヤに変わり、筍はぐんぐん伸びて若竹になった。麦の畑は早々と黄金色に染って、「麦秋」、すなわち、麦の刈り入れの時期にさしかかっている。

其十三

入梅天氣雨滂沱　入梅の天氣　雨　滂沱たり
數頃高田水作波　数頃の高田　水　波を作す
雲脚不行煙溟溟　雲脚　行かずして　煙　溟溟たり

山前連唱插秧歌　　山前　連（しき）りに唱ふ　插秧の歌

この詩は、田植えをテーマとする。第一句は「五月雨」＝梅雨を詠じる。「入梅」は、旧暦では、芒種の後の「壬」の日、立春から百二十七日目に当たる日に定められている。三谷一馬『江戸年中行事図聚』（立風書房、一九八八年二月）では、以下のように「田植え」を解説している。

五月末から六月初め頃になると、成長した早苗は玉苗と呼ばれ、苗代から田へ移されます。田植えのために苗代田から早苗を抜くことを、早苗取りといいます。農家では、男女の別なく田植えに励みました（二一三頁）。

第四句は早乙女（さおとめ）たち（田植えをする女、あるいは田植え祭りに田の神に扮する少女）が「田植え歌」を歌っている様を描いたものであろう。前掲『江戸年中行事図聚』によると、

苗を植える女性、早乙女たちの一斉に歌うのが田植え歌で、地方によって色々なものがあります。時には太鼓を打って音頭をとり、歌に合わせて植えます。これは大勢の早乙女を拍子に乗せて、手の早い者、遅い者が一律に植えるための手段だといわれています。

とある。

其十四

傍江鄰舍面層坡　　江に傍ふ鄰舍　層坡に面す
一徑斜廻入綠莎　　一徑　斜めに廻りて　綠莎に入る
正識夜來漁得返　　正に識る　夜來　漁し得て返るを
合歡花底曬蘋蓑　　合歡の花底　蘋蓑を晒せり

この詩は、俳句の季語でいうところの「梅雨明」の頃を詠じたものであろう。第四句の合歡の花は、梅雨明けの頃に開花するからである。

川べりの隣家の向こうに、丘があり、斜めに伸びる小径を辿って進むと、「緑莎」すなわちハマスゲ（浜菅）の草むらへと入ってゆく、という。ハマスゲは浜辺や河原に生えるので、隣家が一本の小径で河原に繋がっていることを示し、後半の伏線を敷いている。

後半は合歓の花の間に蓑が乾されているのを認めて、隣家が昨夜、漁から帰ってきたことを知る、という内容である。詩語としての「蘋蓑」は、南宋の薛季宣（一一三四～七三）に用例がある。その「青田同七五兄作四首」の其四（『全宋詩』巻二四七一）に、

天空月白不見人　天空 月 白くして 人を見ず
無聲露滴蘋蓑濕　声無く 露 滴りて 蘋蓑 湿ほふ

とある。ちなみに、この詩も漁師を詠じた詩である。范成大の「夏日田園雑興」にも、この詩の後半に似た構成の作例がある。

千頃芙蕖放棹嬉　千頃の芙蕖 棹を放にして嬉しむ
花深迷路晚忘歸　花 深くして 路に迷い 晩に帰るを忘る
家人暗識船行處　家人 暗に識る 船の行く処
時有驚忙小鴨飛　時に驚忙して 小鴨の飛ぶ有り

広大な蓮池に船を浮かべて花の間を、掉さすにまかせて遊ぶうち、方向を見失い、夕暮れになっても帰るのを忘れて夢中に船をこぐ。ところが、家人は船の行方がよく分かっている。なぜなら、驚いた鴨があわてて飛び立つから……。この詩は范成大自身の船遊びを詠じたもので、詩仏のように漁師を描いたわけではないが、転句と結句の関係がよく似ている。

【秋】

其十五

滿窗柳日罩陰青　満窓の柳日　陰を罩ひて青く
一葉梧桐先自零　一葉の梧桐　先づ自ら零つ
僮僕不知秋始至　僮僕 知らず　秋の始めて至るを
朝來依舊掃門庭　朝來　旧に依りて 門庭を掃く

初秋の、暑さも残り、陽差しもまだ強く照りつける頃、桐の葉っぱが一片舞い落ちるのを見て、秋の到来を知るという内容である。詩人は季節の推移を敏感に感じ取ったが、童僕はそれに気づかず、いつもと変わらず庭掃除をしている。俳句に、「桐一葉（きりひとは）」という季語があるが、あたかも、この初秋の季語をテーマに詠じた詩のようでもある。中野子興はこの詩を評して、

僮僕 最も伶俐なるを忌む。無情の状 大に好し。

僮僕最忌伶俐、無情之狀大好。

と、後半に描かれる「鈍感な」童僕を指して、利口な童僕は一番良くない、こういう鈍感なのが最高と諧謔味豊かなコメントを残している。

其十六

竹舍松鄰總盡歡　竹舍　松鄰　総べて歓を尽くし
趣高半夜獨憑欄　趣　高き　半夜　独り欄に憑る
古今一樣仲秋月　古今　一様なり　仲秋の月
只作人心各自看　只だ　人心　各おの自ら看るを作す

右の詩は八月十五日の「月見」の晩を詠じたもの。今宵、隣近所のどこもかしこも月見の宴を楽しんでいるが、詩人はそのような宴たけなわの夜半に、たった一人欄干にもたれて、古に思いを馳せる。今も昔も月に変わりはない、それを眺める人の心が十人十色なだけなのだ、と詠う。

范成大の「秋日田園雑興」にも、中秋の名月を観賞した詩がある。

中秋全景屬潛夫　中秋の全景　潛夫に属す
棹入空明看太湖　棹を空明に入れて　太湖を看る
身外水天銀一色　身外の水天　銀一色
城中有此月明無　城中　此の月明有りや無しや

「潜夫」は、世を避けて隠れて暮らす隠者。「空明」は、月光を含んで明るく澄んだ水。中秋の夜、范成大は石湖から舟を出し、太湖へと向かった。明るい月に美しく照らし出された太湖の銀世界をたった一人で独り占めにした。第一句、これは隠者の特権だと嘯いている。

たった一人で月明を鑑賞した点では共通するが、詩仏が古今という時間軸の上で想念をめぐらせたのとは異なり、范成大は広大なる水平的空間のなかで、神秘的な境域に身を置きながら都市を想像している。

其十七

新釣鱸魚得四顆　新たに鱸魚を釣りて　四顆を得たり
且呼鄰叟盡三杯　且つ鄰叟を呼びて　三杯を尽くす
話頭忽識觀潮節　話頭　忽ち識る　観潮の節
自至前溪繫艇回　自ら前溪に至りて　艇を繫いで回る

西晋、張翰の故事以来、「鱸鱠蓴羹」は呉地の秋の風物として必ず言及されるようになった。范成大の「秋日田園雑興」其十一にも、

細擣棖虀買鱠魚　細かく棖虀を擣きて　鱠魚を買ふ
西風吹上四腮鱸　西風　吹き上す　四腮の鱸
雪鬆酥膩千絲縷　雪のごとく鬆やかに酥のごとく膩やかなり　千糸の縷
除却松江到處無　松江を除却いては　到処にも無し

とある。「棖虀」はユズのあえもの。「買」、『宋詩鈔』では「有」に作る。「鱠魚」は、細切りした魚肉。「四腮鱸」は、四つのエラをもつ鱸魚のこと。詩仏の「四顆」はこれを踏まえたのだろう。「雪鬆」「酥膩」は、鱸魚の鱠を形容する言葉。雪のように軽く、チーズ、バターのようにあぶらけがあって、なめらかである。

詩仏の詩に戻ると、後半の二句は、秋の大潮の逆流を詠っている。中秋節の数日後の潮

が一年で一番壮観だといわれる。浙江の潮が著名であるが、この詩によれば、江戸（の近郊）でも見られるのであろうか。

【冬】

其十八

田田水涸雁依塘　田田　水　涸れて　雁　塘に依る
人渡低橋入夕陽　人　低橋を渡りて　夕陽に入る
北岸南涯誰是領　北岸　南涯　誰れか是れ領す
蘆花芟剰晩來霜　蘆花　芟り剰す　晩來の霜

水田のに水が涸れ、北方から渡ってきた雁は、田圃を離れ、池に集まる。川の南北両岸には、刈り残された蘆が生えていて、霜をかぶったかのような真っ白な花を咲かせている。

其十九

凜凜霜氣觸檐鈴　凜凜たる霜気　檐鈴に觸れ
曉見光芒在小星　曉に見る　光芒の小星に在るを
破卻園林多少景　園林　多少の景を破却するや
盆中無恙萬年青　盆中　恙無し　万年青

前半の二句は、軒端の鈴に霜が付着し、明け方、朝日に照らされて、まるで光を放つ小さな星のようだと詠じる。詩人は身震いするような寒気の中、一瞬の輝きをとらえて、それを詩に詠み込んだ。後半も同様に、冬になって草木が枯れ殺風景になった庭の様子を細やかに観察し、鉢植えの「万年青」がその字のごとく生気を失わずにいる姿に着目している。「万年青」はオモトのこと。江戸中期から、観賞植物として流行し始めた。秋になると実がふくらみ、晩秋には赤く熟す。中野子興はこう評している。

冬日、顔を飴ばしむべき者、盆植に若くは莫し。転結　閒適の情を得たり。
冬日可飴顔者、莫若盆植、轉結得閒適之情矣。

＊　＊

以上のように、詩仏と范成大の着眼点には共通項が多く、描写法においても、類似するところが多々見られる。むろん、それは詩仏の学習の成果であろう。とはいえ、両者の間には見逃すことのできない差違も存在する。そのもっとも大きなものは、前述したように、范成大がしばしば農民の艱難辛苦を織りまぜ、社会風刺や文明批判を展開するのに対し、詩仏はあくまで閑適なる日常を描くことに終始している点である。詩仏の詩における農民（漁民）は、むろん組詩を彩る重要な役割を演じてはいるが、彼らが作品の主役になることはない。「村居」の風景のなかに完全に融け込んだ脇役であり、主役はその風景を切り取る詩仏その人である。

この相違のより直接的な原因は、前述の通り、詩仏と范成大の社会的身分の相違や年齢差によるものであろう。范成大がこの組詩を完成させたのは、官界の第一線を退いた晩年のことであり、駆け出しの詩人であった詩仏と決定的な開きがある。そして、より本質的なのは、江湖詩社が標榜した脱政治の主張に代表される、日中詩歌観の相違によるものであろう。しかし、その代わり、地方の風習や行事、和歌・俳諧でよく詠じられる四季の風物等が詠み込まれ、日本の風俗に根ざした、日本独特の繊細な田園詩になっている。

詩仏は、田園詩を書くに当たって、もっぱら范成大一人をモデルとしていたわけではないようである。たとえば、『卜居集』所収の「山荘十首」は、南宋の方岳（一一九九～一二六二、字巨山、号秋崖）の「山居十首」の形式を模倣した跡が認められる。両者の十首連作は、すべて「我愛〇〇好」の句によって始まるからのである。「重頭詩」は、中唐から始まり、宋代に多く作られた。北宋の穆修（九七九～一〇三二）の「和毛秀才江墅幽居好十首」（『穆參軍集』巻上、四庫全書本）の自序に、

滎陽の毛生 墅の宣城の南陵に在る有り。嘗て「村居」詩十首を作る。其の詩 律格五言四韻を用ひ、篇ごとに皆な上の一句を同じうす。元和、長慶よりこのかた詩人 是の体多し。生の往還 躡（お）って和する者 数人。

滎陽毛生有墅在宣城之南陵、嘗作村居詩十首。其詩用律格五言四韻、毎篇皆同上之一句。元和、長慶來詩人多是体。生之往還躡而和者數人。

とあり、第一句はすべて「江墅幽居好」で始まる。そのほか、宋末元初の舒岳祥（一二九～九八、字景薛、舜侯）にも、「春日山居好十首」、「夏日山居好十首」、「秋日山居好十首」、

「冬日山居十首」があり、「〇日山居好」を以て第一句としている。

㈦　結び

詩仏と同人たちが田園詩を多作する原因は彼らが提唱した「清新詩」に関係があると考えられる。貧しい平淡な農村や隠居生活を描写するのは清新詩の特徴である。それを証明するものとして、当時の人の清新詩評を見てみたい。大田錦城の「享保の詩を学ぶ者有りて予に一律を寄す。戯れに次韻して之を嘲る」（『錦城百律』、国文学研究資料館蔵本）という詩に、以下のようにいう。

柴門不種柳條斜　柴門　柳條の斜めなるを種えず
移竹新標隱士家　竹を移し　新たに標す　隱士の家
邀月唯欣時有酒　月を邀へては　唯だ欣ぶ　時に酒有るを
訪梅何憾出無車　梅を訪ねては　何ぞ憾みん　出づるに車無きを
晴窗雲起雕龍話　晴窗　雲は起こす　雕龍の話
寒館春生摘藻葩　寒館　春は生ず　摘藻の葩（はな）
藝苑清新今若此　藝苑の清新　今　此くの若し
豈持枯葉對人誇　豈に枯葉を持して　人に對して誇らんや

今の風雅の士は、陋屋に柳を植えず、竹を移して隠者を標榜する。月見をする時喜ぶのは酒があること、梅花を見に行き車がなくても気にしない。夏は夏で美しい言葉で飾られ、冬の寒々とした日にも春の美しい言葉の花が生まれる。今の詩壇の清新詩というのはこのようであり、どうして枯れた葉のような「享保詩」（古文辞派の詩）を持って人に自慢するのか……。

中間の二聯に、「清新」派の価値観や生活様態が具体的に詠じられている。春は梅、秋は月、夏は雲、冬にも春を言葉によって紡ぎ出す。四季それぞれに花鳥風月に心を寄せ、形にこだわらず、新鮮な表現を搾り出す。このように、清新なる詩を作るためには、何よりも己の清らかさや高雅さを身をもって体験しなければならない。そして、それは田園詩

に現れる隠居思想と繋がっている。

おそらく、そこから出発して、早期の多くの田園詩が作られたのであろう。詩仏の初期の詩作に特徴的な田園詩にも、自ずと隠逸志向が色濃く表現されている。ただし、表向きは隠逸生活への賛美に映るが、実質的には虚飾にとらわれない文人生活の謳歌であるといってよい。若き詩仏にとって、田園は隠逸を目的とする空間というよりも、「清新」なる作品を生み出す空間であり、あくまで文人としての己を実現する空間であった。よって、彼の田園詩は閑適詩と相互に重なり合い、ほとんど区別できないほどである。つまり、詩仏の田園に対する見方は、中国の士大夫のそれとは違って、農作や収穫に対する関心よりも、文人生活を可能にする、素朴で長閑な農村の生活スタイルが憧れの対象となっている。

したがって、『二編』、『三編』と、後年の詩集において田園詩が減少する理由も理解できる。当時の詩仏にとっての田園は、文人生活を実現する場として意識されていたから、そこに身を置き、それを表現することが、まだ無名の詩仏にとってはとりわけ大きな意味をもったのであろう。しかし、後年名を成し、職業文人としての地位を確立した後は、己自身がすでにそれを具現している。具現している以上、あえて田園を描く必然性が低下したものと思われる。田園詩の減少は、彼の志向がもともと自然への回帰や純粋なる帰田の憧れになかったことを示していよう。

さらに、当時、彼らが刊行した宋詩選集もこの点を裏づけている。享和元年（一八〇一）、詩仏は中野子興、山本謹とともに『放翁詩鈔』を出版した。山本北山の序文によると、その選詩基準は、「放翁詩抄は専ら詩人の為に設け」たものである。収録された作品は、晩年の閑適な心境を表した作が多い。また、柏木如亭の「宋詩清絶序」（早稲田大学図書館蔵本）では以下のように語っている。

> 今吾『清絶』を選ぶに、江湖が閑適の作 多に居るは、固より山人の家分の内事なるのみ。自ら能く另に手眼を出だして其の人を伝ふるを謂ふに非ず。同声 相ひ応じ、同気 相ひ求め、理として然らざるを得ず。
>
> 今吾選『清絶』、江湖閑適之作居多者、固山人家分内事耳、非謂自能另出手眼而傳其人也。同聲相應、同氣相求、理不得不然。

柏木如亭は自ら編んだ宋詩の選集に「江湖閑適之作」を多く選入した理由を、自身が江湖の詩人であり、もっとも共感できる対象だからだと言っている。右文の「山人」は、む

ろん如亭その人を指してはいるが、詩仏も当然、同類である。したがって、詩仏が若い頃から田園生活への憧れを積極的に詩に詠み込んだ理由と目的も、――中年以降、故郷に退居して田園詩を量産した――范成大や陸游等の士大夫詩人による田園詩とは、確実に一線を劃していた、と見るべきであろう。

注釈

① 『大窪詩仏ノート』、梓書房、一九九八年十月、前言。

② 劉蔚氏の『宋代田園詩研究』（人民文学出版社、二〇一二年一二月）「前言」の統計によると、陸游は、千五百首、范成大は一百四十首、楊万里は七十五首の田園詩が作った。

③ 葛曉音氏の『山水田園詩研究』（遼寧大学出版社、一九九三年一月）と池沢一郎氏『江戸時代田園漢詩選』（農山漁村文化協会、二〇〇二年十一月）を参照。

④ 前掲劉蔚氏『宋代田園詩研究』第一章第一節「田園詩義厘定」を参照。

⑤ 本章が使用した大窪詩仏の詩集は、『詩集日本漢詩』（富士川英郎、松下忠、佐野正己編、汲古書院、一九八五年三月）第八巻所収の『詩聖堂詩集初編』・『二編』・『遺稿』である。

⑥ 『詩聖堂詩話』、『日本詩話叢書』第三巻、鳳出版、一九七二年六月、四三二頁。

⑦ 前掲劉蔚氏『宋代田園詩研究』を参照、一五八～一五九頁。

⑧ 渡辺信一郎氏『江戸の庶民生活・行事事典』、東京堂出版、二〇〇〇年七月、九六頁。

⑨ 前掲渡辺信一郎氏『江戸の庶民生活・行事事典』九七頁。

⑩ 本章に引用した范成大の「四時田園雑興」の訓読や解釈は河野みどり「范成大「四時田園雑興」選釈〔一〕〔二〕」（『南山国文論集』第一七号三五～五六頁、第一八号五五頁から八五頁）、及び山本和義、河野みどり「范成大「四時田園雑興」抄解」（『アカデミア』文学・語学編、第五七号、一九九四年九月）を参照した。

⑪ 宋・祝穆撰『古今事文類聚』後集巻四五（四庫全書本）『羣書要語』、勃鳩自關而東謂之郎睪、秦漢之間謂之鵴鳩、其犬者謂之班鳩、或謂之佳鳩、鳲鳩、鵠鵴。注、今之布穀、江東呼為撥穀、名鶻鵴」とある。

第十二章　大窪詩仏の詠物詩

―『三家詠物詩』との関わり―

㈠　はじめに

大窪詩仏の詩業における詠物詩の重要性については、つとに揖斐高氏が「詩仏は詠物詩集こそ刊行していないが、彼を詠物詩人と称することは、他のいかなる称を与えるよりも彼にとっては本質的であろう」①と概括している。そもそも、ひとり詩仏に限らず、江戸の中後期、とりわけ十八世紀後半以降の漢詩壇では、詠物詩の製作がかなり普通的に盛行しており、そのような流行の中で中国の詠物詩選の翻刻や編纂刊行はもとより、日本漢詩人の詠物詩集も数多く刊行されている。また、その背景として、和歌・俳諧の歌会・句会に同じく、詩会が盛んに開かれ、それが詠物詩の創作を促した可能性も、すでに指摘されている②。このように、日本文学史に即した関連研究はすでに一定の成果を蓄積している。しかし、管見の限りでは、中国の詠物詩との影響関係や比較研究は未だ十分にはなされていないようである。そこで、本章では、詩仏の詠物詩を中国の詠物詩史に照らして、その特徴ならびに影響関係を探り、それに江戸期の詠物詩における変遷の跡を考慮に加える形で、詩仏の詠物詩の位相を、より包括的かつ精確に描き出すことを目的としたい。

㈡　詩仏の詠物詩

すべての考察を始める前に、詩仏の詠物詩の重要性ならびに特徴をまず再確認しておく。この点は、彼の詩集を繙けば、にわかに瞭解される。『詩聖堂詩集初編』と『二編』③では、ともに劈頭巻一に、きわめて特徴的な詠物の連作が収められている。『初編』の巻一には、蝶を題材とする十首からなる連作の組詩が並べられ、『二編』の巻一にも、竹に関わる十五首の連作組詩が並べられている。詩型はすべて七言律詩である。以下にそれぞれ詩題を掲げる。

①『初編』巻一……「蝶」「白蝶」「黄蝶」「新蝶」「秋蝶」「睡蝶」「蝶使」「媚蝶」「鬼蝶」「書中乾蝴蝶」

②『二編』巻一……「詠竹」「竹影」「和松塘大夫竹影」（二首）「竹粉」「竹夫人」「竹米」「竹杖」「竹醉」「竹硯」「竹孫」「竹衫」「竹籬」「竹簟」

この他にも、次のような組詩の連作がある（なお、各行末尾の括弧内は、該詩の収録された詩集の種類とその巻数である。「初」は『詩聖堂詩集初編』、「二」は『詩聖堂詩集二編』、「北」は『北遊詩草』、「再北」は『再北遊詩草』を指す）。

③竹――「雨竹」「風竹」「新竹」「露竹」「雲竹」「晴竹」「煙竹」（初・三）

④梅――「梅蕾」「未開梅」「乍開梅」「半開梅」「全開」「未謝梅」「梅実」（初・四）

⑤花――「黄葵花」「長春花」「合歓花」「玉簪花」「山茶花」「石竹花」「忘憂花」（二・四）

⑥桜――「曉櫻」「夕櫻」「雨櫻」「月櫻」「風櫻」「煙櫻」（二・七）

彼の詠物詩における最大の特徴は、右に掲げた詩題に明らかなように、連作組詩の多様さにある。たとえば、④梅の組詩では、蕾から結実まで、順を逐って一つ一つ題材化し、梅の変化を系統的に詠じている。また、③や⑥のように、竹と桜を気象の変化に応じて描き分けてみたり、同じ竹を対象としつつも、②のように、竹の本体から竹製の物品に至るまで、イメージの連想を中心に組み立ててみたりもしている。そのほか、①のように、種類や様態によって蝶の生態を描き分ける組詩や、二文字の名称をもつ花を集めた⑤のような組詩もある。組詩のコンセプトは一様ではないが、一つの対象を一首で総体的に詠じるのではなく、組詩という形態をとって、対象の諸々相を様々な角度から丹念に描き出そうとする点に、彼の詠物詩の最も顕著な特徴がある、といってよい。さらに、詩型は七言律詩（と七言絶句）が多用されるという点も明確な特徴をなしている（③⑥は、七言絶句）。

また、旅に出た折にも、次のような組詩を残している。

⑦雪――「雪声」「雪塵」「雪燈」「雪美人」「雪獅」（北）

⑧秋――「次横山大夫五題韻（秋柳、秋蝶、秋草、秋風、秋水）」（再北）

連作組詩以外にも、「萩花」、「豆腐」、「不倒翁」、「還俗尼」、「煮茶聲」、「緑陰」、「水聲」「煙花戯」等々の作品が詩集の各所に収められている。彼の代表的な詩集『詩聖堂詩集初編』、『二編』、『遺稿』三部作のうち、遺稿集を除く二部は、詩仏自編の詩集である。その冒頭にいずれも詠物の連作組詩が配列されていること、ならびに詩集の随所に詠物詩が現れることの二点から、他でもなく彼自身が詠物の作をとても重視していたことが知られる。また、詩仏の記した詩話『詩聖堂詩話』一巻にも、詠物詩に寄せる彼の関心の高さが随所に現れ出ており、前引、揖斐氏の指摘の正しさを改めて確認することができる。

㈢　詩仏と『三家詠物詩』

揖斐氏の言うとおり、詩仏は詠物専門の自作詩集を刊行してはいない。しかし、彼は、元の謝宗可、明の瞿佑、清の張劭、三家合刻の『三家詠物詩』三巻の翻刻出版に関わり、その校正作業を担当している。この『三家詠物詩』は、三家の一、張劭の門弟の賀光烈が康熙五三年（一七一四）に刊行したもので、菅原琴（冰清、一七八八～一八五二）、松井梅屋（長民、一七八五～一八二六）、梁川星巌（伯兎、一七八九～一八五八）が校閲し、文化七年（一八一〇）に翻刻出版している④。この和刻本に山本北山が序文を寄せており、以下のように記している。

吾が門人 美濃の菅原冰清、学に精にして、詩に善なり、人と為り溫潤敦厚なり。其の中（こころ）は還（ま）た洒洒落落、光風霽月の如し。仙台の詩人 松井長民、美濃の詩人 梁伯兎と相善し。長民、伯兎も亦た皆な洒洒落落、塵俗に羈がれざるなり。三子は詩に於いて殊に詠物を好む。嘗て謝・瞿・張三家の詠物を合刻せる善本を得て、友人の詩仏、淡斎、緑陰と校讎すること数回、遂に剞劂氏に命ず。今茲 文化庚午の杪冬、既に業を卒へ、以て世に敷く。其の功 詠物に於いて邃なり、醸なり、博なり、清なり。その作詩も蓋し亦た此れに類すと云ふ。

吾門人美濃菅原冰清、精于學、善于詩、為人溫潤敦厚、其中還洒洒落落、如光風霽月、與仙臺詩人松井長民、美濃詩人梁伯兎相善。長民伯兎亦皆洒洒落落、不羈乎塵俗

矣。三子於詩殊好詠物、嘗得合刻謝瞿張三家詠物善本、與友人詩佛、淡齋、緑陰校讎數回、遂命剞劂氏。今茲文化庚午杪冬、既卒業、以敷于世、其功於詠物邃矣、醲矣、博矣、清矣。其作詩蓋亦類此云。

この序文によって、詩仏が「校讎」＝校勘の作業に加わっていたことが分かる。さらにもう一点注意すべきは、北山が引用の末尾で校閲者たちの詩もこの三家の詩に似ている、と評していることである。北山が第一に念頭に置いたのは、菅原琴をはじめとする主編の「三子」であろうが、詩仏の名も明記されている以上、当然そのなかに含まれるであろう。はたして、北山の指摘は当を得たものなのであろうか。

そこで、『三家詠物詩』と詩仏の詠物詩とを相互に比較してみると、まず『三家詠物詩』所収作品と同題の詩が、詩仏の詩集のなかにも系統的に存在することに気づかされる。同題の作品を列記すると以下の通りである。

イ、「睡蝶」……謝宗可、詩仏（初・一）
ロ、「蝶使」……謝宗可、詩仏（初・一）
ハ、「賣花聲」……謝宗可、張劭、詩仏（初・二）
ニ、「煮茶聲」……謝宗可、瞿佑、詩仏（初・四）
ホ、「緑陰」……謝宗可、詩仏（初・五）
ヘ、「竹夫人」……謝宗可、詩仏（二・一）
ト、「半日閒」……謝宗可、詩仏（二・一）
チ、「鶴骨笛」……謝宗可、詩仏（二・七）
リ、「雪燈」……謝宗可、詩仏（北）
ヌ、「雪獅」……謝宗可、瞿佑、張劭、詩仏（北）
ル、「水中梅影」……謝宗可、詩仏（北）
ヲ、「黄蝶」……瞿佑、詩仏（初・一）
ワ、「碧筒盃」……瞿佑、詩仏（二・六）
カ、「雪塵」……瞿佑、詩仏（北）
ヨ、「白蝶」……張劭、詩仏（初・一）
タ、「竹衫」……張劭、詩仏（二・一）
レ、「不倒翁」……張劭、詩仏（初・四）

ソ、「豆腐」……張劭、詩仏（初・四）
ツ、「愁」……張劭、詩仏（初・一）
ネ、「雪美人」……張劭、詩仏（北）
ナ、「秋柳」……張劭、詩仏（再北）
ラ、「紅葉」……張劭、詩仏（再北）

前節に引用した組詩との関わりを見てみると、①蝶の組詩では、イ、ロ、ヲ、ヨの四首が重なり、②竹の組詩では、ヘ、タの二首が重なる。⑦雪の組詩では、リ、ヌ、カ、ネの四首が、⑧秋の組詩では、ナの一首が重なる。

これだけの数の重複は、詩仏が『三家詠物詩』に大きな影響を受けていたことをすでに雄弁に物語っているが、結論を急がず、次節において、同題作品の比較を通じて、その影響関係をより具体的に探ってみたい。

㈣　詩仏が三家から学んだもの

まずは、謝宗可と同題の作例のなかから、イの「睡蝶」を比較してみたい。

a　謝宗可

不趁游蜂上下狂　游蜂の上下して狂ふを趁はず
閑舒倦翅怯尋芳　閑かに倦翅を舒して　怯えて芳を尋ぬ
花房舞罷春酣重　花房に舞ひ罷りて　春酣　重く
蕙徑栖遲曉夢長　蕙径に栖ひ遅して　暁夢　長し
貪困有誰憐褪粉　困を貪れば　誰有りてか　褪粉するを憐れまん
返魂無力去偸香　魂を返すに　力無くして　去きて香りを偸む
漆園傲吏忘形久　漆園の傲吏　形を忘れて久しければ
莫到蘧蘧枕上忙　蘧蘧として枕上に到りて忙しなきこと莫かれ

b　詩仏

歸來潛翅入花房　　帰り來って　翅を潜めて　花房に入り
不似蜂兒忙採糧　　蜂兒の糧を採るに忙しなきに似ず
一段閒愁無訪綠　　一段の閒愁　緑を訪ぬる無く
幾場好夢在尋芳　　幾場の好夢　芳を尋ぬるに在り
漆園狂吏病春困　　漆園の狂吏　春困に病み
華嶽飛仙試睡方　　華岳の飛仙　睡方を試む
燕語鶯啼莫相駭　　燕語　鶯啼　相駭(おどろ)かすこと莫かれ
海棠庭院未斜陽　　海棠　庭院　未だ斜陽ならず

両者とも七言律詩という同一の詩型を用い、同一の韻（下平声七陽）を使用している。さらに、詩仏の首聯と謝宗可の首聯は、ともに蝶がのんびり物思いに耽る様子を、蜂が蜜を採るのに忙しなく飛び回る様と対比して描写する点で共通する。頸聯はともに「睡蝶」の主題を描き、謝宗可の尾聯と詩仏の頷聯では同一の故事が用いられている。「漆園の吏」とは、戦国時代の荘周、すなわち荘子を指し、彼が蝶になって飛び回る夢を見た、いわゆる「荘周胡蝶の夢」（『荘子』齊物論）を典故として使用している。

このように、両者の間には、詩型、押韻、詩句の発想ならびに典故の用い方等々において、多くの共通点を見出せる。したがって、詩仏の学習、模倣の跡がかなり顕著に現れ出ている例といってよいであろう。

つづいて、瞿佑と同題の作例のなかから、ヲの「黄蝶」を比較してみる。

a　瞿佑

誤入蜂房不待媒　　誤って蜂房に入りて　媒を待たず
巧傳顏色換凡胎　　巧みに顏色を伝へて　凡胎を換ふ
繞籬野菜流連住　　籬を繞り野菜に流連して住(とど)まり
何處金錢變化來　　何れの処の金錢か　変化して来たる
傳粉已知前事錯　　粉を傳しては　已に前事の錯(あや)まちを知り
偸香未信此心灰　　香を偸みては　未だ此の心の灰なるを信ぜず
上林鶯過頻回首　　上林の鶯　過りて　頻りに首を回らし
一色毛衣莫用猜　　一色の毛衣　猜を用ふること莫かれ

b　詩仏

山蜂相見莫相欺　山蜂　相見て　相欺くこと莫かれ
紅紫叢中伴不稀　紅紫の叢中　伴　稀れならず
亂入菜畦難認影　乱れて菜畦に入れば　影を認め難く
過來麥隴始看飛　麦隴に過り来りて　始めて飛ぶを看る
似憐漢殿輕塗好　漢殿　軽く塗るの好しきを憐むに似たり
初覺秦台重傅非　初めて秦台の重く傅すの非を覚る
休向上林容易去　上林に向かひて容易に去るを休めよ
爲愁公子妬金衣　為に公子の金衣を妬むを愁ふ

第一句は、ともに蝶と蜂とがばったりかち合う様を詠じ、第三句は、ともに黄蝶が野菜畑の周辺をいつまでも飛び回る様を描写している。そして頸聯では、同一の典故が使用されている。詩仏のこの詩には自注が附され、「重く秦台の粉を傅し、軽く漢殿の金を塗る（重傅秦臺粉、輕塗漢殿金）」という、晩唐・李商隠「蝶」詩の二句が引用されている（『全唐詩』巻五三九）。そもそも、「秦台の粉」という表現は、戦国時代・秦の穆公の娘弄玉と蕭史の故事を踏まえる。晋・崔豹の『古今注』によれば、「粉」すなわち「おしろい」は、上代の頃、鉛を原料として作ったが、秦の穆公の娘弄玉は水銀を焼いておしろいを作り、夫の蕭史とともにそれを顔にぬり、「飛雲丹」と名づけ、簫の曲が演奏し終わると、二人ともに仙人と化して昇天した、という故事である。

また、李商隠の句にいう「漢殿の金」は、『漢書』の趙昭儀の故事を踏まえる。趙昭儀は昭陽舎に居たとき、殿上に漆を塗り、門の境界部分に銅を張り、その先端を金色に塗ったとされる。ここでは、「秦台」との対で漢の後宮の黄金に関わる故事が必要だったため、用いられたのであろう。

黄蝶を詠じた詩に蜂が登場する理由は、「蝶粉蜂黄」という唐代の宮中で流行した化粧法があり、晩唐の李商隠がそれを詩に詠み込んで（『全唐詩』巻五三九「酬崔八早梅有贈兼示之作」）以後、女性の化粧を指す常套句と化したからである。また、詩仏は自注に黄庭堅の詩句「漢宮の嬌額　半ば黄を塗る」（『山谷外集』巻七「酴醾」）を引用している。黄庭堅の句は本来、酴醾の花を描写した表現であるが、むろん女性の化粧を暗示している。そして、尾聯はともに、唐の玄宗が禁苑で黄鶯を見かけると「金衣の公子」と呼んだ、という

故事（『開元天寶遺事』巻二「金衣公子」）を踏まえている。

この例にも、前の例同様に、数多くの類似点を見出すことができ、詩仏の学習の跡が顯著である。

最後に、謝宗可、張劭と大窪詩仏三者が同題の作例をもつハの「売花の声」を比較してみる。

a　謝宗可

春光叫遍費千金　　春光　叫び遍くして　千金を費やし
紫韻紅腔細細尋　　紫韻　紅腔　細細として尋ぬ
幾處又驚遊冶夢　　幾処か　又た遊冶の夢を驚かし
誰家不動惜芳心　　誰が家か　芳を惜むの心を動かさざらん
響穿紅霧樓臺曉　　響は紅霧を穿ちて　樓台　暁なり
清逐香風巷陌深　　清は香風を逐ひて　巷陌　深し
妝鏡美人聽未了　　妝鏡の美人　聽くこと未だ了(を)はらざるに
繡簾低揭畫簷陰　　繡簾　低く揭ぐ　画簷の陰

b　張劭

霧裏攜香叫助妝　　霧裏　香を攜へて　助妝を叫び
一絲宛轉破晨光　　一糸　宛轉として　晨光を破る
歌將上苑千秋艶　　歌は上苑の千秋を將ゐて艶やかに
吹入深閨兩鬢香　　吹は深閨の兩鬢に入りて香し
紫陌喚來狂蛺蝶　　紫陌　喚び來る　狂へる蛺蝶を
紅樓驚起睡鴛鴦　　紅楼　驚き起す　睡れる鴛鴦を
檐頭換得金錢去　　担頭　金錢に換へ得て去り
又弄餘音過畫墻　　又た余音を弄びて画墻を過る

c　詩仏

滿城輕靄欲朝暾　　滿城　軽靄　朝暾ならんと欲し
芳韻香聲賣驟喧　　芳韻　香声　売りごえ　驟(には)かに喧(かまびす)し
報道鴛鴦衾裏客　　鴛鴦衾裏の客に報道し
呼醒胡蝶夢中魂　　胡蝶夢中の魂を呼び醒す

今朝深巷遍春信　　今朝　深巷　春信　遍く
昨夜小樓過雨痕　　昨夜　小樓　過雨の痕
莫怪聞來卻惆悵　　怪しむ莫かれ　聞き來りて　却て惆悵するを
紅情綠思不堪繁　　紅情　緑思　繁に堪えず

詩仏の詩にいう「朝暾」は、朝の太陽の意味であるので、まず首聯がいずれも早朝の花売りの光景を描写する点で共通している。詩仏の「芳韻香聲」は、謝宗可の第二句「紫韻紅腔」に由来するであろう。張劭の頸聯と詩仏の頷聯には、ともに蝶と鴛鴦の対句が使われており、やはり影響の跡を見出せる。

なお、詩仏の自注には、南宋・陸游の「小楼一夜聞春雨、深巷明朝賣杏花」という詩句が引用されている。陸游の七律「臨安春雨初霽」（『剣南詩稿』巻一七）の頷聯である。「売花の声」という詩題はもともと陸游のこの七律から来ているが、謝・張両者の作例では「朝まだき深巷に響き渡る花売りの声」という主題が敷衍されて、必ずしも本歌のイメージに寄り添う形では作られていない。しかし、詩仏の詩では頸聯に、幾らか加工されているとはいえ、陸游の一聯がほぼそのまま用いられており、本歌の痕跡が三者のなかもっとも濃厚に残存している。

以上、詩仏と三家の比較を試みたが、総じて、詩句の着想から個別表現、典故の用い方に至るまで、詩仏が『三家詠物詩』から多くのことを学んでいたことがよく分かる。翻刻の校正作業に加わった彼は、『三家詠物詩』所収の作品を一字一字凝視する機会を得た。「校讎数回」（前掲、山本北山の序）の体験は、彼に細心の学習機会を与えたといってよいであろう。

(五)　江戸詩壇と詠物詩

前二節において、詩仏の詠物詩における『三家詠物詩』の影響の大きさを瞥見したが、『三家詠物詩』は、ひとり詩仏のみならず、同時代の他の詩人にも多大な影響を及ぼしたようである。弘化元年（一八四四）、菊池五山の校閲による、明・朱之蕃（？～一六二四）

の『詠物詩』が刊行されたが[5]、五山の門弟、井伊友直が序文を寄せ、以下のように記している。

往歳、仙台の詩人松井長民、元明清三家詠物を鐫し、以て世に布く。詩家は多く取りて著題の模範と為し、今に至るまで盛行す。

往歳、仙臺詩人松井長民、鐫元明清三家詠物、以布于世、詩家多取爲著題模範、至今盛行。

このように、文化七年の『三家詠物詩』刊行後、三十年以上もの間、流行が続いていたことを確認できる。ちなみに、松井長民（梅屋）は自作を焼棄したが、その養嗣、松井竹山（本姓亘理氏、名は千年）には、『歳寒堂詠物詩』一巻（天保十二年〔一八四一〕九月跋）があり、竹山が天保四年秋より日課として詠じた七言律詩百首を収める（『仙台叢書』第七巻〔同刊行会、一九二四年十二月〕に翻刻あり）。

また、菊池五山は、『五山堂詩話』[6]のなかで、しばしば日本人の詠物詩と謝宗可、瞿佑とを比較している。一、二の例を挙げれば、巻九（文化十二年）に、

詠物詩　近今に至りて、作家　稍や其の纖巧を擅にし、享保の諸賢　概ね及ぶ者無し。蓋し唯だ格調を高くするに務めて、此の雕蟲の伎を作すに屑しとせざるならん。彩巖の集中の詠物五首、語は極めて円縟なれば、謝・瞿の諸人も亦た將に衽を斂めんとす[7]。

詠物詩至近今、作家稍擅其纖巧、享保諸賢概無及者。蓋唯務高格調、不屑作此雕蟲伎也。彩巖集中詠物五首、語極圓縟、謝瞿諸人亦將斂衽。

とあり、『補遺』巻一（文政元年）に

容亭　菊花の枕を詠じて云く、「……」と。整斉にして貼切なり。迥かに瞿佑の右に在り。誰か目今に作者無しと謂はんや[8]。

容亭詠菊花枕云、「（詩引用省略）」。整齊貼切、迥在瞿佑之右、誰謂目今無作者

乎。

とある。五山が詩仏の盟友であったことを踏まえれば、彼ら江湖詩社同人の間で、『三家詠物詩』が詠物詩評価の尺度として存在していたことをも示唆している。

ところで、冒頭でも記したように、詩仏の時代以前から、江戸詩壇では詠物詩はすでに流行していた。それでは、『三家詠物詩』刊行の前後で、江戸の詠物詩に何か変化が生まれたのであろうか。もしも、生まれていたのだとしたら、いったいそれはどの様な変化なのであろうか。この問題について考えてみたい。

詩仏の時代より一足早く、安永、天明年間（一七七二～八八）には、上方を中心に詠物詩の流行がすでに始まっていた。それは当時刊行された詠物詩集の多さに如実に現れ出ている。たとえば、岡崎盧門（一七三四～八七、名信好、字師古、京都の人）は、安永五年（一七七六）に、『唐詠物詩選』十巻を編集刊行し、香山適園（一七四九～九五、名彰、字吉甫、京都の人）は、天明元年（一七八一）に、『六代詠物詩纂』を編纂刊行している。「六代」とは、唐、宋、金、元、明、清のことである。個人の詠物詩集では、度会光隆（わたらい）（？～？、字子棟？伊勢神宮宮司）の『詠物茹彙』二巻（天明六年刊、版元＝京都書肆林伊兵衛）、釈大典（一七一九～一八〇一、法諱顕常、字梅荘、京都相国寺）の『小雲棲詠物詩』二巻（天明七年刊）等が編纂刊行されている。また、総集もこの時期に刊行されている。伊藤君嶺（一七四七～九六、名栄吉、字士善、播磨の人）が、安永五年（一七七六）に、清・俞琰の『歴代詠物詩選』（雍正二年〔一七二四〕刊）を模して編纂刊行した、『日本詠物詩』三巻がそれである。そのほか、天明四年（一七八四）には、近藤国宝、古汝玉（ともに未詳）『詩学詠物捷径』二巻が編まれている（ただし、筆者の調査の限りでは、版本は文化十年〔一八一三〕のもの以外確認できなかった）が、これは詠物詩製作のための詩語集である⑨。このように天明年間には、詠物詩製作の入門書までが編集されており、当時の隆盛の様を窺い知ることができる。

ところが、この時期の詠物詩は、総じてなお伝統的な単題による作例が主であり、詩仏の詠物詩に見られる文化文政期の傾向、すなわち対象を単独の一篇のみで詠ずるのではなく、様々な種類や様態を選びとり組詩によって多角的系統的に詠ずるものと、明らかに異なっている。平安時代以来、日本において長きに渉って詠物詩の手本となったのは、唐・李嶠の詠物詩であるが、安永、天明年間の詠物詩は、標題や形式を見る限り、ほぼ李嶠詠

物詩の延長線上にあるといってよい。

たとえば、松村梅岡（一七一〇～八四、名延年、字子長、江戸の人）の『梅岡詠物詩（梅岡詩草）』（安永五年刊）を見てみよう⑩。彼は江戸の詩人なので、前段では言及しなかったが、彼の詩集も安永五年（一七七六）に刊行されている。彼の詠物詩は、すべて七言律詩で詠じられており、この点では詩仏をはじめ文化文政期の詩人たちと相共通する。しかし、約百首の作例のほぼすべてが、一物一首という原則で作られており、標題も、「竹」、「蝶」、「雪」等々、単純に種目を記すものばかりである。それぞれ前掲、詩仏の作例と比較すれば、その違いは一目瞭然であろう（本文㈡所掲①、②、③、⑦を参照）。『梅岡詠物詩』のなかで例外的に複数の作品が詠じられた、梅を例にとっても、「京城梅」「紅梅」「嶺南梅」という三首で、詩仏の組詩（本文㈡所掲④）と比べると、著しくシンプルな構成といわざるを得ない。釈大典の詩もまた然りである。彼の詩集は、天、地、禽虫、草木、雑詠、図画の六部に分類され、併せて四百首余が収録されているが、題詠作品と見なされない作例が多数含まれている（たとえば、「吉野看桜花」のように名勝紀行の作例も収められている）うえ、典型的な詠物の作であっても、標題は松村梅岡の詠物詩と大差ない。『日本詠物詩』⑪には、江戸時代に入って以降の一三四名、五四五首を収めるが、強半は李嶠風の標題を冠する作例である。

しかし、安永、天明年間の盛行が、もっぱら量的な変化を生んだだけというわけでもなかった。旧来型の作例が趨勢を占めるなかで、詩仏の時代へと繋がる新たなる変化の胎動も確実に始まっている。

たとえば、『日本詠物詩』のなかに収められた作例のなかに、『三家詠物詩』所収の作品と同一の詩題をもつものが幾つか認められる。清田竜川（一七四七～一八〇九、清勲）の「蟾蜍滴水」、伊藤東涯（一六七〇～一七三六、長胤）の「無絃琴」、八田龍渓（一六九二～一七五五、田憲章）の「鶴骨笛」、村瀬栲亭（一七四四～一八一九、源之愬）の「不倒翁」がそれで、前三者は謝宗可に、最後の一つは張劭に同題の作がある。『日本詠物詩』は天明四年（一七八四）の刊であり、和刻本『三家詠物詩』の刊行に四半世紀先行しているので、彼らがこれらの作品を詠んだ際、和刻本を手にしていた可能性はむろん絶無であるが、その原本は康熙五三年（一七一四）に刊行されているので、舶来された原本を参照していた可能性は完全には否定できない。また、本章の㈦において記すように、謝宗可単独の詠物詩集は明和七年（一七七〇）に和刻本が出版されているので、これを参照していた可能性はいっそう大きい。もしも、彼らがこれらを参照していたとすれば、彼らにとって比較的近い時

代の中国詩人による作例に影響を受けたこととなり、旧来とは異なる新しい詠物詩スタイルへと変化する一つの兆候と見なすこともできる。

安永・天明期の詠物詩のなかで、化政期スタイルの方へ大きく踏みだしているのは、太田玩鷗（一七四五～一八〇四）の『玩鷗先生詠物百首』[12]（天明三年刊）である。江村北海はこの書に序文を寄せ、そのなかで「題を設くること新奇にして、前人の未だ言及せざる者、十に七八に居り」と述べている。北海の序にいうとおり、従来には見られない新題が多く、「機関的 カラクリマト」「硝子壺中魚」「救火水籠 用心水カゴ」「顕微鏡 ムシメガ子」のように、都市の生活に深く根ざした日本独自の題材も豊富に含まれている。また、この書にも、『三家詠物詩』と同題の作が含まれる。「睡蝶」・「紙帳」（謝宗可）、「煙火戯」（瞿佑）、「豆腐」（張劭）の四首がそれである。

詩仏を中心とする化政期詠物詩の新しい潮流が、従来の詠物詩にない新しい対象を題材化したり、たとえ伝統的な題材であっても、品種や様態等の微細なレベルでさらにそれを分節化し、多様な限定語を加えることによって新たな題材に変えたりし、その上で近体、とくに七律を主として連作の組詩によって詠ずるものだとするならば、この二つの事例はその先蹤と見なすことができるであろう。

つづく寛政年間（一七八九～一八〇〇）になっても、変化の速度は衰えなかった。たとえば、島津天錫（一七五二～一八〇九、名久容、字子嘏、薩摩の人）の『名山楼詠物百首』（この詩集の刊行は寛政十一年。だが、乾隆五十五年の清・朱芝岡序文、同年の呂宏昭跋文がある。乾隆五十五年は寛政二年であるので、詩集の成書時期は寛政十一年以前であろう）はすべて七律である。「遠山筆架」「簾内美人」「妓人出家」等の新奇な題材を詠じたほか、「道家月」「猟家月」「琴中月」というように、月に限定語を加えた連作があり、「山居」「巖居」「楼居」「茅居」「廛居」「船居」「水居」「村居」等、住居に関連する連作組詩も収められている。また、「塵」（謝宗可）、「煙火戯」（瞿佑）のように、『三家詠物詩』と同題の作例も含まれている。岡田新川（一七三七～九九、名宜生、字挺之、尾張の人）のも寛政十年（一七九八）に『暢園詠物詩』[13]を出版している。その詠物詩集においてとりわけ注意すべきは、凡例に記された以下の文言である。「今 詠物詩を抄し、以って書林の需めに応ず」や、「古體は幼学の急とする所に非ざれば、止だ近體を載するのみ」とある。前者については、書肆の需め＝読者の需要とするならば、ただちに当時における詠物詩流行の様が表現されている。後者は近体の詠物詩が巷間の流行を支えていることを示唆する。この詩集の刊行された頃は、山本北山たちが「清新」を唱え、徂徠派の「擬古」への反発を唱え始めた頃で

ある。彼らによって、新たな詩論が喧伝され、反擬古の論調が日増しに高まるなか、新奇な標題をもつ詠物詩が、主として七言律詩によって製作され始める。それはあたかも江戸詩壇の新時代を演出しているかのようでもあった。そして、その中心に大窪詩仏をはじめとする江湖詩社の同人がいたのである。

㈥　中国詠物詩史における『三家詠物詩』

江戸の後期に起こった詠物詩スタイルの変化は、実は中国においても起きている。それをもっともよく体現しているのが、ほかでもなく『三家詠物詩』の三家、すなわち謝宗可、瞿佑、張劭であるが、この三家のうち時代がもっとも早い謝宗可の存在意義がもっとも大きい。

四庫全書も、三家のなかでは、謝宗可の『詠物詩』一巻のみを著録し、『四庫全書総目提要』（巻一六八、集部別集類二）では次のように評している。

宗可の此の編　凡そ一百六首、皆な七言律詩なり。燕、蝶を詠ぜずして睡燕、睡蝶を詠じ、雁、鶯を詠ぜずして雁字、鶯梭を詠ずるが如く、其の標題　皆な纖仄なり。蓋し雍陶諸人の波に沿ひて、弥いよ新巧に趨るならん。瞿宗吉の『帰田詩話』に曰く、「謝宗可の百詠詩、世に多く伝誦するも、「走馬灯」「蓮葉舟」「混堂」「睡燕」数篇を除けば、全首　佳なる者を得難し」と。其の説は信に然り。四詩も亦た高作に出でず。……特だ格調　卑なりと雖も、才思　尚ほ艶にして、詩教　広大なれば、宜しく元人の旧帙有らざる所無かるべきを以て、姑らく之を存し一体を備ふるのみ。

『帰田詩話』に又た曰く、「曩に邱彦能の宗可が「売花の声」詩一首を誦するを見るも、百詠中に載せず。蓋し性として既に此の一格を喜めば、則ち事に随ひて吟を成し、此の一集を作りて筆を絶つに非ざるならん。彦能の誦する所、殆ど此の集の既に成りし後に出づるか」と。

宗可此編、凡一百六首、皆七言律詩、如不詠燕蝶、而詠睡燕睡蝶、不詠雁鶯、而詠雁字鶯梭、其標題皆纖仄、蓋沿雍陶諸人之波、而彌趨新巧。瞿宗吉『歸田詩

話』曰、「謝宗可百詠詩、世多傳誦。除「走馬燈」「蓮葉舟」「混堂」「睡燕」數篇、難得全首佳者」。其説信然、四詩亦非出高作。……（中略）……特以格調雖卑、才思尚艶、詩教廣大、宜無所不有元人舊帙、姑存之備一體耳。『歸田詩話』又曰、「曩見邱彦能誦宗可賣花聲詩一首、百詠中不載、蓋性既喜此一格、則隨事成吟、非作此一集而絶筆、彦能所誦、殆出于此集既成之後歟」。

四庫館臣が謝宗可の詠物詩に与えた評価は決して高いものではなかったが、それでも彼の詠物詩の独自性を認めている。それは、標題の「纖仄」さ、すなわち微細で変則的な標題の付け方をすることによって、「新巧」を追求する、という傾向である。右文中の「雍陶」は、中唐後期の詩人で、「詠双白鷺」詩（『全唐詩』巻五一八）を詠じ、それが評判になって、世に「雍鷺鷥」と呼ばれた詩人である。実は右の引用の前に、ほぼ同じ字数でもって、謝宗可に至る中国詠物詩の流れが記されており、末尾に詠物詩によってもっぱら世に知られた唐宋の詩人の名が挙げられている。唐代では、雍陶のほか、「友人が鴛鴦の什に和す」（『全唐詩』巻五九一）によって「崔鴛鴦」と称された崔珏、「鷓鴣」（『全唐詩』巻六七五）によって「鄭鷓鴣」と呼ばれた鄭谷が、宋代では、もっぱら蝶だけを百首を詠じて「謝胡蝶」と呼ばれた、北宋の謝逸が挙げられている。『詩話総亀』等の宋代詩話には、謝逸の詠じた胡蝶の詩は百首ではなく三百首と記されているが、残念ながら彼の胡蝶詠は散逸して伝わらない。しかし、一篇の詩の出来映えのすばらしさで名を馳せた唐代詩人と三百篇もの胡蝶を詠じた宋代詩人の対比がはからずも明示されている。

「百詠」という連章組詩の形式は、宋代以降、普遍化した。詠物詩ではなく名勝詠ではあるが、「西湖百詠（百題）」（北宋・楊公済、郭祥正）、「郴江百詠」（北宋・阮閱）、「金陵百詠」（南宋・曾極）、「華亭百詠」（南宋・許尚）、「嘉禾百詠」（南宋・張堯同）、「南海百詠」（南宋、方信孺）等の作例がある。詠物詩関連でも、「梅花百詠」（南宋・劉克荘、方蒙仲）がある。「梅花百詠」は、元に入っても作られ、馮子振（一二五七～一三二七、字海粟）と釈明本（一二六三～一三三三）による唱和の作や、韋珪（？～？、「梅花百詠」は至正二年〔一三四二〕の作）の作例がある。これらの諸例は、謝逸の胡蝶詠三百首と併せて、題詠詩、詠物詩の量的拡大を端的に表していよう。土地の名勝にせよ、物にせよ、一つの対象を大量の作品で描き分けようとすれば、自ずと観察は微細に向かい、いきおいその描写のスタンスも、包括・総合よりは細分・分析へと傾くようになろう。

そもそも、宋代は、梅、菊、蘭、海棠、荔枝、橘等の植物や酒、茶、蟹等の飲食物、筆

硯紙墨の文房四宝……等々の譜録が盛んに作られ始めた時代でもある[14]。これら宋代の譜録に普遍的な姿勢は、それぞれの対象を細かな品種に分けて、分析的にそれぞれの特徴を記録する点にある。また、宋代には花卉を中心に網羅的に歴代の詩賦を集め分類した、陳詠（一〇三五～一一一二）の『全芳備祖』（前・後集あわせて五十八巻）のような植物専門の類書も現れた（『全芳備祖』は、のち明の『群芳譜』、清の『広群芳譜』へと発展継承される）ほか、北宋の詠物詩を広く収める『重広草木魚虫雑詠詩集』十八巻（家求仁、龍渓編）や歳時節令の題詠詩集『古今歳時雑詠』四十六巻（宋綬、蒲積中編）も刊行され、題詠、詠物の詩を製作する際に便利な類聚的参考書が一気に増加している。このような時代的気運が宋における題詠詩の量的拡大の傾向を下支えし、さらには、元・謝宗可の詠物百詠を可能ならしめる要因となっていることを、ここで指摘しておきたい。

ところで、謝宗可の詠物詩に見られる「標題の纖仄」および「新巧に趨る」という特徴は、必ずしも彼一人に限定されるものではなく、少なくとも元代の詩人の多くに共通して見出だされる特徴といってもいい。たとえば、謝宗可の「梅杖」という詩は、宋末元初の何夢桂に同題の詩があるほか、劉因（一二四九～九三、字夢吉）や閻復（一二三六～一三一二、字子靖）にも同題の詩がある。また、「鶴骨笛」という詩は、薩都剌（一二七二～一三五五、字天錫）に同題の詩があるほか、馮子振、郭鈺（一三一六～?、字彦章）、曹文晦（?～?）にも作例がある[15]。「蘆花被」という詩は、同時代のウイグル族作家、貫雲石（一二八六～一三二四、字浮岑）の「蘆花被」詩を踏まえている。さらに、「琉璃簾」という詩も、馬祖常（一二七九～一三三八、字伯庸）に同題の詩がある。これら「纖仄」たる詩題が、同時代の多くの詩人によっても手がけられている事実は、この傾向が彼一人に止まるものではなく、時代的風潮であったことを示している。謝宗可は詠物専門の詩集を編み、その気風をもっとも集中的に体現しているので、その代表と見なされるだけである。

そして、三家の残る二家、瞿佑と張劭も、この傾向を継承しており、詠物詩の新たな系譜を形づくった。とくに瞿佑は、前引の四庫提要のなかに、『帰田詩話』の記事が二度引用されていることからも分かるように、詠物詩人の先達として謝宗可を明確に意識し、その作例を熟読していた。かくて、宋元の間に新たな潮流として生まれ定着した詠物詩のスタイルは、つづく明、清に受け継がれていったのである。したがって、謝、瞿、張三氏の系譜は、中国詠物詩の近世型の典型といっても過言ではない。あらためてここで中国近世型の詠物詩の特徴を掲げると、詩型は主として七言律詩を用い、標題は従来のものと比べて「纖仄」、すなわち微細かつ変則的で新奇なものを好み、それをしばしば連章組詩の形

式によって詠ずる、というものである。

(七)　結び

実は三家合刻の詠物詩の和刻本が作られるよりずっと早く、謝宗可と瞿佑二家の単行詠物詩集がそれぞれ翻刻されている。

謝宗可『詠物詩』の和刻本は、明和七年（一七七〇）に刊行されている。ちなみに、釈敬雄（一七一三～八二）の序によれば「寛延癸未」の年に、彼が長崎の高暘谷（一七一九～六六）からこの詩集を譲り受けた、という。ただし、寛延は「癸未」がないので、おそらく宝暦十三年（一七六三）を指すであろう。なお、『先哲叢談後編』の記載によると、高暘谷にも『詠物詩雋』という詠物詩集があるようであるが、筆者は目下のところ、その所在を確認できていない。

瞿佑の詠物詩集は『詠物新題詩集』といい、正統九年（一四四四）の張益の序が附されているので、その前後に成立したものであろう。日本における刊行は、宝永七年（一七一〇）であり、謝宗可の詩集よりも早いが、その理由はおそらく荻生徂徠によって明詩が鼓吹されたこと、あるいは彼の『剪灯新話』が江戸前期に流行したことと関わりがあるであろう。

清代の二つの集大成的詠物詩選、『佩文斎詠物詩選』と『歴代詠物詩選』もそれぞれ和刻本が刊行されている。前者は康熙四十五年（一七〇六）に完成し上古から明代までの代表的作例を収める。和刻本は、文化八年（一八一一）刊の『佩文斎古今詠物詩選』と文化九年（一八一二）刊の『佩文斎詠物詩選』初編（二編は文政十三年の刊）である。後者は雍正二年（一七二四）、俞琰の編、体例は『佩文斎詠物詩選』を参照し、六朝から明代までの作品を収める。和刻本は、天明元年（一七八一）の刊。

瞿佑の『詠物新題詩集』を唯一の例外として、中国で編纂された主要な詠物詩集がすべて十八世紀の後半期以降、翻刻され和刻本となっている点は注意されてよい。そして、この時期こそは蘐園派の唱えた「盛唐詩＝格調＝擬古」から、山本北山の唱える「宋詩＝清新／性霊」へと詩壇の潮流が大きく転換していった頃である。それと歩調を合わせるがごとく、中国近世型の詠物詩が流入し、それをモデルとしつつ、多種多様な新たな標題をもつ

詠物詩が作られていったのであった。

日本独自の題材を豊かに取り入れることで「新奇」を表現し、日本詩壇の主体化を体現したのが、太田玩鷗だとするならば、大窪詩仏はそれとは少しく異なる方法で「新奇」を表現している。彼の連作組詩の標題に三家と同題のものが多く含まれることは、㈡において指摘した通りであるが、彼らと重複しない作例が含まれていることにも応分の注意を払うべきであろう。そこに詩仏の独自性の所在が認められるが、彼は太田玩鷗のように題材の日本化をとくには目指してはいない。たとえば、㈡に列記した蝶の連作（①）を例にとると、「新蝶」「秋蝶」「媚蝶」「鬼蝶」「書中乾蝴蝶」は中国の三家が詠じていない題材であるが、それらは必ずしも日本語独自の標題方法によるものではない。あたかも彼は、中国近世型を積極的に学習し模倣しつつ、素材日中に共通するより普遍的なものを用い、それでいて本家正宗を凌駕する作品を製作することを目指していたかのようである。彼の盟友、菊池五山が同時代の知友の詠物詩をしばしば三家の作と比較し、三家を凌ぐと評したことについては、前に述べたとおりである。それは、けっして誇大な虚飾によるわけではなく、化政期の詩壇をリードした者たちに共通する、ある種の矜持に裏打ちされた批評であったのではないかと推測される。とりわけ、詠物の詩に関しては、国内外の先行作品が刊刻されて広く流布し、頻繁に開催された詩会という場で、作詩活動のもっとも中心的な題材として扱われ、流行を極めていたから、彼らの主体意識もきわめて先鋭であり、批評眼もかなり成熟していたと考えられる。そして、その中心にいた詩仏も、中国の同時代の詩人と同じ高みに立って創作し批評しているという思いがあったに相違ない。

注釈

① 揖斐高「詠物詩についての覚え書」（『芸能と文学　井浦芳信博士華甲紀念論文集』、笠間書院、一九七七年十二月、二四九頁）。

② 詩会と詠物詩について論じたものには、揖斐高『江戸の文人サロン　知識人と芸術家たち』（吉川弘文館、二〇〇九年九月）、堀川貴司「太田玩鷗の詠物詩―十八世紀後半京都詩壇一斑―」（『国語と国文学』、一九九一年七月、三〇～四四頁）等がある。前者では、サロンから生まれた詩として、写実の詩・物を詠む詩・歴史を詠む詩等を挙げている。後者では江戸時代に詠物詩が大量に創作された原因として詩会との関係を論じている。

③ 本章が使用した大窪詩仏の詩集は、『詩集日本漢詩』（富士川英郎、松下忠、佐野正己編、汲古書院、一九八五年三月）第八巻所収の『詩聖堂詩集初編』・『二編』・『遺稿』、及び『紀行日本漢詩』（富士川英郎、佐野正己編、汲古書院、一九九一年十一月）第二巻所収の『西遊詩草』・『北遊詩草』・『再北遊詩草』である。

④ 『和刻本漢詩集成・総集編』第六輯（長沢規矩也編、汲古書院、一九七九年四月）所収『三家詠物詩』を用いた。

⑤ 『和刻本漢詩集成・補編』第十八輯（長沢規矩也編、汲古書院、一九七七年三月）所収。

⑥ 『五山堂詩話』十巻、『補遺』五巻は、『詞華集日本漢詩』第二巻（富士川英郎等編、汲古書院、一九八三年九月）所収。

⑦ 桂山彩巖（一六七九～一七四九、名義樹、字君華、通称三郎左衛門、別号に天水）は儒者。江戸出身。林鳳岡にまなび、幕府の儒官となる。享保十九年（一七三四）書物奉行に任じられ、幕府蔵書の校合にあたった。また詩文にすぐれた。著作に『琉球事略』、詩集に『彩巖詩集』（『日本人名大辞典』、上田正昭監修、講談社、二〇〇一年十二月）。

⑧ 『五山堂詩話』巻九に、「崇儒、名重道、號容亭。詩才清脆、衣鉢自詩佛」（『詞華集日本漢詩』第二巻、四七一頁）とある。

⑨ 以上は『玩鴎先生詠物百首注解』（太平書屋、一九九一年一〇月）の附録に列挙された、江戸時代に刊行された詠物詩集のリストを参照した。

⑩ 『梅岡詩草』、安永五年刊、国会図書館所蔵本。なお、杉下元明の『江戸漢詩―影響と変容の系譜―』（ぺりかん社、二〇〇四年八月）の第三章「松村梅岡と清の汪鵬」には『梅岡詠物詩』について考察がある。

⑪ 『日本詠物詩』、『詞華集日本漢詩』第九巻（汲古書院、一九八四年六月）。

⑫ 早稲田大学図書館所蔵本。

⑬ 国文学研究資料館所蔵本。

⑭ たとえば、南宋・范成大の『范村梅譜』『范村菊譜』、北宋・劉蒙の『劉氏菊譜』、南宋・史正志の『史氏菊譜』、史鑄の『百菊集譜』、南宋・趙時庚の『金漳蘭譜』（紹定六年完成）、南宋・陳思の『海棠譜』、北宋・蔡襄の『荔枝譜』、北宋・王觀の『揚州芍藥譜』、北宋・竇苹の『酒譜』、南宋・傅肱の『蟹譜』、南宋・陳仁玉の『菌譜』、北宋・王灼の『糖霜譜』、北宋・蘇易簡の『文房四譜』、北宋・洪芻の『香譜』等々。

⑮ 宋紅の「鶴骨笛與「鶴骨笛詩」」（『古典文学知識』鳳凰出版社、二〇〇九年第一期、一二五～

一二八頁）を参照。

結語

本論は日本の職業詩人をめぐって、その誕生・発展の考察、および中国の職業詩人との対比を行なった。とくに、江湖詩社（なかでも大窪詩仏を中心として）の江戸詩壇における活動や位置に着目し、日中の職業詩人を比較した。共通点はすでに各章に論じたとおりだが、大きな差異が存在することも分かった。江戸時代の職業詩人は、南宋の江湖詩派はむろんのこと、明清時代の文人よりも、はるかに商業化・専門化していたと言えるだろう（それは第七章、第八章に論じた詩会、書画会に反映されている）。本論の結語として、この差違が生まれた理由を論じたい。

まずは、環境の相違について述べる。とくに都市の環境は、職業詩人の成長に多大な影響を及ぼす。中国では南宋末期、すでに民間において活躍する詩人（江湖詩派）が現れたが、朝廷の交代によってその発展は一時停滞した（宋の遺民となり、隠居する詩人が多かった）。元初は宋の遺民詩人たちが一時的に活躍した（月泉吟社など）が、それは主として民族意識の刺激がもたらした現象かもしれない。元代は儒者の地位が低かったため、漢詩以外の文藝（雑劇など）は隆盛したが、漢詩はずっと不振であった。元末に富裕な詩人も現れたが（顧瑛の「玉山草堂」）、それはほぼ己の家の財力によるものであった。

明代の江南には繁華な商業都市もあったが、江戸のような商業ならびに政治の中心地ではなかった。明代の文人には詩文書画を売り、富裕になった例も確かにあるが、彼らが依存したのは都市の一般市民ではなく、富商（塩商）という特殊な人々であり、富商が破産すれば、それに依存していた職業文人も収入源を失った。

また、体制の違いを見過すことはできない。中国の科挙制度は下層の文人を上層に送り込み続けたが、日本では科挙制度がなかったため（もちろん序章に述べたように町儒者が官儒になることもあったが）、下層文人の出仕は直ちに実現することが叶わず、まず応分の名声を備えることが何よりも必要となった。そのために、詩文を売ったり、詩集を出版するなどして、巷間における名声を高めなければならず、それが結果として、巷間の詩文創作熱を

過熱化させた原因の一つになったと考えられる。

また、社会的地位についていうと、日本における職業詩人は漢詩の作法を教授し指導する師匠という顔を必ず有しており、一般市民から見れば、一段高いところに位置し、すでに高度な学識を備えた知識人であった。日本の職業詩人が儒者から分化して誕生した、という経緯も、いっそうこの点を際立たせている。中国においては、為政者たる士が同時に知識人の頂点として君臨するという構造があり、詩も知識人の不可欠な自己表現手段としてその知的構造の中心に位置している。したがって、民間において、詩を教える師は確実に多数存在していたものの、知識階層全体から見ると、かれらの地位は概していつの時代も決して高くはなかった。文化文政の頃、詩仏たち民間の職業詩人が江戸詩壇の牛耳を執ることができたのとは、この点が著しい差違である。

詩の創作をめぐる社会心理の側面から見た場合にも、儒教の影響から、中国の詩人には「修身・治国・平天下」の精神が強く根づいている。これこそ、余英時氏が『士與中国文化』（上海人民出版社、二〇〇三年一月）のなかで析出した中国の士の、もっとも中核的な精神であろう。そのため、中国の知識人は、詩を「小道」と見なし、文を「載道」の道具と考え、詩は政治社会を映し出す媒体であると考えた。詩において、政治的題材が好まれた理由も、このような士の精神の反映であろう。その結果、「士」の地位に上ることができず、かつまた政治を離れて純粋に詩の創作に耽溺した多くの詩人たちが、貧窮の生活を送らざるを得なかった。もちろん、明清時代の文人のなかには詩文を売って生計を立てていたものもいたが、心中では、そのような藝術の商品化に後ろ暗さや自己嫌悪を抱いていた（鄭板橋がその例である）。それゆえ、中国の自由職業人は近代になってからようやく誕生したという説もある（陳遼の「自由職業者在中国的崛起、消失和新生—談百年中国知識分子的職業発展歴程」、『江海縦横』、二〇〇〇年一期）。

それに対して、日本では儒学が江戸時代になってようやく興隆し、それと同時に漢詩の創作も、少しずつ市民の間に浸透し始めた。江戸時代以前の漢詩は、ほとんど貴族や僧侶の嗜みとして扱われていた。江戸後期の職業詩人に、最初から詩人を目指す者が多かったのは、作詩をするうえで儒学が欠かせないものとは見なされなかったからであろう。そして何よりも、作詩を学ぶ市民が儒学と作詩を別のものと見なしていたからであろう。儒者は詩文を道徳と結びつけて考えるが、一般の市民にとって、漢学は教養である。よって、職業詩人たちが庶民文化に融け込むと同時に、詩文の徹底的な商品化も起こったのであろう。

さらに、日本と同様に、中国にも俗文学があるが、その発展は詩よりも大分遅かった。日本で生まれ育った漢詩人は、中国の風俗を書物や想像によってしか知り得ず、彼らが平素身近に接していたのは俳諧師や劇作者などであった（第五章に論じた奚疑塾がすなわちそうである）。このような俗文学に影響されて、作詩の方式も俗化の道を辿ったと考えられる。本論第七章では、江戸の詩会を論じたが、当時の江戸では俳諧の句会も盛んに行なわれていたため、その形式が詩会開催者に大きなヒントを与えた可能性もある。「人名録」「課題表」（第七章）、書画会（第八章）等、いずれにも各領域（和歌、俳諧など）の文人の名が見られる。これは日本独特の現象といえる。

以上の理由により、江戸後期職業詩人の発展は中国より徹底的で、その影響力は第九章に論じたように非常に大きく、職業詩人によって構成された江湖詩社は詩風改革の主役となり、江戸の詩風を一変させた。その集団内では詩学に関する論争があったが（第十章）、全体としては同じ文人グループに属し、互いに協力して詩壇を隆盛にしていった。

作品に着目すると、江戸後期の職業詩人が創作した漢詩は、ひたすら中国の宋詩に学んだり、模擬したりしたものではなく、確かな独自性を持っている。本論の第十一章、第十二章において検討したように、彼らの田園詩は日本独特の風俗を詩に取り入れており、日本の風物詩といってよい。詠物詩は、形式こそ中国のそれを模倣しているが、詩会の課題になることが多く、連作や同題詩が多いのが特徴である。これらも日本漢詩の独自性であろう。つまり、中国の政治文化から生まれた漢詩と、日本の文化環境から生まれた漢詩には、根本的な差異が存在する。その時代背景に対する理解がなければ、日本漢詩を精読することはできないだろう。本論ではこの点に関しては十分な分析ができなかったため、今後の課題として継続的に研究してゆきたい。

主要参考文献【作者生年順】

〔日　本〕

原　典・和刻本

鳥山芝軒『芝軒吟稿』、国会図書館所蔵本

笠原雲渓『桐業篇』抄本、国会図書館蔵本

同上『桐業篇』刊本、国会図書館蔵本

荻生徂徠『徂徠集』『詩集日本漢詩』第三巻、富士川英郎等編、汲古書院、一九八六年二月

同上『荻生徂徠全集』第一巻、みすず書房、一九七三年七月

著者未詳『蔆園雑話』『続日本随筆大成』第四巻、吉川弘文館、一九七九年十二月

伊藤東涯『紹述先生文集』『詩集日本漢詩』第八巻、富士川英郎等編、汲古書院、一九八五年三月

同上『先遊伝』『日本儒林叢書』第一四巻、鳳出版、一九七一年一月

松村梅岡『駒谷芻言』『日本随筆大成第一期』第八巻、吉川弘文館、一九二七年十一月

江村北海『日本詩史』『日本詩話叢書』第一巻、鳳出版、一九七二年六月

同上『日本詩史』『新日本古典文学大系』65、岩波書店、一九九一年八月

同上『北海先生詩鈔』『詩集日本漢詩』第五巻、汲古書院、一九八五年七月

六　如『葛原詩話』『日本詩話叢書』第四巻、池田蘆洲編、鳳出版、一九七二年六月

皆川淇園『淇園文集初編』『近世儒家文集集成』第九巻、ぺりかん社、一九八六年四月

木村兼葭堂著、水田紀久等編『兼葭堂日記』、芸華書院、二〇〇九年五月

頼　春水『在津紀事』『新日本古典文学大系』97、岩波書店、二〇〇〇年五月

巌垣龍渓『松蘿館文集』、国会図書館蔵本

大田南畝著、濱田義一郎編『大田南畝全集』、岩波書店、一九八七年八月

市河寛斎『寛斎先生余稿』、遊徳園、一九二六年六月

同上『寛斎先生遺稿』『詩集日本漢詩』第八巻、汲古書院、一九八五年三月

同上『三家妙絶』、自蔵本

寛斎、如亭、詩仏、五山『今四家絶句』、自蔵本

山本北山『作詩志彀』、『日本詩話叢書』第八巻、鳳出版、一九七二年六月
同上『孝経楼詩話』『日本詩話叢書』第二巻、鳳出版、一九七二年六月
同上『臭蘭稿甲集』、慶応義塾大学図書館蔵本
稲毛屋山『采風集』、『詞華集日本漢詩』第七巻、富士川英郎等編、汲古書院、一九八三年
八月
頼　杏坪『春草堂詩鈔』、『詩集日本漢詩』第一〇巻、一九八六年一〇月
津阪東陽『夜航余話』、『新日本古典文学大系』65、岩波書店、一九九一年八月
同上『東陽先生詩文集』、国会図書館蔵写本
山中天水『晴霞亭遺稿』、慶応義塾大学図書館蔵本
佐原鞠塢『盛音集』、『詞華集日本漢詩』第一〇巻、一九八四年五月
柏木如亭『柏木如亭集』、太平書屋、一九七九年三月
同上『宋詩清絶』、早稲田大学図書館蔵本
小宮山楓軒『楓軒紀談』、国会図書館所蔵本
大田錦城『春草堂集』、『尊経閣叢刊』、育徳財団、一九三八年
大窪詩仏『卜居集』、慶応義塾大学図書館蔵本
同上『詩聖堂百絶』、国会図書館蔵本
同上『詩聖堂詩話』、『日本詩話叢書』第三巻、鳳出版、一九七二年六月
同上『詩聖堂詩集初編』・『二編』・『遺稿』、『詩集日本漢詩』第八巻、汲古書院、一九
八五年三月
同上『西遊詩草』・『北遊詩草』・『再北遊詩草』、『紀行日本漢詩』第二巻、富士川英郎、
佐野正己編、汲古書院、一九九一年十一月
詩仏、山田直大、奥山榕斎、山本謹『宋詩鈔』、『和刻本漢詩集成　総集編』第三輯
詩仏、中野素堂『陸放翁詩鈔』、『和刻本漢詩集成　宋詩編』第十六輯
詩仏、山本謹『宋三大家絶句』、自蔵本
詩仏、山本謹『石湖先生詩鈔』、『和刻本漢詩集成　宋詩編』第十五輯
詩仏、佐羽淡斎『方秋崖詩鈔』、『和刻本漢詩集成　宋詩編』第十六輯
詩仏、朝川鼎、松井元輔『東坡先生詩鈔』、『和刻本漢詩集成　宋詩編』第十一輯
詩仏、山田直大、山本謹、辻元崧庵『楊誠斎詩鈔』、『和刻本漢詩集成　宋詩編』第十五輯
詩仏、山本謹選、佐羽淡斎箋解『宋三大家絶句箋解』、自蔵本
詩仏、菊池五山『広三大家絶句』、自蔵本

詩仏など『宋四霊詩鈔』、『和刻本漢詩集成　総集編』第四輯
畑　道雲『金鶏医談』、早稲田大学図書館蔵本
菊池五山『五山堂詩話』、『日本詩話叢書』第一〇巻、鳳出版、一九七二年六月
『新日本古典文学大系』65、岩波書店、一九九一年八月
『詞華集日本漢詩』第二巻、冨士川英郎等編、一九八三年九月
五山、辻元崧庵『続宋詩清絶』、早稲田大学蔵本
武元君立『北林遺稿』、山陽新報印刷部、一九三六年一月
佐羽淡斎『淡斎百絶』、国文学資料館蔵本
同上『淡斎百律』、国文学資料館蔵本
周　滑平『妙々奇談』、『日本随筆大成』第三期第一一巻
小町玉川『玉川百詩』、早稲田大学図書館蔵本
山本謹『今体宋詩選』、『和刻本漢詩集成　総集編』第四輯
巻大任『宋百家絶句』、早稲田大学図書館蔵本
松井梅屋『三家詠物詩』、『和刻本漢詩集成・総集編』第六輯
泉澤牧太『真山民詩集』、『和刻本漢詩集成　宋詩編』第十六輯
幾阪世達『後村詩鈔』、『和刻本漢詩集成　宋詩編』第十六輯
市河米亥『米庵先生百絶』、早稲田大学図書館蔵本
松浦篤所『菊磵遺稿』、『和刻本漢詩集成　宋詩編』第十六輯
柴山老山、梁川星巌輯『宋三大家律詩』、自蔵本
畑銀鶏『銀鶏一睡南柯乃夢』、『日本随筆大成第二期』第二〇巻
友野霞舟『錦天山房詩話』、『日本詩話叢書』第八巻、鳳出版、一九七二年六月
大田晴軒『訓蒙浅語』、『日本随筆大成』第三期第八巻、吉川弘文館、一九七七年三月
東條琴台『先哲叢談後編』、『日本偉人言行資料』、一九一六年五月
同上『先哲叢談続編』、『日本偉人言行資料』所収、一九一六年五月
清水礫洲『ありやなしや』、『続随筆大成』第八巻、吉川弘文館、一九八〇年八月
菊池海荘『秀粲樓初集』、国会図書館蔵本
安西雲煙『近世名家書画談』、『日本画談大観』、民友社、一九一七年七月
五弓雪窓『五弓雑抄』、早稲田大学図書館蔵
関　雪江『雪江先生貼雑』、『内閣文庫影印叢刊』、国立公文書館、一九九七年三月
小宮山綏介『南梁剳記』、国会図書館所蔵本

論　著

市河三陽『市河寛斎先生』、あかぎ出版、一九九二年二月
吉田鋭雄『田中桐江伝』、池田史談会、一九二三年一月
三田村鳶魚『三田村鳶魚全集』中央公論社、一九七五年～一九八三年十月
松下　忠『江戸時代の詩風詩論：明・清の詩論とその摂取』、明治書院、一九六九年三月
　同上『明・清の三詩説』、明治書院、一九七八年一二月
富士川英郎『江戸後期の詩人たち』、平凡社、二〇一二年一月
林屋辰三郎編『化政文化の研究：京都大学人文科学研究所報告』、岩波書店、一九七六年三月
大森林造『大窪詩仏ノート』、梓書房、一九九八年十月
鈴木碧堂『大窪詩仏』、鈴木碧堂著、珂北郷土研究会、一九三七年七月
日野龍夫『服部南郭伝考』、ぺりかん社、一九九九年一月
朝倉尚『禅林の文学　詩会とその周辺』八頁、清文堂出版、二〇〇四年五月
揖斐高『江戸の詩壇ジャーナリズム：『五山堂詩話』の世界』、角川書店、二〇〇一年十二月
　同上『江戸の文人サロン　知識人と芸術家たち』、吉川弘文館、二〇〇九年九月
杉下元明『江戸漢詩―影響と変容の系譜―』、ぺりかん社、二〇〇四年八月
池沢一郎『江戸時代田園漢詩選』、農山漁村文化協会、二〇〇二年十一月

論　文

河野桐谷「大窪天民百年祭と化政度の書画会」、『南画鑑賞』一九三八年、四号、六号
秋庭太郎「書画会考」、『三題ばなし考』所収、一九四九年一月
野間光辰「蒹葭堂会始末」、『近世大坂芸文叢談』収録、大坂芸文会、一九七三年三月
長田夏樹「南宋三大家詩集の和刻と江湖吟社の人々」『神戸外大論叢』14(3)、一九六四年二月
大森林造「大窪詩仏と桐生の佐羽淡斎」、『郷土ひたち』第四三号、一九九三年
　同上「大窪詩仏と秋田藩」、『郷土ひたち』第四六号、一九九六年
日野龍夫「近世後期漢詩史と山本北山」、『国語国文』34(6)、一九六五年七月
　同上「文学史上の徂徠学・反徂徠学」、『徂徠学派』、『日本思想大系』37、岩波書店、一九七二年四月

同上「入江若水伝資料」、『近世大坂芸文叢談』、大阪芸文会、一九七三年三月
揖斐　高「江湖詩社と遊里詞―江戸詩壇の革新をめぐって―」（上）、『国語と国文学』51㈶、一九七四年三月
同上「詠物詩についての覚え書」、『芸能と文学　井浦芳信博士華甲紀念論文集』、笠間書院、一九七七年十二月
同上「江湖詩社の出発――市民文学としての漢詩へ」、『国文学：解釈と鑑賞』73㈽、二〇〇八年十月
ロバート・キャンベル「観照のながれ　書画会四席その一～その四」銀閣寺東山殿三百会忌江戸感応寺西園雅集」甲府一蓮寺改号書画会」氷川公園内聚楽会」（『文学』八巻二号・三号・四号・九巻一号、一九九七年）。
同上『天保期前後の書画会』、『近世文芸』四十七号、一九八七年十一月
堀川貴司「太田玩鴎の詠物詩―十八世紀後半京都詩壇一斑―」（『国語と国文学』、一九九一年七月

〔中　国〕

原　典

戦国・荘周著、張耿光訳注『荘子全訳』、貴州人民出版社、一九九二年四月
南朝梁・劉勰著、周振甫註『文心雕龍注釈』、人民文学出版社、一九八一年十一月
唐・王維撰、清・趙殿成箋註『王右丞集箋注』、上海古籍出版社、一九八四年六月
唐・杜甫著、清・仇兆鰲註『杜詩詳注』、中華書局、一九九九年九月
唐・白居易『白氏長慶集』、文学古籍刊行社、一九五五年
宋・蘇軾『東坡集』、南宋乾道九年（一一七三）刊本、国立公文書館
宋・蘇軾、清・馮応榴輯註、黄任軻、朱懐春校点『蘇軾詩集合注』、上海古籍出版社、二〇〇一年六月
宋・李光『荘簡集』、四庫全書本
宋・呂本中『東萊呂紫微師友雑誌』、『叢書集成初編』本
宋・洪邁、孔凡禮点校『容斎随筆』、中華書局、二〇〇五年十一月
宋・方回選評、李慶甲集評校点『瀛奎律髄彙校』、上海古籍出版社、一九八六年四月

宋・周密『齊東野語』、上海書店、一九九〇年九月
宋・嚴羽、郭紹虞校釈『滄浪詩話校釈』、人民文学出版社、一九八三年八月
明・瞿佑『帰田詩話』、明刻本
明・陸容『菽園雑記』、『叢書集成初編』、王雲五主編、商務印書館、一九三六年六月
明・李東陽『麓堂詩話』、『叢書集成初編』本
明・陳継儒『陳眉公全集』、広益書局、一九三六年五月
明・袁宏道著、銭伯城箋校『袁宏道集箋校』、上海古籍出版社、一九八一年七月
明・沈徳符『万暦野獲編』(『元明史料筆記叢刊』)、中華書局、一九九七年十一月
清・銭謙益著、銭仲聯標校『牧斎初学集』、上海古籍出版社、一九八五年九月
清・朱彝尊『曝書亭集』、世界書局、一九三七年五月
清・呉敬梓、李漢秋輯校、『儒林外史彙校彙評』、上海古籍出版社、二〇一〇年八月
清・袁枚著、民国・雷瑨註『箋註隨園詩話』、鼎文書局、一九七四年一〇月
清・紀昀『四庫全書総目提要』、河北人民出版社、二〇〇〇年三月
清・趙翼撰、曹光甫氏校点『陔余叢考』、上海古籍出版社、二〇一一年十二月
南江濤等編『清末民国旧体詩詞結社文献匯編』、国家図書館、二〇一二年十二月

論著

郭紹虞『照隅室古典文学論集』、上海古籍出版社、一九八三年一〇月
葛曉音『山水田園詩研究』、遼寧大学出版社、一九九三年一月
欧陽光『宋元詩社研究叢稿』、広東高等教育出版社、一九九六年九月
陳元鋒『北宋館閣翰苑與詩壇研究』、復旦大学博士学位論文、二〇〇三年四月
熊海英『北宋文人集会与詩歌』、中華書局、二〇〇八年五月
劉蔚『宋代田園詩研究』、人民文学出版社、二〇一二年一二月

論文

陳広宏「明代文学東伝與江戸漢詩的唐宋之争」、『上海師範大学学報（哲学社会科学版）』第39巻第6期、二〇一〇年十一月
龍建国「宋代書会與詞体的発展」、『文学遺産』、二〇一一年第四期